

「君の名は。キルヒアイ
ス」歴史の真実と芯の
世界

月夜かおり

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

らいとすたつふ二次創作ルールに準拠して過激な性描写はありませんが、原作小説に登場しなかったのに追加設定されたカストロプの妹や、まったく別のアニメのキャラクタである宮水三葉などが登場します。ルビンスキーもルビンスカヤのような、そうではないような存在ですし、フレデリカは短髪ではなくロングです。

さて、三葉さんが入れ替わった相手は3年どころか千年以上未来のイケメン軍人さんでした。ごく普通の女子高生が銀河の戦場に。エリート軍人が、ごく普通の高校に。迫り来る隕石への対処はどうするのか、同盟軍との戦いはどうするのか、そんな大味な二次作品ですが細かく設定したつもりです。

目次

つながり	1
淑女になる、戦士になる	75
俊樹とホーランドに栄光あれ	127
デート、ロイエーンロール、女の身	163
女の生理、ベーネミュンデ、核戦争	211
告白、ルビンスカヤとルビンスキー、三竦み	238
運命の変化	299
広島、アスターテ、おもらし	311
真の宮水祭り、元帥府人事、みつは神社	
三葉	361
キルヒアイス in 広島、カストロプvs	415

つながり

祭りが終わった後の宮水神社の鳥居から、宮水三葉は星空に向かって叫んだ。

「最高のイケメン男子に生まれ変わりますようにイ!!!」

「……………はああ……………」

背後で妹の宮水四葉が小学生には不似合いなほどに、深々とタメ息をついていた。岐阜県飛騨地方の山奥から見上げる銀河の星々はあざやかに燦めいていた。

翌朝、宮水家の二階でジークフリード・キルヒアイスは目を覚ました。規則正しい軍隊生活のおかげで時刻は6時15分ちょうどだったけれど、寝ている布団の感触や見上げて見える天井が、まったく記憶にないものだった。

「……………これは……………いきたい…」

落ち着いて起き上がってみるものの、かなり動揺している。左手を顎にあてて様子を見るように周囲を確認した。寝ていたのはベッドでもタンクベッドでもなくて和布団だったし、少佐としての艦内の士官室で眠ったはずなのに、窓から陽光が差している。

「惑星表面上にいるのか……？」

物音を立てないように窓際へ移動すると太陽を見上げた。

コンコン……

軽く窓ガラスを叩くと、耐圧ガラスではない民生向けの昔ながらのガラスのようだと気圧の差があるとは思えないし、外は草木の緑が溢れていて、雀も飛んでいる。

「……いったい、どうなって……たしか、ティアマト星系へ向かっていたはず……眠っている間に連れ去られたにしては身体も拘束されていないし……」

そう言っ手て手に触れて、さらに大きな違和感を覚えた。

「この手……」

ほっそりとした三葉の手だった。

「……この顔……」

窓ガラスに映る顔も三葉の顔で、手で触れると、感覚があった。

「これは夢？ ……夢にしては現実感がありすぎている……とにかく、ラインハルト様に連絡を取る方法を考えなければ……」

自分の肉体のことより優先すべき事項があるので再び状況把握につとめる。もう一度、窓から空を見上げた。太陽がまぶしい。

「この空の色合い……大気がある……重力も、ほぼIG……ティアマト星系にそんな感

星は……」

銀河系のどこに自分がいるのか、わからない。室内を見渡すと、雑然と物が置かれた女性の部屋だった。

「武器になりそうなものは……ないか……」

銃は当然としてナイフなども見つからなかった。仕方なく三葉が図工で使用していた彫刻刀を手にしておく。そつと静かに足音を立てず、部屋を出た。

「……木で作られた家か……」

どんなに足音を忍ばせようとしても、古い木造住宅なので階段をおりると軋む。その音を聴いて台所にいた宮水一葉が顔を出した。

「めずらしい、えらい早く起きてきたんやね。そんなら台所を手伝ってな。まず、寝間着やのうて、制服に着替えなさい」

「……」

「返事は？」

「……は、は……」

彫刻刀を背中に隠して返事をして、とりあえず部屋に戻った。

「はああ……あの老婦人は……この少女の家族……？　そもそも私は、なぜ、この身体に……」

疑問だらけだったけれど、ともかくは言われたとおりに着替えを試みる。

「……………制服は、これか……………幼年学校のようなものか……………」

ハンガーにスカートがかけられ、ブラウスとブラジャーは近くに落ちていた。目を閉じて寝間着を脱ぐと、手探りでブラジャーを着け、スカートとブラウスも身につけた。

「こんなものか……………あとは靴下と髪を……………」

落ちていた靴下を履き、寝癖のついた髪を整えると、階下におりた。

「し……………失礼します」

「おはよう、三葉」

「お、おはようございます」

「……………ん？」

ちよつと違和感を覚えた一葉だったけれど、鍋を火にかけているので頼む。

「火を止めて、お皿をだしてちょうだいな」

「は、はい」

ガスコンロは旧式のコックをひねるタイプだったので一目見て使い方はわかったし、手を伸ばすと身体が覚えているようで適切な力加減で火を消した。お皿も自然と手伸ばした位置にあったものを出した。三人家族のようで、だいたいの食器類が3組あった。

「あ、お姉ちゃん、おはよう。今日は早いね」

四葉が挨拶してくる。

「え……うん、おはよう」

とりあえず挨拶を返した。

「お姉ちゃん、顔洗った？」

「お先にどうぞ」

「うん」

四葉が洗面所に行き、顔を洗い終わると同じ手順で洗顔して問う。

「私の歯ブラシは、どれでした？」

「その緑のヤツだよ。そんなこと忘れたの？」

「少し寝ぼけているようです」

「……だいぶ寝ぼけてるね」

歯を磨いて、台所に戻り、一葉を手伝って朝食の用意をした。

「今朝の三葉は、えらい役に立つね」

「いえ、それほど」

「……。ともかく、もう食べて学校に行つてらっしゃいな」

「はい」

「いただきますー！」

四葉が手を合わせて箸を持った。

「……………。いただきます」

三葉の手も同じような動作を真似してから、箸を持つてみた。そうして四葉と一葉が箸を使っているのを真似してみると、これも身体が覚えているようで自然と使えた。

「ぐちそうさまでしたー！」

「ぐちそうさまでした」

食器を片付けてから二階へ戻り、通学に使っているとと思われるカバンを持つと、かなり軽いので不安になる。

「とりあえず、多めに入れておくか」

落ちていた教科書類を多めに入れて肩にかけると、華奢な肩だったので少し重く感じる。

「お姉ちゃん、まだア？」

「はい、今すぐー！」

階段をおりて玄関に立つと、三葉の足に合いそうな革靴があった。履いてみると、ぴったり合うので本人のものだと確信できる。玄関から外に出ると、名取早耶香と勅使河原克彦が待つていた。

「おはよう、三葉ちゃん」

「おはよう、三葉」

「おはよう」

挨拶を返して平静を装いつつ、二人が歩いていく方向へ進んでみる。二人の会話から情報をえつつも、なるべく目立たないようにコソコソ歩いていると、選挙カーのマイクを使って演説していた宮水俊樹が叱ってきた。

「三葉！ もっと胸を張りなさい！」

「はっ！」

俊樹の方を向いて、左右の踵をつけて背筋を伸ばし、両手を腰の後ろで組むと胸を張って直立不動になった。

「……………」

「……………」

「……………」

あまりに見事な直立不動ぶりに周りにいた町民たちも通学中の生徒たちも驚いている。三葉の身体は凜とした気迫のある立ち姿をしていて隙がない、巫女服を着て舞うときとは別の神々しささえあるし、言われたとおりに胸を張ったことで若々しい胸部が強調されて美しく、すらりとした脚もギリギリまでスカート丈をつめていて自転車を立ち

こぎすれば後ろから下着が見えるほど短くしているので腿の肌が眩しい。あまりの圧倒的な雰囲気、叱った俊樹さえも予想していなかった反応ということもあって、かなり引いている。

「…わ…わかればよろしい。もう学校へ向かいなさい」
「はいッ！」

ぴたりと90度、踵を返して軍隊のような駆け足で学校へ向かう三葉の背中を見て町民たちが感心している。

「えらい厳しい躰けはりましたなあ」

「今どきめずらしい、ええ子に育って」

「さすが町長さんの娘さんや」

「今期も宮水先生で決まりやな。教育パパさんの」

口々に褒め称えられると、俊樹も嬉しそうに赤面して照れる。

「い…いや…それほどでも。ははははは」

勇ましさを感ずる娘の背中を見送ると、また票を集めるために演説を再開した。

朝のHRが終わり授業が始まる前に早耶香が声をかけてきた。

「三葉ちゃんも、お父さんの選挙のためとはいえ大変やね」

俊樹に胸を張りなさいと言われてから、ずっと姿勢正しく三葉の身体は背筋を伸ばしているので立っていても座っていても凛とした雰囲気漂っている。言われて少し首をかしげて問う。

「選挙というのは政治的な代表者を選ぶ制度のことですか？」

「え…、うん、そういう言い方をすると、そうなるけど…今さらっ…」

「……………」

ということとは、ここは同盟領内ということなのか、たしかに、さきほどの父親が着ていたスーツも、よく同盟の政治家が着ているものと同じタイプの服装だった、ティアマト星系は同盟領側だったから、やはり同盟領土内のどこかの星系で居住可能な惑星にいるということか、それにしても生徒たちは髪の色も瞳の色も同じで、ほぼ同一民族に見える、ずいぶんと偏った入植の仕方をしているようだ、と考えている三葉の顔が無表情なので早耶香が心配になる。

「そんなマジメな顔ばかりしてんと教室の中くらいリラックスしてよ」

「え、ええ。ありがとう、サヤチン」

周りと同じ呼び方で早耶香を呼んで安心させようと微笑む。その微笑み方が普段の三葉とは違って、穏やかで温かみがあって早耶香が同性なのにドキドキしてしまうほど、好感のもてる笑顔だった。教室にユキちゃん先生が入ってきて授業を始めるので、

周りが出しているのと同じ教科書を机に開き、困惑した。

「……………読めない…」

授業は国語で万葉集についてだったけれど、まったく字が認識できない。まるで見たことのない文字が羅列されていた。不安になって他の教科書も開いてみる。数学の教科書を開いて少し安心した。

「数式は読める……………こんな古典的な定理を使っているのか……………」

さらに他の教科書を探り、英語を出した。

「読める……………だが、これは同盟の公用語……………」

英語の教科書はスラスラと読めた。早耶香が小声で話しかけてくる。

「英語の教科書なんか出して、どうしたん?」

「いえ」

「宮水さん、名取さん、この問題を解いてくれる?」

私語をしていたためにユキちゃん先生が当ててきた。黒板に書いてある文字は、まるで読めない。立ち上がって教師に一礼した。黒板に書いてある文字は、まるで

「申し訳ありません。頭が痛いので少し休ませていただいてよろしいですか?」

「それなら名取さん、保健室まで付き添ってあげて」

「はい」

二人で廊下に出ると保健室に向かった。

「三葉ちゃん、大丈夫？」

「心配しないでください。授業を抜け出す方便ですから」

「きやは♪ 悪いんだア」

「一応、保健室に行つて頭痛薬をもらいます」

方便を形に残しておくため保健室で頭痛薬をもらうと、早耶香に問う。

「静かなところで休みたいのですが、図書室は、どこでした？」

「そんなこと忘れたん？」

「やつぱり少し頭が痛いのかもかもしれません」

「……なんか、言い訳くさいというか……まあ、ええけど、あつちよ。うちも行くわ。なんか心配やし」

「ありがとう、サヤチン」

礼を言つて図書室に案内してもらうと、休むどころか本棚の間を歩き回り、洋書の棚から何冊も本を開いては閉じを繰り返していく。

「三葉ちゃん、何か調べてるん？ それ、全文英語やん、わかるの？」

「ええ、少し調べごとを……あ、ドイツ語の本もある。こつちの方が……」

独語の本を手に取り、読んでいく。英語よりも早く、まるで母国語のようにペラペラ

とめくって概要をつかんでいる。そうして、しばらく独語の本を何冊か目を通した後、三葉の顔が深刻そうに下を向き、それから周囲を見渡してカレンダーを見ると、さらに深刻そうに顎に手をあて考え込む。そんな三葉の額に汗がうき、その滴が流れて落ちる。

「三葉ちゃん……」

早耶香は本気で心配になってきた。

「大丈夫？ やっぱり頭が痛いのか？」

「いえ……」

やや迷い、それから三葉の瞳が、まっすぐに早耶香を見つめてくる。

「私はこれから変な質問をするかもしれませんが、まじめに答えてもらえますか？」

「う……うん、いいよ」

早耶香も緊張しつつ頷いた。

「まず、ここは地球という星ですか？」

「……。そうだよ」

かなり変な質問だと思いつつも、まじめに答えた。答えを聞いて三葉の喉が緊張しているのか、生唾を飲んでいる。また、三葉の唇が質問してくる。

「今は西暦の2013年ですか？」

「えっと……」

あらためて問われ、早耶香もカレンダーを見る。

「うん、2013年」

「……そ……そうですか……あ、ありがとうございます……」

お礼を言ってくれたけれど、三葉の顔は問題が解決したというより、より深刻化したという顔色で椅子に座ると両手を額にあてている。

「……………」

「……み、……三葉ちゃん……大丈夫？」

「……ええ、……大丈夫です、……大丈夫」

落ち着いているようにも見えるけれど、かなり動揺しているのを精神力で無理矢理に落ち着けているという様子の三葉の顔に、早耶香は気分転換を提案する。

「なにか、飲む？ 買ってきてあげるよ」

「……ありがとうございます……」

「何がいい？」

「……温かい……ココアのようなものがあれば……」

「すぐ買ってくるから、ここにいてよ」

心配だったので早耶香は駆け足で自動販売機から、お茶とココアを買って戻ってき

た。三葉の身体は考える人のように額に手をあて、何かを悩んでいる。

「はい、三葉ちゃん」

「…ありがとうございます」

三葉の唇がココアを飲み、少し安心したように息をついた。

「はああ…美味い…」

「よかった」

「おかげで落ち着きました」

そう言うのと、また独語の本をパラパラと読み、それから独和辞典を眺めはじめた。しばらくして、また早耶香に質問してくる。

「Darf ich Sie etwas fragen?」

「え?」

「あ………。お尋ねしてよろしいですか?」

「う……うん……」

「私たちが今、話しているのは日本語ですか?」

「………そ………そうだよ」

今度は早耶香が動揺してくる、もう医者に診せた方がいい気がしてくる、まっすぐ三葉の瞳は真剣に質問してくるけれど、それが心配でたまらない。早耶香の動揺を察した

のか、三葉の顔が安心させるような笑顔をつくった。

「変なことを訊いて、すみません。冗談ですよ、冗談」

「…はは…：冗談、きついわ…はは…」

「これらの本を何冊か、借りていきたいのですが借りられますか？」

「あ、うん。それなら…：…って、そんなことまで忘れてるといいうか、わからんの？」

「…：。夕べ、少し強く頭を打ったみたいです」

三葉の瞳がウソを考えているような動きをしてから答えてくれた。

「かなり強く打ったみたいやね…：お医者さんに行った方がいいかもよ」

「考えておきます」

「とりあえず、自分の図書カードに本の番号を書いてみて」

「図書カード…：…？」

「これ」

早耶香はカウンターから宮水三葉の図書カードを出した。小さな町の学校なので図書委員がないときはセルフで貸し出すシステムになっている。三葉の手は言われるとおりに貸し出し手続きを行っていくけれど、数字はスラスラと書けても、宮水三葉という字さえ書き順が間違っていたりして苦労している様子だった。

「三葉ちゃん、頭痛とか、ホントに大丈夫？　うちの親戚のお爺さんで脳溢血になったと

き、話はできるのに字が書けないって症状から始まったらしいよ」

「会話はできてても字が……なるほど……」

「頭、痛くない？」

「痛くないですよ」

「……こつち、見て」

早耶香は三葉の瞳を見つめてみる。

「……………」

「……………」

その瞳は澄んでいて、正常に見えるような、いつもと違うような、早耶香と三葉の瞳が見つめ合っていると、克彦が図書室に入ってきて声をかけてくる。

「何を図書室で二人して見つめ合ってるんや？ あやしい関係か」

「あ、テツシー、もうチャイム鳴ってた？」

「ユキちゃん先生が二人が遅いって心配して、見に行つて言うから保健室を覗いたけど、おらんから、来てみたんや」

「そっか……」

「で、見つめ合つて何してたんや？」

「何でもないよ」

「はい、何でもありません。私の頭痛をサヤチンが心配してくれただけです」

「そつか……。なあ、三葉、その選挙用の喋り方なんかしらんけど、オレらにまで、そんなよそよそしいのは水くさいやないか。ちよつと悲しいわ」

「……。ごめん、テツシー」

そう謝つて親しみを込めて呼ばれて見つめられると、克彦は赤面した。

「……わ……。わかつてくれたら……。ええねん……。うん」

「サヤチン、テツシー、そろそろ授業に戻……」

言いかけた途中でチャイムが鳴った。休み時間になり校舎全体が賑やかになる。借りた本をもつて教室に戻ると、二年生の教室なのに三年生が3名も入ってきていてクラスメートの男子を脅して、金銭を巻き上げようとしていた。脅している方も、脅されている方も、どちらも素行の悪い生徒で上下関係のような仲間関係のような上級生にとつて都合のいい、どこにでもある関係のようだった。

「おい、今月の上納金、出せよ」

「今月、もう払ったじゃないっすか」

「足りねえよ」

「そりゃないっすよ」

「あん？」

出し渋っていると、地味に蹴りを入れられ、仕方なく財布を出そうとしている。そのやり取りを見ていた三葉の瞳が怒りに染まった。

「やめなさい」

「ああッん?! 誰か何か言ったか?! コラッ!」

上級生が悪いことをしている自覚があるので、制止されて余計に威嚇するような声をあげてきたけれど、三葉の足は3名へ歩み寄ると、はつきりと告げる。

「やめなさい」

「何だ、このアマッ! ひっこんどけや!」

突き飛ばそうとしてきた上級生の手は三葉の胸に当たるはずが、さっと横へよけられて虚しく空を突き、上級生は苛ついた。

「よけてんじやねえぞ、コラー!」

今度は三葉の頬を平手打ちしようとして手を振ってくるけれど、それも素早く頭をさげて回避されてしまった。

「なめんなッオラー!」

もう完全に頭へ血が上り、相手が女の子なのに拳で顔を殴ろうとしてくる。三葉の鼻先に当たるはずの拳は今度も回避され、逆に体重移動のタイミングを見切られて軸足を三葉の爪先に払われて、もんどりうって転がる。

ドンガラガツシャン!

教室に並ぶ机の列へ突っ込み、盛大に転んだ。それを見ていた他の二人の上級生がいきりたつ。

「宮水、てめえ!」

「このゲロ巫女がつ!」

小さな町なので一つ二つ学年が違っても、三葉の顔を知っている様子で罵り、逆上して殴りかかってきた。左右から襲ってくる二人に対して、三葉の身体は疾風のように右側から来る相手の横をすり抜けて、殴りつけている勢いをそのままに三葉の手が勢いの方向を変え背後から肩を押して、左側から襲ってきた相手と衝突させる。

「うわっ?!」

三葉の顔を殴るつもりが、お互いにぶつかってしまい、二人はからまって転がった。

「無益な争いはやめなさい」

三葉の唇が、きつぱりと告げる。三人とも転倒したものの、擦り傷程度の軽傷で今なら学校内で問題になることもないレベルだったけれど、男のメンツとしては大問題だった。年下の女子を相手に、しかも3対1で、いいように手玉に取られたまま引き下がるわけにはいかない。最初に襲ってきたリーダー格の男が立ち上がって構える。

「優しくしてれば、つけあがりやがつて!」

何一つ優しくはしていないけれど、たつぷりと油断はしていた男が今度は油断なく構えた。もう本気のケンカの構えで腰を落として攻防にそなえ、軽く足をかけられる程度で転ぶような体勢ではなくなると、三葉の腰も低く構え、両脚を前後に開いて立つ。

「やめなさいと言つても、わかりませんか？」

「上等だコラー！」

何が上等なのか意味不明なまま、再び殴りかかってくる。そのパンチには、先ほどのような大きな隙がないので後退して避けると、すぐに黒板まで追いつめられた。

「オラっ！」

「はっ！」

三葉の右脚がハイキックを放つて、リーチと腕力の不利を補って男の顔面をカウントで蹴った。しかも、短いスカートを着ていることを忘れていないので両手でスカートの前後を押さえて下着が見えないようにフオローまでしている。あまりにエレガントな蹴りに女子たちが感嘆の声をあげる。

「キヤー♪ カッコいい！」

「宮水さん、すごい！」

「くっ……………」

リーダー格の男が一撃で倒されてしまうと、残る二人は悪態をつきながら、倒れた仲

間を支えて去っていった。早耶香が駆け寄ってくる。

「三葉ちゃん、すごいやん。そんな技、隠してたんや」

「いえ……。思わず、夢中で。……無益なことをしてしまいました」

「ちつ……余計なこと、しやがって」

脅されていたクラスメートは立つ瀬が無くて悪態をついている。三葉の指先がハイキックで乱れてしまったブラウスの裾を直すと、軽く会釈して席に戻る。ちょうど、チャイムが鳴り数学の授業が始まった。静かな授業中、三葉の机には数学の教科書とノートが開かれているものの、机の下では独語辞典と、初歩的なドイツ語日常会話の本、小学校レベルの漢字の本が開かれていて、こそこそと数学とは違う勉強をしている様子だった。早耶香は何をしているのか気になったけれど、あまりに三葉の顔が熱心なので声をかけるのを躊躇っていたものの、数学教師が不快そうに通りかかり、三葉の肩に触れた。

「授業を聴いていたのなら、設問3をやってみなさい」

「はっ」

あてられた三葉の手は難問だった微積分の数式をサラサラと解いてみせたので教師は納得して机下での副業は不問として通り過ぎていく。そんな調子で昼休みになると、早耶香が誘って、いつも克彦と三人で昼食を摂っている校庭の木陰に行き、弁当を

食べながら問う。

「三葉ちゃん、ずっと違う勉強してたけど、あれ、何？」

「少しドイツ語に興味をもっただけですよ」

「う……うまく、かわされた気がする……」

「かわしたといえ、三葉。三年の不良相手に余裕で攻撃をかわしてたな。舞いみたい。あんなの、どこで習ったんだよ？ 巫女の神業か？」

「もう忘れてください。はしたないことをして恥ずかしく思っていますから」

「その選挙モード喋りも、また復活するんや」

「すみません、つい」

「ま……まあ、……そ、それは、それで可愛いけど……三葉の新しい一面というか……」

克彦が赤面して言うので、三葉の顔が穏やかに微笑むと、余計に赤くなっている。昼休みが終わり世界史の授業になると、三葉の机には世界史の教科書と国語辞典と独語辞典が並び、授業を聴きながら、ノートを書き、ときおり辞典を開いて調べている。教師にあてられても、ほぼ正確な書き順で答えを書いてみせた。物理と化学になると、辞典を開くことも少なくなり、放課後になって早耶香たちと帰宅する。

「じゃあね、また明日」

「三葉、勉強しすぎるなよ。急にガリ勉になると熱出るぞお」

「はい、では、また明日」

三葉の手が上品に振られ、友人たちと別れると宮水家に入った。靴を脱いで居間にあがると、一葉が夕食の用意をしている。

「ただいま、帰りました。お手伝いします」

手を洗って台所に立つ三葉の横顔を一葉は不思議そうに見上げる。

「ホンマに今日は、ええ子すぎて怖いくらいやわ」

「お姉ちゃん、なにかネダりたいものがあるんじゃない？」

「はははは。そうかもしれないね」

笑って四葉の頭を撫でている。それでも夜になると、あまりに普段と違い、夕食の片付けから風呂の準備まで積極的にやってくれるので、一葉が心配になってくる。

「三葉、あんまり私の仕事をとってくると、ボケるかもしれないよ。年寄りには、せいぜい家事仕事をさせておくくらいの方が孝行というのも一つなんよ」

「それは気がつきませんでした」

「……………」

「お姉ちゃん、やっぱり変じゃない？」

「そうかな？」

そう言って三葉の瞳はウソを考えるように室内を彷徨ったけれど、仏壇に置かれてい

た二葉の写真を見て止まる。

「……………」

「三葉？」

「お姉ちゃん？」

「……………」

しばらく二葉の写真を見ていた三葉の瞳は意を決したように、一葉と四葉へ、まっすぐに向かってきた。

「大切なお話があります。お時間をいただいてよろしいですか」

「……………あんまり年寄りを、からかうと怒るよ」

「真剣な話です」

そう言って正座していた一葉の前に、真似をして三葉の膝が正座して相對する。空気が深刻そうなので寝転がっていた四葉も正座した。

「今からする話は、とても驚くかもしれませんし、冗談に聞こえるかもしれませんが。ですが、本当のことであり、ご家族に対しては話しておくべきだと感じますから、どうか、落ち着いて聞いてください」

「……………」

「まず、私は、お二人が知っている宮水三葉ではありません」

「……………」

「見た目は宮水三葉さん、そのものに見えるでしょうが、まったくの別人です」

「……………お姉ちゃん、じゃ…ない?」

四葉は姉の瞳を見る。知っている三葉の性格なら、ここまで手の込んだ冗談は言わないし、言おうとしても、こんなに長いセリフを噴き出さずに言えず、途中で笑い出すのが関の山だったのに、覗き込んだ姉の目は真剣そのものだった。同じことを一葉も感じて落ち着いて先をうながす。

「それで?」

「なぜ、このようなことが起こったのか、それは私にもわかりません。ですが、私は宮水三葉さんではなく、ジークフリード・キルヒアイスという者です」

「ジーク…」

「……………外人さんなの?」

「そうです。日本人ではありませんし、また冗談ではなく、この時代の人間でもありません」

「まさか、宇宙から来たとか言わないよね」

姉の口から嘘とは思えない口ぶりで、嘘と思いたいような事態が話されることが空恐ろしくて四葉は茶化して訊いたけれど、三葉の瞳は肯定的に見つめてくる。

「私から見て過去、あなた方から見て未来の人間である私が、未来の出来事について細かく話すことは避けた方がよいと判断しますから、やや抽象的に言いますが、私は今から数世紀先の未来、そして地球でないところから来ています」

「……はは……あははは……じゃ、どこの星から来たの？」

四葉が脱力気味に問い、一葉は黙って聞いている。

「私は軍人であり、宇宙を移動する船の中に行きが多いので定住星を訊かれると答えにくいのですが、住所をおいているのは所属する国の首都星です。星の名や国名は、さきほど申しました通り、教えない方がよいと判断します」

「………軍人ってことは、どこかと戦争してるの？」

「はい」

「宇宙人と？」

「………お答えしない方が、よいかと思います」

「うーん………そう言われるとき。じゃあ、私たちに話しておいた方がいいことって？」

「やはり、私が本当の宮水三葉さんではないということが第一です。今朝から演じてきました。ご家族を騙していくことは良心も咎めますし、無理もあります。ゆえに話しておこうと判断した次第です」

「あー！」

四葉が大きな声をあげて、三葉の顔を指して言う。

「やつぱり、ウソだよね？」

「いいえ」

「だって、日本語を話してるもん。遠い未来の宇宙から来た軍人が日本語って、無理あるよね。お姉ちゃん」

「その点については私も不思議に思っているのですが、会話は自然と成立するのです。まるで、私が箸を使うことを苦労しないように。ところが、文字を読む、書くとなると、脳の使う部分が違うのか、見たことも聞いたこともなかった日本語は始めのうちは、できませんでした。これは推測にすぎないのですが、私に宮水三葉さんとしての生活史記憶はないのに、箸を使うといった日常の動作に関する記憶はあるのと類似した現象ではないかと思っています。現に、私の母語であるドイツ語に関して読書きは容易でしたし、第二言語として学習していた英語についても同様でした」

「……………うくん……………何か英語…じゃなくてドイツ語で喋ってみてよ」

「Ich freue mich, Sie zu sehen」

「……………発音は本物っぽいけど、意味は？」

「お目にかかれてうれしいです、という意味です」

「……………。軍人って、どんな軍人なの？」

「階級は少佐ですが、あまり細かいことは控えさせてください」

「少佐……歳いくつなの？」

「19歳です」

「………大学1年生くらいなのに少佐？」

「武運に恵まれました。上官にも」

「男の人？」

「男性です」

「………お婆ちゃん、どう思う？」

四葉が黙っていた一葉に問うと、目を閉じて聴いていた一葉は三葉の目を見つめて語る。

「お話は、よくわかりました。実は私にも似たような体験があります」

「ご婦人にも？」

「もう、はつきりとは覚えておりませんし、夢のようなものでは今まで思っていました。ジークさんのお話を聞いているうちに、もしや、と思うような体験は若い頃にありました。自分が自分でない誰かに入れ替わっていたような、そんな記憶です」

「ということは、これは元に戻るのですかっ?！」

落ち着いて話していた三葉の腰が浮いている。

「おそらくは戻ると思いますが」

「それは、いつ?!」

「二日で戻ったような気がします。ただ、何度か繰り返し起こった気もします。このことは、あまり他人に話す気は無く、今まで誰にも言っておりませんが、ジークさんのおつしやりようが、とても誠実な方だと感じ入りましたので、お話ししました」

「一日で……だが、繰り返し……」

「さあ、もう夜も更けてきました。お疲れでしょうし、私も疲れました」

時計を見ると、もう10時を過ぎている。

「お風呂に入っていただけ、お休みください」

「……」

三葉の指がブラウスの襟を少しつまみ、それから言う。

「入浴は遠慮させていただきます」

「遠慮など、無用ですよ。どのみち、もうお湯は沸かしていただきましたし、3人きりですから使わないと、もったいないくらいです」

「そういう意味ではなく、この身体は宮水三葉さんのもので、彼女は17歳。私は男です。彼女の気持ちを考えれば、今朝の着替えは目を閉じていたしましたが、入浴まで目を閉じて完遂することもできませんし、触れられたくない部分もあるかと思ひ、遠慮す

る次第です」

「……………」

紳士だ、本物の紳士がいる、と四葉と一葉は女性として感心し、四葉は生まれて初めて異性へときめきを覚えたし、一葉も年甲斐もなく少し頬を赤らめ人生で最期のときめきを覚えた。ここに座っているのは、たしかに三葉の身体なのに、その向こうに誠実な青年がいるような錯覚さえ見える。一葉が頭をさげた。

「三葉も安心するでしょう。ありがとうございます。では、四葉、二人で入るよ」
「はい」

二人が入浴している間、静かに考え、揚がってきた四葉に頼む。

「四葉ちゃん」

「四葉でいいよ」

「四葉、少し頼みがあるんだけど、いいかな？」

「うん」

「夜更かしさせてしまふけれど、夜の12時になって、私が三葉さんと入れ替わるのか、どうか、見ていて確かめてほしい」

「あく、なるほどお」

「そういうことなら、私が確かめましょうか」

一葉が提案すると、首を横に振って遠慮する。

「ご婦人に夜更かしはさせられません。小さなレディにも負担かとは思いますが、ご婦人は、どうかお休みください。お体を大切に」

「そうですね……ありがとうございます。……よほど、育ちの良い家柄なのでしょうね、あなたは」「いいえ、ごく庶民の出ですよ。では、お休みください」

一葉が寝間に入ると、四葉と二人で三葉の部屋に入った。もう11時20分で、すぐに12時が迫っている。四葉が窓から星空を見上げた。

「お兄さんが来たのは、どのあたり？」

「そうですね。あの星と、あちらの星、その間くらいです」

「ふくん……戦争か……イヤだなあ……」

「そうですね。日本が羨ましいです」

「あつ……やばいかも……」

「どうしました？」

「お婆ちゃん、さつき入れ替わりって言ったよね？」

「ええ」

「つてことは、お兄さんの身体に、今、お姉ちゃんが入ってるかもしれないってことだよね？」

「そうなりますね」

「それ……かなり、やばいかも……だって、うちのお姉ちゃんだよ。ごく普通の高校生で、お兄さんみたいに落ち着いてる沈着冷静な人じゃなくて、むしろ、落ち着きがないタイプ！ しかも、訓練とか何もしてない。そのお姉ちゃんが、いきなり数世紀先の宇宙戦争の中になって……」

四葉の脳内にビームが飛び交う戦場で、逃げ回ってワンワン泣き出す姉の顔が浮かんだ。

「お姉ちゃん死んじゃうかも！ お兄さんの身体で！」

「それは困ったことになるかもしれないですね。ですが、安心してください。すぐに会敵するような宙域ではありませんでしたし、ラインハルト様、あ、この名は私たちだけの秘密にしてください。私の上官であるラインハルト様は、とても優秀な方です。一日や

二日、副官の私がいなくても何ら問題なく勝利してみせることでしよう」

「うー……部隊は勝つても、お姉ちゃん一人、死んじゃうってこともありそう……撃ち合いいになったらパニック起こして走り出しそうだもん」

「ご安心を。四葉が想像しているような白兵戦が無いわけではありませんが、今回は艦隊戦が主になるでしょう」

「艦隊戦……どつちにしても、お姉ちゃん……かわいそう……」

四葉が心配しているうちに、あと10秒で夜の12時になる。

「9、8」

数えながら三葉の身体は布団の上に横たわった。

「3、2、1」

四葉もカウントダウンに加わり、夜の12時になった。

帝国暦486年2月、ラインハルト・フォン・ミューゼル中将は定刻に艦橋へ踏み入れ、違和感を覚えた。ティアマト星域へ向かっている艦隊は整然と航宙しており、何ら異変はなく敵との遭遇にも、まだ数日は要するはずで昨夜までと変わったことは一つしかない。

「キルヒアイスはどうした？」

「それが、まだお見えになりません」

夜間の艦隊指揮を代行していた高級士官が困惑気味に答えた。いつもなら必ずラインハルトが艦橋へ入る10分前には顔を出し、状況確認や引き継ぎなどを行っているはずが、今朝は何の連絡もなく、すでに定刻を数秒ほど過ぎている。

「めずらしいな……なにか、あったのか……」

「見て参ります」

「いや、私が行こう。今しばらく艦隊指揮を頼む。何かあれば、すぐ連絡するよう」
「はっ」

ラインハルトは艦橋を降り、佐官クラスの士官室が並ぶフロアを進み、キルヒアイスの部屋の扉にある呼び出しボタンを押した。

「フフ、このオレが直々に起こしに来てやったぞ」

幼年学校時代から寝過ぎることなど、ほとんどなかった親友の遅刻に何か言つてやろうと待ちかまえたけれど、返答がない。

「……………おかしいな。本当に具合が悪いのか、あいつに限つて連絡もなく……」

起き上がつて連絡することもできないほど体調が悪いのかもしれないと心配になつてくる。ラインハルトは艦隊司令官である自分の生体認証を使つて扉を開けた。

「おい、キルヒアイス、大丈夫か」

室内に踏み込むと、心配して損をした気持ちになるほど、キルヒアイスの顔は心地よさそうに眠っている。パジャマを着て、ちゃんとベッドにいるだけだった。

「なんだ……本当に寝坊か。こいつめ」

悪態をつきながらもクスクスと微笑み、ラインハルトは優雅に室内のイスに腰かけた。佐官用の個室といつても戦艦内のことなので艦長室ほど広くはない。ベッドと机、専用の小さなシャワー室があるくらいで、イスに腰かけたラインハルトは、すぐそばで

眠る親友の顔を見つめた。

「ずっと激務つづきだったからな。疲れているんだろう」

「……すーっ……すーっ……」

穏やかな寝息を聴いていると、起こす気になれない。それに目が覚めたとき、どんな反応をするか、ささやかな悪戯心も湧いて楽しみになる。寝顔を見ていたラインハルト自身まで眠くなるほど時間が経ってから、キルヒアイスの身体が寝返りをうち、目を開けた。

「……ん……」

「やっと起きたか。さて、言い訳を聞こう」

「っ?!」

三葉は目の前に豪華な金髪をしてアイスブルーの瞳も美しく白磁のような肌の整った顔立ちをした美青年がいたので驚いて飛び起きる。

「ひゃっ?! 痛っ!」

狭いベッドで飛び起きて後ろにさがったので壁で頭を打った。

「うろう……痛アア……」

「プっ…、アハハハハハ!」

可笑しくてたまらないという様子でラインハルトが笑っている。

「ハハッハハハ！ これは予想以上だ。ハハハハ、楽しませてもらった」
「うう……」

住宅の壁ではなく戦艦構造物の壁なので、ものすごく痛い。三葉は呻き、ラインハルトは笑い、ようやく二人が再び目を合わせる。

「おはよう、キルヒアイス」

「……、あなたは、誰ですか？」

「プっ、くっ、アッハハハ！ お前はオレを笑い死にさせる気か？ ハハハハ！ こ、これは記念すべき日だ。銀河の歴史に残るぞ。くつく…ハハハハ！」

またラインハルトは笑い出し、それから妙に納得して頷いた。

「たしかに、ローエングラム姓に変えるという話もきているからな、もしも、そうなら、お前へ一番に自己紹介するでしょう」

「……………」

「だが、まだ気が早いな。今はまだ、ラインハルト・フォン・ミューゼルのままでぞ」

「……………ラインハルトさん？」

「クス…………うむ、それもいいな。お前は、いつの間にか、様付けしていたが、オレたちは友人なのだから、そういう呼び方もいいかもしれないな。キルヒアイスさん」

「……………」

「それにしても、クスクス…さっきの慌てようは…クスクス…打ったところ、腫れていないか？」

半分は面白がつて、もう半分は心配してラインハルトは彫像のように美しい手で、三葉が痛がつている後頭部を撫でると、ついでに赤毛の前髪を指先で親しみを込めていじり、涙目になつてゐる瞳を見つめた。

「っ……」

あまりに美しい美男子に見つめられて三葉は赤毛よりも真つ赤に赤面する。

「ん？ 本当に熱があるんじゃないのか？」

「ひゃ……」

そう言つてラインハルトの手が三葉の額に触れてくると、変な声をあげている。

「熱いな」

「あう……うわ、わ……」

落ち着き無くドギマギしている様を見て、ラインハルトは決めた。

「今日は、このまま寝ている。お前は、ずいぶんと疲れているようだ」

「え……あの……、ここは……」

「ダメだ。反論は聴かぬ。おとなしく寝ている、いいな」

念を押してからラインハルトは出て行つた。三葉は一人になつて室内を見回した。

「……(ハ)……(ハ)……」

狭い個室には小さな窓があった。窓は本当の窓ではなくて液晶画面のような画像を映し出す装置が壁に設置されているのだったけれど、画像の鮮明さは見たことがないほどで本当の窓と違いがわからない。そして見えたのは宇宙空間と何千という数の宇宙船だった。

「……………なにかの、デモ画面?」

三葉は首をかしげ、そして違和感に気づいた。首をかしげたのに髪が肩を撫でたりしない。妙に髪の毛が軽い気がする。

「え……………私の髪……」

頭髪を手で触れると、男性のような短髪で少しクセ毛な感触がした。

「……………どうなってる……」

頭や顔を触ると、どうにも違和感が大きい。そして、その手も、まったく見覚えがないほど遅しくて力強そうな男性っぽい手だった。

「え? ……え? ……なに、この手……………ど、……………どうなってるの? ……これ、私の手?」

確かめるように腕や胸に触れると、腕も硬くて太いし、胸にあつたはずの膨らみが無くて、かわりに豊かな大胸筋の厚みがあつた。お腹も腹筋の凹凸がわかるほど鍛えられていて脂肪がなくて、つつい下腹部を触ると身に覚えのない一物があつた。

「……お……男っ?!」

声をあげ、そして鏡を見なくなる。シャワー室のような扉を見つけて入ると、洗顔向けの鏡があった。

「……これが……私……うそ……」

鏡には見たこともない美男子が映っていた。さきほどの金髪の青年も美しかったけれど、どこか神々しいほど人間離れした美しさだった。彼に比べて、少し背が高くてもやかそうな顔をしている。

「……… いったい、何がどうなってるの……」

フラフラと三葉はベッドに戻り座り込んだ。

「これは……… いったい、……… どういうこと……」

また手を見る、やっぱり男性の手だった。

「……… 夢? …… そうだよ! きつと、夢だよ、これ!」

あまりにも不可解な状況なので三葉は夢だと思ってみるけれど、起きるという気持ちをもつても醒めないし、現実感が強すぎる。困惑して冷や汗がういてくるのに、急に艦内放送が響いてきた。

「本艦隊は予定通り10時20分よりワープを開始する。各員、留意されたし」

「……… ワープ? …… 10時……」

三葉は顔を上げて室内に時計がないか探した。ベッドの近くに、それらしき表示がされたパネルがあった。時刻と日付を読んでみる。

「今は10時17分? Montagって何? 月曜日ならMondayだったと思うけど……:スペル間違いなんてありえないよね……:Februaryって? 二月ならFebruaryでしょ。……:486……:って、これ年のこと? ……:486年って……:何? ……:」

読めるような読めないような表示がされていて、数字は理解できるし、アルファベットも読めるけれど、微妙に三葉が学習してきた英語とスペルが違うし、何より、おそらく年を表示しているだろう欄に486という数字があり、わけがわからない。

「……あははは……変な夢……うん、そうだ……きつと、夢だ……」
「ワープ開始!」

ふわりと三葉は身体が浮くような感覚を覚えた。

「あ、ほら、やつぱり夢だ」

夢の中で歩いているときに似ている地に足がつかない感じのフワフワとした感覚が生じて、三葉は頷いた。もう目が覚めて、見慣れた天井と布団が迎えてくれると期待したのに、フワフワ感が終わっても、まだ同じ部屋にいるままだったし、美青年のままだった。

「……………なんで……………醒めないかな……………この夢……………」

夢だと思いたいののに、やっぱり現実感が強い。しかも窓のような画面に映っていた宇宙空間の景色は少し変化していて、距離感はつかめないけれど、さつきまでと星の位置や密度が違い、ガス星雲のようなものも見える。

「……………夢……………きつと……………夢……………」

とても怖くなって、もそもそと三葉はベッドに潜り込むとシーツにくるまった。けれど、そのシーツやベッドが知っている物より、はるかに肌触りが良くて、通気性もあるのに保温性もあって、見たことのないような生地で作られていて、ベッドマットの柔らかさも体験したことのない心地よさだったし、その他の室内にあるものも材質が粘土なのか金属なのか、それすらわからない物があつたりする。照明も蛍光灯でもLEDでもない、なにか、ものすごい先進的な技術で作られているような雰囲気がある。部屋そのものは人類が居住するのに普遍的な間取りをしているものの、細部の品々が地味ながら圧倒的に違って感じる。そんな現実感をともなつた未来的な感じに、三葉は泣きそうになつてくる。否定したいのに、自分が百年か五百年、もしかしたら、もつと未来にいるのかもしれないという不安が襲ってきて怖くてたまらない。

「……………ぐすつ……………夢ツ……………きつと夢……………寝れば……………醒めるから……………」

夢の中で寝れば目が覚めるかもしれないという現実逃避で三葉はプルプルと震えな

がら目を閉じた。起きていたのはわずかな時間だったけれど、とても頭が疲れてきていて、ベッドマットも心地よくて、目を閉じて泣いていると眠れた。そのまま夕刻まで眠っている、ラインハルトが2人分の食事をトレーに載せて入室してきた。

「うむ、言われたとおりに寝ているな。起きて仕事でもしていたら怒ってやろうと思っただが感心、感心」

「……………ぐすつ……………」

それほど深い眠りではなかったので気配を感じて三葉が目を覚ました。

「キルヒアイス……………」

目が合うと、寝惚け眼が涙に濡れていた。ラインハルトは優しく微笑んだ。

「どうした。悪い夢でも見ていたのか」

「……………そんな感じです……………今も……………」

「そうか。たしかに、色々あったからな。オレも悪夢を見ることがあるよ」

振り返れば、敵軍に殺されかけたことは当然としても、自軍にさえ裏切られたり陰謀によって窮地に立ったことが何度もあるし、何より10歳だった頃に姉を後宮に奪われてから、悪夢を見るなどという方が難しい人生を生きてきた。ラインハルトは親友の隣りに座ると、優しく肩を抱いた。

「キルヒアイス」

「……」

三葉は芸術的なまでに美しい美男子に肩を抱かれ、また赤くなって顔を伏せた。

「恥じることはない。泣きたいときは泣けばいい」

「……は……は……」

しばらく静かに抱かれていると、食事の匂いがして朝から食事を摂っていないこともあって、三葉はお腹が鳴って、ますます恥ずかしくなった。

「っ……」

「アハハハ、身体は元気なようで、よかった。食べよう」

ラインハルトがトレーを渡してくれる。二人でベッドに腰かけて食べ始める。料理は欧風なだけで、三葉が見たことのある食材が使われていて、食べていると少し気分が落ち着いた。

「ごちそうさまです……ご迷惑をおかけしました」

「いいさ。シャワーでも浴びて、すつきりしろ。ずいぶん、パジャマが汗に濡れているぞ」

「あ……はい……」

言われてみると寝汗でパジャマが濡れている。顔も洗いたいので、三葉はシャワー室に入ってパジャマを脱いだ。

「……………うわああ……」

鏡に映る裸体を見て感動する。触ったときも思ったけれど、鍛え上げられた若々しい肉体は圧倒的に美しかった。

「すごい筋肉……」

とくに女性の身体と違うのは肩から胸にかけての筋肉で、くつきりと三角筋や上腕二頭筋のラインがみえ、大胸筋の厚みも体積としてなら三葉の乳房を大きく超えるほどある。

「お姫様抱っことか余裕でできそう」

ぐっと力を入れてみると、大胸筋がピクピクと反応して嬉しくなった。

「うわ、すごい動く…ピクピク…」

さらに力を入れると、筋肉のラインがあざやかに変わった。つつい、ボディービルダーがやっているようなポーズをとって鏡で見してみる。

「腹筋もキレキレ、かっこいい」

しかも鏡に映る顔も惚れ惚れするような美青年なので、スマイルをつくってみると、その笑顔にドキリとしてしまい、赤くなつてから虚しくなった。

「なにやってんの私……。シャワー浴びなきゃ…」

そんな場合ではないのに、あまりの肉体美に見入ってしまったことを反省しつつ、下

を見ないようにしながら下着も脱いだ。

「……トイレ……」

シャワー室にはトイレもあつたし近づくとも自動で便座の蓋があがり、座つて用を足すと自動で流れてくれた。

「シャワーは、どう使うのかな……」

トイレは全自動だったけれど、シャワーは使い方がわかりにくい。なにかパネルのよなものが設置されていて、それを触ると出てきそうでパネルには文字も表示されているけれど、やっぱり英語とは明らかに違うし、うっかり使つて熱湯を浴びたり冷水を浴びるのは嫌だったので三葉はパジャマのズボンを再び履くと、扉を開けてラインハルトに問う。

「すいません。シャワーつて、どう使えばいいですか?」

「……は? 何を、どう使うつて?」

「シャワーのお湯の出し方がわからなくて、すいません。教えてください」

「……………クス、変わった冗談を言うようになったな。いいだろう、付き合つてやる」

少し不敵な微笑みを浮かべたラインハルトは、なぜか軍服の上着を脱いでシャワー室に入つてくると、パネルを操作して適温でシャワーを出しつつ、教えてくれる。

「これを、こう。あとは温度は、こうだったろ。で、どういうオチのある冗談なんだ?」

「い……いえ……冗談ではなく……」

「なるほど、お前、誘ったな。まあいい、少し狭いが久しぶりだ、いっしょに入ろう」
「へ……？」

三葉が返事をしないうちに、ラインハルトも服を脱いでいく。

「つ……」

顔も美しいけれど、その身体も全身が白磁で彫像されたのかと思うほど精巧な芸術品のように三葉は見入ってしまう。この世に、これほど美しい人間が存在したのかと思うような完璧な身体で三葉が立ちつくしていると、先にシャワーを浴び始めた。

「お前を休ませて今日は正解だったかもしれないな。退屈きわまる航海で何もなかった。だが、明日からは警戒が必要だろう。ん？ どうした、お前も入ってこいよ」

「……は……はい……」

逆らいがたい雰囲気には圧倒され、三葉もパジャマを脱いでシャワーを浴びるけれど、もともと小さなシャワールームなので二人で入ると、かなり狭い。どうしても身体が触れ合ってしまうので、三葉はお湯の温度以上に暑く感じた。

「なつかしいな。こうしていると子供の頃を思い出す」

「……ハア……ハア……」

美青年の身体になつて美青年とシャワーを浴びるといふ女子として脳が腐りそうな

状況に三葉は、まともに応答できない。

「やっぱり、まだ調子が悪そうだな」

「…ハア…ハア…」

「明日も警戒といつても、たいしたことは無いだろうから、調子が悪ければ艦橋に立たなくていいぞ」

「…ハア…」

「もう揚がろう。ずいぶんと顔が赤い。のぼせているぞ」

「…は……はい…」

シャワー室を出てバスタオルで身体を拭くと、ラインハルトはバスローブ代わりにバスタオルを腰に巻いたので、三葉も見習って同じようにする。ラインハルトの髪が濡れたことで、ますます美しく輝いているし、アイスブルーの瞳は子供時代を思い出したような無邪気さに光っている。イスに座って三葉にはベッドをすすめてくる。

「お前は横になつていろ。まだ、のぼせた顔をしているぞ」

「…すすみません…」

言われたとおりに寝転がった。さすがに、もう眠くないので目を開けていたけれど、むしろイスに座ったラインハルトの方が艦橋勤務の後に、怠りなく白兵戦の訓練もしたので眠気を覚え、うつらうつらとし始めた。

「……眠いな……オレも横になる」

そう言つてベッドに入つてきた。当たり前のように寝始めたので三葉は困つた。

「……………」

どうしよう、何この状況、これが普通っぽい口ぶりだけど、つていうか、ここは、どこ、今は何時代なの、私は、どうしてキルヒアイスつて呼ばれる男の人なの、と三葉には訊きたいことは山ほどあるけれど、すやすやと眠っている美しい寝顔を見ていると起こす気にはなれない。

「……………」

こんなにキレイな人間いるんだ、金髪すごい、眉毛までキレイ、睫毛も、と三葉は状況の把握よりラインハルトの美しさに目を奪われ、時間を過ごしていく。起こさないように静かにしていても自分は眠くならないし、音を立てないように時刻表示をみると、もう夜の12時になろうとしていた。

ラインハルトの寝顔を見つめていたキルヒアイスの瞳が少女が美青年に見惚れているような色合いから、未知の体験をしてきた思慮深い青年の色合いに変わった。

「……………」

ラインハルト様がおられる、ということに戻つてきたのか、しかし、なぜ、裸、とキ

ルヒアイスは大きな安堵と大きめの疑問を抱いたけれど、声に出したりせず眠っているラインハルトを起こさないよう静かにベッドから離れた。

「……………」

私も裸なのか、いったい何が、数秒前までの私の身体は中身が17歳の少女だったはず、と疑問が大きくなりつつあるも、ベッドサイドに置かれた二人分の食事トレーなどで、なんとなく察した。キルヒアイスは静かに軍服を着るとラインハルトへ、私は資料室にいますがラインハルト様はお休みください、とメモを残してトレーを持って退室した。トレーを士官食堂に返却すると資料室に入った。

「日本……………やはり実在している国家だったのか……」

資料室のコンピューターで体験してきたことの真偽を見極めるため調べ物をしていく。

「王朝国家？ そんな雰囲気では……………なるほど、立憲君主制か、それ以前は征夷大將軍による幕府との並立……………そこからの大政奉還……………急速な技術力の成長は、火縄式火薬銃を取り入れた時期にもみられ……………日清戦争、日露戦争と連勝するも……………人類初の被爆国……………敗戦後は君主を象徴に……………三葉さんがおられた時期で、すでに120代以上も……………記録上は人類最長の王朝……………現在も、同盟領へ亡命した者が、宗教法人日本皇統保存会、通称日本教を立ち上げて……………よくルドルフ大帝の時期を乗り越えて……………八百万の神

？ ……なるほど、ルドルフ大帝の神格化に逆らわず、一柱の神として積極的に受け入れ、瑠怒流布大明神に……おおよそ、軍事的な名将も、すぐに神として祭るのか……かわった民族だ。そういえば、三葉さんも宮水姓が、そのまま神社としても……由緒ある血統の女性だったのかもしれない……黒髪の美しい凛とした女性だったから……」

キルヒアイスは、あまり深く歴史に興味を持つ方ではなかったけれど、実体験してきた国のことであり、繰り返し入れ替わりが起ころるかもしれないという一葉の言葉も気になつていたので調べを進める。もう真夜中ではあつたけれど、身体は十分に昼寝をした後のように疲れを感じていない様子だった。

「侍？ 騎士道精神に類似した独特の戦士階層か……ラインハルト様が以前に決闘されたとき、剣術について調べておられたときも出てきたような気も……まあ、これは関係ないか。ん？ 日本教の副会長に同盟軍のウランフ提督が登録されている……日蒙文化交流継承会を通じてか……人の縁というのは不思議なものだ。政治団体でもない、ただの趣味の集まりのようなだな。さて、岐阜県飛騨地方については……町の名は、糸守町だったかな」

さらにローカルな情報についても調べる。

「小さな町のことだから何の記録もない可能性も……あつた」

意外にも糸守町の話は、すぐに見つかった。

「ティアマト彗星の一部が落下……隕石の落下による犠牲者が出た例としては有史以来、最大規模……これ以後、宇宙から飛来する物体に対する防衛が各国で進み、ミサイル技術の進展と拡散……これが、後の地球上での核戦争への遠因とも……」

世界史の分岐点になるような、かなりの歴史的な事件があつたようで大きく記録が残っている。そして、読み進めるキルヒアイスの端末機を操作する指が止まった。

「落下は2013年……まさかとは思うけれど……犠牲者名簿がある。……っ！……彼女たちも……」

犠牲者名簿に三葉たちの名前を見つけてキルヒアイスは胸に痛みを覚えた。

「私が入れ替わった日から、あと、ほんの半年あまりで……まだ17歳の彼女は……フロイライン四葉なんて、まだ10歳くらいで……サヤチン……」

温かいココアの味を思い出して、キルヒアイスが涙を零した。図書室で様子がおかしいと心配してココアを飲ませてくれた早耶香、あの友人を思いやる少女も早世するのかもしれないと思いが熱くなる。お兄さん、と呼んでくれキルヒアイスの話を信じてくれた四葉まで犠牲になると知り、運命が呪わしくなった。

「くっ……」

「今日のお前は、泣いてばかりだな」

不意にラインハルトが隣りに立って声をかけてきた。キルヒアイスの肩に手を置き

ながら、アイスブルーの瞳は端末機を見る。

「ティアマト彗星？ ほお、泣いているかと思つたら何か作戦に使えるような地形的条件を見つけたのか？ ん？ 違うな、これはティアマト星系ではない。どこの星系だ？

……地球？ こんなところを調べて何を？」

ラインハルトはやや早口かつ多弁気味に言った。日に二度も泣いていた親友は弱い男ではないはずなので気にかかり、その心配が口調に出ているのだとわかり、キルヒアイスは涙を拭いて微笑んだ。

「ご心配をおかけしました」

「心配などしていいない。こんな古い時代のことを夜中に調べて何をしているんだ？」

「はい、少し気にかかることがありましたので」

「ほお。で？」

「……………。黙っておくわけには参りませんね」

「当たり前だ」

「たしかに、話しておかなければならないことです。繰り返し起こる可能性もあるので
すから」

キルヒアイスは資料室に余人がいないか、しっかりと視線を巡らせる。その動作でラインハルトも極めて内密な話なのだと悟る。二人が内密な話をするのは、その多くが帝

政に対する反逆についてなので、ラインハルトの顔も真剣になった。

「それで？」

「これからする話は、かなり荒唐無稽というか、信じがたく、また冗談のように聞こえるかもしれませんが、少なくとも私の主観にとっては真実と感ぜられることです」

「めずらしく前置きが長いな。早く言え」

「まず、昨日の私、12時以前の私は、かなり普段と様子が違いますでしたか？」

「ん？ ああ…」

ラインハルトが記憶を振り返り頷いた。

「かなり普段と違ったな」

「まるで中身がフロイラインのようではありませんでしたか？」

「おお、そう言われると、そうだ。やや女々しい…いや、可愛い、というか…」

「昨日の私は私であって、私ではなかったのです」

「……というと？」

「まったく別の人格と、私の人格が入れ替わっていたのです」

「おいおい、そんなことが…」

「私も半信半疑です。ですが、資料室で調べて疑いようのない事実かもしれないと考えが変わってきています」

キルヒアイスが端末機に映る宮水三葉の名を指した。

「昨日の私は、西暦の2013年に生きていた宮水三葉という女性と入れ替わっていたかもしれないのです」

「このフロイラインと？」

ラインハルトも端末機を見る。キルヒアイスは犠牲者名簿だけでなく当時の読売新聞に掲載された、ティアマト彗星落下でお亡くなりになられた方々、という追悼記事にあつた三葉の顔写真を指した。その写真は糸守高校の修学旅行で撮影されたものを切り抜いたようで女子高生らしく写りを気にして顔の角度を工夫して撮られた可愛らしい一枚だった。その隣にある四葉の写真は小学校入学時の一枚で、一葉の写真は糸守町老人会のバス旅行で下呂温泉に行ったときのもの、克彦の写真は月刊ムーに投稿記事が載ったときの転載で、早耶香の写真は本人フェイスブックより、となつている。

「は？」

「……………そんな話を信じろというのか？ いや…………お前が、こんな冗談を言う人間でないのは知っているが…………だが、しかしだ」

「私も最初は寝惚けているのか、変な夢ではないか、もしくは精神病にでも罹ってしまったのか、とも考えたのですが、こうして調べてみると、昨日体験したこと、この資料室にある情報が一致するのです。彼女の名前も、家族の名前も。知りもしなかつた町の

名も」

「……………よしんば、そうであったとして、どうだと言うのだ？　今のお前は、もうお前ではないか」

「人格が入れ替わる現象は、繰り返し起きる可能性がある」と、彼女の祖母に言われたので「す」

「繰り返し……………、そうになると、どうなる？」

「その日、一日、おそらく24時間、私はラインハルト様のお役に立てないでしょう」

「……………それは……………場合によっては、かなり困るな」

「そうです」

「……………対策はないのか？」

「今のところ。ですが、ずっと続くわけではないとも言われています」

「続かれてたまるか。お前はお前だ。他の何者でもないはずだろう」

「そうありたいのですが……………」

キルヒアイスが視線を落とすと、ラインハルトが問う。

「それで泣いていたのか？」

「いえ。そのことでは……………。むしろ、ただの女々しい感傷です。この入れ替わった女性
が、その半年後に不条理な死を迎えると知り……………つい……………」

「フっ、お前らしいな。どのみち、こんな大昔の人間、100歳まで生きててもオレたちには擦りもしない」

「そう思っていたのですが、わずか半年の命と知れば………妹もおられて10歳でしたし、私は先刻まで現場にいた、という感覚なので同情を禁じ得ないのです。女々しいとは思いますが……」

「まあ、目の前にいたフロイラインが……となればわからなくてもないが、ちなみに、どういう死に方をするのだ？」

「このティアマト彗星の一部が落下したのです」

「彗星の落下？ そんなことも、この時代の人間は観測できないのか？ 事前に観測できなくても自動防衛の人工衛星くらいないのか？」

「人類が宇宙へ進出して一世紀と経たない時期ですから」

「そうか。まあ、仕方ないのだろうな」

「はい、むしろ、この隕石落下による犠牲が要因となって、日本という国が宇宙防衛に乗り出します。ラインハルト様がおっしゃるように自動防衛の人工衛星システムを開発しようとし、アルテミス首飾りの原始的な形として、アマテラスの首飾りシステムを2050年までに配備しようと2038年には準天頂衛星イトモリ零号機が打ち上げられます。ですが、ご存じの通り地球上での核戦争が2039年に起こり、すべては水

泡に。それどころか、アマテラスの首飾リシステムが核ミサイルを迎撃する能力も持っていたことが核戦争を誘発した可能性さえあります。つまり、この隕石落下での犠牲が生じたことが無ければ、人類の歴史は大きく変わっていたかもしれないのです」

「……………」

「この犠牲さえ…………無ければ…………のちの大きな犠牲も…………」

「キルヒアイス、お前、このフロイラインたちを救えないものか、と考えているな？」

「いえ…………まさか……」

「フフン、では仮にフロイラインミツハと次に入れ替わったとき、彗星落下の当日だったとして、助けようとするれば、どう助ける？ お前の身体は鍛え上げた帝国軍少佐ではなく、ただの女学生なのだろう？ いかにする？」

「仮に、ということですか……」

「そうだ。まさか、星占いに出たと言い回るわけにもいくまい。まして未来から来たなんて言えば狂人扱いされるだろう」

「仮に落下まで12時間あるとして、協力者なく私一人、いえ、三葉さん一人の身体であれば……」

キルヒアイスは糸守町の地図をモニターに映した。

「隕石の落下は、この地点です。被害は半径500メートルまで。ただ、事前に察知した

と言つても、この時代の観測技術では確認できないでしょうし、確認できても迎撃はできません。落ちることは不可避です。となれば、避難させるしかありませんが、それを叫んでも少女一人の妄言で終わるでしょうから、実力行使します」

「フロイラインミツハ一人でか。どうやって？」

「町内で無人の空き家や倉庫などを2、3カ所、爆破します。その後、さらに大きな爆破を行うという予告電話を入れれば、避難せざるをえないでしょう」

「女学生が爆薬など手に入れられるのか？」

「この時代の地上車は排気ガスの匂いからして、揮発性の高い危険な燃料を使用していたようですから、倉庫などの密閉された空間で揮発させ充満させれば、ゼツフル粒子のように爆発させられそうです。簡単な起爆装置を作れば2時間もあれば実行可能です。他に料理に使用していた燃料も可燃性のガスでしたから、そちらを利用して良いでしょう」

「なるほど、即席爆弾か。ちやちな爆発でもデモンストレーションの爆破があれば、予告電話を信じるだろうな。周辺一带から避難させられるだろう」

「もし、即席爆弾でない実用的な爆薬が手に入り、男性の協力者が1名でもいれば、デモンストレーションも必要なく予告電話と、見つけやすい場所に一つ仕掛けるだけで指定した時間までに避難してくれることでしょう」

「たしかに、フロイラインの声で予告電話したのでは当局が本気で捜査しないかもしれない。男の声なら動くだろう。それで一つ本物の爆弾が見つければ、デモンストレーションがなくても避難は開始されるな。いい作戦だ」

「問題があるとすれば…」

「すれば？」

「地方警察の本部から爆発物処理班が呼ばれるでしょうから、彼らに犠牲者がでないよう予告電話のあとに道路を封鎖します」

「どうやって？ 動員可能な人員は一人か、二人だろうか？」

「幸い、この町は山奥ですから、この道路と、こちらの道路、この二つのルートの木を切り倒すなどの手段で封鎖すれば足止めができます。あとは注意すべきは事後に三葉さんが当局から逮捕されないよう、目撃されても人相がわからないようにすることやアリバイ作り、現場に指紋、髪の毛などを残さないよう行動しなくてはならないでしょう。我々が普段やっている軍事行動とは違った注意力が必要になるでしょうね」

「うむ、意識のない間に、自分が爆弾魔になつてはフロイラインミツハに気の毒すぎるからな」

ラインハルトとキルヒアイスの脳裏に、修学旅行で撮影された微笑んでいる写真の三葉がキルヒアイスの意志によって覆面をかぶり隠密に行動し、燃料を盗み、町内を爆破

し、予告電話によって町民を避難させ、爆発物処理班を倒木で足止めし終え、ほっと安堵の微笑をして隕石落下を待つ姿が去来した。

「さすが、キルヒアイスだ。たつた一人の女学生でも実行可能な作戦だな。やはり、お前、オレが問う前から考えていたな。助ける手段がないか、その可能性を」

「はい……」

「だが、わかっているのだろう。聡明なお前のことだ」

「ええ……」

少し沈黙した二人が異口同音する。

「歴史を改変してはならない」

キルヒアイスが体験したことが本当に時間移動であるならば、なおのこと不用意に歴史へ介入してはならない、たとえ無名の少女とわずかばかりの町民を助けるだけであっても、後世の歴史にどんな影響があるかわからない。その認識を共通させた二人は資料室から出た。

「だいたい歴史を変えられるなら、ルドルフの出現前に戻りたいというヤツは何万、いや、何億人というだろうな」

「ラインハルト様、お声が高いです」

「夜中だ、当直以外は寝ているさ。まあ、一国家の存亡とまでは言わなくても、フロイラ

イン一人くらい助けたいと誘惑されるか？」

「……………。もしも、ラインハルト様が、あと半年、一年の命であると、他人から真剣に告げられたら、どう感じられますか？」

「そんなヤツは殴ってやる」

「クスッ…たしかに、気分のいいものではありませんからね。やはり、たとえ繰り返し入れ替わりが起これるとしても絶対に教えない方がいいでしょう」

「ああ、黙っていてやるのが、フロイラインミツハのためでもあるだろう」

「そうします。それはそうと、私も訊きたいのですが、なぜ、私とラインハルト様は裸だったのですか？」

「ああ、いっしょにシャワーを浴びたからだ」

「……………中身は三葉さんだったのですよ」

「うくん…フロイラインミツハには申し訳ないことをしたな」

「他に、何をなさいました？」

「事情聴取か？」

「いえ、むしろ、私の身体は何をいたしましたでしょうか、昨日」

「まず寝坊だ。起きてこないから心配して見に行ったら寝ていた」

「それは、すみません」

「お前が謝ることはない。それで起きるまで寝顔を見ていたんだ。ククっ……」

ラインハルトが意地の悪い笑い方をするのでキルヒアイスが問う。

「よほど彼女は驚いたのではないですか？」

「ああ、壁で頭を打つてな……ククっ……キルヒアイスのおんな顔を見ることができたのは収穫だったぞ」

「かわいそうに……」

「もちろん、ちゃんといたわつてやったぞ。しばらく寝ていると言つてな。で、夕方に食事をもつていつてやったら、泣きながら寝ていた」

「無理もないでしょう。あんな平和な生活をしていたのに、いきなり軍艦の中、しかも宇宙ですから。パニックになったりしませんでしたか？」

「いろいろ起こりすぎて、ぼんやりという風だったな。それでシャワーでも浴びて、すつきりしろと言ったらシャワーの使い方がわからない、とか言い出して。オレは、まだキルヒアイスだと思っているから、何の冗談かと思つて、まあ、それで、いっしょに浴びることになって……そうか、顔が真っ赤だったのは、のぼせたのではなかったのだな。これは真剣に詫びを入れておかねばならないな。伝えておいてくれるか？」

写真で見た三葉の前で裸になったのだと考え直してみると、女性に対して悪いことをしてしまったと反省したラインハルトは不明を恥じて少し赤面した。キルヒアイスが

微笑んで頷く。

「二応お伝えします。ですが、入れ替わることが繰り返し起きるなら、むしろラインハルト様こそ、三葉さんに出会うことができるのですよ。私は永遠に会えないでしょう」

「そうか、そうだな。……繰り返し、か。次は、いつになるのだろうか」

「その時が戦場でなければ、よいのですが」

「ああ、それについての対処を話し合っておこう」

二人は入念に、もしも戦闘中にキルヒアイスが三葉として行動した場合について話し合いをもった。

四葉が見守っていると、12時のカウントダウンで布団に寝て目を閉じていた三葉が目を開けた。

「っ……戻ってる?! 私の部屋だ!」

「あ、お姉ちゃんになった」

その動き、口調どれも実姉だと確信できた。

「よかったア! やっぱり夢だったんだ!」

「……夢にするんだ……」

どんな体験をしてきたのか、とても気になる四葉が質問する前に、三葉は急に丸く

なつて布団の上で呻いた。

「うううっ……」

「お姉ちゃん?! 大丈夫?!」

「うううっ……はうう……」

苦しみだして歯を食いしばった三葉の額に汗がういてきている。

「どこか撃たれたりしたの?!」

軍人、戦争という単語を思い出した四葉は心配して姉の頭を抱き上げた。

「しつかりして、お姉ちゃん! お姉ちゃんの身体に戻ってるんだよ! それでも痛い
の?!」

「うううっ……あううぐうう……た……立たせて、……は……早く……」

「立つの? 大丈夫? どこが痛いのか?」

「おっ……」

「お?」

「おしつこ……出そう……」

「……………」

四葉が脱力して姉の頭を落とすと、三葉は下腹部を押さえて悲鳴をあげる。

「あああつ……ひ……響くから……そつと……そつと立たせて……うううう……」

「あの人……お風呂も遠慮したから……あんな涼しい顔して我慢してんだ」

着替えも目を閉じたと言い、入浴も明白に遠慮した紳士が、三葉の下着を脱がせることになるトイレを先延ばしにしたのもわからなくもない。そして精神力の違いなのか、三葉の呻きようを見ていると妹として少し恥ずかしい。

「お姉ちゃんって淑女とか紳士って存在と一光年くらい離れてるね」

「ううう……ハア……お願い……た……立たせて……で、出ちやう、漏れちやう」

「はいはい」

四葉は高齢者を介護するような配慮をしつつ呻いている三葉の肩を抱き、まずは上半身を起こした。

「ほら、私の肩に手をのせて立って」

「ううう……あ、ありが……うう……」

よろよろと三葉は内股で立ち上がると、妹の肩を杖のように支えにしながら歩く。

「ハア……ハア……ううう……自分の部屋から、出るのが、こんなに遠いなんて……」

一歩一歩がづらいようでも半歩ずつくらい進んでいる。昨日は一日を狭い士官室の中で過ごした三葉が今は少しでも早く自室から出ようとしている。

「そういえば、お姉ちゃん、向こうの世界って、どうだった？」

「ううう……あうう……」

「……。あとで訊くね」

ようやく部屋を出ると、階段をおりるのは妹の肩ではなく手すりを頼りに一段ずつ進む。けれど、どんどん限界が近づいてきたのか、階段の半分までおりると、もう立つのも苦しいようで、一段一段、お尻をおろして座ってから足をおろし、またお尻を一段おろしてから足をおろすという状態になった。

「ハア……ううう……ハア……ううう……」

「もうバケツでも持つてきてあげようか？」

先に降りた四葉が問うと三葉は首を横に、ゆっくりと振る。

「い、……要らない……私にも……ハア……女子高生としての……ハア……プライドが……あるの

……ハア……し、思春期むかえてない……ハア……お子様には……あああ！」

「お婆ちゃん、寝てるから静かにね」

四葉が見守る中、ゆっくりと階段をおりた三葉は、また妹に肩をかりる。四葉の先導でトイレを目指した。

「ハア……そつと……うう……そつと、ゆっくり歩いてよ……うう……早くトイレに……、ゆっくり……ハアう……早く……」

「ゆっくり早くつて、それも超空間移動だよ」

振り返ると、姉が半泣きの顔で我慢して震えている。もう潤んだ目から涙を流しつ

つ、鼻水まで少し出ている。姉らしいといえれば姉らしいけれど、ほんの数分前までの凜とした美少女とは思えない変貌ぶり、外見が同じでも中身が変わると人間こうまで変わるのかと感心してしまい、四葉はタメ息をついた。

「はあああ…、お姉ちゃん、このままだと本当に、おもらしするよ？ バケツもつてきてあげるから、そこにしなよ」

「…イヤ……プライドが…うう…思春期が…ハア…女子高生が…」

「お姉ちゃんが恥ずかしがりなのは、知ってるけどさ。冷静に考えてみなよ。バケツにするのと、おもらし、どっちが恥ずかしい？」

「ハア…ハア…どっちも死ぬほど恥ずかしい…」

「……………。ちゃんと冷静な判断をして限界だったからバケツを使ったお姉ちゃんを私は笑わないけど、おもらししたお姉ちゃんのことには笑うよ」

「っ……………」

「口噛み酒を造るだけでも恥ずかしがってるお姉ちゃんが、おもらしなんかしたら、それをキツカケに、どんどん自滅的な方向に進んで行きそうな予感がするよ。なんとなく」

「うう…ハア…ハア…ダメ、もう一步も動けない…ハア…動いたら……出ちゃう…」

三葉の瞳が焦点を失い、視線が上を向いている。顔が汗びっしりなのに青ざめていて、腿はプルプルと震え、今にも限界を迎えるのは明らかだったので四葉が決める。

「バケツ、もつてくるね」

「……うん……お願いい……」

三葉は恥を忍んで妹が用意してくれたバケツに済ませた。四葉は姉を傷つけないために、見ないように聴かないようにして待ち、三葉は後片付けをしてから、赤くなつた目頭と鼻を擦りながら、妹に礼を言う。

「ありがとう。でも、お姉ちゃんはバケツにしてないよ。ちゃんとトイレに間に合つたの」

「……。うん、そうだね。間に合つてたね」

歴史を捏造する姉を四葉は優しく受け入れる。それでも三葉は念押しする。

「バケツにしたなんて小学校で言ったりしないでね」

「お姉ちゃんは、ちゃんとトイレでしたよ」

「ありがとう、四葉」

「うん、うん」

四葉は頷いてから、訊く。

「それで、どうだったの？」

「っ……バケツじゃないもん！ トイレだもん！」

「……。その話じゃないから」

「……………じゃあ、何の話なの？」

「訊きたいのは昨日一日、誰かと入れ替わっていた感覚とか、ジークフリード・キルヒアイスっていう名前に聞き覚えはない？」

「え？　なんで、四葉が私の夢を知ってるの？」

すつかり尿意との戦いに気を取られて昨日のことを夢だと思っている姉へ、四葉は眠くなってきたので早めに話を進める。

「お姉ちゃんはジークフリード・キルヒアイスっていう男の人になってなかった？」

「……………あれは夢じゃないのかな……………でも、キルヒアイスって人は知ってるけど、ジークフリードって？　ラインハルトさんも四葉が知ってる？」

「あく……………ジークフリードはキルヒアイスさんの名だと思うよ。たぶん姓がキルヒアイス。ラインハルトさんはキルヒアイスさんの上官らしいかな」

「情漢って何？　どういう関係？」

「今、微妙に変な字をあててない？　お姉ちゃん、あつちの世界で一日何してたの？」
「うくん……………二度寝して、ご飯食べて、シャワー浴びて、そんな感じ」

「……………自分宇宙にいるなあ、って思わなかった？」

「宇宙……………やっぱり、あれは宇宙なのかなあ……………」

「ワープとかした？」

「した!」

「戦争は?」

「戦争? そんなの無かったよ」

「二人は軍人じゃなかった?」

「うん……身体は、すごい鍛えて……」

そう言つて三葉は真つ赤になった。なんとなく四葉は理解できたし、姉が初日にした行動は次に入れ替わったときにキルヒアイスから訊く方が詳細な気がして、もう眠いので話を終わらせる。

「とりあえず、キルヒアイスさんと入れ替わるの、しばらく繰り返して起きるかもしれないって」

「またあるの?!」

「うん、お婆ちゃんがそう言つてた。だからね、くれぐれもキルヒアイスさんの生活を乱すようなことしないであげてね」

「い……入れ替わり……入れ替わり……私の身体、どうなつてたの?!」

三葉が不安になつて自分の身体を抱く。見知らぬ男性に一日、自分の身体を操られていたという女性らしい恐怖を覚えている。女子として意識のないうちに、自分の身体を男性から意のままに操られるということは底知れない恐怖と不安がある。怯えて青く

なっている三葉を見て、四葉はキルヒアイスの配慮を伝える。

「安心して。絵に描いたような紳士的な人だったから、お風呂も断ってたくらい」

「……おっぱいとか触られてない?」

「そういうことしないタイプだと思う。着替えも目を閉じてしたって。トイレも行ってないはず」

「よかつたああ……。……。でも、だから、あんなに、おしっこ……。……」

「次、入れ替わったときはトイレは行ってもらうよう言っておく?」

「……。……。……。ダメ! 我慢してもらって!」

三葉は鏡で見たキルヒアイスの顔を思い出して、彼が三葉の身体でトイレに入り、脱いだり、拭いたりするシーンを思い浮かべ、ブンブンと首を横に振った。

「絶対ダメ! むしろトイレが一番ダメ!」

恥じらって顔を真っ赤にして拒否している。

「あんなカッコいい人に見られたくないもん!」

「カッコ悪い人ならOKなの?」

「もつとダメ!!」

「キルヒアイスさんは、きつと目を閉じてくれるよ」

「目を閉じてたって触るんでしょ?!」

「……まあ……拭くかな……」

「その前に脱がせるんでしょ?!」

「脱がずにはできないね」

「着替えだけ! 朝の着替えだけにしてもらって! パンツ脱ぐのは絶対ダメ! 着替えてでもパンツは替えなくていいから!」

「……生理現象だよ? 夕方くらいに限界きたら、どうするの?」

「………我慢してもらって……」

「お姉ちゃん、冷静に考えようよ。さつきは家だったから良かったようなものの、うっかり学校でおもらししたら、どうするの?」

「っ……」

「慣れない女の子の身体でさ。朝から一日だよ? 午後の体育が跳び箱とかだったら厭

しいよ? それでなくても、教室で人にぶつかられたり、何かを踏み外したりした拍子に漏らしちゃうかも。想像してみなよ、そんな自分の姿を」

「………ヤダ……そんなことになったら、もう学校いけない」

三葉の脳裏に水たまりにたたく自分の姿が去来した。跳び箱の上で体操服を濡らしてしまう三葉、授業中の教室で漏らしてしまう三葉、石段を踏み外して転びながら漏らしてしまう三葉、どの三葉も真っ黒な絶望の闇に沈み、その後の学校生活が破綻して

いくのも、なんとなく感じる。

「きつと、漏らすよ。今日は乗り切れても、そのうちいつか。運の悪い日もあって。だいたい丸一日我慢なんてことを何度もしたら、お姉ちゃんがお姉ちゃん本人でいるときだって膀胱炎にでもなつて、学校で漏らして大恥をかくと思うんだけど？」

「……………うう……………」

「トイレくらい諦めてさせてあげなよ」

「だって……………トイレは密室……………」

「その気になつたら、お姉ちゃんの部屋だって密室だよ。おっぱい揉んだり、何でもできるよ。でも、キルヒアイスさんは、そんなことしない人だつて思うから」

「……………ぐすつ……………じゃあ、……………小だけは、してもらつて……………」

「大は、どうするの？」

「我慢してもらつて。絶対！」

「……………まあ、大なら便秘気味になるくらいで済むかなあ……………」

「……………ぐすつ……………うっ……………うっ……………泣きそう……………。入れ替わりなんて……………イヤだよお……………うう……………うう……………女の子には見られたくないところが、いっぱい、いっぱい……………あるんだよお……………イヤだよお……………もうイヤだよお……………」

三葉が畳の上に寝転がつて手足をバタバタとさせ始めた。四葉は深いタメ息をつく。

「はああ……………。あ！ もう一つの、あれは、どうする？」

そして何かに気づいて姉に問うけれど、姉は意味がわからず問い返す。

「あれって？」

「…………私も、そろそろだから小学校で習ったけど、あれ」

「あれ？」

「だから、あの日、月に一回は来るんじゃないの？」

「あ……………」

「……………」

「……………」

二人は入念に、もしも生理中に三葉がキルヒアイスとして行動した場合について話し合った。

淑女になる、戦士になる

キルヒアイスは目を覚まして木造家屋の天井が見えたので二度目だということを悟った。

「…………やはり繰り返すのか…………」

三葉の唇が男らしくつぶやき、静かに和布団から三葉の身体が起き上がると、そばに手紙があつた。読んでみる。

キルヒアイスさんへ

はじめまして、宮水三葉です。

もし、またキルヒアイスさんが私になつているのなら、できるだけ私の生活を私のように過ごしてください。周囲から変に思われたくないので苦痛かもしれませんが女の子らしく振る舞ってください。入れ替わっていることも周りに言わないでください。

一度目のとき目を閉じて着替えていただき、ありがとうございます。今日も同じようにしてください。お願いします。私の身体は見ないでください。触るのも必要最小限にしてください。お願いします。お願いします。

読み終えた三葉の手は手紙を机に片付けた。

「返事は夜に書く方がいいか……今日の出来事も含めて」

鏡を見ると三葉の姿が映っている。

「……女の子らしくか……。言葉使いも気をつけた方がいいだろうな……。いいのかな。……いいのかしら？ いいのでしょうか？ いいの？ ……難しい……」

三葉の細い腕が男らしく腕組みして、いいのだろうな、と考え込んでいた仕草から、少し女子らしく首を傾げて、いいのかな、と三葉の唇がつぶやき、さらに、いいのかしら、いいのでしょうか、と女性らしさを実直に研究し腕組みをやめて右手を腰へ、左手を顎にやり、やつぱり左手を顎にあてるのは男っぽいので軽く握って親指の先を唇にあててみる。

「右手は……こうか。……いや、こうでいいかしら……」

右手を腰から股関節の前あたりにやって指先をそろえてみると、かなり女性らしく三葉の姿が鏡に映っている。

「……独特の美しさのある人だ……。いや、美しい人ですね。……あ、自分に言うのは変か……。やつぱり難しい……。ともかく、着替えを」

とりあえず着替えを探した。一度目のときは衣類は散らかっていたけれど、今は着替えがセットにして置いてあるのでわかりやすい。部屋の中も、ある程度は片付けられて

いて人目を気にしている感じがした。

「着替えるか。なるべく触らないように」

目を閉じて着替えを終えると、一階におりた。一葉がいるので挨拶する。

「おはようございます」

「ええ、おはよう。ジークさんなんね？」

一葉が訊いてくるので頷いた。

「はい、ご迷惑をおかけします」

「いえいえ、こちらこそ。向こうで三葉が迷惑をかけていないか、心配でたまらないくらいですよ」

「三葉さんには安全に過ごしていただけるよう上官にも頼んでありますので、どうか、ご安心ください。何か、お手伝いすることはありませんか」

「四葉を起こすのを願います。一昨日、夜更かしして昨日は二人とも遅刻したから、今日はちゃんと登校させんとねえ」

「やはり、ご迷惑をかけたようです。すみません」

謝つてから顔を洗い、再び二階へあがった。

「四葉、おはようございます」

戸をノックしたけれど返事がない。繰り返しノックしていると一葉が台所から言っ

てくる

「入ってもらって、けっこうですよ」

そう言われたので室内に入ると、四葉は布団で静かに寝ていた。

「起きてください。四葉」

「……………」

なかなか起きない。小学生なので長い睡眠時間を必要とするのに、前々日は明け方まで三葉と話していたし、そのおかげで昨夜も睡眠リズムが戻っていない。

「起きてください。……………」

揺り起こそうとして、三葉の手が止まる。穏やかに寝ている四葉が、あと半年で非業の死を遂げるのだ、ということをお願い出してしまい、三葉の瞳が潤んだ。ちょうど10歳といえば、キルヒアイスとラインハルトにとつても思い出深い時期なのに、この四葉は人生をそこで終えるのかと思うと、三葉の瞳が涙を零しそうになる。

「……………」

軽く頭を振って顔を引き締めた。

「起きてください。四葉」

「……………」あ、お兄さんの方？」

「見ただけでわかるのですか？」

「うん、まあ、姿勢から言葉遣いから、ぜんぜん違うし」

「……そうですか……女の子らしいというのは難しいようです」

三葉の顔が悩ましげに斜め下を向き、左手は軽く握って唇にそえられていく。四葉は起床の伸びをしつつ言う。

「今の方が普段のお姉ちゃんより、よっぽど女の子らしいよ」

会話しながら一階へおりて朝食の準備を手伝い、三人で食べる。

「ねえ、お婆ちゃん、今の方が女の子らしいよね？」

「そうやね。いいところのお嬢さんという風やけど……ちよつと……」

「ちよつと、どう違うのでしょうか？ できるだけ三葉さんに迷惑をかけたくないので、ご教授ください」

「うちの三葉に比べると、背筋がピシつとしすぎなんよ。小手先の仕草を女らしいしても背筋から軍人さんの雰囲気、しっかり伝わってきて……そうやね、もう少し。たとえば、ジークさんの知っている女性らしい女性を真似されてみてはどうでしょう？」

「私の知っている女性らしい女性……」

アンネローゼ・フォン・グリューネワルトの姿を思い出した。憂いを含んだ穏やかな瞳と、しっとりとした座り姿、後宮に入るまでの微笑みも忘れていない。

「あの方の真似を……」

三葉のまつすぐ正座していた足が少しだけ崩され、背筋もわずかに傾けられると、たおやかな女らしい座り姿になった。

「このような振る舞いでよいでしょうか？」

「……………」

あまりに女らしく優美なので、また別の方向で三葉から離れてしまったけれど、もう注文をつけるのは気の毒なので二人は頷いた。朝食が終わり、家を出る前に四葉が告げる。

「お姉ちゃんが、トイレは小だけは済ませてくださいって。今も我慢してるよね？ 学校で失敗されたら立ち直れないから、すっきりしてから家を出てあげて」

「……………」

三葉の顔が貴婦人のように恥じらい、赤面して頷いた。

「もちろん、身体は見ないようにしてあげてね」

「はい、当然そのようにいたします」

三葉の身体がトイレに向かい、緊張した面持ちで入っていった。しばらくしてトイレから出てくると、三葉の瞳が涙ぐんでいる。

「どうかしたの？ どこか痛かった？ 何か失敗して濡らしたなら着替えあるよ。目を閉じてトイレって難しかったでしょ」

「……いえ……三葉さんのお心を想うと……見ず知らずの男に……さぞや、おつらいのではないかと……」

つい、アンネローゼの境遇と重ね合わせてしまい、本人の意思に関係なく女性の身体が操られることに、深い悲しみと同情、そして罪悪感を背負った顔になっている。その悲しげにハンカチで涙を拭いている様子は、もう青年軍人というよりは不遇の貴婦人だった。四葉が複雑な顔になる。

「そこまで気を遣ってもらえると……お姉ちゃんも安心すると思いますよ」

「どうか、御安心くださるようお伝えください。誓って不埒なことはいたしておりません。目を閉じて、すべて成しておりますから。信じてください」

「うん、信じるよ。その顔を見たら、なんだかキルヒアイスの方が傷ついているような気がする」

この人、きつと童貞なんだろうな、ちよつと潔癖すぎないかな、女性関係で何かあったのかな、と四葉はキルヒアイスの女性に対する潔癖さを感じるとともに、少し心配した。そろそろ家を出る時刻を過ぎかけているので四葉が促して、通学路を行くと、早耶香と克彦に出会った。

「おはよう、三葉ちゃん」

「おはよう、三葉」

「おはようございます、サヤチン、テツシー」

「……………」

「どうかされましたか？」

少し首を傾げたアンネローゼが穏やかに問うように、三葉の唇が問い、早耶香が言う。

「また選挙モードなんやね」

「昨日は休憩やったんか。また無理すると明日、寝坊して遅刻するぞ」

「はい、気をつけます。ご心配、ありがとうございます、テツシー」

ありがとう、ジーク、と言ってくれるアンネローゼを真似して言う、克彦が真っ赤になった。早耶香が少し冷めた目で言う。

「一昨日より女らしいね」

「そう心がけております」

穏やかに三葉の唇が微笑むと、同性の早耶香でさえ見惚れるような顔だった。

「どうですか、サヤチン、私は女らしく振る舞えているでしょうか？」

「……………うん。十分に……………」

もともと顔立ちの整った三葉が居住まいや仕草まで整えると、神々しいくらいになっている。そのせいなのか、学校に到着して授業を受け、昼休みになると柄の悪いクラスメートに野次られた。

「そんなに票が欲しいのかよ、お嬢様」

野次つてきたクラスメートは一昨日、上級生にからまれて金銭を巻き上げかけられたところを助けられる形になったのだけれど、それが気に入らないようだからんでくる。

「いい子にしてないといけないってか。宮水さんちの三葉ちゃんはおよ」

「……」

無視するのもよくないと考え、ごく無難に応えてみる。

「私自身まだ未熟で選挙制度のことなどよく理解しておりませんが、お父様の選挙につきましては重ね重ね皆様にご支援いただきたいと存じております。どうか、この通りお願いいたします」

座っていた三葉の腰が立ち上がって深々と礼をすると、克彦も立ち上がった。

「おい、からんでやるなよ。親のことで」

「ちっ……」

舌打ちしてクラスメートが立ち去ると、克彦が心配する。

「大丈夫かよ、三葉」

「はい、ありがとう、テッシー」

「……そ、そんな真剣に礼を言われると照れるだろうが……べつに、たいしたことはしてねえよ」

昼休みが終わり、午後の授業も平穩に受講して、なるべく宮水三葉としての生活を乱さないことを心がけていたのに、放課後になつて校門を出ると上級生3名にからまれた。

「おい、宮水、ちよつと付き合えよ。こないだの礼をしてやる」

「……………」

ついていくべきか、迷う。明らかに先日の件で意趣返しに來ている。それに対して正当防衛で反撃することが、宮水三葉としての生活に良い影響をおよぼすとは思えないし、戦力的にも3対1で筋力には自信がもてない。しかも、三葉の身体を無傷に、相手も軽傷におさめるとなると、かなり至難の業に思える。そして、たまたま自分が対応できる今日からんでくれたことは感謝したいほどの偶然で、この次も偶然に期待するのは危険すぎると判断して、三葉の頭が礼をした。

「先日は一時の感情に身を任せ、大変なご無礼をいたしました。どうか、お許しください」

「あん？ ……えらく今日は感じが違うな……………」

「こいつのオヤジ、選挙に出てるから、もめ事はヤバイってんじゃないっすか」

「なるほど。それならそれでよお、こつちも手荒なことはしねえから、ちよつと付き合えよ」

三葉の胸に男の手が伸びてくると、さっと後退った。

「逃げんなよ、コラ」

「どうか、お許しください」

「だからよお、詫びなら詫びで、誠意みせろや」

「口先だけじゃなくてよ、口の中で頼むぜ」

「そうそう、白いの吐き出さねえで、ゴックンしてくれや」

「口技は神業なんじゃねえか、反吐女」

「……………」

三葉の手に、つい力が入って拳になりそうになる。女性の尊厳を踏みにじろうとする三人の輩に鉄拳制裁を加えたくなる。相手は完全に油断しているので一瞬で正面の一人へボディーブローを入れて倒し、次の瞬間には右の一人を回し蹴りで仕留め、それで一対一になれば動揺するに違いないので勝機は確実に掴める。その自信はある。けれど、そんな宮水三葉はいけない、そして今日は勝てたとしても、こういった輩は軍法会議にでもかけない限り次回は6人9人と数を増やして再び来襲してくる。低俗ではあるけれど、それは戦略的には正しい上、その次回のとき宮水三葉が三葉本人だったら、ひどいことになる。だから、下品な言葉を浴びせられてもグツと我慢して再び頭をさげていると、克彦が間に立ってくれた。

「先輩、これだけ詫び入れてるんすから、このへんで勘弁してやってくださいよ」
「うっせえ！ ひっこんでろ眉毛！」

ガッ！

一喝されて克彦が蹴り飛ばされる。

「テツシー！」

心配して早耶香と二人で駆け寄った。すぐに克彦は立ち上がった。

「オレからも頼みます、もう勘弁してやってください！」

「……ちっ……」

かなり強く蹴ったのに、すぐ立ち上がってきたのは意外だった。克彦は休日建設現場で手伝いをすることもあるので体格も悪くない。小さな町なので、だいたいの素性はお互い知っている。

「勅使河原のぼっちゃんは、やっぱり宮水とデキてんのか？」

「もう手打ちにしてもらえませんか。お互い、一発ずつ、これで終わりに」

「けっ、足りねえな」

「これ以上やると、こっちも問題にしますよ」

「あん？」

「オレは、ぼっちゃんっすからね。うちにも若いのが大勢いる。つていうか、あんたらの

先輩も就職してますから、声かけたら、どうなりますかね？」

「くっ……家の力に頼るってのか、情けねえ野郎だ！」

「お願いしてるだけつすよ。これで手打ちに、頼みます」

克彦が頭を下げると、悪態をつきながらも上級生3名が去った。三葉の瞳が申し訳なさそうに克彦を見つめる。

「すみません。私のために」

「おう。缶ジュースおごつてくれよな」

「クスっ……わかりました。おごらせていただきます」

三葉の財布を勝手に使うことは少し気が引けたけれど少額なので缶ジュースを買った。

「……………」

この時代の缶ジュースと、私たちの時代のもの、ほとんど形状に変化がないな、よほど人類にとって普遍的な形に完成しているのだろう、と余計なことを考えてから克彦に渡した。

「ありがとう、テツシー。蹴られたところ、痛みは大丈夫ですか」

「もう平気だって」

美味そうに缶ジュースを飲む克彦に、もう一度頭を下げながら帰宅すると、すでに帰

宅していた四葉が訊いてくる。

「今日は、どうだった？」

「なるべく普通に授業を受けたのですが、一つ申し訳ないことがあります」

そう言つて上級生にからまれた件の顛末を四葉に話した。

「そんなことがあつたんだ。お姉ちゃんに伝えておくよ。他には？」

「あとは、お父様の選挙について周囲から言われたとき、どう対応するのが正しいでしょう？」

「テキストでいいよ。無視でもいいし」

「……ですが、政治的な代表を選ぶものですよね？」

「子供に関係ないじゃん」

「……そうかもしれないませんが……」

「私も訊きたいことがあるの、お兄さんに」

四葉は姉の身体が一日どう過ごしたかを訊いた後は宇宙や銀河について訊いてきた。それについて、後の歴史に問題とならない程度に答えながら夕食を終え、三葉へ手紙の返事を書いた。

宮水三葉さんへ

はじめまして。と言いましても、すでに私も、あなたへの手紙を置いておきましたし、

これを読まれているときには、もう戻った後になりますから、2通目ということになるのでしょいか、なんだか、ややこしいですね。

ご依頼の件ですが、私の気をつく範囲で努力いたしました。至らぬ点はあるかと存じますが、どうかご容赦ください。とくに、お身体については細心に気をつけたつもりです。

ただ、四葉に話しておいたのですが、少々の揉め事を起こしてしまい、テツシーには申し訳ないこともありました。明日もまた彼をいたわっていただけると幸甚です。

手紙を書き終えると国語辞典で誤字脱字をチェックして、入浴せずに12時を待つているうち、気になったので糸守町選挙管理委員会から各戸に配布されている選挙公報を手にとった。俊樹の公約が書いてある。

ブレない責任ある政治を！

宮水俊樹は責任を果たします。

宮水俊樹の5つの約束

農林業を地域の主役に！ 安全で美味しい農作物を提供することで地域の農業を元

気にします。

建設業を生き生きと！ 地域の雇用は建設業で守られています。建設業の応援団と

して皆様に役立ちます。

福祉・医療を充実！ 皆様が安心して暮らせる町へ、高齢化社会に対応した支援を推進します。

地方創生への挑戦！ 歴史的・文化的な資源に光を当て、民俗学者としての知見を發揮します。

子育て・教育は町の責任で！ 子供を安心して産み育てられる町へ、教育の機会均等な実現のために奨学金制度を充実させます。

三葉の口がつぶやく。

「……………すばらしい……………」

三葉の瞳がキラキラと輝いていく。俊樹の写真を熱く見つめている。

「……………これこそ、善政の模範……………ラインハルト様が目指すところ……………三葉さんのお父様も、すばらしい方……………」

共和主義政体については情報を制限されて育ってきたので、俊樹の公約を見て深く感動している。民主主義について、ごく簡単に投票によって代表を選ぶ、ということと腐敗もあり必ずしも善政を敷くとは限らないという程度のことしか知らなかったので、生の選挙公報を読むことができたのは、とても新鮮だった。そろそろ12時という頃になつて寝ていたはずの四葉が起きてきた。

「四葉？ どうしました？」

「一応、見守りに来たの、お兄さんとお姉ちゃんを。……まあ、今日はお兄さんっていうより、お姉様だった気がするけど」

「ありがとう、四葉」

そう言つて布団へ横になった。時計を見ると、あと2秒だった。

ミューゼルの艦隊の旗艦タンホイザーの艦橋でラインハルトは定刻になつてもキルヒアイスが現れなかつたので指揮席から立ち上がった。それを見てノルデン少将がタメ息をつく。

「はああ…遅刻とは、まったく、たるんでおりますな。しかも、これで二度目とは」

「……………」

お前は黙つていろ、という言葉を飲み込んでラインハルトは艦橋をおり、キルヒアイスの部屋に入った。想定通り、三葉はイスに座つて待つていた。

「おはよう、フロイラインミツハ」

なるべく優しい微笑みを心がけるとキルヒアイスの頬が赤くなつたので複雑な気持ちになる。宮中の女性から同じような反応をされることには慣れてきたけれど、相手が親友だと反応に困る。しかも、宮中の女性が相手なら無礼でない範囲で冷たくすればよかつたけれど、三葉には緊張させないように優しさを心がける必要があつた。

「お…おはよう…ございます…ラインハルトさん？」

「もう、キルヒアイスからの手紙は読んでくれたようだね」

「はっ」

三葉の手元にはキルヒアイスからの手紙が日本語で書かれていた。

宮水三葉さんへ

はじめまして。私はジークフリード・キルヒアイスと申します。

今回のこと、とても驚いておられると思います。正直、私も驚き、いったい何をすればよいのか、五里霧中の状態です。それでも、お互いに冷静になつて自分たちのためには、何をすべきで、何をすべきでないかを、分別していかねばならないかと考えております。

すでにご承知かと存じますが、私は銀河帝国の少佐であり、ラインハルト様の部下です。まことに勝手なお願ひではありませんが、三葉さんが私の身体におられる間、その立場で振る舞っていただきたいのです。

子細につきましては、ラインハルト様よりご説明あるかと思しますので、どうか落ち着いて、イスに腰かけ静かに待っていてください。

追伸 ラインハルト様が知らぬこととはいえ、シャワーを浴びていただく際に無礼があつたこと深く反省しておられますので、どうかお許しください。また、私の身体で入

浴していただくことは不快でなければ、どうぞご自由に。

手紙を読み終えたことを確認したラインハルトは、すぐに手紙を処分した。余人をもつて解読不能な文字ではあつたけれど、コンピュータにかければ解読されるし、余計な嫌疑は避けたかったので慎重に行動している。

「どうか、緊張しないでください。フロイラインミツハ」

「は……はい……」

「まずは一つ、私から詫びを入れさせていただきます」

「え……？」

「知らぬこととはいええ、フロイラインの前で裸になってしまい見苦しいところを見せてしまった。どうか、許してほしい。気が済まなければ叩いていただいてもかまわない。

どうか、この通り」

ラインハルトが恭しく片膝を床につき頭を下げると、三葉も日本人らしい仕草で両膝をついて頭をさげる。

「いえ、私こそ……いろいろ……わけ、わからなくて……」

「では、シャワー室の件は水に流してくださいますか？」

「はい、もちろん」

「ありがとう、フロイラインミツハ」

安心した顔をしたラインハルトに三葉は好感を抱いた。キルヒアイスにも好感を抱いているけれど、やはり一言の言葉も交わしていないので人となりをつかみにくい。鏡をみれば、そこにいるけれど、それは自分の肉体として動くので、どうしてもキルヒアイスに会ったという実感はなかった。

「では、まず、着替えていただくか。いつまでもパジャマのままとはいかないから」「着替え……」

「もちろん、私は退室するが、軍服の着方は説明させていただきます」

「あ、はい。お願いします」

三葉は帝国軍少佐の軍服の着方を教えてもらい、退室しようとしたラインハルトに告げる。

「わざわざ出てもらわなくても、背中を向けてもらえば大丈夫です。この身体は女の子じゃないし」

「わかった。では」

ラインハルトは背中を向けて立っている。三葉は教えられた通りに軍服を着てみたけれど、やはり微妙な乱れはラインハルトに調整してもらった。

「うむ、どこから見ても立派な帝国軍少佐だ」

「……そう……ですか……？　せ……戦争、してるんですよね……？」

キルヒアイスの身体が不安そうに立っているのは、ラインハルトとしては少し悲しかった。まるで貴族の子弟が戦場に出てきて怯えているような立ち方で実にナヨナヨとして情けない。けれど、ラインハルトはそれを顔には出さず三葉を励ます。

「大丈夫、軍隊といっても、この艦は旗艦、めったなことでは傷一つつかない」

「……………わ……………私も戦うんですか…？ 大砲とか、撃つの？」

「いえいえ、ただ私のそばに立っていてくれればそれだけで十分です」

「……………立ってるだけ？」

「ええ」

「……………ここにいちやダメですか？」

「どうしても不安なら、それでもかまいませんが、艦の構造上、指揮を執る艦橋が一番安全です。私はフロイラインミツハの安全のためにも目の届く艦橋にいてほしい」

「……………わかりました。……………言われる通りにやってみます」

「では、まずは立ち方と、敬礼をお教えます。私の真似をしてください」

そう言ってラインハルトは直立不動になり両手を腰の後ろで組んだ。

「これが基本の立ち方です」

「……………こう、ですか？」

三葉は真似してみる。

「もう少し胸を張って」

「…はい」

「そうそう完璧だ」

「……」

もともと身体が覚えていたのか、やってみると、すぐにできた。

「では、敬礼」

「はい」

二人で向かい合って敬礼すると、ラインハルトは笑い出してしまった。

「プツ…クスクス…」

「え？ …へ、変ですか？」

「いや、失礼。ついキルヒアイスの顔と、まじめに向かい合って二人きりで敬礼するなど、可笑しい状況だと思ってしまい。失礼した」

「うう…二人って、どういう関係なんです？ 上司と部下ってだけなの？」

「いや、キルヒアイスとは友人です。大切な」

「そうなんだ…じゃあ、敬語じゃない方が自然なんですか？」

「二人きりのときは、くだけてもらってかまわない。むしろ、私もその方が嬉しい。ただ、周囲の目があるときは上司と部下のように振る舞ってください」

「わかりました」

「では、艦橋にご案内します。フロイラインミツハ」

ラインハルトと三葉は移動して艦橋に上がった。

「うわあ……」

三葉は全天の星空を見て驚く。士官室にあったモニターの比ではない艦橋から見える宇宙空間に立ちすくんでいる。画像が鮮明すぎて、まるで宇宙空間に立っているような錯覚さえ感じた。

「これってガラス？ ……軍艦なのに装甲は？」

「アハハハ、むき出しに感じるかもしれませんが、ぶ厚い装甲の内部ですよ、ご安心ください」

「モニターなんだ……」

見上げている三葉にノルデン少将が近づいてきた。

「ずいぶんと遅い出勤ですな。さすがは少佐殿」

「……は……は……」

口調や目線の感じから、それが厭味だということは三葉にもわかった。とりあえず自分が着ている軍服よりも飾りが多いので敬礼をしたけれど、三葉が返答に困っているとラインハルトが前に立ってくれる。

「卿が言わずとも、私が指導する。しばらく離れていたまえ」

「わかりました。小言をともに聞いても仕方ありませんからな」

ノルデン少将が離れていくと、ラインハルトが耳元で囁いてくれる。

「指揮席までいけば、周囲には音が漏れにくいよう力場が働いている。こちらへ、どうぞ、フロイラインミツハ」

「はい」

二人で指揮席まで歩いた。

「女性を立たせて座るのは気が引けるが、立場があるので容赦してほしい」

「い、いえ、どうぞ、お気になさらず」

ラインハルトが艦隊司令らしく座り、三葉は指揮席の隣りに立ち、教えられた立ち方をしてみる。

「これでいいですか？」

「ええ」

「……………すぐ戦いになるんですか？」

「いや、おそらく今日も敵とは遭遇しまい。油断はしないが平穩でしょう。落ち着いて二人で話をしましょう。いろいろとフロイラインミツハには知っておいてほしいこともあるので」

「話を……じゃあ、戦っているのは宇宙人ですか？ それとも大きい怪獣みたいな？」
「っ……」

ラインハルトは目を丸くして、少し口を開けた。まさに啞然として、その美しい顔でポカンと口を開けている。けれど、それも数瞬だった。

「なるほど……なるほど……そういう思考になるか、…そうなるだろうな」

やや考えて納得し、それから答える。

「過去から来たフロイラインミツハに未来の出来事を教えてしまうのは、危険が伴うかもしれないから、絶対に過去に戻っても話さないと約束してくれますか？」

「……はい……」

「まず、いまだ我々人類は宇宙人というような存在と出会ったことはない。宇宙に巨大な怪獣もいない。まあ、銀河ごとごとくを調査探検したわけではないから、ひよつとしたら何かいるかもしれないが、人類が宇宙に出て千年、今のところは確認していない。出会ってもいないのだから、むろん、戦ってもいない」

「……じゃあ、何と戦ってるんですか？」

「人間だ。我々と同じね」

「………どうして？ 同じ人間同士で？」

「うむ、そう問われると哲学的だが、知っておいてもらわないと変なことを言い出される

から教えておこう。あなたがいた時代から、だんだんと人類は宇宙に進出していった」「ワープとかで?」

「そう。だが、何度か統一されたり分裂したりと、争いを繰り返して、五百年ほど前、銀河帝国が人類をまとめて統一した。だが、そこから脱出して別の国家をつくった集団もある。それが自由惑星同盟、我々は叛乱軍、叛徒と呼んだりもするが、そこそ戦争している。飽きもせず長々と」

「何のために?」

「まあ、銀河帝国としては人類はすべて銀河帝国のもとにあるべきだ、と考えているし、自由惑星同盟としては皇帝が支配する体制を打倒し民主主義を広めるべきだ、と考えているのだろう」

「銀河帝国って皇帝がいるの?」

「ああ」

「ふくん……」

「……………うむ、第三者からみれば、ふくん、で終わることかもしれないな」

ラインハルトは一瞬、自分の人生目標がありきたりな虚しいことに感じられそうになつて気を取り直して語る。

「私と二人きりのときは皇帝に対して、どう言っても問題ないが、他人がいるときは不敬

な発言は絶対にしないでほしい。不敬罪で処刑されることもあるゆえ」

「はい、気をつけます」

「キルヒアイスから聞いたが、フロイラインミツハのいた国もテンノウという皇帝のよ
うなものがおられるのであろう？ 不敬罪はあるか？」

「いえ、別に」

「その支配は、どうだ？」

「……うん……支配はしてないかな」

キルヒアイスの顔が女子っぽく傾げられる。ラインハルトは女性らしい仕草の親友
よりも国家体制に興味が湧いたので問うてみる。

「では、テンノウは何をしているんだ？ 放蕩の日々か？」

「えっと、大半の国民は深く意識してないけど、うちは神社だから知ってますが、祭祀
王っていう位置づけなんですよ」

「ふむ……どういふものだ、それは？」

「天皇は人だけど、神さまに一番近い人というか、半分神なような、やっぱり人のような」

「自己神格化か」

「あゝ……そういうのとも違うんですよ」

「どうせ、自らの判断は常に正しいと主張して国民に厳しい政策を押しつけておきなが

ら、自身の一族は特権を得て財産や欲望をほしのままにしているのだろうか？」

「うくん……そういうバカっぽい王様像とは、だいぶ違って、まず政策とか実際の政治には基本ほぼ関わらないんです。そういう意味では何もしてません」

「では、遊んでいるだけか？」

「いえいえ、王様というより、どちらかというとな神官の代表者、私たち巫女や禰宜の総代表、そういう意味で、もつとも神に近い人です」

「うむ、宗教上の代表者なのか？」

「そういう理解の方が近いですね。だから、神事も多くて大変なのに外交儀礼もあつたり総理大臣とか裁判官を任命したり認証したりで、放蕩どころか、ご高齢なのに毎日忙しくて、私も巫女っていう女性神官みたいなものをやってるから、わかるんですけどお正月も休憩する時間さえ無いくらいに……あの…、この話、ちゃんと語ると、とても長くなりますけど、聞きますか？」

「……………」やめておこう、フロイラインミツハには知っておいてほしいことが多いが、私が日本のことを知っても仕方ないからな。他に訊きたいことはあるかな？」

「銀河帝国と自由惑星同盟、どっちが勝ってるんですか？」

「うむ、いい質問だ」

ラインハルトは現在の情勢についてフェザーン自治領の存在も含めて説明していく。

そのうちに昼食の時間になった。ラインハルトは冷たい声で言う。

「ノルデン少将、しばらく艦隊指揮を頼む」

「はっ」

「何かあれば、すぐ連絡するよう」

ラインハルトと三葉は士官食堂ではなく艦隊司令官としての住居室に入った。また二人つきりになったので三葉が訊いてみる。

「あのノルデン少将さんのこと、ラインハルトさんは嫌ってるんですか？」

「わかるのか」

「なんとなく」

「うむ、女性の勤というやつか……」

ラインハルトは通信で従卒に昼食を2人分もってくるように言い、三葉のためにイスを引いた。

「どうぞ、座って」

「ありがとうございます」

立ちっぱなしだったので座れるのは嬉しい。テーブルを挟んで二人で座った。ラインハルトも意図的に姿勢を崩して、頬杖をついてみせ雰囲気をやわらげて言う。

「ご察しの通り嫌っている。公言してもいいが、まあ黙っているのが大人というものだ

ろうな」

すぐに昼食が運ばれてきて、食べながら午後の予定を説明される。

「午後からは避難訓練を行う」

「避難？ ……やっぱり危険なんですね…」

三葉が不安そうに問うと、ラインハルトは優しさと厳しさを表情に出そうか迷い、結局は優しさを選んだ。不慣れな優しい顔をつくって言う。

「フロイラインミツハ、この艦は旗艦ゆえ安全度は高い。だが、万が一ということもある。そんなときに安全にシャトルで脱出する訓練なのだ。しておいて損はない。……それに、フロイラインミツハのいた平和な時代でも、避難訓練はしておいて損はないと……いや、まあ、何でもない」

わずかにラインハルトも三葉が隕石落下の悲劇から偶然にでも助かってほしいと想い、口の端にのぼらせたけれど、やはり黙っておくことにする。

「ともかく、ここにいるからには、万が一のとき一人でもシャトルに乗り込めるよう手順を覚えておいてくれ」

「わかりました」

食事が終わると、二人でシャトルに乗り込み、艦外へ出てクルリとタンホイザーの周りを遊覧飛行した。

「うわああ……」

「やはり、見ごたえがあるかな？」

「はい、すごく……」

三葉は巨大な戦艦を見て感嘆している。ラインハルトは説明を始めた。

「前方に主砲をはじめ武装が集中している。後方は動力部、中央が居住区と艦橋になる」

「へええ……」

「しつかり覚えておいてほしい」

「はい」

「では一度、艦に戻り、フロイラインミツハが一人で操作して同じことをやってみよう」

「え……」

「大丈夫、私もついてはいく。ただ、操作は一人でやってほしい」

「…はい……やってみます…」

シャトルが艦に戻り、わざわざ一度、艦橋まで戻ってから三葉の判断だけで艦内の通路を進み、シャトル発着装置まで行き、乗り込む操作も三葉が挑戦する。けれど一度は見たものの、モニターや計器に表示されているのがドイツ語なので読めない。

「えっと……どれだっけ…」

もたついていてもラインハルトが優しく指示してくれた。

「このボタンを押して。やはり、キルヒアイスが予想したとおり会話はできて、文字は不自由するのだな。夜にはドイツ語の勉強をしていただく」

「……はい……」

「では、艦に戻り、次は射撃、ブラスタアの使い方を習得していただく」

「………やつぱり、撃つことが……あるんですか？」

「万が一、もしもというときに身を守る訓練ですよ、大丈夫、万が一です」

精一杯にラインハルトは優しい顔をつくり、三葉を艦内の射撃場に案内してブラスタアの撃ち方を教える。三葉は説明された通りに撃つてみる。

ピシユウン！

一発目からの的に当たった。

「フロイラインミツハは筋がいい」

「………3メートルしか離れてなければ、当たりますよ。お世辞はいいです」

見え透いた世辞を言われて三葉は少し疲労感を覚えた。ラインハルトの方も世辞を言う技術も熟練度も低いし、そもそも才能がない。何より女子の扱いに慣れておらず疲労感を覚えてきている。

「そうか、すまない。では次は10メートルで」

「はい」

だんだんと遠くなる的に、それでも身体が覚えていてくれるのか、集中して狙えば当たる。けれど、集中力が切れると外してしまう。三葉がタメ息をついた。

「はああ……」

「……」

こんなにもやる気のないキルヒアイスの顔は見たくなかった、と思ったラインハルトは無然とした表情になりそうになって、慌てて笑顔をつくる。

「はじめてにしては、とてもいい成績だ。世辞ではなく」

「ありがとうございます。この銃って、ぜんぜん反動が無いんですね。オモチャみたい」
「うむ、旧式の火薬銃は私も撃ったことがあるが、かなり反動が大きかったな」

以前の古式決闘戦を思い出しているラインハルトの前で、三葉がブラスターの発射口を覗いている。

「どういう仕組みで動いているのかなア……」

「っ?! 何をしている?!」

ラインハルトが怒気をはらんだ声をあげると、三葉がビクつと身を縮めた。

「(ハ)の……」

この大バカ者が、と怒鳴りつけそうになってラインハルトは握った拳を反対の手で押さえ込む。

「……落ち着け……相手はフロイラインだ……そうだな、オレたちの方が悪い……勝手に都合を押しつけて……ハア……そうだな、キルヒアイス……オレは発射口を覗くな、という説明をしなかった。うむ、オレの方が悪い、そうだな、キルヒアイス、お前が帰ってきたら、オレを誉めてくれ、オレは我慢したぞ」

ラインハルトは三葉へ背中を向けて心の中のキルヒアイスと会話すると、爽やかな笑顔をつくった。

「フロイラインミツハ、大切なことを説明し忘れていた」

「は……はい……」

「発射口は絶対に覗いてはいけない。たとえエネルギーパックが入っていなくても」

「はい、す、すみません」

「もちろん、友軍に向けてもいいけない。向けていいのは敵だけだ」

「はい、わかりました」

「では次は動いている的を狙ってもらおう」

「……少し休憩させてもらえませんか？」

「そうだな。では、ブラスタアの訓練が終わったら休むとしよう」

そう言ってもらえたけれど、三葉は動的射撃の後には、物陰に隠れてから打つ訓練や、伏せて打つ訓練、さらには模擬戦用のブラスタアに替えてラインハルトとの射撃戦を経

験させられてから、ようやく休憩になった。

「よし、10分間の休憩の後、次は小銃と小火器の訓練を行う」

「……はい……」

すぐに終わった休憩の後で、小銃やハンドキャノンなどの携帯型小火器の扱いを学び、午後5時になった。

「少し早いが夕食にしよう」

「はい！」

まだ混雑していない士官食堂の使い方も教わり、食事が終わるとラインハルトが当然のように言ってくる。

「シャワーを浴びた後、装甲服に着替えていただく」

「え……」

「あ、ああ、もちろん、シャワーがイヤなら省略してもいいが、射撃訓練で汗をかいたから、その方がよいかと思うのだが、どうだろうか？」

「いえ、その…シャワーはいいんですけど、装甲服というものに着替えて、何をするんですか？」

「むろん、白兵戦の訓練をしていただく」

「……まだ、続くんですね……」

「すまない。お互いの安全のためだ。いろいろな状況に対応できるように。一通り学んでほしい」

「……わかりました……頑張ります」

疲れてきた三葉は、それでもシャワーを浴びてから装甲服の着方を教えてもらい、格闘戦で身を守る方法を教授された。

「では、次は攻撃の方法だ」

「……はい……」

「攻撃は主に戦斧、ナイフ、そして素手となる」

「……はい……」

だいたい身体が覚えていくるので実演され真似してみるとできる。けれど、やっぱり疲れる。体力はある感じがするけれど、精神的に疲れてくる。軍事知識も教えてもらうと、忘れていたことを思い出すかのように頭へ入り、記憶の引き出しが整理されるようになっていくものの、やっぱり大変だった。ラインハルトと戦斧を交えつつ三葉が問う。

「…ハア…ハア…あの、そもそも、こんな原始的な戦い方をするこことあるんですか？

さっきのブラスターで決着がつくんじゃ？」

「あ、そうか。ゼツフル粒子の説明を忘れていた。休憩がてら説明しよう」

「……………」

休憩中にも、いろいろと説明され、午後8時なって装甲服のまま艦橋に戻った。ノルデン少将が驚いて声をかけてくる。

「どうしたのですか？ そのような姿で」

「これより全艦規模での模擬白兵戦を行う」

「えええ……………」

三葉とノルデン少将が異口同音したけれど、ラインハルトは指令を発する。

「艦内の各員に告ぐ！ これより全艦規模での模擬白兵戦を行う！ まず陸戦要員を7対3に分け、7を侵入した敵兵、3を守備兵とし、陸戦要員でない者も艦航行に差し障りのない者はすべて守備側として参加しよう！ 敵軍の勝利条件は司令部要員の制圧、防衛側は司令部要員を守りきるか、シャトルにて脱出させれば勝ちとする！」

「……………」

三葉とノルデン少将が、やる気無さそうに聴いているし、他の艦橋要員も金髪の司令官が急に言い出した模擬戦を心底迷惑そうにしている。すでに、午後8時を過ぎていて夕食も終わり、艦内の全員が舌打ちしたくなるような指令だったけれど、それはラインハルトも自覚していた。

「むろん、時間外超過勤務手当は支給される！ さらに、勝利側へは今月の私の給料をす

べて差しだそう！ 一個艦隊司令官の給料だ！ 男子に二言はない！ 15分後、模擬戦開始とする!!」

個人的な報償の設定により、一気に艦内が沸き立った。

「よし、やるぞー！」

「こっちは守りきるか脱出させればいいだけだ！」

遮音力場をこえて響いてくるほど艦橋要員も盛り上がっているけれど、三葉とノルデン少将だけは興味が無さそうにしている。

「……お金もらつても……」

「私は白兵戦が苦手です、この演習はパスさせていただきますのですが……」

貴族出身らしい発言にラインハルトの瞳がギリリを光った。すでに三葉に対して忍耐と優しさを一ヶ月分は差しだしているのに、容赦なく怒鳴る。

「ノルデン少将！ 苦手なればこそ訓練するのが道理であろう!!」

「うう……」

「さっさと装甲服に着替えてくるのだ！ もっとも、そのまま参加でよいなら、そうしているがいい！」

「はっ……」

仕方なくノルデン少将が更衣室へ走っていく。三葉は艦橋の階段に座り込んでいた。

「……おうち帰りたい……男子に二言はなくても女子には、二言、三言いいたいことがあるよ……」

「フロイラインミツハ」

キルヒアイスの肩が見たことがないほど落ちているので、ラインハルトは今までの生涯に無いほど、優しく、そして申し訳なきような顔で告げる。

「巻き込んで済まない。だが、お互いの安全のためなのだ。万が一、この艦に敵兵が侵入した場合、どういう対処がされ、フロイラインミツハが、どう動くのが最適か、学んでおいてほしいのだ。頼む」

「……は……い……」

三葉は祖母の顔を思い出した。幼い頃から参加させられた神事の舞いや祝詞の練習は三葉が疲れたといっても、やりたくないといっても、優しく厳しく予定通りに進められた。祖母とラインハルトの顔は、まったく似ていないけれど、三葉にはラインハルトと一葉の顔が重なって見えてきた。

「……う……どの世界にいても……やりたくないことを……」

審判役の艦橋要員が模擬戦開始を告げる。

「状況開始します！」

模擬戦が始まった。右舷から侵入したと想定された敵兵に対して、ラインハルトは防

衛陣を構築していくけれど、もともと陸戦要員が味方3に対して敵側が7なので、じわと押されていく。ノルデン少将が不安そうに提案してくる。

「そろそろシャトルへ移動しませんか？」

「いや、まだだ。この状況で艦を捨てるのは早い」

気質的に逃げるのが好きではないため、自ら設定した勝利条件を満たすより、より実戦に近い判断をしていたけれど、敵側はラインハルトたち司令部要員が早々に逃げ出すと想定してシャトル方面への兵力を大きく割いていた。おかげで艦橋を守りつつ、敵兵力を待ち伏せによる逆襲で減らしていった。それでも結局は艦橋への侵入をゆるした。

「突破されました！」

「迎え撃て！」

艦橋に雪崩れ込んできた敵兵は15名、もともと白兵戦の訓練が少ない艦橋要員は報奨金ほしさに奮戦したけれど、やはり倒されていく。三葉も倒されないことを目標に戦っていた。

「ハア…ハア…うう…ノルデン少将さん、もう、やられたの？」

「ははは、すみません。白兵戦は苦手です」

なるべく痛くないように殴られて倒れたノルデン少将は立ち上がらず、もうダメージ判定をほしがっている。ラインハルトは後ろから蹴つてやろうかと思っただけれど、もと

もと期待していなかったので自制して三葉へ叫ぶ。

「キルヒアイス！ 私の後ろにいるんだ！」

「ハア…ハア…」

「キルヒアイス！ こっちだ！ キルヒアイスうう！」

「……………あ、私か…」

そう言つて振り返つた瞬間、敵兵に打たれてダメージ判定をもらった。

「あう……………ごめんなさい…」

「いや、よくやった。想定以上に」

三葉はキルヒアイスの身体で敵兵を倒せないまでも複数足を止めしていた。おかげで、その間にラインハルトは数名を倒している。それでも、もはや艦橋に残っている自軍側はラインハルト一人だった。敵兵がラインハルトだけになったので嬉しそうに戦斧を手にして近づいてくる。

「へへへ、とうとう、お一人ですな。金髪の司令官どの」

「だが、貴様らも3人だ」

「3対1、もう降伏していただいて、けっこうですよ」

そう言われて降伏する性格なら、とつくにシャトルへ向かつていたので、奮戦してラインハルトは3人の陸戦要員を倒しきった。左腕と右脚にダメージ判定を受けて、もう

死亡判定の寸前だったけれど、それでも生き残っている。

「ハア……ハア……オレの勝ちだ！」

勝ち誇るラインハルトを三葉とノルデン少将が微妙な目で見る。

「……………」

これが実戦だったら、たった一人、艦内に残った司令官、という状況で、それはそれで勝ちなのだろうか、と三葉とノルデン少将は疑問に思ったけれど余計なことは言わないでおく。審判役が告げる。

「模擬戦終了です！ 守備側勝利！」

「司令官万歳！」

「ミューゼル閣下万歳！」

「……ちつ……最後の最後で……」

「……くそつ……白兵戦が得意な艦隊司令官って、どうだよ……」

「……自分が暴れたかっただけじゃねえのかよ……」

「……艦隊指揮なんてやってないでオフレッサーに弟子入りしてこいよ……」

「……まあ、ビビって逃げるぼっちゃん貴族よりマシか……」

報奨金がもらえる方は喜んでいり、負けた方は悪態をついている。それでも年齢のわりに頼もしい艦隊司令官で部下を置いて逃げ出す可能性は低そうだと感じられてい

た。ラインハルトは晴れがましい笑顔で三葉を誉める。

「フロイラインミツハ、よく頑張ってくれた」

「…逃げ回っただけですけど…」

そう言いつつも三葉も疲れた顔で嬉しそうに微笑み、装甲服を脱いで自室に戻った。けれど、ラインハルトがドイツ語と日本語が併記されたキルヒアイス手製の学習帳をもつてきたので、子供が嫌がるように首を横にイヤイヤと振った。キルヒアイスの瞳が泣きそうに潤んでいる。

「…うう…」

「フロイラインミツハ、もう少し頑張ろう」

「もう10時ですよ。少しは休ませて…」

「あと2時間だ。頑張ろう」

「……………鬼……………」

「本当に、すまない。だが、次にフロイラインミツハが入れ替わって来たとき、そこが戦場でないとは限らない。基本的な用語が読めないと致命的ということも。さ、今のうちに頼む」

「……………金髪の鬼」

「大丈夫、キルヒアイスが言っていたが、すぐに覚えられるそうだ。もともと会話は成立

するのだから、普通に言語を習得する何倍も早く覚えらるらしい」

「……………いつは……………赤鬼だよ……………」

三葉は赤毛の頭を抱えつつ、学習帳に12時まで向かった。

キルヒアイスの瞳がイヤイヤ勉強している子供のような目から、穏やかな貴婦人のような瞳に変わり、それからキルヒアイスとしてラインハルトを見上げた。キルヒアイスは机に向かって学習している姿勢だったし、ラインハルトは隣にいて教えている体勢だった。

「家庭教師のようなラインハルト様を見ることができるとは思いませんでした。案外、ラインハルト様も教師に向いているかもしれないですよ」

「はあああ……………やつと戻ったか。疲れたぞ、オレは！」

ラインハルトはベッドに倒れ込む。

「キルヒアイス、オレを誉めろ！ これほど忍耐と優しさを総動員したことは、かつて無いぞー！」

「それは、ご苦労様です。三葉さんの方も疲れたでしょうね」

「そうだろうな……………外見がキルヒアイスだから、つい忘れそうになるが、17歳のフロイラインに一日で叩き込めるだけ叩き込んだのだ。ひどいことをしているとは思いが

……あいつめ……なかなか口が悪い……

「彼女は、何と？」

「金髪の鬼」

「クスっ…、それは、それは」

「お前のことは赤鬼と言っていたぞ」

「このカリキュラムを考えたのは、私たち二人ですから、そう思えるでしょうね。それで三葉さんであるときの私は、どうでしたか？」

「まあ、素材がいい、というか、キルヒアイスの身体だからな、白兵戦はそこそこ、射撃も悪くない。もう2、3回、訓練すれば、お前の半分くらい。半人前キルヒアイスにはなるだろう」

ラインハルトが起き上がって問う。

「お前の方は、どうだった？」

「もともとが平和な時代の、ごく平和な国ですから、学校に行つて帰る。それだけです」
「羨ましいことだな」

「興味深いのは、やはり彼女の父親ですね」

「ほお、どんな父親だ？」

「誠実そうな政治家です。しかも、選挙の真つ最中で公約なども配布されています」

「ん？ テンノウが儀式をして大臣を任命していくのではなかったか？」

「天皇という君主は象徴に過ぎず、国政も地方自治体の運営も共和主義的な選挙によって選出された首長や議員によってなされていますよ。行政の長である総理大臣も選挙で選ばれた議員の中から選出され、天皇は形として権威を与えているだけです」

「ふ〜ん……」

そう言ってからラインハルトは三葉と同じ反応を自分がしたことを自覚して、笑った。

「ハハッ！ なるほど、どうでもいいことだ」

「お疲れでしょう。もうお休みください」

「お前も疲れているだろう？」

「そうですね……身体は不完全燃焼というか、全力で白兵戦をしたかった身体が、とてもハンパなところで終了のホイッスルをもらったような感じです」

「アハハハ、そうだろうな。さて、寝るとしよう」

そう言っただけでラインハルトは退室し、キルヒアイスも一人になると、すぐに眠った。

三葉の貴婦人のように伏せられた睫毛が、イヤイヤ夜中まで学習させられている小学生のような目で開いた。

「Schlachtschiff…戦艦…あ！ やつと戻った!!」

「お帰り、お姉ちゃん」

「うっ！」

呻いた三葉は右手で、はしたなく自分の股間を押さえた。強い尿意を覚えている。

「うう…：…漏れるうう…」

さらに左手でも股間を押さえる。制服のスカートを食い込ませて、とてもはしたない姿になったので四葉がタメ息をつく。

「はああ…もどった途端に、これか…」

「トイレトイレ！」

三葉は両手で股間を押さえたままトイレに駆け込み、無事に用が済むと今度は喉の渴きを強く覚えた。

「喉、乾いた。お茶あるかな」

冷蔵庫からお茶を出して飲む。一杯で足りず三杯を飲んだ。その様子を見ていた四葉が言う。

「たぶん、お昼からは水分も控えてトイレに入ってなかったんだらうね。朝のトイレの後は悲愴な顔してた」

「こっちも悲愴だったよ。はああ…：…殺されるかと思った」

「戦場だったの？」

「戦場なみ！ お客さん扱いしてくれたのは最初だけで、あとは訓練！ 訓練！ 夕食の後には模擬戦まで！ それが終わったら10時から12時まで勉強だよ！ ひどいと思わない?!」

「……かなりスパルタだね」

「誉めて、私を誉めてよ、四葉」

「うん、頑張ったね、お姉ちゃん、よしよし」

四葉に頭を撫でてもらい、少し気分が癒された三葉は気になることを訊く。

「あの赤鬼は、どうしてた？」

「赤鬼？」

「キルヒアイスのこと！ 私の身体で、ちゃんと女の子らしく過ごしてくれた？ 学校で変なことしてない？」

三葉はキルヒアイスが残してくれた手紙を読みつつも、妹からも確かめておきたいので問う。

「私の身体にエッチなこととかしてないよね？」

「安心して。そんな人じゃないし、お姉ちゃんより女の子らしく過ごしてたよ」

「私よりって……お風呂とトイレは？」

「お風呂はまだ。トイレは小は済ませてって言ったから朝は、ちゃんとしてた。その後は、ずっと我慢したのかも。……………」

四葉が朝の様子を思い出して、どう言うべきか迷った顔になると、三葉は強く不安になる。

「なに？ 何かあったの？ ねえ?!」

「なんて言うか……………つらそうだったよ」

「つらいって何が?」

「潔癖すぎるのかな……………女性に対して、ちゃんとしなきゃって気持ちがありすぎて、おしっこするのにパンツを脱がせるだけでも、すごい罪悪感があるみたい」

「……………罪悪感……………」

「もしかしたら、女性関係で何かトラウマとかあるのかもね。沈着冷静な感じの人だけだと、そういうところはデリケート過ぎるっていうか。そんな感じ。だから、エッチなことなんて絶対しないよ」

「そっか……………よかったア……………でも、トラウマって何が……………」

「私、もう眠いから寝るね。お風呂、まだ残ってるよ」

「うん、ありがとう」

三葉は入浴するために脱衣所で裸になった。鏡で自分の裸体を見る。身体に異変は

無い。

「…………この状態で意識が他人に…………しかも男子に…………嫌すぎる…………。まあ、でも、トイレも我慢できる範囲は我慢してくれたみたいだし…………。あくあ…………疲れた」

湯船に入ると、疲労感を再認識した。精神的にもヘトヘトだったし、自分の肉体も慣れない姿勢を続けていたからなのか、とても疲れている。湯船で寝そうになり、フラフラと揚がつて布団に倒れると、すぐに眠った。

「おはよう、お姉ちゃん」

「…………うん…………おはよう…………もう朝…………一瞬だった…………」

「そろそろ起きないと、また遅刻するし」

「……………」

まだ寝ていたそうな顔で三葉は起きて着替える。四葉が朝食の当番も代わってくれていて、ぼんやりと食べて家を出る頃になって、やっと目が開いてくる。路上で早耶香と克彦に出会った。

「おはよう、三葉ちゃん」

「おはよう、三葉」

「おはよお…………」

元気が無さそうな三葉を見て早耶香が言う。

「今日は電池切れみたいやね」

「私はロボットか……あ、テツシー、昨日は、ありがとうね」

上級生にからまれた件を四葉が朝食時に話してくれたので、克彦へ礼を言った。

「おう。いいってことよ」

そう言つて克彦がガッツポーズすると、三葉は気になったので克彦の上腕二頭筋に触れる。

「ふくん……普通は、これくらいか……」

「……ま、まあな。何と比べてだよ？」

「何つて………軍人さんとか」

「ぐ……そ、そりや、あいつらの訓練は、すげえだろうしな……オレは、ただの高校生だからな」

やや男のプライドが傷ついた様子の克彦へ、沙耶香がフォローを入れる。

「テツシーは普通より逞しい方だよね」

早耶香は言いながら、反対の上腕二頭筋に触れた。三葉より、ゆつくり長く触れる。

「ほら、テツシーって現場の手伝いもしてるから、運動部よりあるくらいだよね」

「ま、まあな」

今日から筋トレしよう、と克彦は決意しながら二人と登校した。

俊樹とホーランドに栄光あれ

キルヒアイスは三度目になる体験だったので落ち着いて起き上がった。その身体は17歳の三葉のものになっている。

「制服がない……私服？ 今日は何曜日か」

三葉の制服はクリーニングに出されていて部屋に無く、私服がセットになって置いてあったので目を閉じて着替えた。

「三葉さんの予定は……」

置いてあった手紙を読んだけど、とくに予定はない様子で身体に触れないでほしいことが繰り返し書かれているだけだった。

「三葉さんの方は予定なしか。……けれど、ラインハルト様の方は、おそらく今日にもティアマト星域で同盟軍と交戦状態に……このタイミングとは。……艦隊戦そのものはラインハルト様なら問題ないとしても、ノルデン少将との関係も……。心配しても何もできない。今は忘れて、三葉さんとして行動しよう」

窓から空を見上げたけれど、ラインハルトがいるのは遠い銀河のイゼルローン回廊の

向こう、しかも時代さえ違う。何もできないと悟り、気持ち切り替えて女性らしい振る舞いを心がける。しとやかに髪を整え、一階におりて顔も洗った。

「おはようございます」

「あら、おはよう、ジークさん」

一葉の家事を手伝い、ゆっくり寝ていた四葉が起きてくると朝食をとみにして、平日にはできない家事や神社の掃除を手伝って昼食が終わってから、一葉に問う。

「町の中を散歩してみたいのですが、よろしいでしょうか？」

「ええよ。手伝ってくれておおきにね。これ、ジークさんに」

一葉が3000円を渡そうとしてくる。

「いえ、このようなお気遣いまでいただかなくても…」

「もらっておいて。使うところなんてコンビニと自販機くらいしか無いけど、三葉の財布とは分けて持っていれば、ちょっとしたことには気兼ねのう使えるでしょう？」

「それは……たしかに……。ありがとうございます」

まったく通貨を持たずに行動するのは不便かもしれないと受け取り、前回に克彦へ缶ジュースを買った分を三葉の財布に補給してから、ポケットに入れた。家を出て町を見て回る。

「キレイな町だ。……ここが……この地球が……」

隕石落下と核戦争のことを思い出しそうになって頭を振った。

「忘れよう。ティアマト彗星のこともティアマト星域のことも。おっと、いけない」
つい男言葉になつてゐるのを自覚し、アンネローゼのことを思い浮かべ、しっかりと真似をする。

「どこへ行きましょう。学校ではない方向がいいかしら」

女性らしい足取りで歩き、すれ違う町の人にも挨拶しながら散歩していると、気になる車が通りかかった。

「今日は糸守町町長選挙の日です！ みなさん、投票に行きましようー」

町の広報車が早耶香の姉の声を響かせて周回している。

「投票……………」

とても興味が湧く。

「あれが投票所……………」

歩いていると、すぐに投票所と書かれた看板が公民館に置いてあり、中に入つてみると思いつとも迷つてゐると、外でタバコを吸つていた町職員に声をかけられた。

「三葉ちゃん、どないしたん？」

親しげな声のかけられかたなので、向こうは三葉の顔を知つてゐるようだった。

「はい、その…………もし、よろしければ投票所の中を見学させていただけないかと思いまし

て」

「ああ、なるほど。いよいよ興味が湧いてきたんか。ええこつちゃ。ほな、案内するわ」
気さくに職員が案内してくれ、中に入ると投票箱や入場整理券の受付があり、立会人もいて、みんな三葉の顔を知っているようで歓迎してくれる。

「なんでも訊いてや」

「はい、ありがとうございます。では、なぜ、あそこの机にはついたてがあるのですか？」
三葉の指が投票用紙を書くための机を指すと職員が答えてくれる。

「そりや秘密選挙ちゅーてな。誰が誰に投票したか、見られたら書きづらい場合もあるやろ。本当に支持して入れて入れたい候補者に票を入れられるよう、横から見られんためのもんや」

「そんな配慮があるのですか。すばらしい町ですね」

三葉の顔が画期的なことを知ったという表情になる。逆に町職員は反応に困る。

「……。いや、うちの町だけやのうて、全国どこでもあるはずやで」

「国中で……。本当に、すばらしい国ですね」

「……。まあ、そうやな……」

どこことなく応答にズレたものを感じつつも、町職員は女子高生が初めて選挙に興味をもつて見学しているの、こんなものか、と思うことにした。

「他に質問したいことはあるかい？」

「はい。あの人たちは、やはり監視役なのですか？」

今度は立会人について訊く。明らかに投票箱を監視できるような位置に座っているので気になった。けれど、憲兵のような制服ではなく、ただの私服を着ているし、性別も年齢もまちまちで警察や軍の人間とは思えない。

「監視役ちゅーか、立会人は有権者の中からランダムに選ばれて、投票に不正がないか、見守る役やから、まあ、監視役ちゅー監視役やけど、どっちかというと、ワシら役人が不正をせんか、見張る役やね。もちろん、日当もでるよ」

「国民が役人を監視するのですか？」

「そうや。とくに開票作業は、しつかり立会がされるよ」

「国民が……役人を……よくこれほど、すばらしい制度を……。どうやって、こんなすばらしい制度を築いてこられたのですか？」

「そ……それは、まあ……長年の努力ちゅーか、コンプライアンス的な？ 公職選挙法も、じわじわ厳しくなるでの」

「……。厳しくなるというのは、やはり思想信条によつて投票が制限されていくということですか？」

「いやいや、厳しくなるのは立候補者の方や。まあ、一番露骨なのが票の買収やけど、他

にも選挙活動に使っていい金額も上限があるし、何より金権政治にならないよう、どんどん厳しくなっていっておるよ」

「……………」

三葉の顔が強く感動している。

「三葉ちゃん、そんなに興味があるんやったら、お父さんの事務所に行ってきたらええやん。きつと、喜ばはるよ」

そう言つて職員が俊樹の選挙事務所を教えしてくれる。教えられると、目立つ看板と幟旗が立っていたので、すぐにわかった。近づいていくと、運動員から声をかけられた。

「あら、三葉ちゃん、来てくれはったの。どうぞ、中に入って」

運動員といつても、同じ色のエプロンをしただけの近所のおばさんで登校中に見かけたことがあるような気もする。選挙事務所は勅使河原建設の資材置き場にあるプレハブで中に入ると、必勝という文字が大きく書かれた紙が何枚も貼ってあり、中央には片目のダルマガが鎮座している。そして、パイプイスが並び、20人くらいの町民がヒマソウに雑談していたけれど、三葉の顔を見ると一斉に声をかけてくる。

「おお、三葉ちゃん！」

「よう来たね！」

「まあまあ、三葉ちゃんやないの！」

「お…お邪魔いたします…」

圧倒されて返答に困るけれど、おおいに歓迎されている。それがしばらくして落ち着くと、俊樹が奥から顔を出した。

「三葉、どうして、ここに来たんだ？」

「すみません。ご迷惑でしたら、すぐに帰ります」

「いや、別に迷惑ではないが…」

俊樹が対応に困っている様子だったけれど、運動員のおばさんが三葉の両肩を抱いてくる。

「ホンマは喜んでるんよ。あんな顔してても」

「……お父様が……」

「ま、…まあ、…来てくれて嬉しいが……どうした？ 何か用事か？」

「……………」

問われて三葉の瞳が迷い、それから決意して言う。

「お父様におうかがいしたいことがあります」

「そ…そうか。…なんだ？」

「お父様にとつて民主主義とは、どのようなものですか？ 共和制を、どのようにお考え

ですか？」

「……………」

「[[[[[[……………]]]]]]」

いきなりの質問に俊樹は目を丸くしたし、にぎわっていた町民たちも静かになる。

「……………。三葉、ずいぶんと本質的な質問をするのだな」

俊樹は娘の瞳を見る、とても真剣に問う、澄んだ瞳だった。

「わかった、私も真剣に答えよう」

そう言つて俊樹は咳払いをして語る。

「私の目指す民主主義とは、単に多数派の意向をもつてよしとするものではない。むしろ、多数派の求めることこそ最重要視するが、それは少数者を無視するということではない。多数派の代表が少数者に配慮しつつ、政治を采配することこそ肝要だ。こんな小さな町でも、ときに争いは起きる。我田引水という言葉があるだろう。昔は村内でさえ、水利一つをめぐる殺し合いになることもあった。人は利益を求め、生存を求め、ときに、それは衝突を招く。その衝突を防ぐために、話し合う」

もともと学者から政治家に転身した俊樹も若者から質問されて、それを教授するのは好きな方だったので、しっかりと語ってくれる。

「和をもつて尊しというように、目指すところは、みな合意が得られることだが、必ずしも全員が頷くとは限らない、それでも少数側に強い不満が残らぬよう、配慮した采配

を行つていく。建設工事の発注もそうだし、農業用水の整備も、そうだ。保育園の増設だつて必要だ。だが、予算には限りがある。その中で、どれを行い、どれを我慢してもらうか、配慮しつつ決める。その采配が最善でなくとも次善の範囲におさまり、皆さんが納得していてくれれば、私は来期も町長であるし、そうでなく失政や慢心があり、また何度も少数者への配慮を欠けば、それは重なつて次第に多数者となるだろう、そして、人心は離れ、いずれは選挙に負け、去るのみとなる。そうならぬよう、町民の声を聴き、みなに配慮する。それが、私にとつての民主主義であり、共和制への考えだよ、三葉」

黙つて聴いていた三葉の頭が深くさげられた。

「お父様のご見識、感服いたしました。誇りに思います」

「三葉……………お前も大人になつたな」

俊樹は涙腺を指先で押さえて頷いた。静かに聴いていた町民たちも拍手してくれる。

三葉の頭が町民たちへも向かつてさげられた。

「お父様へのご支持まことにありがとうございます。どうぞ、これからもよろしくお願ひいたします」

三葉の唇が支持を願うと、近くにいた町民が握手を求めてくる。

「ええ娘さんに育つて！ おつしや、福井で仕事しとる弟にも声かけちやるわ。住民票は、こつちのままやしな」

「おう、ワシも息子に声かけたるわ！ あいつ、いつペンも選挙に行きおらんし！ いい加減、大人にしたる！」

「私も！」

「オレもや！」

「ありがとうございます、ありがとうございます」

三葉の手が何人もの町民と握手を堅く交わしていくと、どうせ今回も俊樹が勝つだろうという事前予想でたるんでいた雰囲気が一変した。まだ、昼過ぎなので急いで親類縁者に声をかければ一票でも集まる。にぎわつてくると、なにか手伝いたくなつて俊樹に問うた。

「何か私にお手伝いできることはありませんか？」

「うゝむ……未成年者の選挙運動への参加は禁止されているのだよ。気持ちは嬉しいが……みなさんに、お茶を淹れることくらいかな……」

「わかりました」

そう言つて、お茶くみをしながら三葉の唇が頑張っている運動員たちに微笑みかけると、より頑張つてくれる。そうしているうちに、日が暮れて開票時間が迫つてきた。そろそろ帰宅しなければ、とも考えるけれど、どのように選挙が終わるのか、とても興味があり知りたい。

「三葉、夕食もこちらで食べていきなさい。まあ、オニギリくらいしかないが」
「ありがとうございます」

礼を言つて心配をかけないよう三葉のスマフォで家に電話をかけた。

「もしもし、宮水です」

四葉の声がする。

「三葉です」

「ああ、お兄さん。遅いから心配してたよ」

「すみません」

「まだ帰つてこないの？」

「はい、お父様の選挙結果を見守りたいのです」

「……………そんなの面白い？」

「とても興味深いです」

「そっか……………それなら仕方ないか」

電話を終え、時計を見ると8時だった。俊樹がマイクを持ち、事務所内にいる町民たちを挨拶する。

「ただいま投票が閉め切られ、いよいよ開票となります。本日までの皆様のご支援、まことにありがとうございます。今暫くお時間をいただけますよう、よろしくお願いいた

します」

町民たちと三葉の手が拍手をして、そして静かに待つ。開票作業が始まって15分で選挙管理委員会が当確を町内放送で流してくる。早耶香の姉の声が事務所に響く。

「こちらは糸守町選挙管理委員会です。本日開票されました町長選挙の結果を発表します。当選、宮水俊樹さん。繰り返します、当選、宮水俊樹さん。以上です」

「万歳！」

誰かが叫ぶと、すぐ続く。

「宮水先生、万歳！ 糸守町、万歳！」

「お父様、万歳！ 民主主義、万歳！ 共和制に栄光あれ！」

「……。万歳!! 万歳!!」

娘さんが少し変なことを叫んだけれど、若い子の言うことなので町民たちには深く気にされず、みんなが万歳し、俊樹はダルマに目を入れる。どういう風習なのだろうと、見ていると若い美人の秘書が声をかけてきた。

「宮水先生への花束の贈呈役をお願いします」

「…はい」

一瞬躊躇したけれど、娘という立場なので儀礼上、当然だと判断して花束を持ち、俊樹に近づく。

「お父様、ご当選、おめでとうございます。これまで以上のご健勝ご活躍を祈念いたしております」

「うむ……うつ、うむ！」

花束を受け取った俊樹が涙ぐみ、上を向いて涙を流すまいとしたけれど、ダクダクと涙が溢れてきた。

「宮水先生が泣いてはるわ。そら娘さんに祝つてもろたら嬉しいわな」

「ぐすつ……これは目の玉が汗をかいておるのです」

言い訳をして泣き笑いになっている。感動が伝染して、三葉の目尻も濡れた。この場面なら泣いても問題ないし、女子という立場でもあるので涙を零しながら言う。

「本当におめでとうございます。お父様」

「ああ、ありがとう、三葉」

感動し合う親子へカメラマンが言ってくる。

「お二人とも記念撮影をいたします。こちらを向いてください」

撮影が終わり、さすがに酒宴になると未成年なので帰宅する。玄関に入る前に、ふと違和感に気づいた。

「……なぜ、お父様と三葉さんたちは同居されていないのでしょうか……」

今さらながら、気になった。

「ただいま戻りました。遅くなり申し訳ありません」

「おかえり〜い」

「おかえりなさい」

四葉と一葉が迎えてくれた。

「選挙なんか面白かった？」

「はい、とても興味深いもので感動いたしました」

「そっか。……………」

「……………」立ち入ったことを訊くようですが、お父様と三葉さんたちは、なぜ、同居されていないのですか？」

「……………」

四葉が無言で一葉を見る。一葉は少し考えてから答える。

「ジークさん、立ち入ったことはお訊きにならないでください」

「はい、大変失礼いたしました、どうぞ、お許してください」

「私はもう休ませていただきますね。四葉も夜更かしはダメよ」

そう言つて一葉が寝間へ入ると、四葉は問うてくる。

「また、おしっこ我慢してる？」

「……………」

三葉の睫毛が戸惑った風に揺らめく。今日はお昼から選挙事務所にて忙しく立ち回りつつ、女子トイレを使うことは遠慮していた。なのに、お茶を淹れてもらうことも何度かあって、今現在かなり我慢していた。相変わらず表情には出ていないけれど、ぴったり膝を閉じて正座している様子から四葉の問いは正鵠を射ていた。

「やっぱり、おしっこ限界が近そうだね？　遠慮せず、しちやいなよ。っていうか、してあげて。でないとお姉ちゃんに戻ったとき、おもらし寸前でパニックってるから。ほらほら、トイレ行って」

「……。四葉………はい……、そうさせていただきます。でも、四葉、あなたも10歳のレディーになるのですから、そういうったことは口の端に登らせるのも憚り多きこととお知りになった方がよいです」

「はい。ほら、トイレ行って」

「失礼します」

三葉の身体がトイレに入り、用を済ませて出てくる。限界が近かった生理現象を済ませると心持ちが落ち着いた。一人になって三葉への手紙を書き終えると、三葉のスマフォを使って公職選挙法について調べているうちに12時前になった。今日一日の体験が心を巡る。

「……選挙………すばらしいお父様………私は、これを体験するために、ここへ来たのかも

しれない……」

そうつぶやいてから、三葉の身体は布団へ横たわると、まだ興奮の冷めやまぬ様子で目を閉じた。

第三次ティアマト会戦が三葉の眼前で開戦していた。前衛のミュッケンベルガー元帥の艦隊が、すでに同盟軍と砲火を交えている。三葉は指揮席の隣りに立って、かなり遠くに見える戦闘の光りを見ており、ラインハルトが余裕をもって問う。

「どうかな、フロイラインミツハ、艦隊戦を見ての感想は？」

「……あの光り……あの爆発で人が死んでいるんですか？ いったい何人……」

「そうだな。艦の大きさによるが、数百人から千人単位といったところか」

「……………」

怖いような、怖くないような、まだ実感が湧かない三葉が過度に緊張しないようラインハルトは会話を続ける。

「もし、フロイラインミツハなら、どんな風に艦隊を動かして戦うかな？」

「素人に訊いても仕方ないと思いますが……」

「素人の発想が新しい戦術を生むかもしれない、というのは冗談だが、何か無いかね？」
「たしか、武装が艦の前方に集中しているから相手を包囲して十字砲火にするか、相手の

側面や後背をつく方が優位なんですよね。だったら、相手艦隊の後方にワープして攻撃したら、どうですか？ それか、ワープするミサイルでも作って敵旗艦に撃ち込めば早いんじゃない？」

「なるほど、ワープするミサイルか、やはり面白いことを言う。すばらしい発想力だ」

「それ、誉めてないでしょ」

「いや、失敬。まず基本を教えていなかった私が悪い。ワープというのは繊細なガラス細工のようなもので、そうそう簡単にはできない。準備にも時間を要するし、ワープに入る場所はもちろん、ワープから出て行く先の空間にも、無視できるほど星間物質が無い状態であることが必要なのだ。たとえば、1光年先の空間を観測したとき、その情報はいつのものだと思う？」

「1年前ですか」

「そうだ。見通せる先の安全を確認しつつワープするのだが、1年前の情報では不安定要素が大きい、ゆえに既存の航路であれば安全である蓋然性が高いが、まったく知らぬ宙域を進むには、かなりの時間と労力を要する。そして、たとえば地球と近いシリウスまで何光年か、知っているかね？」

「8.6光年ですよね」

「ほお、よく知っていたな」

「私の住んでる町は星がキレイで有名だから、ちよいちよい話題になるんですよ」

「なるほど。で、地球とシリウスまで1光年ずつワープしたとして9回のワープになるが、もしも太陽系とシリウス星系の間で戦闘することになっても、たいていは、どちらかの星系内で行うことになり、あまり途中の宙域で会敵することはない。なにしろ、宇宙は広いからな。だが、広い反面、狭い部分もある」

「イゼルローン回廊みたいなの？」

「そう。あそこまで狭くないにしても小惑星帯でも低速で行動して隠れるにはいいが、高速で動けばたちまち衝突してしまうし、ワープなど、もつての他だ。ワープは、ほとんど何も無いことが確実にわかっている宙域でしか行えず、逆に戦闘は隠れるに最適な小惑星帯やレーダーの邪魔をする星間物質が多い星系内で行われる。そういうわけで、戦闘中のワープは、ほぼできないわけだ」

「あ……味方が押されてませんか？」

三葉が前方のモニターに映し出されている彼我陣形図を指した。同盟軍の第1艦隊がホーランド中将の指揮で猛攻をかけてきている。その突撃に帝国軍の前衛は混乱しつつあった。ノルデン少将もラインハルトへ近づいてきた。

「敵の艦隊運動、なかなかに見事ですな。我が軍が押されている」

「ふんっ……速度と躍動性にはすぐれているが、他の部隊との連携を欠き、補給の伸長を

無視している」

ラインハルトの指摘通り、第5艦隊のビュック中将と、第10艦隊のウランフ中将は動かず、ホーランド艦隊のみが孤軍奮闘し、ミュッケンベルガー艦隊を押ししている。それを見てノルデン少将が提案してきた。

「我々も手をこまねいて見ているばかりとはいきまずまい。前進して攻撃に参加しては、どうですか？」

「いや、ここは後退だ。全軍！ 後退せよ！」

ラインハルトが麾下の艦隊を後退させ、説明してやる。

「ここは後退して味方にも後退するスペースを与えるのがよい。我々が前進しては、かえって混乱が増すばかりだ」

「……………」

三葉とノルデン少将が無言で見守る中、ラインハルト艦隊が後退したことを攻勢の好機と見たホーランド艦隊は、さらに激しく突撃を繰り返し、ミュッケンベルガー艦隊は陣形が崩れていく。その様を見てラインハルトが指揮席から立ち上がって吐き捨てるように言う。

「なぜ敵の無秩序な動きに合わせて、無意味な混乱を繰り返すのか！ なんといいたらくだ！」

「……………」

それなら、そろそろ味方を助けに行った方がいいんじゃないかな、と三葉は思ったけれど、黙っている。それでも顔に出ていたのでラインハルトが問うてくる。

「どうした、キルヒアイス、何か言いたいことがあるようだな？」

近くにノルデン少将がいるのでキルヒアイスと呼びかけられて三葉は少し遅れつつも反応する。

「あ、はい。…あの、そろそろ少しは攻撃に参加した方がいいんじゃないかな、と。余計なお世話かもしれませんが」

「なるほど」

「キルヒアイス少佐の言う通りですぞ。ここは前進して攻勢に出しましょう」

「……………」

お前には訊いていない、と言いそうになりラインハルトは冷静を保つためにキルヒアイスの前髪を触りたくなかったけれど、今は中身が三葉なので遠慮してタメ息で誤魔化した。

「はああ……二人とも、よく聞かがいい。敵の動きは、まもなく行動の限界点に達し終局するだろう。そこを待つて攻勢に出て、一挙にこれを叩く」

「なるほど、敵が行動の限界に達するまで待つとおっしゃる。それは一年後ですか、そ

れとも百年後ですかな」

「……………」

あ、イラつとする喋り方する人だなあ、と三葉が思っていると、ラインハルトは猛烈に苛ついて拳を握り、それから冷静になろうとしてキルヒアイスの前髪を見つめる。

「……………」

「……………」

え、なに？ ヘルプアイ？ 私に何を求めているの？ と三葉は困った。ラインハルトは右手でキルヒアイスの肩に触れた。肩くらいならいいかな、という判断だったし、別に三葉もイヤではない。

「キルヒアイス」

「はい…何ですか？」

「いや、呼んでみたただけだ」

「……………」

さらに戦局が推移し、とうとうミュッケンベルガー艦隊が瓦解しかかっている。それを見ていると、三葉は少し怖くなった。味方を圧倒した敵艦隊が、次はこちらに来るかもしれない、という本能的な恐怖だったけれど、それはノルデン少将も同じだったように提案してくる。

「こうなつては退却するしかありませんまい。損害を被らぬうちに、さっさと撤退いたしましよ」

「いや、今一步で敵の攻勢は止まる。それを待つて一挙に撃つのだ」

「それは机上の空論、そのような妄想に拘泥せず、ここは潔く撤退を」

「黙れ!!」

とうとうラインハルトが怒鳴り、さらに怒鳴りつけようとするものの、攻勢に出る好機が到来し、ホーランド艦隊の動きが止まったので指令を出す。

「今だ。全艦、主砲斉射3連!!」

命令に従い、艦隊が主砲を斉射する光りの帯がホーランド艦隊を撃ち、薙ぎ倒していく。

「第2射用意! ファイエール!」

二度目の斉射で戦局は一変し、ホーランド艦隊は瓦解した。三葉が感動して声をあげる。

「うわああ! すごい!!」

「フっ…」

ラインハルトも嬉しそうに微笑み、グツと拳を握った。ノルデン少将が提案してくる。

「すばらしい……さあ、ここは一挙に追撃いたしましょう。もはや敵は烏合の衆」
「うむ………」

ラインハルトは少し考え、キルヒアイスの顔を見て首を横に振った。
「やめておこう。残敵掃討の功など、他の提督に分けてやる」

そう言つて追撃はしなかつたけれど、ミュッケンベルガー艦隊の残存戦力は復讐とばかりに殺到し、追撃していくものの、待ちかまえていたビュコックとウランフの両艦隊から逆撃に遭い、そこで戦闘は終了した。

「すごいですね、ラインハルトさん」
「フフント」

キルヒアイスの声と顔で賞賛されるのには慣れていても、いつもと違い雰囲気新鮮なのでラインハルトもくすぐつたい。三葉は賞賛を続ける。

「たった二回の攻撃で勝つちやうなんて」
「敵の動きを見極め、好機を突けばよい、それだけのことだ」

「すごい、すごい！」

キルヒアイスの顔が強く感動してキラキラと輝く瞳で見えてくれるのは、ラインハルトとしても、かなり嬉しい。ラインハルトは艦隊戦についてのイロハを語りつつ、艦橋で撤収の指揮を執り、三葉も12時の10分前まで艦橋で見学して、ラインハルトに言う。

「すいません。そろそろ入れ替わるので、部屋に戻っていいですか」

「ああ。お疲れ様、フロイラインミツハ」

キルヒアイスの身体が艦隊司令官より先に休息するのを艦橋要員は不思議そうに見ているけれど、三葉は艦内の自室に早歩きで戻ると、紙にペンで、大勝利、とだけ書いてイスに座って目を閉じた。

「ラインハルトさん、すごいなあ……天才だよ」

まだ興奮冷めやまぬ声色でつぶやき、12時を迎えた。

キルヒアイスは、目の前にあつた日本語の漢字での、大勝利という文字を見て立ち上がった。

「ラインハルト様が勝った！ お勝ちになった！」

負けるはずがないとは信じていたけれど、何もできずに過ごした一日の不安を打ち消してくれた三葉の文字に感謝する。

「大勝利……あざやかな字だ。習字というものだろうか」

三葉は巫女として御守りの札へ字を書くことも練習しているので、ペンで紙いっぱい書いた漢字もバランスが整い、美しかった。選挙事務所でも多数見かけた必勝の字のような墨書きではないけれど、それでも迫力があり、三葉の勝利に喜ぶ感情まで伝わって

くる。

「……………これは、とっておこう……………記念に」

三葉との手紙は即時処分することにしていたけれど、ただ大勝利というだけの情報なら問題ないと判断して、残すことにした。キルヒアイスは自室を出ると、すぐに艦橋へあがる。

「ラインハルト様」

「その顔は知っているな。そうか、手紙か。フロイラインミツハめ、オレの楽しみを横取りしおって」

そう言いながらも嬉しそうに艦隊戦の経緯をキルヒアイ스에語って聞かせた。

「さすがは、ラインハルト様です」

「フム、だが、フロイラインミツハは、もっと嬉しそうな顔をしてくれたぞ、キルヒアイス」

「そう意地悪を言わないでください。私はラインハルト様の勝利に慣らされているのですから」

「そうだな、そうだった。これまでも勝ってきた。そして、これからも勝つ」

「はい、ラインハルト様」

「お前の方は、どうだった？」

「こちらも勝利です！」

「勝利？ 何に？」

「選挙に勝ったのです！ 三葉さんのお父様が！ 再び町長に選出されました！」

「そうか、それはめでたいな。イゼルローンに帰ったら祝杯というう」

二人は喜びを分かち合いながら凱旋していった。

三葉は自分の部屋で目を開けると、布団から起き上がった。

「すごい大勝利だった……けど、やっぱり平和が一番だよ。ミュツケンベルガー艦隊に配属されてた人たち、可哀想……」

夢から覚めるように興奮も冷めていく。

「あれって、やっぱり千年先の現実なのかなあ……」

そつと三葉は自分の首筋を撫でた。汗でベタついている。

「日曜だったのに、けっこう汗かいてる……ま、お風呂に入ってない証拠だからいいけど。……おしっこは……してくれたんだけ……まあ、いいかな、その方が……」

尿意はなく、汗のベタつきだけがキルヒアイスからの配慮を教えてくれる。三葉は静かに布団から立ち上がると衣服を脱ぐ。下着姿で廊下に出ると、四葉も自室から廊下へ出てきた。

「四葉、起きてたの？」

「気になるから。どうだった？ むこうは」

「えつとねえ……っていうか、今からお風呂に入るんだけど」

「じゃ、二度目だけど、いっしょに入るよ」

二人で入浴して向かい合って湯船に浸かった。四葉が問う。

「で、むこうは今日、どうだったの？ また訓練？」

「ううん、戦争だった」

「とうとう……勝ったの？」

「うん！ ラインハルトさん勝ったよ！」

再び勝利の興奮が戻ってきた。

「どんな感じに勝ったの？」

「まずね。ラインハルトさんとミュッケンベルガー元帥さんの艦隊があつてね」

三葉は湯船に黄色いアヒルのオモチャを浮かべてラインハルト艦隊とし、緑の亀も浮かべるとミュッケンベルガー艦隊とした。それから、ふと思いついて付け加えておく。

「これ、未来のことだから、ここだけの話ね」

「話しても誰も信じないよ。もちろん言わないけど。で？」

「でね。同盟軍はホーランド艦隊と、ウランフ艦隊、ビュコック艦隊が来てたの。両軍は

ぼ3万」

ホーランド艦隊の代わりにブルーの小舟が浮かべられ、その後方にウランフ艦隊が赤い金魚、ビュコック艦隊が白い白鳥のオモチャで代替表示される。お風呂が戦場になり、三葉と四葉の胸前で艦隊戦解説が始まる。

「開戦するとホーランド艦隊が押してきたの。二倍あるミュッケンベルガー艦隊は苦戦して、だんだん崩れていく」

ブルーの小舟が緑の亀をコツコツと打つ。

「私と参謀役のノルデン少将さんは、我々も前に出て攻撃に参加しようって言ったけど、ラインハルトさんは、まだだっ！ まだ早い。相手がエネルギー切れになるチャンスを待つんだって少し後退するの」

黄色いアヒルが少しさがる。

「そしたら、ホーランド艦隊が余計に強く攻めてきてミュッケンベルガー艦隊は、もうチリチリに」

「二倍の差があるのに、ホーランドさん強かったの？」

「なんかね、すごい動きしてた。アメーバみたいな躍動的な」

三葉がグネグネと動かししたブルーの小舟に、緑の亀がひっくり返されて腹を見せて浮かんでいる。

「でも、とうとうラインハルトさんが今だ！ 撃て！ って」
黄色いアヒルが突撃してブルーの小舟がひっくり返る。

「相手のエネルギー切れを狙った、すごい一撃だったよ。でも、追撃はしないでもいい。そんなのは他の提督の手柄にすればいいって。そしたら、ミュッケンベルガー艦隊の残りが仕返しに追っていくの。ところが、これを予想してたウランフ艦隊とビュコック艦隊が迎え撃って」

ひっくり返った緑の亀が、ひっくり返ったブルーの小舟を追い、その行く先を塞ぐように左右から赤い金魚と白い白鳥がつつきに来る。ひっくり返った緑の亀は慌てて後ろにさがった。

「そこで戦闘は終わり。ラインハルトさんの一人勝ち！ ……ん？ ん……」

そう言った三葉が5つのオモチヤを見つめ、少し考える。

「ちよつと、この戦い、ひどくない？ このウランフ艦隊とビュコック艦隊が、たとえば猛攻してるホーランド艦隊をフォローするように左右から前進していけば、片方はホーランド艦隊のフォローができて、もう片方はラインハルト艦隊への牽制になるでしょ」
赤い金魚と白い白鳥がブルーの小舟の左右を固め、緑の亀をひっくり返すと、白い白鳥と黄色いアヒルが睨み合った。さらに赤い金魚が黄色いアヒルに向かってくる。

「こうなると、ラインハルトさん2対1で不利になるし……ビュコック艦隊が何度も後

退命令をホーランド艦隊へ出してたのは傍受してたけど、イゼルローン回廊ほど狭い宙域でもないんだから見てないで助けてあげればよかったのに」

再び三葉は5つのオモチャを初期位置に戻すと、また考える。

「ラインハルトさんも後退なんかしないで、こう左側を迂回するように進んでホーランド艦隊の側背を突けば、ミュッケンベルガー艦隊の被害も、もつと少なかったかもしれないし」

緑の亀をひっくり返そうとするブルーの小舟へ、黄色いアヒルが突っ込む。

「いくら後方待機を命じられたからって、観戦しすぎじゃ……」

「これ、どっちもひどいね。なんで味方を助けようとしらないの？」

「あく……ラインハルトさんは周囲から、あんまり良く思われて無くて、孤立しやすいらしいよ。っていうか、帝国軍って、お互いに非協力的で要塞司令と駐留艦隊司令も仲悪いつて。あと、このビュコックさん……」

三葉は会戦中に見た敵将経歴を思い出す。

「士官学校出じやないから、かなりの年齢で。なのに若いホーランドさんに階級が追いつかれて。だから、じゃないかな？」

「男社会のあるあるだね」

「だね。絶対そう。たぶん、ホーランドさんも若くて天才って情報もあって、それってラ

インハルトさんと同じ。そして、お爺さん提督なのもビュコックさんもミュッケンベルガーさんも同じ。すごく似た対決だった。でも、結果は真逆。ミュッケンベルガーさんは若い天才を邪魔にして後方に、ビュコックさんはより老練で若い天才に戦わせるだけ戦わせて2倍の敵を相手にしているのに、ぜんぜん助けなくて観戦。最期にチョコツとだけウランフさんと組んで手柄をゲットして、さようなら。ラインハルトさんは後方だったのをいいことに、美味しいところ取りして、さようなら。……戦場って卑怯者が生き残る場所なんだね。ホーランドさんは旗艦撃沈情報があったから、きつと戦死……可哀想……この会戦で一番頑張った人なのに……せっかくホーランドさんが面白い動きして頑張ってたのに同盟軍の誰も協力しないから。……ウランフさんも自分より若い天才を見捨てて、年上の言うこと聞いて保身に走って……冷たい人。ホーランドさんみたいな頑張る人が先に死んじゃう世界って一番間違ってるよ」

三葉はブルーの小舟を指先で撫で、それから慰めるように胸で抱いた。

「ホーランド艦隊に必要だったのは100回の後退命令より、一個の味方艦隊だったんじゃないかな。戦艦や戦闘機の性能って帝国と同盟で拮抗してるから真正面から戦って2倍を相手に勝つなんて、すごいことなのに……どうして、誰も気づいてあげないの。彼は真の天才だったのに」

「天才って、その時代中には理解されることがあるからね。気の毒に」

四葉も言い、二人とも巫女なので祈りの形に両手を組んだ。慰霊の気持ちを込めて宣言する。

「ただけだけしきますらお、おおしきさきもり、君の名はホーランド、君がよ、ちよに、やちよに、君の名よ続け、百年百歳、千年千歳、万年万歳、ホーランド万歳、ホーランド万歳、ホーランドに栄光あれ」

ウイレム・ホーランドは未来ではなく過去に知己を得たけれど、いずれにせよ本人の知るところではなかった。祈りを終えた三葉がラインハルトのことを考える。

「ラインハルトさんにしても、攻撃のタイミングは最高だったけど、ある意味、せこいというか、サツカーとかバスケみたいなのがチームプレーの精神でいうと一番嫌われるタイプ。まあ、げんに嫌われてるし。生き残ったミュッケンベルガーさんあたりから、反応が遅すぎるのだ、あの金髪は！　って怒られて降格されてなきやいいけど。主砲斉射2回だけで追撃もしないとか、仕事しなさすぎじゃないかな。そりや周囲から孤立するよ、超美味いところだけ……これって降格どころか軍法会議ものじゃ……」

三葉は次に入れ替わったときが、軍法会議だったらいやだな、と思った。

「お姉ちゃん、そろそろ寝よ」

「そうだね」

入浴を終え、三葉は眠る前にキルヒアイスが置いておいた手紙に気づいたけれど、眠

いので後回しにして眠り、朝になって寝惚けたまま一階へおりた。すでに四葉と一葉が朝食の用意を終えかけている。

「お姉ちゃん、おはよう」

「おはよう、三葉。顔を洗いなさい」

「ん〜……おはよー……」

顔を洗って髪紐を結び、食卓につくと三人で朝食を摂る。テレビがニュースを流していた。

「昨日行われました糸守町の町長選挙が即日開票され、宮水俊樹さんが再選されました。昨夜の選挙事務所内の映像です。宮水先生、万歳！ 糸守町、万歳！ お父様、万歳！

民主主義、万歳！ 共和制に栄光あれ！ ……。万歳!! 万歳!!」

「「ブツ！」」

三葉と四葉と一葉が味噌汁を噴いた。三方向からの味噌汁が空中で交わる。

「「ゴホっ！ ゴホっ！」」

「お父様、ご当選、おめでとうございます。これまで以上のご健勝ご活躍を祈念いたしております。うむ……うっ、うむ！ ぐすっ…これは目の玉が汗をかいておるのです」

「っ?! ちよつと！ 何してくれちゃってるのよ?! 変なことしてるじゃない！」

「「……………」」

三葉がテレビにつかみかかったけれど、もう次のニュースになっている。三葉は新聞を乱暴に開いた。

「うわああああ……載ってるよお……」

地方欄には花束を俊樹へ贈呈している三葉の写真が載っていた。

「イヤだあああ……恥ずかしいい！ 恥ずかしすぎるううううう」

三葉が制服でゴロゴロと畳を転がって手足をバタバタさせているので、スカートの中身が全開で見えている。

「……………」

「うう………だいたい、このスマした顔は何よ?! いかにも町長のお嬢様でございませわ、みたいな、この顔！ ぬけぬけと、はい、私の父は町長でござ、この町の大將です、って答えてるような、この顔！ しれっと普通の子とは違うのよ、特別扱いしてね、って言うかのような、この顔！ しかも可愛く微笑んで、できるだけ自分を可愛く見せようと狙ってる、この顔！ このお嬢様面！ あああつ！ うわあああ！ こんな私じゃない!!」

「……………」

黙っていれば美人という顔が激しく歪んでいるのを、四葉と一葉は複雑な顔で見ている。

「うううっ！ かゆい！ 恥ずかしすぎて、かゆい！！ 寒気がする！ 吐き気も！ よりによって選挙の日に！ 事務所に！ テレビに！ 新聞に！ ああもおお！ あ、そうだ、手紙」

三葉が立ち上がった階段を叫びながら駆け上がる。

「キルヒアイスうう！！」

部屋にキルヒアイスがいるわけでもないのに怒鳴り込むと、手紙を取り上げた。

お父様のご当選、心よりお祝い申し上げます。

それ以上は読む気がしない。三葉は窓から空に向かって大きな口を開けた。

「うあああああ！！ キルヒアイスううう！ アイスううう！ あいつううううう！」

千年先へ、千光年先へ、届けとばかりに地球から叫んだ。

「…ハア…ハア…」

飛騨地方の山々から、山びこが返ってきている。朝から大声をあげた三葉は学校に行きたくないと主張したけれど、一葉に説得されて登校する。その道すがら、当然のように会う町民の誰もが、お祝いを言ってくれるし、それに対して挨拶しないわけにもいかない。頭をさげて歩く。やっと学校についてもテレビと新聞の影響で話題の中心にされて放課後までに疲れ切った。

「私は平凡に生きたいに……町長の娘とか……巫女とか……イヤなのに……まして、少

佐とか、もっとイヤなのに……」

フラフラと昇降口で靴を履き替えると、ラブレターが2通も入っていた。読む気がしないけれど無視はできないのでカバンに入れた。

「あいつに丁寧な断りの返事を書かせてやる」

帰り道も町民たちから声をかけられて三葉はアイドル扱いされるけれど、それがイヤで仕方なかった。

デート、ロイエンロール、女の身

キルヒアイスは三葉の身体で起き上がると、すぐに読めとばかりに枕元へ置いてあつた手紙を開いた。

「……三葉さんを……とても怒らせて……」

手紙は、かなり感情が滲む字で書いてあつた。

キルヒアイスへ

あなたのことについて、私はとても怒っています。

私たちと父の關係はとても複雑なんです。

勝手なことをしないでください。

学校でも家の周りでも、普通の高校生らしく過ごしてください。

繰り返し返す！

私はとても怒っている！

以上！

追伸、あなた宛にラブレターが来ています。私の生活を乱さないよう、丁寧な返事の

手紙を書いて、断っておいてください。私は町のアイドルでも町長の娘でもなく、ごく庶民として生きたいんです！ 目立つことは絶対にしないで！ もちろん、身体にも触らないで！ 以上！

きわめて感情的で追伸の方が長いくらいだった。

「……………お父様とのご関係……………」

すでに、この身体に入ったときは女性らしく振る舞うということが板に付いてきたので手紙を読み終わると、申し訳なくて祈るような形に手を組み、許しを請う。

「お許しください。三葉さん、私の配慮が足りませんでした」

自分と父親の関係なら、何ら問題がないような行動でも、もしもラインハルトが誰かと入れ替わるようなことがあって、その誰かが父親と仲良くしていたりしたら、戻ったときラインハルトが、どれほど激怒するかは想像するのが怖いほどで、それぞれの家庭にはそれぞれの事情があるのだと思い知り、三葉の怒気で乱れた字を見ると、日本式の土下座をしたいほどだった。

「……………三葉さん、……………本当に、ごめんなさい」

立ち上がった鏡を見ると三葉の顔に、バカ、圧政ボケ、と大きく油性ペンで書いてあった。

「……………ご自分の、お顔なのに……………それほどにお怒りになって……………」

このまま登校すると、それはそれで三葉の名誉を損ねることになりそうなので急いで着替えて顔を洗う。油性ペンなので、なかなか落ちなかつた。やつと、三葉の顔が元に戻った頃、四葉が起きてきた。

「おはよう、お兄さん。つていうか、もうお姉様の方がいいかな」

姉の身体は本人以上に女性らしく髪を結っている。四葉が挨拶すると、上品に微笑みかけてくれた。

「おはようございます、四葉」

「顔、かなり赤いよ」

擦ったので三葉の顔が赤くなっている。

「私は三葉さんを、とても怒らせてしまったようです。どのような様子でしたか？」

「激ギレで喚いてたよ。ギャーギャー！ つて山びこ響くくらいに」

「……………どうすれば、良いでしょうか？」

三葉の眉が上品でありながら物憂げに顰められる。悩んだ顔であつても気品があつた。わずかに涙まで滲ませている。

「少しでも、お怒りのとける行動を心がけたのですが、どうしてよいか…、まったく、わからないのです」

「うーん……………とりあえず、お父さんには、あんまり関わらない方がいいよ。あとは普通に

授業を受けて普通に帰ってくればいいんじゃないかな」

「そうですか……そのように心がけます」

申し訳なくて涙を滲ませたまま登校する。早耶香と克彦が声をかけてきた。

「おはよう、三葉ちゃん」

「おはよう、三葉。どうした？ 泣きそうな顔して？」

「いえ、何でもありません。ご心配、ありがとう、テツシー」

ハンカチで楚々たる仕草で三葉の目を拭く。それを見て克彦は男として強い保護欲を覚えた。守りたい、そう強く感じる。そんな女ぶりだった。

「三葉、つらいことがあるんやったら、相談してくれや」

「どうか、ご心配なく。お気持ちだけで私は十分に嬉しいです」

湿った瞳で三葉の顔が微笑みをつくると、ゾクツとするほどの魅力があった。お前はオレが守る！ と叫んで抱きしめたい衝動を抑えるのに克彦は苦勞してから、あえて普段通りに言う。

「選挙、終わったのに、そのモード出るんやな。……まあ、可愛いけど」

「私も真似してみよっかな」

「サヤチンには似合わんて」

「なんでよ?!」

「ほな、やってみい」

「…………おほほほほ！ おはようございます、テツシー。ごきげんいかがかしら」
やってから、早耶香は猛烈に恥ずかしくなった。顔が真っ赤になる。

「うゝ…………もういい、やめる」

「ほらな、照れがあるやん。三葉はぜんぜん照れがないからな、すごいよな」

三人で登校して、三葉の身体は静かに深窓の令嬢のように授業を受け、そして帰宅してからは一葉を手伝い、ラブレターに丁寧な断りの返事を書き、そして思い悩みながら、三葉へ謝罪の手紙を書く。

宮水三葉様へ

前略

私の軽率な行動が、あなた様の逆鱗に触れたこと、深くお詫び申し上げます。

ご家庭の事情を考えもせず、軽々にお父様と交わりましたこと、本当に申し訳なく思っております。

この上は、いかなる罰でもお受けいたします。

そして、私の行動に至らぬ点があれば、どうかご教授ください。

ご意向にそえるよう全力で努力いたします。

申し訳ありませんでした。

どうか、お怒りが少しでもとけますよう、心よりお詫び申し上げます。草々

書き終わると丁寧に机の上へ置き、ラブレターへの返事もそれとわかるように置くと、12時前だったので布団に寝た。廊下から足音がして四葉が入ってくる。

「お姉様に訊きたいんだけど、いい?」

「はい、なんなりと」

「本当は男の人なんだよね?」

「はい」

「……よく、そんな完璧に女の真似ができるね。役者でも目指してたの? それとも、もともと、そっち系の人?」

「役者を目指したことはありませんが、今の立ち振る舞いは、ある方の真似なのです」「ある方って? どういう人?」

「……………憧れの方です」

そう答えると、三葉の頬が赤くなった。まるで少年のような純朴さを感じ取った四葉は、さらに三葉の瞳の奥にある悲しげな光りにも気づいた。

「その人は、どうしてるの?」

「……………」

三葉の瞳が迷っている。そして、答える。

「……お元気に、されています」

「嘘は信じられるように、つこうよ。キルヒアイスさんって、人を騙するのが苦手だね」

「……………」

「で、その人は、どうしてるの？　うちのお父さんのことに立ち入ったんだから、こつちも少しくらい訊いてもいいよね」

「……10歳のフロイラインに話すようなことでは……10歳……」

ちやうど、キルヒアイスとラインハルトが不本意にアンネローゼから引き離されたのも10歳の頃だったことを思い出して、迷いが深くなる。四葉が諦めた。

「そう、よつぼどのあるんだね」

「……はい。……四葉は、まだ10歳なのに聡明なのです」

「お母さんが早く死んじゃったのに、お父さんまで出て行ったら、こつちもなるよ」

「……………」

キルヒアイスは四葉の瞳にラインハルトと似た光りを見つけた。それは10歳の頃にラインハルトが宿した野望という光りとは違うけれど、明らかに非凡な者のみかもつ光りだった。

「四葉、あなたは……」

「今は、もう時間もないから」

言いながら四葉が時計を見ると、12時だった。

三葉はリンベルクシュトラーゼの下宿にあるキルヒアイスの部屋で起き上がると、ドキリと緊張した。キルヒアイスの身体が不安そうに周囲を見回す。長身で筋骨逞しい身体なので、平穏な室内で怯えているのが滑稽でさえあった。

「……………どハッ? ……艦内じゃない…………」

明らかに戦艦の中ではない。

「……………、地球なの? ……太陽もある…………」

窓を見ると、日が昇っている。

「……………いつたい、どうなってるの? ……また、時代が…………」

窓から見える光景は中世ヨーロッパの街並みで石畳が続き、そして行き交う人々の服装も中世を感じさせる。

「…………ハア…………ハア…………」

心臓がドキドキと高鳴ってくる。いつたい、どこの時代にタイムワープしたのか、恐ろしくて仕方がない。窓ガラスに映る顔を見た。

「キルヒアイスそっくり…………ジークフリード一世とか、そういうつながり?」

顔には見覚えがあった。背後のドアが開いてラインハルトが入ってくる。

「遅いじゃないか、キルヒアイス」

「あ……ラインハルトさん？」

「その呼び方は、フロイラインミツハか。お久しぶり」

「っ！ 今は何年ですか?!」

「ん？ 486年だが」

「……それは帝国暦で？」

「もちろん」

「……………えっと、第三次ティアマト会戦の後ですか？」

「そうだよ」

「じゃあ……時代は変わってない。よかったア」

へなへなとキルヒアイスの腰が床へ座り込むと、ラインハルトは情けなくなつた。

「まあ、立って。イスに座って」

「はい、ありがとうございます。それ、私服ですか？」

ラインハルトは軍服を着ておらず平服だった。三葉から見るとブラウスとカッターシャツの中間のような服に見える上質でヒラヒラとした服を着ている。そして平服であるせいか、口調も少し優しい。軍人という雰囲気は薄れている。

「ああ、私服だよ」

「……もしかして、軍をクビになったの？」

「アハハハハハ！ あいかかわらずフロイラインミツハは面白いな。ただの休暇中だよ」

「休暇、それで……もしかして、ここはテーマパークか何かですか？」

「いや、ボクらの下宿さ」

「下宿……」

「まあ、それはいいから、そろそろ朝食を食べよう。ああ、そうだ。フーバー夫人と、クリヒ夫人の前ではキルヒアイスらしくしてくれよ」

「は……はい……じゃあ、私に変なことを言ったら寝惚けているってフォローをお願いします」

もう他人になりすますことに慣れてきた面もあるので外したときは寝惚けているで誤魔化すことにして朝食を食べて街に出た。街並みを観察して三葉が問う。

「あの、どうして、こんなに古いんですか？」

「古いつて何が？」

「ここ、地球じゃなくて首都オーデインですよ」

「そうだよ」

「街並みが古いのは、そういう地区だからですか？」

「うん……フロイラインミツハの言うことは、よくわからないな。別に、これが普通だ

けど?」

「じゃあ帝国中が、こういう街並みなんですか?」

「いいや、田舎に行けば農園もあるし別荘地だってあるよ」

「……………文化なのかなあ…………一周まわってこうなったのかな、千年は経ってるのに、この街並み……………服装も、みんな……………」

行き交う人々の服装が、とにかく古かった。

「まあ、いいかな。これは、これで」

「お昼からは予定があるんだけど、それまでは、どうする?」

「また白兵戦とか言わないでくださいよ」

「しごいて悪かった」

二人とも平服なので誰も敬礼してこないし、とても気楽に過ごしている。

「ああ、そうだ。これ、フロイラインミツハに」

ラインハルトが5万2000帝国マルクを渡そうとしてくる。

「え…いえ、こんなのもらうわけには…」

「忘れたのかい? 報奨金だよ。防御側の勝利だったじゃないか」

「あ、ああ、あの」

それなら、と受け取ってポケットに入れた。お金があるおかげで買い食いもできる。

屋台で売られていたクレープをかうと、ラインハルトに笑われた。

「似合わないな。キルヒアイスには」

「うう……この身体にいと、たしかに味覚も男の人っぽくなるけど、やっぱり見ると食べてみたいと思うんです。あと、量は私の三倍は食べられるし」

「なるほど。よし、オレも食べてみよう」

ラインハルトもクレープをかう、二人で食べながら道を歩いていると、ドレスを売っている店もあった。

「うわああ……センスが古いけど、いつか、こういうのも着てみたいな」

赤いドレスを憧れの眼差しで見つめていると、ラインハルトが、また笑う。

「その身体で着るのはやめてくれよ。どういふ罰ゲームかと思うから」

「むっ……着てやろうかな。キルヒアイスへの復讐に！」

「復讐？ キルヒアイスが何かしたのか？」

「聞いてくださいよ。ひどいんですよ」

キルヒアイスの頬を膨らませて、三葉が語る。

「私の家、お母さんが早くに亡くなったんですよ。なのに、お父さんが、ちよつと勝手に私たち二人の姉妹のことより仕事のこと優先で家を出て行って。お婆ちゃんに育ててもらってるの」

「それは……気の毒に……」

笑っていたラインハルトが神妙な顔になる。

「それで？」

「それで、お父さんとの仲は、微妙なんです。大嫌いってわけじゃないけど、素直に仲良くしようとは思えないでしょ？」

「それは当然だろう」

「なのに、キルヒアイスってば、お父さんのところに行って仲良く写真にまで写ったりして。お父さんは町の町長だから世間から注目されてイヤなんですよ。私は平凡な庶民でありたいのに」

「……そうか……すまない。明日、キルヒアイスには必ず言っておく」

「お願いしますね。私の家族関係を変に動かさないでください」

「ああ、悪かった。オレからも謝らせてくれ」

「ラインハルトさんが悪いわけじゃないから、いいですよ」

「……………。オレも自分の父親が嫌いだ」

「そうなんですか？」

「ああ、フロイラインミツハと似たようなものだ。早くに母を亡くして、父は酒に溺れ、オレと姉さんを顧みなかった。それどころか、あいつは……」

そこまで言っただけでラインハルトは迷い、そして告げることにする。

「昼から会う姉のことなんだが…」

ラインハルトは周囲に人がいないか、監視システムと連動したルドルフ像が無いかを確認してからキルヒアイスの耳元へ語る。

「オレの姉は後宮に捕らわれている。父に売られて」

「っ……………」

「オレとキルヒアイスが力を欲しているのは、姉を救い出すためだ」

「……………それって……………皇帝に逆らうってこと…?」

「……………」

ラインハルトは沈黙で肯定した。

「絶対に口外しないでくれ」

「わかりました」

「……………意外に、オレとフロイラインミツハは共通点があるものだな」

「そうですね。千年経っても人は変わらないのかも」

あれほど訓練させられた理由が少しわかって三葉はラインハルトに抱いていた反感が消え、再び好感をもち、そして迷惑をかけないよう訓練を頑張ろうと思った。そしてラインハルトは何かを思い悩み始めた。彼らしくなく決断に逡巡している。

「どうかしたんですか？」

「昼から姉に会うのだが、キルヒアイスもいつしよにという形で後宮へ申請してある」

「……私も……」

「迷うのは、連れて行くか、行かないか、そして連れて行った場合、フロイラインミツハのことを話すべきか、話さざるべきか、だ」

「お姉さんにウソをつきたくないんですね」

「……それもあるし……とはいえ、……連れて行かなければ心配をかける……戦傷ということで安静にしているとウソもつけるが……そのウソを信じていただいても、それはそれで、キルヒアイスが面会に来られないほどの重傷なのかもしれない、と心配を……」

ラインハルトが爪を噛む。艦隊司令としての毅然とした態度とは違い、子供じみた仕草だったので三葉は助けてあげたくなる。

「ラインハルトさん……」

「……どうすればいいか……」

「お姉さんに会える機会って少ないんですか？」

「ああ、めったにないことだ。実の姉なのに」

「……………」

少し考え込んだ三葉が決断した。

「それなら、やっぱり言わない方がいいと思います。私がキルヒアイスとして面会します」

「だが、フーバー夫人たちとは違うぞ」

「……………」面会は何時間くらいですか？」

「昼からといっても、皇帝への謁見があつて、その後だから4時間もない」

「なら、少し心配をかけますが、戦闘中に頭を打つたことにして、頭痛薬を飲んで、ぼんやりしているとでも言えば、乗り切れると思います。その方が心配をかけないと思いますよ。入れ替わりなんて、普通、信じないですし、信じたら信じたで、めつたに会えない分、とても心配すると思います」

「……………」そうだな。そうしよう」

二人は方針を決めると、下宿に戻り軍服に着替えた。二人とも階級章が新しくなっている。大将と中佐だった。

「出世したんだ」

「ああ、いよいよ大将だ」

やはり軍服を着るとラインハルトの雰囲気も少し堅くなる。三葉も気持ちを引き締めて背筋を伸ばした。ラインハルトが微笑んでキルヒアイスの肩を軽く叩いた。

「行くかうか」

「はい。……皇帝か……怖い感じの人ですか？　大きくて強そうな……」

「そんなオフレツサーのようなものじゃない。むしろ、ただの年寄りだ。それに会うのはオレだけでフロイラインミツハは控えの間で待っているだけだから安心して」

「よかった」

三葉は新無憂宮へラインハルトと出向き、控えの間で退屈な時間を直立不動で過ごしてからアンネローゼに出会った。

「姉さん、久しぶり」

「アンネローゼ様、お久しぶりです」

「いらっしやい。ラインハルト、ジーク」

基本的な会話は事前に打ち合わせているので自然にできた。

「……………」

なんてキレイな人なんだろう、と三葉が見惚れている。見ていると胸が熱くなって、抱きしめたくなる衝動が湧いた。抱きしめてキスをしたい、そしてまた抱きしめたいと、胸が熱くなってくる。

「ジーク、どうかしたの？」

「いえ……」

「こいつ、戦闘中に頭を打って、ぼんやりしているんですよ」

「それは大変、具合はどうなの？ ジーク」

「たいしたことはありません。医者からも異常はなく、頭痛薬で治るとのことですから」
「そう、それなら良かったわ。でも、気をつけて。ラインハルトのために無理はしないでくださいね、ジーク」

「…」

あ、この人、キルヒアイスのこと好きなんだ、と三葉は呼びかけ方で感じた。とても感情を抑えて押し隠してはいるけれど、ジークと呼びかける声色で、もともとは同じ女性である三葉にはわかった。そして今は身体が男性であるせいか、頬が赤くなりそうで抑えるのに苦労した。アンネローゼの美しさは帝國中から選り抜かれただけあって、まさに完璧な宝石といってよく、きつと銀河一の美女だと思われる。ブラウンシユバイツクヤリヒテンハイムの家系から後宮に出された娘と違い、まさに美しさだけを観点に選ばれているので何億人何十億人に一人という美貌だった。

「姉さんこそ、お元氣そうだけど、お変わりないですか？」

「ええ」

「本当に？」

ラインハルトはいつになく気を遣って会話を進め、穏やかな三人の談笑を意図して造り出し、夕食をともした。アンネローゼは地下のワイン庫から銘柄を指定したワイン

を取つてくるようにラインハルトへ頼み、三葉と二人きりになった。

「ジーク、ラインハルトをお願いしますね」

「はい、アンネローゼ様。……」

こんなにキレイな人が、この世に存在するんだ、高嶺の花つていうか、後宮にご指名で召されるくらいだから、帝国臣民の中でも選りすぐりの美人、やつぱり田舎の町娘とは違うなあ、気品というか、オーラから違うし、と三葉が見つめていると、アンネローゼは少し赤面して顔をそらした。

「そんな風に見つめないでください。ジーク」

「し……失礼しました」

一礼して、少しさがる。近づいてしまうと衝動的に抱きしめそうだった。まるでキルヒアイスの身体が、本心では今すぐ彼女を連れ出したいと求めているかのように、三葉まで気持ちがあつてくる。二人とも、やや困惑していると、ラインハルトが駆け戻ってきた。ラインハルトは本来のキルヒアイスがアンネローゼと二人でいるのなら気を利かせて、ゆつくりとワインを探したのだけれど、今は中身が三葉なので、かなり急いで戻ってきたのだった。

「ハア……ハア……見つけて来ましたよ、姉上。ハア……」

「大将閣下ともあろうお方が、そんなに息を切らして」

二人きりの時間が終わり、あとはラインハルトからのフォローもあって三葉は面会を乗り切った。ラインハルトと地上車で下宿先へ戻る道すがら言われる。

「よく姉上に気づかれなかったな。親しい仲は難しいだろうと思っただが」

「……………親しくても、めったに会わない関係だと気づかないのですよ。私のお父さんだって、気づかないで万歳してましたから」

「そうか……………そうだな。すまない」

「だから、ラインハルトさんが謝らなくていいですよ」

地上車が下宿に到着すると、午後8時だったので三葉は提案する。

「あと4時間ありますし、白兵戦やりませんか」

「……でか？」

「組み手くらい庭でもできますよね」

「そうだな、やってみるか」

二人とも軍服から動きやすい服装に着替えると、庭で向かい合い、組み手争いをしたり、ナイフを持った相手と素手で戦う演習をしたりする。前回のイヤイヤ訓練していたときと違い、三葉にやる気があるので習得が格段に早い。下宿の窓から、フーバー夫人とクーリヒ夫人が声をかけてきた。

「金髪さんも、赤毛さんも、ご精が出ますわね」

「ホントお若いって羨ましいことです」

すでに10時を過ぎていて、鍛錬とはいえ非常識な行動になっていた。三葉が謝る。
「騒がしくして、すみません。どうしても今日、やっておきたくて」

「あらあら、では私たちは休ませてもらいますね」

「ご夫人方にラインハルトも頭をさげて、さらに白兵戦の練習をしていると、だんだん三葉はラインハルトの動きが読めるようになってきた。

「えいつ」

「おっ?」

ラインハルトが投げられて驚いている。

「今の動きは、いいな。キルヒアイスらしい技のキレがある」

「もう一回、お願いします」

「ああ」

さらに続けると、ラインハルトがだんだん本気になってきた。

「よし、一度、本気でやってみるか」

「はい」

本気で戦うと、むしろキルヒアイスの方が体格がいいので三葉が勝ってしまった。

「……フ、フフ。油断してしまったようだ。もう一度やろう」

「はい」

再び二人が対峙する。今度こそと、本気の本気で構えるラインハルトと、やはり本気で構える三葉が夜中の庭にいと、練習ではなく酔ってケンカでもしているように見えたので訪ねてきたオスカー・フォン・ロイエンタールは声をかけるのを躊躇った。

「……。コホン」

それでも火急の用件があるので咳払いして二人へ声をかける。

「ご決闘の邪魔をして申し訳ないが、ラインハルト・フォン・ミューゼル大将閣下とお見受けいたします」

「これは決闘ではない。ただの演習だ。卿は？」

「オスカー・フォン・ロイエンタールと申します」

「おお、卿が、あのロイエンタールか。武名は聞いたことがある」

「それはお耳汚しでした。私などより大将閣下の武名こそ轟いておりますれば、一つお願いしたいことがございます」

軍人なのに、けっこうなロン毛、と三葉は思った。けれど、夜中の訪問なので油断せず相手が武器を持っていないか観察する。すでに宮廷内に敵が多いことは聞いているのでブラスターを部屋に置いてきたことを後悔した。次から肌身離さず所持しようとする。そんな表情をロイエンタールは見抜いたようで頭をさげた。

「閣下は、よい部下をお持ちのようですね」

「卿の用件は？」

すでに午後11時30分を過ぎている。演習も非常識だったけれど、訪問も非常識な時間だった。

「立ち話では、差し障りがございます」

「……。よからう。入れ」

ロイエンタールから並々ならぬ気配を感じてラインハルトは居室内に招き入れた。三人でテーブルを囲み、密談が始まると、三葉は日本語でメモを取る。もうキルヒアイズと入れ替わる時間が迫っているので大切な話なら、手紙にする時間もないので書いていたのだけれど、ロイエンタールの瞳が、やめてほしそうにしたので手を止めた。

「すると、卿の友人を助けるため、私に助力を請いたい、というのだな？」

「そうです」

「そのために帝国最大の門閥貴族と対立しろと」

三葉は二人の話を記憶に残そうとするけれど、軍規や身分が関わるそれなりに複雑な話だった。すでに12時近くて眠くなってくるし、一日の最後に白兵戦をしたので身体も疲れてきている。つつい話が頭に入らず、ロイエンタールの瞳をぼんやりと見る。

「……………」

あ、左右で目の色が違う、視力も違ったりするのかな、ていうかロン毛が似合っていない、その顔の横に垂らした毛、すごいウザい、顔はなかなかハンサム、けど、この身体にいるときつて男の人にときめかなくなってきたかも、どっちかというときと女の子が可愛く見えて抱きしめたくなるし、食欲があるんだから性欲も、この身体からくるのかな、朝起きたときとかすごいことなってるし、あれを女の子のあそこに…、と三葉が無関係なことを考えていると、ロイエンタールが聴いているのか、という目で見てきた。聴いてますよ、という顔を作つて背筋を伸ばした。ラインハルトはロイエンタールの話を信じつつあり、重要な問いを発して試しにかかった。

「卿は現在の銀河帝国ゴルデンバウム朝について、どう思う？」

「五百年になんなんとする巨体には、様々な膿が溜まっております。大規模な外科手術が必要でしょうな」

「あ…」

今の不敬罪っぽい、と三葉はつい声をあげてしまった。

「……………」

微妙な間があり、三葉は空気が読めていないことに気づいて、視線をそらせ、そして時計を見ると、もう5分前だった。

「す、すみません。ちよつと休憩を10分ほど…」

「……………」

このタイミングでか、というロイエンタールからの視線が痛いけれど、ラインハルトがフォローしてくれる。

「キルヒアイスは前回の戦闘で頭を打つてな。ときおり強い頭痛に襲われるのだ。だが、少し休んで薬を飲めば問題ない。悪いが、待つてやつてくれ」

「それは、お大事に」

「失礼します」

三葉はキルヒアイスの部屋に戻ると、紙に走り書きを残す。

アンネローゼさんに会い、気づかれず、無事終了。

夜中に訪問客あり、今もラインハルトさんの部屋で話中。5分に戻った方がいい。

話題は派閥抗争

貴族の揉め事で友達を助けてほしい、みたいな。

信用できそうな雰囲気もあるけど、不敬罪っぽいこと言ってた。

名前はオスカー・フォン・ロイエンロールさん。

捕まってるのはミッター・マヤさん。

時間が迫ってくる。少しできるようになったドイツ語も混ぜて書いたけれど、スペルなどをチェックしている時間は無さそうだった。せっかく部屋に戻ったので置いて

あったブラスタ―も身につける。

「まだ敵か味方が不明だし。手紙は……ん……こんなもんかなあ……忙しい一日だった……午前中は、のんびりでよかったけど……」

他に書くべきことを考えているうちに12時になった。

キルヒアイスは目前にあった紙を読むと、すぐにラインハルトの部屋へ入った。

「お待たせいたしました」

「よく戻ってきた。座れ」

「はい」

「……」

ロイエンタールは6分で戻ってきてくれたことはありがたかったけれど、内心では刻一刻を争っている。頼み事なので失礼の無いよう落ち着いているものの、本心では今すぐにも駆けつけたい気持ち強い理性で抑制している。なのに、戻ってきたキルヒアイスの腰にはブラスタ―があり、警戒するのが当然だとわかっていても良い気はしない。それでもミッターマイヤーのために話を続ける。

「大将閣下のお力添えをいただきたくお願い申し上げます」

「うむ。……。キルヒアイス、話は覚えているか？」

「はい、こちらのロイエンロールさんからのご依頼でミッター・マヤさんを助けるという話でした」

「ロイエンタールだッ！」

つい大きな声を出してしまい、ロイエンタールは詫びる。

「失礼、ロイエンロールではなくロイエンタールだ。できれば間違わないでいただきたい」

「これは失礼いたしました。ロイエンタール少将」

キルヒアイスは立ち上がって敬礼した。ロイエンタールは軽く頷き、付け加える。

「あと、ミッターマイヤー少将の救出をお願いしている。こちらの間違わないでいただきたい。キルヒアイス中佐におかれては、よほど頭痛に苦しんでおられたとお見受けする。夜分の訪問、まことに申し訳ない」

「いえ、こちらこそ、失礼いたしました」

「うむ、キルヒアイスには私から話そう」

そう言つてラインハルトは今までの話を、ほぼ丸ごと繰り返した。ロイエンタールの話が、本当のことなのか、それとも罠なのか、キルヒアイスの判断もほしいので繰り返しているけれど、ロイエンタールにとっては時間の空費に感じられる。

「どう思う？ キルヒアイス」

「はい。では、ロイエンタール少将におかれては現在の銀河帝国ゴールデンバウム朝について、いかがお考えでしょうか？」

「……」

「キルヒアイス、それも訊いた。我々の考えと一致している」

ラインハルトとキルヒアイスが目で会話する。そして頷き合った。

「キルヒアイス！ ミッターマイヤー少将が、どこに捕らわれているか、すぐに調べてくれ」

「はい、おそらくブラウンシュヴァイク公の息のかかった軍刑務所でしょう。すぐに！」

そう言うてからのキルヒアイスは迅速な事務能力を発揮してミッターマイヤーの居場所を突き止め、すぐに三人で駆けつけた。

「くくくつ……ここまで痛めつけられれば、もう後悔しただろう。死ぬがいい」

駆けつけた刑務所の奥からフレーゲル男爵の声が響いてくる。

「悲鳴をあげなかったのは、たいしたものだが、もう私は眠い。貴族は健康管理も気をつけるのだ。もはや飽きた。殺せ」

自分の手を汚さずに手下へ命じているところへ、ラインハルトたちが間に合った。

バシユウン！

手下がミッターマイヤーを射殺しようとしていたブラスタターをキルヒアイスのブラ

スターが撃ち落とした。フレীগエルが驚き振り返る。

「ミューゼル?! 貴様!」

「フッ」

ラインハルトとフレীগエルが睨み合い、少し遅れてアンスバッハが現れ、両者を仲裁する。ロイエンタールは倒れている親友を抱き起こした。

「ミッターマイヤー! 傷は?!」

「ぐう……見ての通りさ」

ミッターマイヤーは20分ほど前に胸部を狙ってきたプラスチックの射線を見切つて、致命傷をさけるため手のひらから肘までを射線に重ねて受け止めていた。二度の射撃を受けて両手が、まったく動かなくなつたものの致命傷は受けていない。そこを電撃も付帯する鞭によつて何十回も打たれたために、朦朧としていたけれど、ロイエンタールの顔を見ると、笑顔をつくつてみせた。

「なんとか生きています。両腕も義手にすれば、なんとということはない」

「……。そうだな。だが、ミッターマイヤー夫人には悪いことをした。抱きしめる両手が義手では、いささか、ものさみしいだろう」

一人の漁色家として冗談を言つて励ましたものの、あと10分、いや20分、早く到着していれば、ここまで酷い傷を負わずに済んだかもしれないと思うと、睨むつもり

はなかつたのにキルヒアイスを見てしまった。

「……」

「……」

これは、わだかまりが残るかもしれない、とキルヒアイスは思った。そして、ロイエンロールがブラスターを抜き、誰も止める間もなく撃った。

バシユウン！

「ヒギイアアア！」

牢内にいた拷問係が悲鳴をあげている。この拷問係というのが、黒の編み上げブーツに、網タイツをはいて、黒皮のパンツをはいた大男でオフレッツサー並みの体格をしていたけれど、自身の痛覚には弱いようで、ロイエンロールが一人の漁色家として急所を撃つたために、喘ぎ苦しんでいる。アンズバツハが眉をひそめて言う。

「私は自重を願ったはずですが、ロイエンロール少将」

「ああ、人として自重はするさ」

ロイエンロールが平然と応答する。

「ただ、軍刑務所内にいるはずのない害虫がいたので殺虫剤をかけたまでのこと。フレゲル男爵におかれては、身に覚えのない害虫であれば、実に申し訳ないが、今暫くお待ちいただければ、殺虫剤が効いて駆除できましょう。その上は死骸を捨てておいて

もらいたい」

長めの口上が続くうちに、拷問係は撃たれた急所からの出血多量で息も絶え絶えになつてゐる。今すぐ救急処置しないと死んでしまうのは明らかだったけれど、誰も助けようとしなない。拷問係は薄れゆく意識の中で、今までに何度も拷問で死に至らしめた被害者が見ていたであろう刑務所の天井を見ている自分をあわれみ、泣きながら死んでいった。

「……ちっ……」

フレーゲルは舌打ちして手下に片付けておくよう命じると立ち去つた。もともと、この拷問係を呼んだのもフレーゲルであつたけれど、あまり気に入っていない依頼先で単に料金が安いということを使つていた。というのも、この拷問係の本業はマツスルジムの人気トレーナーで拷問係は趣味ということが大きかつたけれど、趣味が災いしてジムの生徒たちは愛好する講師を喪うことになつた。

三葉は自分の部屋にいる自分を認識し、目の前にいた四葉に言う。

「ただいま」

「おかえり。今日は、どうだった？」

「うーん……午前中は街を見て回つたよ。けど……」

「けど?」

「ここは本当に未来なの、って思うくらい街が古かったよ。服装のセンスも、なんか一周回って先祖返りっていうか、中世気取りみたいな。日本で言ったら和服と、ちよん鬘が復活してるみたいな感じ。逆明治維新でもあったのかな」

「へええ」

「あと、午後からラインハルトさんのお姉さんに会ったよ」

「どんな人だった?」

「すっごい美人! ありえないくらい優雅で上品で落ち着いてるの」

「優雅で…落ち着いて…」

四葉は数分前の三葉の身体がまとっていた雰囲気を感じ出した。

「その人の状況って、どう? 何か不幸なこととか、困ったことない?」

「え……うん。あんまり幸福じゃないかな」

「どうなってるの?」

「うくん……こういう話、過去にいる四葉に私がしているのかなあ……」

「誰にも言わないよ」

「じゃあ、あのね。皇帝がいる話はしたよね」

「うん」

「その皇帝のお妾さんというか、第2、第3の夫人みたいな感じなの。光栄なことらしいけど、あんまり幸せそうじゃないっていうかイヤイヤみたいな感じでラインハルトさんとキルヒアイスは、そのアンネローゼっていうお姉さんを取り返したいから、強くなるうみみたいな計画らしいよ」

「なるほど……それで10歳の私にする話じゃないって、あんな苦しそうに……」

「四葉も、キルヒアイス本人から聞いてたの?」

「少しだけね」

「じゃあ、私の勘だけど、アンネローゼさんはキルヒアイスのこと好きかもしれないって言ったら、どう?」

「……………相思相愛なのに引き裂かれたんだ……そりゃ、女性への態度が潔癖にもなるよね」

「キルヒアイスも、アンネローゼさんのこと好きなんだ。……………私、協力したい!　なんとか助けたいよ!」

「それは……………その気持ちは大切かもしれないけど、うかつに動いてマズいことになるくらいなら、慎重にした方がいいと思うよ。千年先の感覚とか常識って、私たちと、ずいぶん違うかもしれないし。たとえば、平安時代が千年前だけど、その頃の感覚とか常識って同じ日本人でも、ぜんぜん知らないでしょ?」

「あ……そうだね……そっか。慎重にしないとね。でも、何かしてあげたいなあ……」

「その気持ちで訓練を頑張ればいいよ。とりあえずは」

「うん！ 夜にね、格闘の練習したよ。かなり上手くなった」

「へえ……」

四葉が半信半疑なので三葉は近くにあったノートを丸めて四葉へ渡す。

「これをナイフだと思って私を突いてみてよ」

「……。じゃ、いくよ」

ノートをもった四葉が構える。

「えいつ！ と、みせかけて！」

四葉は素直に突かず、一度フェイントを入れてから、斜め下から三葉の顎先へ斬りつけようとしたけれど、三葉は反射的に対応して避け、妹の手首を取ると、ノートを握らせたまま手首と肘を捻って力の方向を最小限の動作で変えさせ、その先を四葉の喉元へあてた。

「ほらね。これで四葉は一回、死んだよ」

「……すごいね……一瞬だった……」

姉の成長に四葉が感心している。

「でも、一回死んだとか言わないで。縁起悪いし」

四葉は喉元を撫で、この技で殺される者は自らの喉を切り裂く感触を自らの手で味わうのだと感じた。三葉は無邪気に微笑む。

「射撃だって、かなり上達したよ。まあ、ブラスタードだから反動ないし、火薬の鉄砲だと違うらしいから、そつちは感覚が違うかもだけど、この私の身体でも覚えた格闘技は使えるんだね。そこらの不審者には負けない気がする」

「はいはい。調子に乗って失敗しないでね」

「そうだね。男と女で筋力は、ぜんぜん違うし。食欲も。……もしかしたら性欲も違うかも」

「そうなの？」

「うん、男の身体でいると、いっぱい食べられるし、自然と食欲を感じるみたいに、性欲も……アンネローゼさんを見てたら抱きしめたいって気持ち湧いてきてドキドキしたもん」

そう話す三葉の頬が少し赤い。

「今は身体が女子に戻ったから変な気分だよ。女の子を可愛いって思う気持ちか、わかるようになって……」

「なんかお姉ちゃんから男っぽさを感じるかも。逆にお姉様は、しっかり女性っぽいし」
「とりあえず、お風呂に入ってくる」

三葉はすでに寝ている一葉を起こさないように足音を抑えて脱衣所に入ると裸になった。ふと洗面台の鏡で自分の裸体を見る。

「……女の子の……裸……私って、けっこう可愛いかも……」

自分の身体なのに妙な興奮を覚えてしまった。

「……おっぱい……」

思わず自分の乳房を自分で揉んでみる。

「うわぁ……柔らかい……」

嬉しそうに自分の乳房を揉み続けていると、四葉が脱衣所に入ってきた。二人の目が合う。

「……」

四葉の顔が見たこともないほど、げんなりとした表情なり頭痛でもするかのように手で額を押さえ、崩れて片膝をついた。

「……なんてアホな姿……すっごい既視感……我が姉ながら……ホント……もう……」

「べ、別に！ ちょっと確かめてただけだから！ 思春期きてないお子様にはわからないんだから！」

「はぁぁ……いっしょに、入ろうと思ったけど、もういいよ」

妹にタメ息をつかれた三葉は一人で入浴し、髪を乾かして自室の布団に潜った。

「……」

なんとなく寝付けない。

「あのあと、ロイエンロールからの頼み事、どうしたのかな……」

事件の始まりだけ知り、その続きが気になる。

「……でも、軍人なのにキザっぽい長髪で、軽く縦ロールまで入れてたよねえ……あ、フォンが入るから貴族か、はいはい。それよりアンネローゼさん……」

銀河一の美女を思い出して寝返りする。寝返りした動きで三葉の左右の乳房がぶつかりあった。なんとなく、また自分の手で胸に触る。

「キルヒアイスは……私の胸、触ったりしてるかな……アンネローゼさんが好きなら、しないかな……でも、トイレでは……」

だんだん眠くなってきた頭で、ぼんやりと想像する。

「……トイレは仕方ないかなあ……私だつてキルヒアイスのを……握るし……、トイレは仕方ないとしても、朝起きたとき、すごい大きくなってるの、やめてほしいなあ……あれも生理現象らしいけど……あんな大きく……」

想像が妄想へと変質していき、三葉は胸を揉みながら、反対の手を股間にやった。

「やっぱり無いか……有っても困るけど……」

さきほどまで有ったものが無い。それから確かめるように女子としてのものが有る

か、まさぐった。

「よかった……ちゃんと女子……」

無くなっていたら、どうしようかと思っただけ、ちゃんと有ったので安心する。

「……………ここに……男子の……あれを……」

まだ無意識に胸を揉み続けていた三葉は股間を触り続ける。

「ハア……………やだ……………こんなことして……………あ、自分の身体だから、何をしてもいいのか……………最近、ややこしいなあ……………」

寝惚けてきた頭で自慰を続けると、自分が女なのか、男なのか、妄想の中でゴチャゴチャになってくる。キルヒアイスの鍛え上げられた身体、ラインハルトの象牙細工のよな姿、アンネローゼの宝石より美しい存在感、ありのままの宮水三葉の裸体、左右の瞳で色が違う縦ロール男、街で見かけた赤いドレス、今回は会えなかった軍人臭くないノルデン少将、大きな戦艦、未来の宇宙、男子トイレ、いろいろなものが走馬燈のように駆けめぐり、三葉は半分眠った状態で自慰を続けていき、そのまま朝を迎えた。

「お姉ちゃん、遅刻するよ」

四葉が戸を開けた。

「……………」

そつと戸を閉めて見なかったことにする。姉の寝顔は幸せそうだった。だらしなく

口を開けてヨダレを垂らしていた。それ以上は見なかったことにする。

「思春期かあ……はああ……」

タメ息をついた四葉は戸をノックして起こす。

「お姉ちゃん!! 起きないと遅刻するよ!!」

「……んう……」

やっと起きた三葉は時刻を見てバタバタと寝癖も直さないまま朝食を掻き込み、通路を走った。しばらく走って、早耶香と克彦に追いついた。

「ハア……ハア……おはよう、サヤチン、テッシー」

「おはよう、三葉ちゃん」

「おう、おはよう。三葉」

三人で歩いていくと、不意に三葉は早耶香の胸に触った。三葉の手がモミモミつと早耶香の乳房を揉んでいる。

「うくん、いい感触。しかも、私より大きい」

「っ?! いきなり何するんよ?!」

早耶香が驚いて振り払ったけれど、三葉は悪びれずに言う。

「ちよつと触ってみたくて。女同士の友達だし、いいじゃん」

「……………」。今の触り方、友達って感じじゃなかったよ」

早耶香が恥ずかしさと怒りで顔を赤くしている。まるで男子に触られたような触り方だったので女子同士のスキンシップとは想えない。

「ごめん、ごめん。私の揉んでみる？」

三葉が不必要に胸を張ったけれど、早耶香は遠慮する。

「いらないよ」

三葉は次に克彦を見て訊いてみた。

「テツシーってさ、私やサヤチンのことを見ていて抱きたいって思ったことある？」

「なっ……………」

克彦の顔が赤くなるので、悟った。

「あるんだ」

「……………」

「……………」。あれ、私、今、かなり変なこと訊いた？」

「……………」

二人が無言で頷くので、三葉も寝惚けていた羞恥心と、自分が女子であるという自意識を取り戻して、猛烈に恥ずかしくなってきた。

「ごめん！ なし！ さっきの無しで！ お願います！」

「まったく、お嬢様だったり変なこと言い出したり、三葉、大丈夫か？」

「えへへへ……、女心と秋の空、みたいな」

「はあああ……そろそろ夏だな」

あきれられながら登校してラブレターをくれた相手の下足箱に返事を入れたときだった。

「調子に乗ってんじゃねえぞ」

「え？」

三葉はクラスメートの柄の悪い男子に罵られて、首を傾げる。

「ごめん、私、何かした？」

「オヤジが当選したからって調子に乗ってんじゃねえって言ってるんだ」

「……………。ああ、その話」

三葉の胸中に不快感が湧いてくる。今までにも何回も言われたことで、三葉は何もしていないのに、からんで来られることが再び繰り返されているだけで、うんざりしている。実に苛立たい。

「別に、私と父は関係ないから」

「ちつ、当選した途端、コロつと態度を変えやがって。親が政治家だと、子供も汚ねえな」

「っ……」

三葉の顔が怒りで赤くなる。嫌っていても父親のことを他人に悪く言われると腹が

立つ上、自分も含めて汚いとまで言われて相手を睨みつけた。

「何も汚いことなんかしてないから」

「あん？　どの口が言う？　汚ねえ酒、垂らしてるくせによ。よく、あんなこと人前でできるな？　ゲロ酒お嬢様。スカートの中からも、白いの垂らしてみせろよ。ギャハハ」

「……………」

ますます三葉の顔が怒りで赤くなり、ラインハルトが下衆を睨むような目になった。少し離れたところにいた克彦と早耶香がフオローに来てくれる。

「三葉、大丈夫か？」

「三葉ちゃん、もう行こう」

おかげで少しだけ冷静になれた。

「……………うん……………そうだね。フン！　負け犬の相手なんてしても仕方ないよね」

「なんだと?！」

「ああ、うるさい。よく吠える犬ね。負け犬ほど、吠えるって本当なんだ」

「てめえ!!」

怒った相手が掴みかかってくる。三葉は掴みかかってくる相手にタイミングを合わせて前蹴りを入れた。三葉の靴底が相手の股間にヒットする。

「ぐはっ?!」

相手は股間を蹴られ、机が倒れるような無抵抗さで後ろへ倒れ込んだ。

「うう……ぐう……」

「もう私にからまないで」

「うう……てめえ……ぐう……」

股間を蹴られて動けない相手に背中を向けて、教室へ向かった。

「三葉って、怒ると怖いな」

「三葉ちゃん、強いね」

「私は何もしてないのに、からんでくるからよ。……もしかして、昨日の私、あいつに

何かした? 怒らせるようなこと」

手紙には書かれていない何かがあつたのかもしれないと訊いたけれど、克彦は首を横

に振った。

「いや、あいつには何も」

「そう。……昨日の私って、どんなだったっけ?」

「自分のことを忘れるのかよ。いや、まあ、あのお嬢様モードと普段の三葉って、もう別人みたいに変わるよな。態度がコロっとって言いたくなるのは、わかるくらい」

「そ、そう。き、気分で、やってるの。気にしないで」

「気分ねえ……」

「だいたい、あいつが私をイライラさせるから」

そう言いながら、三葉は下腹部を撫でた。本当に気分が落ち着かない、まだ苛ついている。悪い予感がしてきた。授業を受けて昼休みになると、三葉は自分が女子であることを強く認識させられる事態を迎え、女子トイレの洗面台の前で暗い気持ちになった。

「うゝ……来ちゃったよ……夕べ、やたらムラムラするし……今朝からイライラしてると思つたら……うゝ……来ちゃった……」

毎月と同じように対処してから、洗面台で手を洗い、暗い気持ちで沈み、愛用のポーチを握って鏡を見る。

「ううゝ……鏡よ、鏡、私を私でいさせてください」

「三葉ちゃん、なに言うてんの？」

早耶香も女子トイレに入ってきた。

「うゝ……来ちゃったの」

「あれが？」

長い付き合いなので愛用のポーチに何が入っているか知っているし、身体の匂いも変化するので早耶香は、すぐにわかった。ただ、ごく当たり前のことなのに三葉は激しく

動揺している。

「うん、あれが来ちゃった。どうしよう?」

「……………いやいや、来ない方がヤバイでしょ」

「それは、もつとヤバイけど、そんなことはしてないもん」

「だったら、当たり前に来るよ、そりゃ。温泉旅行でも行く予定だった?」

「うゝ……………そんな感じ……………」

「そっか、気の毒にね」

「ああ……………」

絶望的な気持ちで帰宅して、四葉に相談する。

「来てしまいました。あれが」

「そっか。まあ、そろそろだとは思ったけど」

「どうしよう?」

「前に考えておいた通りにするしかないんじゃない?」

「ぐすつ……………それしか、ない……………かな…」

「他に手段がある?」

「……………ない」

「じゃあ、一回は私も予行演習しないと、いきなりお姉様るときで失敗したら困るから、

やっておくよ」

「うん……………ごめんね、四葉……………こんなことさせて……………」

「別にいいよ」

「……………」

三葉は申し訳なきような顔で自室の布団に寝転がった。そして、愛用のポーチを妹に渡す。

「……………この中に入ってるから……………」

「お姉様のおときは目隠しとイヤホンもしてもらおう？」

「うん、そうして」

「音楽とか大きめの音でかければいいよね」

「うん。……………」

「じゃ、ちよつと腰あげて」

「……………。息も止めてもらって。今も四葉も」

「私、息止めは40秒が限界だよ」

「それでいいから」

「わかった」

そつと四葉は以前に説明されていた通りの手順で対処していく。見守る三葉の目は

涙で潤んだ。

「それ、すぐ丸めて捨てて。手を汚さないように」

「(っ)うっ？」

「そう」

「で、新しいのをパンツに貼る、だよね。これを、こうして……」

四葉は小学校ですでに習っている生理用ナプキンの使用方法を実演してみる。袋から出して、カバーを外し粘着部分を三葉のショーツに貼り付ける。ショーツの形に合うようにナプキンを拵げつつ前後にしっかり貼り付け、羽状になっている部分は折り込んで左右にもズレないよう固定する。もう、とつくに呼吸を止めていることができる限界は超えているので静かに呼吸すると、独特の匂いがする。血と汗、それだけでなく肉の内臓のような匂いだった。

「(っ)うっ？　これで完成？」

「うん、そう」

「じゃあ、もう一回、腰あげて」

「はい。……………」

ナプキンを替えたショーツを引き上げてもらう三葉は羞恥心の極みで顔を腫れそうなほど赤くしている。

「これで完了?」

「うん……………ありがとう……………ごめん…ごめんね、ごめん、ごめん…つ…ひつく…うう…」

起き上がった三葉が啜り泣き始めたので四葉は首を傾げる。

「ここって泣くところ? 問題なく交換できたと思うけど……………」

「まだ来ない四葉にはわからないよ、この情けなさは……………妹に替えてもらうことが

……………あるなんて……………ううっ……………ごめん、ごめん……………」

「謝らなくていいよ。ほら、泣かないでお姉ちゃん」

「ぐすっ…ぐすっ…」

そう言われても三葉は、しばらく泣いていた。

女の生理、ベーネミュンデ、核戦争

キルヒアイスは三葉の部屋で起き上がりうとして、経験したことのない体調不良でよろめいて手をついた。

「うう……」

下腹部が痛いし、頭痛もあつて頭に重さを感じる。めまいもするし軽い吐き気もあつた。

「風邪……それとも下痢……」

そして気持ちが憂鬱で、何もしたくないくらい身体がダルい、このまま起きないで寝ていたいという強烈な誘惑もある。それでも風邪のような高熱がでているわけではない、行こうと思えば学校に行けそうなほどの体調の悪さで、判断に迷う。

「……ふう……ふう……」

なんとか立ち上がると、よりいっそう身体が重い。

「……これは……いったい……」

鏡を見ると、それほど顔色が悪いわけでもないけれど明らかに、いつもの三葉の身体ではなかった。手紙が置いてある。

四葉の言うとおりにして過ごして。

それだけが書いてある。まるで三葉も思考力がないような様子で妹に丸投げされていた。

「……………とにかく……………着替えを…」

よろよろと着替える。目を閉じるとバランスを崩してしまいそうなのでイスに座つてから着替えようとして三葉のお尻がイスに接すると、言いようのない気持ち悪さが股間にあつた。

「つ……………」

「お姉様、起きてる?」

四葉が入ってきた。

「あ、イスに座つちやダメだよ。こつちに寝て」

「は……………はい……………」

言われるとおり、再び布団に寝た。

「つらいよね。お姉ちゃんも重い方らしいから毎月大変そうだから、たぶん同じだと思うよ。むしろ初体験な分、よりつらいかも」

「この体調の悪さは……何かの持病なのですか？」

「ううん、健康な証拠だよ」

「では、なぜ、これほどに身体が……」

「月経だよ。知らない？」

「……月経……」

言われて、ようやく三葉の身体に何が起こっているのか、理解した。軍事教育がメイの幼年学校では、あまり習わない知識で姉妹もないし、ほんのわずかに一般教養の授業で習った気がする程度で、ラインハルトとも、そういったことは話題にしなかった。むしろ、10歳の頃にアンネローゼを後宮に奪われてから、そういった方面の話は二人とも無意識的に避け、拒絶してさえた。

「これから必要な物を交換するから、私の言うとおりにして」

「……はい……はい……」

「足を肩幅に開いて、膝を立てて」

「……はい……」

「じゃあ、この後は目隠ししてイヤホンで音楽もかけてから作業するから、自分の下半身に起こっていることは意識しないようにしてあげて。でも、私が膝を軽く叩いたら、腰を5センチくらい持ち上げて。それ以外は終了するまで何もしないようにしていて」

「……………わかりました。お手数をおかけするようで、すみません」

三葉の両膝が恐る恐る立てられ、少しだけ脚を開いた。

「もう少し、脚を開いておいて」

「…はい…」

「うん。じゃあ、まず目隠しをするね。目を開けないとは思うけど、お姉ちゃんを安心させるためだから、わかってあげて」

「…はい、お願いいたします…」

三葉の瞳が閉じられると、四葉はハンカチを細長く折ったものを目の上に置いて、さらに三葉の髪紐を後頭部へ回してから縛った。

「じゃあ、次にイヤホンで音楽をかけるけど、何か好きな曲とありますか？ できれば

2013年以前に存在している曲で」

「……………はい……………では…ワグナーをお願いします…」

「うん、たぶんネットにあるよ」

四葉は三葉のスマホを操作してユーチューブでワグナー名曲選を見つけ、イヤホンジャックをさした。

「あとね、作業中、可能なら息を止めてほしいらしいよ。でも、苦しいと思うから、無理はしないで」

「…はい…」

「じゃ、イヤホンするね。音も大きめだけど我慢して」

四葉は自分の耳にさしてみて音量を確認してから三葉の耳へイヤホンを挿入する。大音量でワググナーがかけられ、聴覚と視覚は完全に無くなった。四葉が作業を始める。

「まずは。これでよし。ちよつと腰をあげてもらつて」

四葉が三葉の膝を軽く叩いた。

「うん、そんな感じ。つて、聞こえてないか」

「……………」

「これを剥がして、すぐにビニール袋へ。で、新しいのを」

「……………」

「これでよかつたはず」

テキパキと作業して、また三葉の膝を軽く叩いた。

「はい、終了」

「……………」

「もう、いいですよ」

四葉はイヤホンを抜き目隠しを解いて、ハンカチが三葉の涙で濡れていたので驚い

た。

「……………」

お姉様が泣いてる、これってそんなにイヤなことなの、泣くほどイヤなの、と四葉は意外に思っている。

「……………」

「……………」

目隠しを解かれても、まだ三葉の涙が止まらない。ずっと考えないようにしていたことを意識してしまっていた。婦女子が後宮という場所で、どういう目に遭うのか、かのフリードリヒ4世は、すでに高齢ではあるけれど病臥に伏しているわけではない。そして、後宮にアンネローゼが入ってから、すでに9年もの歳月が過ぎようとしている。ずっと考えないようにしていたし、10歳のころは知らなかった。けれど、現実を実感してしまい、しかも今は女の身であるからか、それとも体調がもたらしてくるのか、憂鬱で悲しくて胸が苦しい。むしろ、今まで意識しないようにしてきたことさえ、自分の卑怯さに思えてしまい、助け出せないでいる不甲斐なさと、女の身への同情が涙になって溢れて止まらない。あのチョコレートケーキを泣きながら一人で食べた夜から、もう泣くまいと決意していたのに、声をあげて泣きそうになり、三葉の手が三葉の胸を強く押さえた。

「っ……」

胸を押さえてしまい、そこにある膨らみを感じて慌てて手を離れた。

「……なんてことを……私は……」

「そこまで気にしなくていいよ」

「……ですが……三葉さんとの約束……」

「別にエッチな気持ちで触ったわけじゃなさそうだし。起きられる？」

「……はい……」

起き上がると、やっぱり身体が重い。それでも涙は止まってくれた。四葉に頭をさげる。

「……どうも……すみませんでした……」

「ぜんぜん、いいよ。気にしないで。じゃあ、放課後になったら、すぐに帰ってきてね。また交換するから」

そう言つて四葉は階段をおりつつ一人言をつぶやく。

「あそこまで潔癖性の人だと、お姉ちゃんの身体でいるの、かなりつらそう。それとも、アンネローゼさんのことでも思い出したのかなあ……」

今朝は四葉だけが朝食の用意を手伝い、三人で食卓についたけれど、食欲もない様子だった。

「お姉ちゃんの場合も、ほとんど食べないけど、お茶くらいは飲んだ方がいいよ」

「……はい……」

食べると吐きそうな気がして、少しだけ日本茶を飲み、登校する。通学路に出ると早耶香と克彦がいた。

「おはよう、三葉ちゃん」

「おはよう、三葉」

「……おはようございます……」

「……………」

長い付き合いなので三葉の顔色を見て、多い日なのだとか克彦までわかってしまう。それでも、なんとか学校前まで歩いたものの、校門へ至る坂道を見上げた三葉の瞳が力を失った。

「ああ………」

「三葉……」

克彦が倒れそうになった三葉の身体を抱き支えた。うなじから、うつすらと汗をかいている三葉の体臭がして、やっぱり生理中なのだとかわかってしまう。

「おい、三葉、大丈夫か？」

「……………」

貧血を起こしていて、聞いているのに聞こえていない、見えているのに見えていない。

「三葉ちゃん、保健室いっ」

「……………すみません……」

それだけ言つて気を失い、気がつくと保健室の天井を見ながら涙を流していた。

「……………」

つらい。

ただ、ただ、つらい。

身体のダルさや痛みもあるけれど、気持ちがつらい。

まるで三葉の身体が泣いているようで、つらい。

それとも女性の本能なのか、生理現象なのか、つらくて、つらくて、気分が憂鬱に沈む。

「……………」

お腹が痛い、気持ちも痛い。全身の細胞が月経を迎えることを悲しんでいる気がする。妊娠という生物としての目的に至れず、無為に血を流していることを、身体が悲しんでいると感じる。

「……………」

涙が流れる。

「……………」
気持ちを立て直せない。

「……………」
考えたくないことばかり考えてしまう。

「……………」
とくにアンネローゼのことが、つらい。

考えたくないのに、後宮という場所にいるアンネローゼの身が、心が、心配でたまらない。今すぐ駆けつきたいのに、何もできない。もとの身体に戻ってさえ、それができないと知っていて、より不甲斐ない。不甲斐ないという男らしい心理さえもおぼろげで、ただ女々しく涙を流すしかできない。

「……………」
なんとかアンネローゼのこと以外のことを考えようとしてペーネミュンデのことを思い出してしまった。

「……………」
あの人は……………三度も……………」

アンネローゼの前に皇帝の寵愛を受けていたペーネミュンデは三度も妊娠しているが、すべて流産に終わっている。それは証拠はないものの、他の貴族たちの陰謀によるものかもしれない。ペーネミュンデは憎むべき敵だったけれど、女の身になって考える

と三度も流産したことは本当に気の毒で、彼女が狂気に落ちていく一因になったと実感できる。

「……」

またアンネローゼのことを考えてしまう。幸か不幸か、まったくもって考えたくないけれど、アンネローゼが妊娠したという話は一度もない。後宮に入って長いけれど、その気配がなく、それは他の貴族たちの陰謀を抑止する一因にはなるものの、女としてのアンネローゼの幸せを考えると、思考がワープに失敗した艦のようにグネグネと論理破綻してしまい、また涙が溢れる。

「……」

そうやって泣いて過ごし、一日がどう終わったのか、ほとんど記憶に残らず三葉への手紙も書けなかった。

ベーネミュンデ侯爵夫人から唾液を吐きかけられたラインハルトは表情を変えなかったけれど、心情は複雑だった。

「ペッー」

「……」

ラインハルトの整った顔は仮面のように無表情で、その頬をベーネミュンデの唾液が

ねっとり流れれる。

「そのへんで気が済みましたかな。侯爵夫人」

リヒテンラーデが慇懃に、やや遅い制止をして自裁という形式の死刑執行を進めていく。

「陛下！ 陛下は、いずこに?!」

「……………」

ラインハルトにとって姉を殺そうとした憎い女ではあったけれど、あわれな最後を迎えるかと思うと憎みきれない部分もあったし、この女は姉と同じような立場にいたのだ、ということもわかっている。強引に飲まされた毒が回り、もう動かなくなると医師と死体処理係を残して立会人たちは解散し、ラインハルトも廊下を進んだけれど、ハンカチで顔を拭いたものの、不快感は残っている。しかも、途中でフレーゲルに出会ったので、さらに不快感が増し執務室に戻ると、すぐに顔を洗った。時間が経過して唾液の匂いが、より不快になってきたし、死の寸前だったからかアドレナリン混じりなのか、この上なく臭い。

「フロイラインミツハ」

「はぐ」

執務室の机でドイツ語の勉強をしていた三葉が返事した。

「悪いがシャワーを浴びたい」

三葉や四葉と違い、ベーンミュンデは唾液を美しく吐き出す訓練をしていないので切れがわるく、ラインハルトの髪や軍服にまで匂いがついていた。

「どーぞ」

「では、失礼する」

大将としての執務室には夜通しで仕事になった場合にそなえてバスルームもあった。歴代の大将は生真面目に夜通しの作戦会議で使用した者もいれば、私的に連れ込んだ女性と使用した者もいたけれど、ラインハルトは後者のような使用方法があるとは思いません。ベーンミュンデの唾液を洗い落とすために入浴する。更衣室もあるので三葉に裸体を見せることはないものの、一応は断ったラインハルトはシャワーを浴び、軍服はクリーニングに出して、バスローブを着た。

「やつと、すつきりした」

「お姉さんは、お怪我なかつたんですか？」

「ああ、無事だ」

暗殺は未遂に終わりアンネローゼは無事である。髪を拭いたラインハルトはキルヒアイスの横顔を見つめ、その中にいる三葉に問う。

「フロイラインミツハ、女性に生まれたというのは、どういう気持ちだ？」

「え……」

ドイツ語の勉強を止めて、考える。

「ん〜……じゃあ逆に、ラインハルトさんは男性に生まれたというのは、どういう気持ちですか？」

「………………。なるほど、愚問だったようだ。オレとしたことが、詮無いことを訊いた」

「愚問ついでに、ラインハルトさんって好きな女性いるんですか？」

女子高生らしい質問に、ラインハルトは真面目に答える。

「いや、いない。フロイラインミツハには好きな男性はいるか？」

「いえ、いません」

「では、キルヒアイスなんて、どうだ？ どう思う？」

もうペーネミュンデのことを忘れたいラインハルトが話を膨らますと、三葉はキルヒアイスの赤毛をかきあげて答える。

「正直、会ったことがないんで、わかりにくいんですよ。人柄が」

「なるほど、たしかに」

「あとは永遠に会えないことがわかってる人を好きになっても、しょうがないっていう虚しさもありますね」

「それも、たしかに、そうだ」

「ラインハルトさんは、どういう女性が好きですか？」

「そうだな。頭が良くて器量がよければいい、かな」

「秀才系が好きなんですか？」

「そうなるな。……」

忘れたいののに、またベーネミュンデのことを思い出した。唾液は洗い落としたのに、記憶はなかなか洗い落とせないでいる。

「フロイラインミツハが、もし誰かと結婚していて、その誰かが、別の女性を愛し始めたら、その別の女性を殺したいと思うか？」

「………思うかもしれないけど、思うことと実行することの間には一万年くらい距離がある気がします。ラインハルトさんは、どうですか？ もし誰かと結婚していて、その女性が別の男性と付き合うようになったら、許せますか？」

「………。想像がつかない。そもそも、自分が結婚するということさえ、思いもよらぬ話だ。まして、その先など………わからない」

「ですよね。結局、まだ子供なんですよ、私たち」

「………」

子供と言われても、いまだ初恋の経験もないラインハルトには反論が無かった。三葉が話を続ける。

「この世界、つていうか、今の時代つて一夫一婦制なんですか？」

「基本的には、そういう建前だが皇帝は当然として、門閥貴族どもも二人、三人と囲っていることも多いし、貴族でなくても裕福な者や地位のある者は、そうであることもある」
「ロイエンロール少将さんも、そんな感じですね。今朝、軍務省の前で女の子と歩いてたし」

「彼は結婚していないから厳密には違うが、……個人の自由だろう、干渉することではない。あと、ロイエンロールではなくロイエンタールだ。非礼にあたるから、しつかり覚えてやってくれ。彼は、これから大切な部下になるのだから」

「はい。個人の自由ですか、それを言い出すと、一夫一婦制が厳密じゃないなら、さっきの質問への答えはノーですよ。殺してまでなんて。何より、失ったお互いの気持ちを取り戻せるわけじゃないから」

「お互いの気持ちか……」

なんとなく答えを得たような気がしてラインハルトはベーネミュンデのことを心の中で落ち着させ、机にあった書類にサインをした。それは自裁を見届けた者たちが書く証明書で、たしかにベーネミュンデは帝国貴族に恥じない最後を迎えたという形式張った内容だった。三葉が問う。

「お昼から、またブラスタターの訓練とかですか？」

「いや、私は大將級以上が出席する退屈な会議に出なければならぬ。他の者にフロイラインミツハの訓練を頼むわけにもいかなぬから6時までには自由にしてくれていい。この書類さえ、リヒテンラーデ公へ渡しておいてくれれば」

そう言つてラインハルトは自裁見届人証明書を渡した。

「はい」

三葉はベーネミュンデの自裁見届人証明書を持つてリヒテンラーデのもとへ出向く。その道中で廊下を歩きながら一人言を漏らす。

「メールとかで送ればいいのに。効率悪いなあ……、しかも、やたら広いし。無駄が多すぎ」

ラインハルトから重要な書類なので従卒などに渡さず、必ずリヒテンラーデ本人へ手渡すように言われている。もともと、本来は暗殺未遂事件の被害者であったアンネローゼが見届人の一人になるのが慣例だったけれど、姉の心理的負担を考えてラインハルトが代理人として見届けているし、そうして良かったと思つていたけれど、三葉にとつては入れ替わつたときには、すでに終わつていた事件で実感はない。

「失礼します。ミューゼル閣下より書類を預かつて参りました」

「うむ」

リヒテンラーデは書類を受け取つたけれど、とくに何も言われなかつたので、すぐに

敬礼して退室した。

「さてと6時まで、どうしようかなあ」

また廊下を歩いてみると、生理現象を覚えたので男子トイレに入った。

「男の子って前に飛ぶから便利だなあ。女子は、いちいちパンツ脱いで座らないといけないのに、男子はサツと出して、すぐ発射で便利すぎ」

用が済んで手を洗っていると、奥の個室からノルデン少将がズボンを直しながら出てきた。

「やあ、キルヒアイス中佐。昇進、おめでとう」

「ありがとうございます」

ハンカチで手を拭いてから敬礼した。ノルデン少将も軽く敬礼を返して、手を洗いやヤクセのある髪を鏡で整えている。もともと戦場においても厳格な雰囲気のない将官だったので三葉は訊いてみる。

「この近くでヒマつぶしに、ちょうどいいところつてありますか?」

「そうだね。それなら、軍務省付きの美術館など、どうかね? ちょうどいい、当家が寄贈した刀剣があるのだ。案内しよう」

「ありがとうございます。でも、ノルデン少将、お仕事は?」

「少将は少々ヒマなのだ。はははは!」

「……………あはは…」

一応、上官なので合わせて笑い、三葉は軍務省に付属した美術館に入った。館内は過去の武具などを展示していて、とくに戦車や戦闘機などの工業製品ではない美術性の高い物品を中心として戦争に関するものを並べていた。そのために古代から中世までの剣や槍、中世以降の火縄式銃や火打ち式銃が多い。

「これが、当家が寄贈した太古の昔の槍だ」

ノルデン少将がガラスケースに入っている日本製の槍を指した。その槍を三葉は知っていた。

「…三大名槍……日本号……あの日本号が…、ちゃんと伝わってるんだ…」

三葉は刀剣に関心はなかったけれど、官位まで与えられた槍のことは知識にあった。もともと神社関連で大きな集まりがあると、刀剣神社として有名な名古屋の熱田神宮などへ行くことになるし、ご神体が刀剣である神社も多いので普通の女子高生よりは知識がある。ノルデン少将は自慢げに語ってくれる。

「この槍に、私は救われたのだ」

「え？ これを持って白兵戦でもしたんですか？」

「いやいや。これを寄贈したことで私は少将への昇進が早くなり、おかげでミューゼル閣下の艦隊に配属された。もし、准将のままだったら、ミュッケンベルガー艦隊だった

かもしれない。そうなると、ティアマト会戦で戦死していたかもしれないからね」

「なるほど、そういう出世の仕方もあるんだ。楽でいいですね」

三葉が感心していると、同じように時間の余裕があったのか、エルネスト・メックリンガー准将が声をかけてくる。ノルデンの方が階級が上なので敬礼し、三葉も敬礼した。

「すばらしい槍ですな。ノルデン少将からの寄贈があつたおかげで私たちも目にすることができる。ありがたいことです」

「うむ、子爵家としては、この程度、当然の社会貢献ですよ」

「……」

見返りがある場合は社会貢献って言わないと思う、と三葉は余計なことを考えたけれど、余計なことだとわかつてるので口にはしない。他にも日本から伝承されている物がないか目で探したけれど、この槍だけのようだった。そんな三葉の様子に気づいたのか、メックリンガーが残念そうに言ってくる。

「この時代から、のちに地球上での核戦争がなければ、もつと伝承された美術品は多様で豊富だったでしょうね。実に惜しい」

「核戦争……」

そんなことが起こるんだ、いつだろう、と三葉は気になった。メックリンガーに質問

しようとして、ごく当然の歴史知識だったら、沖繩歴史博物館で第二次世界大戦についてですか、とバカな女子高生が質問するようなものだったり、ルドルフ大帝って何年前の人物ですか、と不敬罪クラスの発言をするようなものだったりしたら、それをキルヒアイスの口でするわけにはいかないと判断し、帰ってから調べてみようと思った。

「当家には、この槍以外にも色々ありますよ。よければ、お二人に、これからお見せしましょうか？」

「それは是非！」

メックリンガーの瞳がキラキラと輝いている。誘われて断るのも非礼かと思い、三葉も付き合うことにしたおかげで子爵家で美味しい紅茶を飲んでいるうちに、核戦争について調べることは忘れた。夜11時30分になり、下宿で幼年学校の教科書をラインハルトと復習していたことも終え、フーバー夫人が用意してくれたワインを開けた。

「その身体なら飲めるだろう」

「お酒か……」

酒といえば口嘯み酒を思い出す。

「嫌いか？」

「いえ、造ってばかりで飲むことがないので」

「酒を造っていたのか、どんな酒を？」

「……………」

説明すると原始人か、石器時代の女あつかいされそうなので避ける。

「お米から造っています。ごく普通に」

「米か、では麦から造るビールと似たようなものか？」

「うーん……まあ」

「飲んでみたいな」

「……」

飲まれたくないな、私の唾液から造るんだよ、と思いつつワインを飲んだ。

「あ、美味しい」

「口に合って、よかった」

しばらくワインを楽しむうちに、二人とも少し酔って饒舌になる。

「もしもフロイラインミツハ本人そのものが、ここにいるのなら今はお互い、かなり緊張すべき場合なのだろうな。時間も遅いし二人きりだ」

「フフ、そうかもしれないませんが、この身体にいると男性を同性に感じますよ」

「すると、女性を異性に感じるのか？」

「そうですね。そんな感覚があります。そして、ワインも美味しい」

グラスを飲み干すと、もう12時だった。

少し酔っていたキルヒアイスの瞳が、体調不良で呻いているような色合いに変わり、それから、ようやく12時を過ぎてくれたことに気づいてタメ息をついた。

「はああ……………やつと、この身体に…」

「つらそうだな？ 何かあったのか？」

「……………いえ、……………何も」

「明らかに何か隠しているだろう？ お前が、つらそうな顔をするなんて、よほどのことだ」

「……………彼女のプライベートなことですから」

「そうか。では遠慮しよう」

「ベーネミュンデ侯爵夫人の件は、どうなりましたか？」

「……………うむ」

せつかく忘れていたのに思い出してラインハルトはワインをあおった。記憶が唾液の匂いとともに蘇ってくるのでワインで洗い流すために、自ら2杯目を注ぐ。

「予定通りすべて終わった。もう何も問題は無い」

「そうですか……………よかった、と申し上げにくいですが、アンネローゼ様にとっては、一つ危険が減ったことになりますね」

「ああ。……………女か……………思えば人類の半分は女なのだな」

「……………はい、そうなりますね」

「……………」

男ばかりの軍隊生活なので、実は人類構成員の半分は女性だという明白な事実を忘れそうになる。ラインハルトは雑談として結論なく話したけれど、キルヒアイスには言いたいことがあった。

「ラインハルト様」

「何だ？」

「一日も早くアンネローゼ様をお救いしましょう」

「ああ、そうだな。そうしよう」

頷いてラインハルトは三葉が飲んでいたグラスへ、ワインをついで二度目の乾杯をキルヒアイスとした。

三葉は布団の上で月経痛に耐えるような丸くなった姿勢でいた。

「戻った途端、うう……………この痛み、このダルさ……………間違はなく私の身体……………いつそ、あと

3日くらい入れ替わったままでよかったのに……………ううう……………あああ……………」

「大変そうだね」

「男の身体って気楽でいいなあ……うう……」

「で、向こうは、どうだった？」

「うん、面白かったよ。子爵家でお茶もよばれたし」

「へええ」

妹に子爵家の豪華さとノルデンの息子たちが父親とそっくりだったことを語りながら入浴する。四葉も話を聴きたいので二度目だったけれど、いっしょに湯船に入っている。

「暗殺未遂とかあってアンネローゼさん、危なかったらしいし。あと、核戦そ……」

「え？ 何？」

「……………ううん、何でもない」

「そこまで言ったなら言つてよ、お姉ちゃん」

「……………ううん、本当に誰にも言つちやダメだよ」

「はいはい」

「核戦争があつたらしいよ、地球で。それで美術品とかも残つてるのが少ないんだつて」

「核戦争……………いつ？」

四葉の顔がやや神妙になる。三葉は軽く応える。

「調べようと思つたけど、やめた」

「どうして?」

「もしもさ、それが来週とか、来年つてわかったら、その日まで震えながら過ごすことになるんだよ? もし10年後でも、なんか就職するのがバカらしくなりそうだし、50年後でも、子育てするのが微妙な気分になりそうだしさ。ま、300年後くらいだと、関係なくて、ちょうどいいかなって思うけど」

「……………なんとか防ぐとか。近いうちにあるなら」

「無理無理! そんなことができるなら北朝鮮からミサイル飛んでこないから」

「それは、そうだけどさ。知は力なり、フランスス・ペーコンの言葉だよ。知れば、なにかできるかもしれないよ?」

「うくん……………でもさ、あんまり未来を覗くのつて……………どうなのかな……………たとえば、自分が子供を産むときでも、産まれてくるのが男の子なのか、女の子なのか、検査で知っちゃうと楽しみが減らない?」

「うちは代々、女の子しか産まれてないらしいよ、お婆ちゃんが言ってた」

「うつ……………そういうの、知りたくなかった。やっぱり楽しみが減るじゃん」

「楽しみはともかく危険は察知した方がよくない?」

「うくん……………どうなのかなあ……………防ぎようのない災いならさ、いつそ、その日、その瞬間まで知らず、あつさり一瞬で死んじゃう方が楽でいいよ? きつと」

「……………はああ……………」

四葉は深いタメ息をついて風呂の湯に顔まで沈んだ。

告白、ルビンスカヤとルビンスキー、三竦み

キルヒアイスは三葉の部屋で目を覚ますと、回数を数えて日付を見ていた。

「これで22回目……………」

三葉と入れ替わることに、すでに22回となっている。

「三葉さんの時間では4月から6月に、けれど私の時間では486年の2月から11月まで進んで……………私が三葉さんになるのは、三葉さんの時間で、およそ週に3、4回。けれど、私の時間では不定期ではあるけれど週に1回程度……………もしも、このままのペースなら彗星落下の頃には、私の時間では489年中頃に……………」

入れ替わる日のペースが二人のいるそれぞれの時間で違うことには、ずいぶん前から気づいていたけれど、その記録から逆算して彗星落下まで入れ替わりが続くと仮定すると、帝国暦では489年までになりそうだった。

「この現象は三葉さんたちを救えという神の意志なのでしようか……………いえ、神のような非科学的なものが……………もつと、よく知り、もつと、よく考えましょう……………。けれど、もしも、彗星落下で三葉さんが亡くなるとすれば、私は彼女の残り少ない人生の半分を無

為に奪っているということに……」

胸に痛みを覚えつつ、三葉としての日常を女性らしく過ごすために枕元にあつた手紙を読む。

「テツシーとカフェに……写真とお土産……」

手紙には今日の予定として、克彦と電車で移動して地方都市にあるカフェに行くこと、もしも自分が行けずに入れ替わりが起こつてキルヒアイスが行くなら、カフェの料理をスマホで写真に撮っておくこと、テイクアウトのお土産を多めに買って帰ることが書かれていた。

「サヤチンは……」

たいてい3人いっしょに行動するのに、早耶香のことが触れられていないのでスマホでメッセージ履歴をチェックした。克彦とのやり取りが見つかる。

明日、念願のカフェに行かんか？ 割引券もらったし。

行く行く！

じゃあ、9時に駅に集合な。

サヤチンは？

あいつは家族で富山にマス寿司を食べに行くって言つておつたやろ。

ああ、そういうえば、そんなこと言つてたかも。サヤチンが行けないなら来週は？

割引券の期限が来るから。

そっか。どうしようかな。

割引券がある分、おごってやってもいいぞ。

行く！

じゃあ、決まりだな。

やり取りを見ると、昨夜になって急に決まったことなのだとわかった。

「……………これは……………デート……………どんな服で行けば……………」

着替えは用意されていなかった。もうお互い軍服や制服だと、用意しなくてもわかるし、普段着も三葉のショーツが入っているタンス以外は中身を把握している。

「明らかにデートなのですから、テツシーに失礼のない服装でないと……………」

いつもの日曜日に着ているような平服で行くわけにはいかないと思い、タンスを探つて少し胸がきついけれど、三葉が中学生の頃に女性らしさへ憧れて買った白いワンピースを選んだ。

「もう、こんな時間に……………」

服を選んで、いつも身なりを整えることに気遣っていると、約束の時間が迫り、朝食もそこそこに駆け急いだ。到着すると、すでに克彦が待っていた。

「おはようございます。お待ちせいたしました」

「……………。そ、そんな女らしい服……………もってたんや……………」

初夏らしい肩と胸元を露出したワンピースは17歳の三葉の健康的な美しさを外面からも内面からも輝かせていたし、白いワンピースに合う靴が無くて玄関で困っていたところ、一葉が二葉が使っていたヒールのある白サンダルを出してくれたので、いつも学校で見る三葉とは別人のように可愛らしく見えて、克彦は気温以上に暑く感じた。

「おかしくないでしょうか。スカートが短すぎる気がして、場にふさわしくなければよいのですが」

スカート丈は制服と同じほどだったが、ふわりとした生地なので風が吹くと不安感が大きい。首から肩、胸元までを露出するのは宮廷婦人たちにも、よく見られる衣装だったので抵抗が少ないけれど、スカートは踝まで長さがあるのが標準で、膝上の腿半ばまで露出するのは内心で、とても恥ずかしいと感じている。ただ、周囲の女子高生も同じほど短いので、それが文化なのだと自分に言い聞かせているだけで、恥ずかしいことにはかわりはなかった。

「い……………いや……………ぜんぜん、大丈夫。ナイス、チョイス」

そう言う克彦も普段の平服よりも決めてきていて、香林坊で買ったスラックスや勅使河原建設の嫡男として出席するパーティーなどでも着られるフォーマルさとカジユアルさを兼ね備えたカッターシャツを選んでいた。

「じゃあ、行こうか」

「はい」

二人で電車に乗って糸守町を離れ、おしゃれなカフェのある街を歩くと、三葉の美しさと気品ある雰囲気は、とても目立った。立っただけでも座っただけでも、物腰の穏やかさと上品さは銀河屈指の女ぶりでエスコートしている克彦にも気合いが入る。それでも、お目当てのパンケーキが運ばれてくると、三葉の手が恥じらいながらスマフォを出した。

「……お料理の写真を撮りたいと思います。……失礼ですが、よろしいでしょうか」

「あ、…、ああ、どうぞ」

克彦は普通のことだと感じたけれど、喫茶中にスマフォを出して料理を撮影すること、とても下品で不作法なことに感じられるのに、そうするように命じられているので羞恥心に耐えながら、一品につき角度を変えて3枚は撮らされ、恥ずかしそうに顔を赤くしている。そんな女の表情を見て、克彦は元々どうでもよかつたパンケーキの味は一切記憶に残らず、ただ三葉の顔に見惚れた。とても恥ずかしそうに一枚一枚の写真を丁寧に撮りつつも、周囲の視線を気にして顔を真っ赤に染め、あまりに恥ずかしくて涙まで浮かべている。

「はああ……」

やっと撮り終わってスマホを片付けると、両手の指で熱くなった頬を冷やしてタメ息をついている。

「はしたないことをして、すみませんでした。ご同席されていて、さぞやご不快であったかと痛み入ります。どうか、お許しください」

「いや、いいって、いいって。ほら、早く食べんと、クリームが解けるで」

「はい、いただきます」

そう言つて半分まで食べてから、また恐る恐る三葉の手がスマホを出した。

「あの……」

「どうした？」

「……もう一度、写真を撮つてもよいでしょうか」

「ああ、いいけど、早く食べんと解けるぞ」

「はい、せつかくお誘いいただきましたデートで、このような不調法をお見せすること、どうぞ、ご容赦ください」

「……デート……だよな、やつぱり……これは……」

克彦は満足そうに頷いて、迷っていた夕方の予定を三葉が喜びそうな手羽先の美味しい焼き鳥屋ではなく、景色のいい静かな公園の丘に決めた。けれど、三葉の顔は悲壮なほど羞恥心で染まり、食べかけのパンケーキの断面を撮ることに抵抗を覚えている。ふ

わふわのパンケーキの断面を生地の様子がわかるように撮っておくことという命令だったけれど、公衆の面前で自分が食べかけた物を撮るといふ行為が恥ずかしくすぎて、スマフォを持つ三葉の手が震えている。見かねて克彦が言う。

「貸してみ、オレが撮ったろ」

そう言つて克彦が撮つてくれた。おかげで気持ちになる。

「すみません。ありがとうございます」

「いいつて。さ、食べようぜ」

「はい」

ようやく喫茶を楽しむ、糸守町にはない都市部の賑わいを見て回り、夕方になると克彦に誘われて公園の丘にのぼった。

「コンタ夕日がキレイなんや」

克彦は有名すぎる夕日スポットだと、他にもカッブルがいて告白しにくいので子供の頃に何度か見に来たことのある、ごく平凡な公園に誘っていた。その選択は正解だったようで運良く誰もいないし、夕日が美しく周囲を彩っている。

「これが夕日……」

キルヒアイスは地球で見る夕日に心を打たれた。

「なんて美しいの……」

生まれて初めて見る地球での太陽の夕日は心を揺さぶるほど感動的だった。

「ああ……」

どの可住惑星も当然ながら環境的に地球と近いけれど、恒星の大きさや色合い、恒星惑星間の距離、大気の微量成分、それらが少しずつ惑星ごとに異なるために夕日はとくに違いが鮮明になる。そして糸守町は急峻な山に挟まれた谷間であるために夕日となる前に日陰となってしまうので、今日のこの夕日が本当に初めての夕日だった。

「……………」

「……………」

太古の昔から何十億年と繰り返されてきた自然現象を目の当たりにしてDNAが揺さぶられるような感動を受けていた。今までに見たどの夕日よりも美しいと感じるし、写真や絵画で見た夕日も、地球が核戦争で荒廃する以前の夕日を目指す印象の原点として描写されているので、その原点そのものを見ることができて胸と目が熱くなってくる。

「まるで夢のよう……」

ここでは女性として振る舞い、危険な戦場でもなく、陰謀渦巻く宮廷でもない場所が安らぐ。一瞬、帝国軍士官としての自分が本当なのか、ここにいる自分が本当なのか、どちらかが夢なのか、わからなくなるほど夕日に感慨無量となった。

「こんな美しい夕日を見せてくれて、ありがとう、テツシー」

「三葉」

「はい？」

克彦の方を振り返ると、真剣な眼差しで見つめられていた。

「オレは三葉が好きだ」

「っ……」

前置きも照れもない直球の告白を受けて三葉の心臓が拍動の速度を早めた。

「オレは三葉が好きだっ！」

「……テツシー……」

困った、という気持ちと、嬉しいという気持ちとが等量に湧いて思考を混乱させてくる。自分が宮水三葉ではないことは忘れていない、けれど可能な限り女子の三葉として行動しようと思っている、もしも、この告白を受けたのが三葉本人なら、どう反応したのか、どう反応するのが、今後の三葉と克彦のためになるのか、それを考えるけれど、答えに至れない困ったという気持ちと、そして素直に嬉しいと感じる気持ちが混在して、三葉の頬も夕日で染められている以上に赤くなってくる。

「オレと付き合ってくれ」

「……それは……男女交際ということですか？」

わかりきっていてバカな質問をしていると自覚していたけれど、それでも問うと、克彦は真剣に頷いてくる。

「ああ、そうだ」

「……………」

三葉の瞳が克彦を見つめる。克彦も見つめてくる。男性からの告白と熱い視線が、より三葉の心臓を高鳴らせてくる。答えに窮して無言だったけれど、三葉の表情を見て克彦は勝機を感じて、三葉の肩を握った。華奢な肩が男の厚い手のひらに包まれると、ますます三葉の心臓は早く鳴る。肩を露出しているのです、お互いの体温を熱いくらいに感じた。

「ずっと、好きだった。なかなか言えなかったけど、伝えておきたいんだ。好きだ、大好きだ」

ずっと言えなかった分、言えるようになるかと繰り返し言いたくて連射した。その連射が三葉の心臓を経験したことがないほど高鳴らせたし、感じたことのない嬉しさが胸に湧いてきて、このまま克彦の男性らしく成長してきた腕に抱かれたいという衝動さえ覚えた。

「……………」

「……………」

イエスと答えない、答えてあげたいし、答えたかった。言葉にしなくても、そつと目を閉じて唇を捧げるだけで気持ちには十分に伝わるし、身体がそれを求めている気がする。けれど、それはダメだとわかってもいる。たとえ、最終的にイエスと答えるにしても、それは三葉が決めることで、今日の自分が決めていいことではないとわかつてる。そして、このタイミングで、また思い出してしまった。この真つ直ぐな熱い告白をしてくれた克彦でさえ、あと四ヶ月の命なのだを知っていることを思い出してしまった。

「……………」

「好きだ、三葉」

女として、とても嬉しかったし、男として尊敬に値する男だと想う。自分に、こんな勇気をもった告白をアンネローゼにできるだろうか、そう自問すると、より尊敬するし、握られている肩から感じる男の手の逞しさが、女の身体の芯を熱くさせてきて、このまま抱かれないという気持ちで身体の重心が克彦の方へいつてしまいそうになる。それを我慢して、踏み止まるのが、つらい。

「泣かないでくれよ」

克彦は三葉の涙を指先でぬぐった。いつの間にか、涙を流していた。

「イヤだったか？ オレなんか好きだって言われて……………」

「いいえ！」

これは、はつきりと答えておかないといけない。三葉がイエスと答える可能性も大いにあるのだから、今は選択の余地を残して明日に持ち越さなければいけない。

「イヤだなんて、とんでもないことです！ 嬉しいですよ！ とても嬉しいですよ。この涙は嬉しくて泣いているのです！」

「三葉……」

克彦はイエスだと想って三葉の身体を抱きしめてキスしようとしてくる。けれど、それには心苦しくも抵抗する。抱かれないのに抵抗するのは、相手にも悪くて、とても苦しくて涙が零れる。

「待って、待ってください。どうか、答えは明日まで待ってください。お願いします、今は……今は、ここまでに……」

キスは拒絶して顔を伏せ、克彦の胸へ頬をつけた。そして言い募る。

「本当に嬉しいですよ。けれど、どうか明日まで待ってください。勝手なことを言って、すみません。お願いします、どうか、待ってください」

答えを待たせることが申し訳なくて泣けてくる。しかも、克彦と三葉には時間が残されていない、あと四ヶ月しかない。そう思うと涙が止まらなくなつて、ぼろぼろと三葉の涙が零れ、夕日を反射してキラキラと光った。

「三葉……」

克彦は待つてと言われて、一つだけ心当たりはあった。早耶香のことだと思った。自分が早耶香に好かれていっているという自覚は自惚れでなくあった。むしろ、早耶香は周囲から見てもわかるほど、はつきりとアピールしてくる。だから、三葉が躊躇うことがあるなら、それは早耶香のことだと、女性の人間関係は詳しくはわからないものの、そう解釈した。

「……………」

「……………」

もう夕日が沈んでしまった。

「待つよ。三葉、一日でも一ヶ月でも一年でも待つ。オレは、ずっと三葉が好きだから」
「っ……………くっ……………」

声をあげて泣きそうになって、それは17歳の少女として、この場面でするのは変だとわかっていても嗚咽が湧いてくる。泣き声を手で押さえて耐えている三葉の肩を克彦は優しく抱いていてくれた。ずっと、そうしていたいと克彦は思ったけれど、現実はいさ少し冷酷で、もう時間がない。夕日をバックにしての告白は予定したものだったし、日没時間もネットで検索して知っていた。そして、糸守町まで帰る終電も、もう無くなることを知っている。山奥の町に帰るには、たった今、日没したばかりなのに次の電車を逃すと、無くなってしまう。

「三葉、そろそろ帰らないと電車が無くなるから」
「はい……」

ハンカチで涙を拭くと、克彦が手を引いてくれる。泣き顔のまままで電車に乗るのは恥ずかしかつたけれど、ダイヤが極めて限られていることは行きに見たので知っている。せめて電車内に化粧室でもあれば顔を整えたかったけれど、たった2両しかない車両には化粧室もなかった。夕方の混み合う車両内で、泣いている白いワンピースの女子と、その連れに見える男子という組み合わせは、とても注目を集めてしまう。他の高校生たちからクスクスと笑われている気もする。

「三葉……そんなに泣かなくても……」

「ごめんなさい……つ……ごめんなさい……」

「いや、謝らなくてもいいから」

「……ううっ……」

「泣きたいなら、泣いていいよ。……けど、どうして、そんなに泣くんだよ？ ……心配になるじゃないか……」

「……すみません……ううっ……」

それは言えない。あと四ヶ月で克彦も三葉も彗星落下で死んでしまう。言ってあげたい。言って死を回避させてあげたい。なのに言えない。それがつらくて心が掻き乱

れる。涙と嗚咽が止められない。両手で口を押さえて泣き声を忍ぶのに、その両手が涙で濡れる。死なないでほしい。克彦にも三葉にも生きていてほしい。こんなに若くて、過去よりも未来に積むべきものがあるはずの歳なのに、死んでしまうなんて悲しすぎる。

「ううっ……うーっ……」

「……三葉……」

ふと号泣する三葉の顔を見ていて、克彦は既視感を覚えた。こんなに泣く三葉の顔を見たのは、初めてではない。母の二葉を送る葬式でも見た。母親を喪つて当然に大泣きしていた。それを思い出すと克彦は今日の三葉が履いているヒールのある白サンダルを二葉が履いていたことも思い出した。

「三葉………お母さんのこと思い出したんか？」

「……ううっ……うっ……」

否定も肯定もしなかったけれど、克彦は勝手に解釈した。

「そうか………亡くなるには、早過ぎるよな。……泣きたいなら、思い切り泣けばええ。人目なんか気にせんと、しつかり泣け。それが亡くなつた人へのたむけにもなるって、オレの婆さんも言つてたから。ぞんぶんに泣いたらええ」

「っ……」

そう言われて堰が切れた。

「うっ……うあああつ……死なないで！ 死なないでください！ お願いだから、生きて！ 生きていてください！ うあああつ！ わあああああうう……」

もう声をあげて泣いてしまう。あまりに切羽詰まった号泣で重い事情があるのだろうと周囲の乗客も察し、さきほどまでクスクスと笑っていた高校生たちも静かになった。克彦は泣き続ける三葉の頭を抱き、抱かれながら三葉の手も克彦のカッターシャツをキュツと掴んでいた。そうして糸守町へ近づいていくと、どんどん乗客が減っていく。一駅ごとに乗客が減り、二人とも席に座ることができた。座ってからも、克彦の胸に顔を伏せていたけれど、さすがに一時間もすると泣き顔も落ち着いて、抱かれていることが恥ずかしくなって礼を言って離れた。

「……………」

明日まで待つて、と言われた克彦は待つつもりだったので話題に困り、キルヒアイスも黙っているうちに少し冷静になれた。いくら女性を演じているからといって、自分を見失いすぎでないかと思う。けれど、単に演じているだけでなく、身体も女性そのものなので男性である克彦と異性として感じる部分があることは確かだったし、何より生きていてほしい。

「……………」

「……………」

外が暗いので、車窓に二人の姿が、はつきりと反射して映っている。克彦の隣りでワ
ンピースを着て女らしく座っているのが自分だと意識すると、再び夢の中にいるような
錯覚さえ感じた。

「次は終点、糸守い〜♪ 糸守い♪」

「おりよう」

「はい」

電車に乗る前は手をつないでいたけれど、糸守では少し離れておりた。克彦が夜空を
見上げる。

「夕日は見えないけど、この町の星は格別だな、やっぱり」

「はい。……………」

戦艦の艦橋から見る星は空気の揺らぎによる瞬きが無く鮮明すぎて、むしろ糸守から
見る星こそ一番美しい気がする。なのに、この町はあと四ヶ月で壊滅的な被害を受
ける。そう思い出すと、また涙が流れた。

「……………三葉……………やっぱりイヤだったなら、無かったことにしてくれ…」

「いえ！ 違います！ そういう涙ではないのです。ただの思い出し泣きです。明日、

必ずお返事いたしますから、どうか待つてください」

「そうか……それなら……明日まで待つてるよ」

あとは無言になつてしまい、暗い夜道なので克彦は家の前まで送つてくれた。

「じゃ、また明日な」

「はい。今日は、とても楽しかったです。ありがとうございます」

「……。最期まで、お嬢様モードなんだな。ちよつとくらい、くだけてくれよ」

「すみません。それも明日、必ず」

「そうか、じゃ、明日、期待してるぜ」

克彦は背中を向けながら手を振つて歩み去つた。その背中を見送つてから家に入る。

四葉が迎えてくれた。

「お帰り、お姉様」

「ただいま戻りました。遅くなり、すみません」

「デート、どうだった？」

「とても楽しかったです。夕日が素敵で」

三葉の顔が少女らしく微笑むと、四葉は少し冷めた顔になる。

「そう……自分が男つて覚えてる？」

「……………はい……………ときどき忘れてしまいますけれど……………」

「まさかキストかしてないよね？」

「も、もちろん！」

「そんな慌てなくても……」

話題を変えるためにキルヒアイスはお土産を差し出した。

「こちら、お土産になります。……そ……その……明日、三葉さんも食べる分があるそうですから残してあげてください」

自分の分を確保するような口上を恥ずかしそうに言い、遅い夕食をいただくが入浴はせずに部屋着に着替えた。

「……今日の出来事、どう手紙に……」

どんな手紙を書いて三葉へ克彦から告白されたこと、そしてすばらしい男性なので、ぜひ交際した方が良いことを伝えようかと思いついて悩んでいると、スマホが鳴った。着信表示はサヤチンになっている。

「もしもし？ 三葉です」

「メッセージ、読んでくれてないの？」

「すみません。いろいろありまして」

「そっか。富山土産のマス寿司、食べてくれた？」

「あ、はい。さきほど夕食に、いただきました。ありがとうございます、とても美味し

かったです。お魚をあんな風に調理しているなんて、とても斬新で面白い料理だと思います」

「……。まあ、喜んでもらえてよかったですけど。話は、それだけよ」

早耶香が電話を終えようとするので、こちらから話しかける。

「サヤチンにも聞いてほしい話がありますの」

「嬉しそうな声して、ええことでも、あつたん?」

「はい! 今日、テツシーが私のことを好きだと言ってくれました。お付き合いしたいと! 私は、とても良いことだと思っておりますが、サヤチンも祝福してくださいませよ、すよね?」

「……。それは何かの冗談?」

「いいえ、冗談などではありません。テツシーは本心から私のことを好きだと、まじめに告白してくださったのです。私、とても感動いたしましたし、あしからず想っております。前向きに考えたいと想っております」

「……。それを私に話して、どうしたいわけ?」

急にスマフォから響いてくる早耶香の声が低く冷たくなったけれど、話を続けた。

「お友達として祝福してください。テツシーと私が交際することを、いっしょに喜んで

「いただきますのです」

「……………。あのさー!」

早耶香が怒鳴ってきた。

「いくら何でもひどすぎない?!」

「え……………。何がですか?」

「つ…………。そうやってスツトボケるんや?! 私の気持ち、知ってるくせに!」

「サヤチンのお気持ち? すみません、よく知りません。教えていただけますか?」

「…………。ああそう!! じゃあ勝手にすればいいよ!! 付き合いええッ!! こんな大事な

話、そのふざけたお嬢様モードでされるなんて思わなかった!! わかってほしいなら、

わかってほしいで、もっと言い方ってあるやん?! それなら私だつて諦めたのに!!」

「あ…………。あの…………。お気に障ったのなら、謝罪いたします。どうか、落ち着いてください」

「バカにしないで!!」

そう怒鳴った早耶香は電話を切ってしまい、こちらから何度かけても応答してくれな

かった。

「いったい、どうして、サヤチンはお怒りになってしまったのでしょうか…………」

まだ女心が十分に理解できない。けれど、ゆっくり何度も考えてみるうちに、だんだ

ん早耶香の気持ちが見えてきた。

「もしかして、彼女もテツシーのことを好きで……」

そう考えると思い当たる節は多い。そして、そうとしか思えなくなってきた。

「私は、なんてことを……彼女の気持ちも考えずに……」

時計を見ると、もう夜の10時過ぎで早耶香へ会いに行くことも非常識だし、自分が謝りに行くと余計に混乱させる気もする。そして、やっぱり時間が残されていない三葉と克彦に幸せな時を少しでも過ごして欲しいという気持ちもあつた。自分に置き換えても17歳の頃にアンネローゼと幸せな時間を数ヶ月おくれるなら、その後には過酷な運命が待っているとしても、その数ヶ月の価値は何物にも代え難いと想える。

「とにかく、お手紙に……」

克彦から真剣な告白を受けて、とても好ましい男性だと感じたこと、そして早耶香とのやり取りを手紙にしていこうちに12時を迎える。ちょうど、入れ替わる瞬間を見守るために四葉が部屋へ入ってきたけれど、別れの挨拶をする前に日付が変わった。

三葉はクロイツナハムの警察署内でホフマン警視から感謝状を受け取っていた。

「感謝状！ ジークフリード・キルヒアイス殿。貴殿はクロイツナハムにおける麻薬捜査に協力され、多大な功績のあったことをここに証し、これに感謝いたします。帝国暦486年11月……」

感謝状が手渡され、三葉も銀河帝国の礼儀作法で受け取る。

「この身に余る栄誉、恐縮の至りです」

授与式が終わり、少しばかりホフマンと談笑したけれど、あまり話すと昨日の記憶がないことでボロが出そうなので、早々に切り上げ、ラインハルトが待っている喫茶店に入った。

「お待たせしました」

「ああ」

ラインハルトは平服で優雅にコーヒーを飲んでいた。二人とも第四次ティアマト会戦が終わったことで、休暇で娯楽施設であるクロイツナハⅢに来ている。

「こんなのをもらいました」

三葉が感謝状をラインハルトに見せる。ラインハルトは微笑してアイスブルーの瞳を細めた。

「キルヒアイスらしいな。どこにいても苦労性のようだ」

それから、わざと芝居めいて貴族っぽい仕草で右手を胸にあてつつ名乗る。

「フロイラインミツハと初めて会ったときも少し話したけれど、オレの名も変わった」

「そういえば、どこかの家名を受け継ぐって…」

「ええ。ラインハルト・フォン・ローエングラムと申します」

大袈裟に会釈してランズベルク伯爵アルフレッドが淑女に対してするような挨拶をしてみせる。

「以後お見知りおきを、フロイラインミツハ」

冗談としてキルヒアイスの手をとり、その甲へキスをするような仕草も見せたけれど、さすがに唇は触れない。三葉も冗談とわかつていて応える。

「はい、こちらこそ、よろしく願います。ローエングラム様」

「クスっ♪」

「フフ♪」

二人とも失笑したけれど、メニューを持ってきたウエイトレスが会話を聴いてしまい、真顔で同性へフロイラインと言っているラインハルトの顔を凝視してしまい、目が合つて即座に顔をそむけられた。ラインハルトも三葉も休暇中の油断で、つい変な疑いをもたれる言動をしてしまったことを自嘲して笑ひ、席を立った。

「さて、せっかくの休暇だ。とりあえず観光でもしようか」

「そうですね」

喫茶店を出て、二人でクロイツナハムの内部を歩き回った。やはり大人向けの娯楽施設なのでカジノやキャバラなど、金、女、酒という組み合わせが目立つ。あまりラインハルトにとっては興味の湧かない場所だったので、つつい話題が会戦のことになっ

た。

「フロイラインミツハは、あのととき何か言いたそうにしていたな」

「あのとときって？」

「ミュツケンベルガーから私の艦隊が単独で突出する形に布陣され、右に転進して敵の眼前を横断する、という策をとったときだ」

「ああ、あの。こんな邪道は二度と使わぬ、って言つてらしたときですか」

三葉は第四次ティアマト会戦を思い出して答える。

「余計なことだから言わない方がいいかな、って思ったから黙っていたんですよ」

「どんなことを考えていたのか、知りたい」

「じゃあ言いますけど、あれって完全にミュツケンベルガー元帥さんからの仕返しですよ」

「仕返し?」

「ほら、第三次ティアマト会戦のとき、ホーランドさんの艦隊に猛攻されてミュツケンベルガー艦隊が大ダメージを受けてたじゃないですか。そのとき、いくら戦利にならなかつたとしても、ぜんぜん助ける様子も見せなかつたら、そりや怒りますし、次で仕返しされますよ」

「ふむ……ミュツケンベルガーから好かれていないのはわかっているが、なるほど仕返

しかア」

「ミュツケンベルガー元帥さんにしたら、ティアマトの借りはティアマトで返す、みたいな気分だったと思いますよ。だいたい帝国軍も同盟軍も、お互いに友軍と協力しなさいです」

「フ、それが見抜けるようになったか。あの会戦でのフロイラインミツハの働きには感謝している」

「私は、ただ相性が悪そうだったノルデン少将さんを近づけないようにしただけですよ。第三次のときと違って、忙しそうでしたから」

会戦の日に入れ替わっていた三葉は相性の悪い二人が揉めないように間に立って両方と会話し、直接二人が話すことのないよう立ち回っていた。それは糸守町でも相性の悪い氏子のおじさんたちが氏子総会や社務所月例会でケンカをしないように立ち回るとき身につけた技術で、お茶を淹れたり、コーヒーの糖分を多めにしたりと、細々とした配慮で衝突をさける戦術でもあった。それに、第三次ティアマト会戦でのラインハルトの勝利によりノルデンも批評より世辞が多くなったので、その世辞さえ耳に入れたくないラインハルトに代わって話を聴くことが三葉の役目になっていた。

「ああ、それが、とても助かった。あいつが何か言うとオレの思考が乱される」

「配属されてきた副参謀長のメックリングー准将さんとは相性がいいみたいですね」

「女性は人間関係を見抜く目が鋭いな」

「……」

思いつき顔に好き嫌い出てますよ、と三葉は言いそうになつたので黙つてキャバクラの看板を見上げた。

「ここに入つてみませんか？」

「ここにか……いや、こういう店は、ちよつと……」

「こういう店ばかりの地区じゃないですか。避けてたら面白いものないですよ」

「だ……だが、フロイラインミツハが不快な思いをするかも……」

「イヤだつたら、すぐ出ればいいじゃないですか」

二人の美青年が店前で話し合っていると、すぐに客引きが声をかけてくる。

「いらつしやいませ。本日サービスデイにて30分2000帝国マルクで1ドリンクつき、しかも5時まで是一对一以上の接待をお約束しております。さ！ さ！ どうぞ！」

「入つてみましょうよ」

「……では……少しだけ……」

好奇心を刺激されている三葉と、乗り気でないラインハルトを客引きはプロらしく柔軟さと強引さを兼ね備えた攻勢で店内に引き込んだ。

「二名様、入りませす！」

「いらつしやいませ」

「キャー、お兄さん、ステキ！」

まだ昼過ぎだったので他の客は少なく、余り気味だったキャバ嬢たちが二人の美青年を見て集中砲火を浴びせてくる。

「どうぞ、こつちに座つて。お兄さん、お名前は？」

「ジークフリード・キルヒアイスだよ」

「キルヒアイスさんですね。かっこいい名前！まるで戦場を駆け抜ける疾風みたい！

軍人さんでしょ？」

「え、わかるの？」

「姿勢でわかるよ。何を飲みますか？」

「じゃあ、黒ビールを」

「黒ビールですね。私も何か飲んでいい？」

「いいよ。どうぞ」

「じゃあ、キルヒアイスさんと同じにしよう」

「君の名は？」

「私はエリザベート。エリザでも、エリーサでも好きなように呼んで」

よくある源氏名で本名ではなかった。

「じゃあ、フロイラインエリーサって呼ぶね」

「きやはっ♪ フロイラインとか言われると恥ずかしい！」

「一回言ってみたかったんだ。フロイラインって」

「うんうん、上流階級って感じがするよね。あ、ビール来たよ。乾杯しよ、乾杯！」

「プロージット♪」

三葉は、どことなくユキちゃん先生に似ているキャバ嬢と盛り上がっているけれど、ラインハルトは不味そうに安ワインを黙って飲んでいいる。ラインハルトに付いたキャバ嬢が話しかけても必要最低限に、ああ、と答える程度で盛り上がっていない。それでも律儀に30分間は待ち、立ち上がった。

「キルヒアイス、そろそろ出よう」

「はい」

まだ居たかったけれど、明らかにラインハルトが不機嫌なので三葉も立ち上がった。キャバ嬢たちもラインハルトの顔色は見ていたので、ここでしつこくすると次の瞬間に怒鳴り出すという気配を見抜き、次回のご来店を期待して引き下がった。どのみち宇宙に浮かぶ閉鎖されたクロイツナハルに居るのなら、また夜にでもキルヒアイスだけが来店してくれるかもしれないという見込みもあるし、そういうパターンの客も多い。三葉

はユキちゃん先生に似ているキャバ嬢の頭を撫でた。

「ごめんね、フロイラインエリーサ」

「また来てください。キルヒアイス」

店を出ると、ラインハルトは四葉のようなタメ息をついた。

「はああ……うるさいところだった」

「ああいうの嫌いですか？」

「好かないな。むしろ、フロイラインミツハが楽しそうだったのが意外だ。あんな下品

……いや、ああいう雰囲気は平気なのか？」

「雰囲気っていうか、女の子たちが可愛いじゃないですか」

「……………あれも、可愛いうちに入るのか……………」

「今度は、あつちの店に入ってみませんか？」

三葉が別のキャバクラを指したのでラインハルトは止める。

「いいいや。もう、たくさんというか、もっと別のジャンルの店にしよう。ああ、そうだ

！ カジノがある！ カジノに行こう！」

二人で別のフロアに移動してカジノに入ると、やはりバニーガールもいたし、スロットゲームもポーカールもあつたけれど、賭け事に関しては二人とも経験がない。少し試してみても、すぐに負け、もともと吝嗇気味であるラインハルトは金銭の無駄遣いだと感じ

たし、田舎育ちの三葉も興味が持てずカジノに使うくらいなら、もう一度エリーサと乾杯したいと思った。

「出ようか、キルヒアイス」

「そうですね」

「ここは意見が一致してカジノを出た。

「次、どこで遊びますか？」

「ふむ……」

ラインハルトが悩む。たしかにクロイツナハムには休暇で遊びに来ているけれど、10歳で幼年学校に入ったきり、ずっと遊びとは無縁の生活だった。もともと壮大な目標があつて座学にも訓練にも励んできたので大人の遊び方など知らない。遊んだ記憶といえど、噴水に入ったり鬼ごっこや戦争ごっこ、という子供の遊び方しか覚えていない。水遊びは好きだったけれど、水商売の店は好きになれそうにない。大人向け娯楽施設で水商売を避けると、やれることは少ない。ラインハルトは案内板を見て考えるけれど、フライングボールの競技場は現在閉鎖中と表示されているし、射的などでは三葉が怒りそうだし、おそらく遊技場の射的では、本格的な射撃訓練をしているラインハルトたちにとつては退屈と予想される。

「あ」

声をあげてラインハルトが決めた。

「ここにしよう！」

「……………ですか……」

小学生じゃないんだから、と三葉はプールを指されて思ったけれど、さつきはキャバクラに付き合ってもらったので同意した。二人で男子更衣室でレンタルの水着に着替え、プールサイドに出ると、やっぱり大人向けの娯楽施設なのだと感じる雰囲気だった。子供がキャツキャツと水遊びするプールではなく、大人の男女がゆったりと休暇を過ごすプールだった。

「キルヒアイス、競争しよう」

「……………。場の空気を読んでください。ここで競争とかしたら冷たい目で見られますよ」

「そう言われると、みな泳いでいないな。いったい何をしているんだ？」

「基本、カツプルで来るか、ナンパでしょ。それか、日光浴、あとはお酒」

「プールの意味がないじゃないか……」

「いえ、プールがあるから水着になれるという口実があるわけですよ。ほら、ああいう水着の人もいるし」

三葉は相手に気づかれないようにプールサイドのカウチで寝転がっているドミニク・サン・ピエールを指した。ドミニクは赤い水着を着ていたけれど、かなりの露出をして

いて身体の大部分が見えている。

「あの女は、あんな姿で恥ずかしくないのか？」

「シツ、声が高いですよ。遮音力場があるわけじゃないんですよ」

三葉が心配したとおり、ラインハルトの声はドミニクに聞こえてしまい、寝転がっていたのに起き上がってフルーツカクテルを一口飲むと、こっちに歩いてくる。目のやり場に困るような水着姿でラインハルトは目をそらしたし、三葉はフォローするために前へ出る。

「す、すみません。田舎育ちなもので。あんまりキレイな人だから、びつくりして」

「そう。坊やたちも可愛いわね。どこから来たの？」

「オ…オーデインです」

「ずいぶん都会から来たのね。私の方が田舎者よ」

「お姉さんは、どこから来られたんですか？」

「フェザーン」

「ああ、あの」

はじめて帝国臣民以外の人間に会い、ちょっと嬉しい。

「フェザーンって、どんな感じですか？」

「抽象的な質問ね。でも一杯おごってくれるなら、話してあげてもいいわよ」

「ぜひ」

三葉とドミニクが会話を始めると、ラインハルトはすることがなくなり、とりあえずプールを一周泳いでから、また戻ってきた。まだ楽しそうに会話しているので、また一周してから戻つてくると、アドリアーナ・ルビンスカヤに声をかけられた。

「私の連れに、お友達を盗られたみたいね」

ルビンスカヤは黒い肌を銀色のビキニ水着で包み、スキンヘッドの黒い頭皮も銀髪のウィッグをかぶっていた。ドミニクと同じくスタイルは良いものの、ドミニクよりは露出が控え目で、けれど瞳は野心でもありそうな光りを放っていたのでラインハルトも少しは興味をもった。

「ご婦人もフェザンから、おこしですか？」

ラインハルトは女性に対する礼儀として丁寧に問うた。

「ええ。坊や、と呼ぶには失礼な年齢かしら？」

「ラインハルト・フォン・ローエングラムです」

「ローエングラム……あの二度のティヤマト会戦で活躍された？ たしか、以前は

ミューゼル……」

「フェザンのご婦人方にまで覚えていただいているとは思いませんでした。失礼ですが、あなたは？」

「ルパーナ・ケッセルリンクと申しますわ」

堂々と偽名を名乗った。お忍びで来ているので当然、自治領主ということは隠しているし、スキンヘッドで多くの人々に記憶されているだけに、銀髪のウィッグをかぶっていると、誰も気づかずにいてくれる。

「あの二度の会戦、本当に見事なご活躍でしたわね」

「いえ、それほどでも」

「そして、ウワサに違わぬ、この金髪もお美しいこと」

「そんなことまでウワサの種になっていきますか」

「私は外側より、その内部にある実力に興味を覚えるけれど」

ルピンスカヤが見通すように見つめてくる。せつかくの偶然の機会に最大限情報をえようとしてくる視線だったけれど、ラインハルトの方もフェザン人という存在に興味を覚えるし、政治や軍事の話は退屈しない。二人も話し込み、三葉とドミニクの方も盛り上がっているのです。ルピンスカヤが滞在しているホテルに呼ばれ、最高級ワインを飲みながら、また話し込んだ。ラインハルトとルピンスカヤは政軍について話していたけれど、ドミニクと三葉は完全に逆ナンになっている。

「坊や、女の人と、お付き合いましたことあるかしら？」

「いえ。……」

キルヒアイスの瞳は赤いドレスに着替えたドミニクの胸を見ている。さきほどまでの水着より面積が広いので露出は控え目だけれど、胸元や腋は露出されて大きく開いているのでブラジャーを着けていないことは明らかで、下半身もスカートというよりチャイナドレスのように前後の布に分かれて左右は大きく露出している。腰よりも高い位置から左右の肌を露出しているのでショーツも着けていないのがわかる。きわどいところが見えそうで見えない色気があつて身体が熱くなってくる。

「……」

キルヒアイスの目がドミニクの肢体に見惚れている。

「フフト、可愛い坊や」

ドミニクは露骨な視線を浴びて楽しそうに微笑んだ。まるで少年が覚えたばかりの性欲に翻弄されているような視線で、大人の男性が隠すことを学習する前の、野蠻で野性的で物欲しそうな目で年下の美男子から見られると、ドミニクも身体が熱くなってくる。今夜どうやってキルヒアイスの身体で楽しもうか、せっかくの休暇を最大限に楽しもうと、挑発的なポーズをとってみると、やっぱり見つめられる。

「……」

「フフン♪」

ドミニクが脚を組むと、スカートの奥を見られるし、腕を上げて髪をまとめるフリを

すると胸と腋を見られる。そろそろ女優、歌手、ダンサーとしては第一線で活躍するには苦しい年齢になってきてきているだけに若い美男子からの視線は、とても嬉しくて、もう会話はどうでもよくなり、魅せるドミニクが見ている三葉の前で色々なポーズをとっている。だんだんダンサーとしての血も騒いできて、ほぼ踊りのように動いていた。

「……………ゴクツ…」

三葉が無意識に生唾を飲み、ドミニクは踊る。四つん這いになって、お尻を突き上げ、腰をひねって頭を低くし、露骨なまでに股間を強調する。布の面積が小さいドレスの裾がドミニクのお尻に食い込み、踊るたびにヒラヒラと怪しく危うく揺れた。ルビンスカヤの方も、ドミニクの方向性に賛同してラインハルトを口説こうと思ったけれど、こちらは容易に落ちない。軍略の話には乗ってくるけれど、ルビンスカヤの身体には一切の興味がないうで、銀色のドレスから見える内腿や胸元、腋、背中、お尻から目をそらせて話している。あまり見せつけると退室しそうな雰囲気さえ感じる。

「まるでイゼルローンの防壁ね」

「は？」

ラインハルトが問い、ルビンスカヤは問いを返す。

「もし閣下が同盟側で、あそこを落とすなら、どう落とすかしら？」

「さて、それは思いついても話せないな」

アイスブルーの瞳が野心的に光ると、ルビンスカヤは金髪の頭を抱きしめなくなった。けれど、正攻法で落ちないのはイゼルローン並みのもので策略をろうすることにした。

「これは479年ものの白よ」

そう言つてラインハルトのグラスにサイオキシンの入りのワインを注いだ。この手の酒席に慣れているルビンスカヤとドミニクに比べて、まったく初陣に近いラインハルトと三葉は指先で微量ずつ入れられているサイオキシンの気づきもせず酩酊していく。それでもラインハルトは引き際を感じていた。

「酔い過ぎてしまったようだ。そろそろ失礼しよう」

「もう一つだけ昔話を聴いてほしいわ」

もう、だいたいの話話は尽きてきたのでルビンスカヤは野心と恋について語る。

「もしも閣下が、野心と恋、いずれかを選ぶとしたら、どちらにする？」

「……………野心だ」

「なぜ？」

「恋は誰にでもできるだろう。だが、野心は……………その才幹のある……」

アルコールとサイオキシンの作用で、もうラインハルトのろれつは怪しい。

「……者にのみ……達成可能……な……」

「そうね。昔、閣下と同じことを考えた男がいた」

「……」

「その日の暮らしにも困るような、ごく貧しい家の娘。けれど、とても可愛い。夕食を持つていてあげると、とても喜んで食べるような可愛い娘」

「……貧しい……か……」

もうラインハルトは半分話を聞いていない。貧しかった家族3人での暮らしが脳裏を回っている。

「そんな貧しいけれど、それでも愛していた娘と結婚するか、銀河の富の数%を占める富豪の娘との縁談を選ぶか。とても悩んだし、悩みすぎてハゲてしまったけれど、結局は野心をとった」

「……」

ラインハルトの家庭も似て非なる決断を迫られた。貧しい家庭に数%どころか、人類社会の6割を牛耳る体制の頂点からの誘いだった。もしもあのとき、アンネローゼに年上の恋人でもいて、いっしょに同盟へ逃げていたら、どんな未来が待っていたのか、そんな想像をするけれど、酔いと薬物の効果で思考はまとまらない。ルピンスカヤは目を細めて語る。

「おかげで、その男は恋以外のすべてを手に入れ、人生を大いに楽しむ、芳醇な酒、舌を

溶かす料理、心の琴線を震わせる名曲、たおやかな美女、いずれも手に入れた。そして政略と軍略のゲームを楽しむ地位さえ」

もうラインハルトの意識は朦朧としていたので、ルビンスカヤは銀髪のウィッグをとって禿頭になった。

「けれど、ダース単位で愛人をつくっても、子供をつくったのは、その娘とだけ。そういうバカな男の昔話」

「もう聞いてないわよ。どっちの坊やも」

まだ三葉は目を開けているけれど、もうドミニクの身体しか見ていない。ドミニクは三葉が意識を失わないようアルコールとサイオキシンの量を調節していた。完全に意識を無くしたラインハルトの身体をルビンスカヤは女性とは思えない膂力で横抱きにして持ち上げるとベッドへ運んでいく。

「私の最初の相手にふさわしいわ」

「まったく、あきれれるわ。たしかに、あなたは男としての楽しみを、ほぼすべて手に入れた。だからといって、女の楽しみまで手を出す必要があったのかしら？」

ドミニクは先月までアドリアン・ルビンスキーという男性だった元愛人に問うたけれど、彼らしく、そして彼女らしく微笑まれる。

「そうあしざまに言うものではないわ。人の運命など、ちよつとした気まぐれで大いに

良い方にも悪い方にも変わってしまう。むしろ、個人の才幹など、それを生かす場も与えられず死んでいった者の方が多い。さきの会戦でも何もできずに無駄死にした天才が100人はいたろうさ。才幹はあったが、運が無かったという者がな」

「運命と気まぐれねえ……。前に話してくれたわね、まだ人類が地球だけにいた頃に出現したルドルフのような独裁者の話。ヒムラーだったかしら？」

「ヒトラーだ」

「そう、それ。その彼は美大志望で、それに落ちてから独裁者の道へ進んだ。もしも、美大に合格していたら、世界の運命は大きく変わっていたかもしれない。あなたの息子が医大に合格したことも、ちょっととした歴史的イベントなのかもしれないわね。しかも、病気を治す研究じゃなく性転換なんて技術に進んだ。そして、あきれることに第一号を志願したのが父親なんてね」

「ルパートが言ったのだ。私の男であるところが憎い、と」

「だから、切り落とさせてあげたのね。麻酔なしで輸血だけして苦しむ姿を見て、ずいぶんバカ笑いだしたそうね。でも、やっぱり親子、裏切つて殺したりはしなかった。ちゃんと女にしてくれたわね」

「オレにとつて、いや、私にとつて、女になったのは幸いな気まぐれだったわ。でなければ手術後に精密検査など受けなかった。あの精密検査で脳腫瘍が見つかり、運良く助

かった。医者嫌いの私のこと、男のままだったら数年後に脳腫瘍で死んでいたから」
「お金儲けにもつながったしね」

中年男性だった自治領主が見違えるような美女になったことは、すでに一部の業界では有名で銀河中から同じような手術を望む問い合わせが、すでに一万を超え、超高額にもかかわらず予約は100件を超えている。これはこれでフェザーンの新たな経済的優位点になりつつあった。イエス・ルパート・クリニックは結果にコミットする、という謳い文句で自治領主の顔写真をピフォアアフターで流している。どう見ても別人というほどの美女になっていくけれど、自治領主という立場に変更がないのでコンピューター合成写真でもない真実だと思われるし、医科大学院を出たばかりの実力派名医も笑顔でCMに出ている。地球教の司教たちも、いい顔はしなかったけれど、性転換がダメという教義もなかったので不問にしていた。

「はああ…」

タメ息をついたドミニクは聞こえないように囁く。

「あなたのような人が、わざわざ貧しい家庭の女とそれでも子供をつくったほど恋していたと想うと、この坊やたちより可愛いわね。富豪の娘がブスだろうと美女だろうと、天秤にかけて、いまだに心残りでそれを他人に語って自分の選択の正しさを反芻せずにはいられないのだから」

そう言いつつ、ドミニクは若き日のルピンスキー青年を想像した。仕事帰りに貧しい恋人へ夕食を届けて、いっしょに喜ぶ笑顔。そして富豪の娘からの縁談が来て思い悩む顔。自らの地位が確固たるものになってから、ダース単位の愛人をつくって満たされぬ想いを満たそうとした背中。そもそも愛人にしても、せいぜい同性の親友と同じくらいの数しか人間は深く付き合えないのでダース単位でつくってしまうと、強精帝オトフリート4世が1万人以上の美女を後宮に集め日夜励むも5年後に死亡したとき、いまだ5000人が処女だったように、10ダース20ダースと愛人がいると豪語しても一夜二夜しか相手をできずに放置している女も多くいたりする。なんのかんで面影がルパートに似ているドミニクが指名を受けやすいのは、結局は忘れられないからだと察した。

「初恋か……」

ドミニクも自身の初恋を思い出した。まだ16歳だった頃、フライングボールが巧かった先輩にときめいたことがある。けれど、歌手志望だったので恋人はつくらずに出世を選んだ。もしも、あの男子と結ばれていたら平凡な家庭の主婦だったか、それとも戦死されて未亡人になっていたか、どちらにしてもありきたりの人生だった気がする。

「本当に人間の運命なんて、わからないものね」

「運命は自ら切り開くものだ」

つぶやきが聞こえたルビンスカヤがラインハルトの服に手をかけながら言う。

「よし、決めた。オレは、いや、私はダース単位の美男子を集める。さらに私自身は歌とダンスを極めて銀河に名をはせる。銀河一に」

「ダース単位が好きね。あと、歌もダンスも極めて銀河一なんて無理よ。知識も経験もないから安易に考えてるみたいだけど、歌って踊れるなんてのは、どっちも中途半端になる。そうね、軍事と経済、その両方で銀河一になるのが難しいように。だから、どちらか選んだ方がいいわ」

「ふむ……経験者に言われると、……そんなに難しいことか？」

「激しくダンスすると、息が切れて歌えないし、歌うのに集中すると姿勢が限られるから、ろくにダンスできないの」

「なるほど」

「あと、あなたも女性ホルモンの影響が出て来るから、筋力もだんだん落ちるわよ。思っているほど踊れなくなる」

「そうか、奥深いな」

ルビンスカヤが禿頭を撫でて考えていると、ドミニクの身体へ三葉が理性を失って抱きついてきた。

「あああ……」

もうアルコールと薬物、そして性欲によつて理性が駆逐されている。ドミニクは嬉しそうに高級ハンドバックから注射器を出した。

「フフ♪ 最高にハイで忘れられない夜にしてあげる」

やはりサイオキシンも麻薬なので口から飲食物に混ぜて摂取させるより血管に直接流し込む方がはるかに効く。サイオキシン入りの注射器の針がキルヒアイスの肌へ刺し込まれつつあるのと、ルピンスカヤの舌先がラインハルトの肌へ接触しつつあるのは、ほぼ同時だったし、そして夜12時だった。

キルヒアイスの瞳がアルコールとサイオキシンと色香に酔っていた色合いから、熱い告白をされた余韻に浸っている乙女の色合いになって、そして今しも注射器で怪しげな薬物を投与されかかっている帝国軍大佐の危機感に満ちた目になった。

「やめなさいー!」

明らかに看護婦でもない妖艶なドレスを着たドミニクを平手打ちして倒すと、状況を確認するために周囲を見回すのと同時にブラスタを抜いた。

「くっ…!」

目まいがする。アルコールだけでない神経異常を感じた。

「何するのよ?! つ……………」

顔を叩かれたドミニクが激怒しているけれど、ブラスターの発射口を向けられて黙った。さつきまでの色香に感づてくれていた様子とはまったく違い、下手に動くと思われると感じている。

「この注射器は何だ?!」

「……さあ?」

ピシユン!

威嚇だったけれど、ドミニクは顔の横を撃たれて、次の返答は慎重にしないと殺されないまでも、女性であっても膝や腿を撃たれるかもしれないと感じた。そのくらいキルヒアイスの語気は強く、視線は鋭い。

「ラインハルト様は?!」

「……………」

ドミニクは視線をベッドに向けた。

「ラインハルト様!」

「急に威勢が良くなったな、坊主」

坊主頭の美女がラインハルトを人質に取るようにしている。ラインハルトは意識がなく、ぐったりとしていたし、ルピンスカヤはスカートの中から小型ブラスターを抜いている。一物が無くなったスペースに護身用の一物を装備することになっているよう

だった。

「ラインハルト様に何をした?!」

「……………うむ、貴様、夢遊病者か何かか。それともサイオキシングが、おかしな回り方をしたか…」

ラインハルトを人質に取りながら、ルビンスカヤは銀髪のウィッグをかぶる。

「さて、どうする?」

「くっ…」

ブラスターで狙いをつけているものの、目まいがする。グラグラと頭が揺れて今にも意識を失うかもしれない。キルヒアイスはドミニクを人質に取った。状況は不明だったけれど、二人の女は仲間のように見えたし、その判断は悪くなかった。

「なるほど、では人質交換。そして解散といこうか」

「……………わかった。ラインハルト様を無事に返すなら、それでいい」

「ドミニクと出口まで向かえ」

「ラインハルト様は?」

「部屋の奥に置く」

そう言つてルビンスカヤはラインハルトを室内に残し、自分たちの重要な荷物だけを手にすると、ブラスターの発射口を天井に向けた状態でキルヒアイズと距離をとりつつ

室内を時計回りに移動し、キルヒアイスにも同じように動くよう顎で指示した。

「……………」

「……………」

お互いに一触即発を避けつつ、室内を迂回して距離をあげ、ルビンスカヤはドミニクのいる出口へ、キルヒアイスは部屋の奥へと動き、ラインハルトのもとへ辿り着いた。

「ラインハルト様、ラインハルト様！」

呼びかけても意識はないけれど、呼吸はしてくれているし、顔色も悪くないので少し安心した。そしてルビンスカヤたちに問う。

「お前達は何者だ?! さっきの注射はサイオキシンのか?!」

けれど、すでに二人の姿は出口から消えていて、もう誰もいない。追いかけたいけれど、目まいがして歩くのも苦勞する。なんとか、電話機まで辿り着くと警察署に連絡してホフマンを呼び出してもらった。

「ラインハルト様、ラインハルト様」

ホフマンが来てくれるまで呼びかけていると少しは反応してくれた。

「うう…姉上…」

「ラインハルト様……………よかった……………無事で…」

けれど、今度は自分の意識が朦朧としてくる。結局、意識を失ってしまい、駆けつけ

てくれたホフマンに事情を説明することができたのは、かなり時間が経ってからとなり、その頃にはルビンスカヤたちはクロイツナハIIIから消えていた。ラインハルトとキルヒアイスが不本意にサイオキシンを摂取させられたことは不名誉なことだったけれど、一昨日の警察への協力とホフマンの機転もあり、記録には残らないまま解毒剤をもらえたものの、もうクロイツナハIIIには滞在したくなかったので、すぐにオーディンへ帰還した。

三葉は見惚れていたドミニクの顔が、急に四葉の顔へと入れ替わったので、驚く。

「うわっ?!」

「人の顔を見て、うわっ、とか言わないの」

「あーあっ……びっくりしたあ……そっか、戻ったんだ、女の私に……」

さきほどまで魅力的な異性の顔を見ている男の身体にいたのに、見ていた顔が急性の肉親に変わってしまった感覚は違和感がありすぎて困惑する。まるで牛乳だと思つて飲んだのにコーラだったような吐き出しそうな違和感だった。そして、アルコールとサイオキシンの効果からは解放されていた。

「酔いも一発で醒めちゃったよ。飲み過ぎだったかなあ……二日酔いついていう状態にキルヒアイスがならないといいけど」

「お姉ちゃん、むこうで何してたの？」

「今日はね、はじめて遊びらしいことできたよ。娯楽施設に行つてね。女の子とお酒を飲んだりプールで逆ナンされたりしたよ」

「……うくん……なんか、それ、お姉様のイメージと違うなあ……お互い、いろいろすれ違つてないかなあ……」

「お風呂、まだお湯ある？」

「あるよ」

「じゃあ、入ろ」

三葉は入浴するための脱衣所へ行つて悲鳴に近い絶叫をあげた。

「なんで、このワンピースが出てるの?!」

「お婆ちゃんは寝てるから静かにね」

四葉も二度目の入浴が習慣になつてきたのでパジャマを脱いで裸になる。小学生らしい幼さと女らしさを兼ね備えた裸体になり、姉を落ち着かせるために腰を叩く。

「どうして、このワンピースが出てるのよ?!」

「はいはい、大きな声を出さない」

「まさか、この乙女ワンピースで出かけたの?!」

それでも三葉は小声で絶叫した。

「デートとか言ってから、まあ普通のチョイスだと思っただけ」

「デートじゃないよ、ただのお出かけだよ。うう……このワンピースで外を歩くなんて……」

「それ、お姉ちゃんが中学の頃に買ったやつじゃん。自分で買ったのにダメだし？」

「あれは気の迷いだっただの！ 思春期の黒歴史だよ！ こんな女の子っぽい着てみないな、って思わず買ったけど着てみたら、いかにも過ぎて恥ずかしくて部屋から出られなかったし、四葉にしか見せてないの」

「お姉様とお姉ちゃんの差恥心は、いろいろと水準が違うんだね」

「あいつ、ホントに男なのかな?! よくこんな女の子の子したワンピースでテッシーと出かけられるよ」

そう言っただけで湯船に入っていると、だんだん克彦と、どんな日曜日を過ごしたのか心配になってくる。さっと洗髪して、すぐに揚がると手紙を読んだ。

宮水三葉さんへ

前略、本日は大切な報告があります。ご予約通りにテッシーとデートいたしました。

とても親切にエスコートしてください、楽しい一日を過ごすことができました。あれほど、すぐれた男性はそうそういないと感じております。優しくて頼りになつて遅くで、そして彼は三葉さんのことを好きでいてくださいます。

これは憶測などではなく、確かなことです。

はつきりと彼は私に、いえ、三葉さんに向かって、好きだと言ってくださいました。とても熱意のある告白で私が代わりに聞いてしまったことは本当に申し訳ないのですが、それだけに三葉さんにも伝えておきたいのです。あんなに感動的な告白をできる男性は、この宇宙にそうはいないでしょう。女の身になって受けても、男として見ても、とても尊敬に値する人であると感じております。

もちろん、告白に対する答えは保留しております。

明日、お答えいたします、と伝えて、お待たせすることも陳謝いたします。

あとは三葉さんのお気持ち次第です。

ただ、差し出がましいようですが、テツシーは素敵な方だと思えますし、三葉さんのお相手として望ましいと感じます。また、青春の時間というのは、とても短いものです。とくに来年には大学受験を控えておられるのですから、お二人が楽しい時間を過ごさせるのも今年の秋くらいまでかもしれません。そのことも含めて、テツシーの熱意に答えてあげてください。どうか、良い青春の思い出をたくさんつくってください。

もう一つ、ご報告せねばならないことがあります。

サヤチンのことです。これは憶測なのですが、おそらくは外れていないと思います。サヤチンはテツシーのことを好きでいらつしやると感じるのです。

それなのに、私はデートが終わった後にサヤチンからお電話をいただき、そのとき告

白された嬉しきで軽率にもテツシーとのことを祝福してください、とお願ひしてしまつたのです。

このために、彼女は大変に憤慨されてしまい、お詫びのしようもありませんでした。まことに勝手に申し訳ないのですが、サヤチンのことは、どう対応してよいかかわからず、善処いただければ幸いです。草々

手紙を読み終えた三葉の手が震えている。

「善処つて……あいつ、また私の生活をメチャクチャに……よりによつてサヤチンに、テツシーから告白されたなんて自慢したら……なんてことを……普通、サヤチンの気持ちくらい見たら、わかるじゃん……」

「サヤチンさんの気持ちに気づいてなかつたんだ。お姉様……そのへんは男っぽいな。あんなわかりやすいアピールに気づかないとか」

横で四葉も手紙を読んでいた。

「うう……サヤチンに、なんて言つて謝ろう?」

「それもあるけど、告白の方はどうするの?」

「……そんなこと言われても……私が告白されたわけじゃないし……」

「ぶつちやけ、好きなの? 嫌いなの? 男子として」

「……………」

「……」

あ、ちよつと赤くなった、でも真つ赤になるほどじゃないんだ、と四葉は姉の気持ちに計つたけれど、三葉は友情の破綻を心配している。

「ありえないよお……私たちは三人で、いい関係だったのに……」

「そろそろ寝ないと遅刻するよ」

そう言つて四葉は退室し、三葉も悩みながら布団に入つて朝を迎えた。あまり眠れずに布団を出て、休みたいけれど休むわけにはいかない、と登校する。いつもより早く出たり、遅く出たりして早耶香と克彦を避けようかとも考えたけれど、それをすると逆にあとあと話しくくなるかと四葉に言われて普段通りのタイミングで通学路に出た。

「……」

「……」

「……」

通学路には同じことを考えた早耶香もいたし、克彦もいた。克彦は当然として、早耶香もタイミングをずらすのは負けを認めた気もするし、もう負けているけれど最後の意地で長年の習慣通りに登校している。早耶香と重苦しい雰囲気歩いてきた克彦が挨拶してくる。

「よ、よお、三葉」

「……うん……おはよう。……サヤチン、おはよう」

「……。おはよう」

返事はしてくれただけれど、目は合わせてくれない。顔も見たくないという気配が漂っている。

「……サヤチン、あのね……」

「……」

黙って早耶香が歩調を早めた。遅れないように三葉も歩調をあげ、克彦もついていく。

「……」

「……」

「……そ、そうだ！ マス寿司、美味かったぞ！ ありがとうな。こっちも、お土産にクッキー買ってきたんだ。な、三葉」

「う……うん……」

「……」

無言で早耶香が、さらに歩調を早めた。話したくない、ついてこないでという背中を追いかけているうち学校に着いてしまった。早耶香と落ち着いて話すタイミングをもたずに授業を受け、昼休みになった。

「……………」

いつも通りなら三人で校庭で食べるけれど、どちらから誘うわけでもなく移動したので、どうしようか迷っていると克彦が声をかけてくる。

「三葉、昼飯、行こうか」

「……。サ、サヤチン、お昼ご飯、食べに行こうよ」

勇気を出して声をかけると、早耶香は弁当箱を出して考える。

「……………」いい。今日は教室で食べるから」

「そ……………」

「オレは先に行ってるぞ」

克彦が行ってしまうと、三葉は二択を迫られた。校庭に行くか、このまま教室にいるか、場所の二択は、そのまま人との関係に反映されることが痛いほどわかる。三葉は恐る恐る弁当箱を持って、早耶香の机に移動した。

「い……………」いっしょに……………」食べていい？」

「……………」

いいともダメとも言わなかったけれど、早耶香は机上に少しだけスペースを空けてくれた。

「あ……………」ありがとう……………」

「……………」

「……………。あの…ね…………昨日は、私、どうかしてたと思うの…………ごめんなさい…………」

「……………早く食べたなら？」

「う……………うん…………」

二人で昼食を食べるけれど、あまり味は感じない。ちらりと校庭を見ると克彦が一人で食べながら月刊ムーを読んでいる。月刊なので一ヶ月間、ずっと同じ雑誌を読んでいることが多い。

「……………」

「気になるなら、行ってきたら？」

「ううん、そういうわけじゃ……………ないから…………」

「……………」

「ホントごめん！ ごめんなさい！」

三葉は両手を合わせて頭を下げた。早耶香が箸を止めて、三葉を見る。

「……………それで、私は謝ってもらったし許さないといけないわけ？」

「そ……………そんな……………つもりじゃなくて……………ただ、謝りたくて……………」

「……………」

早耶香は食べ終わると、スマフォをいじり始める。三葉も食べ終わったので黙っている

のも居心地が悪いのでスマホをいじる。昨日のパンケーキの写真が出てきたので、あわてて閉じたのに、見られていた。

「二人で行ったカフェ、楽しかった？」

「う……ううん！ ぜんぜん！ つまんなくて何も覚えてないよ！」

「……………」

早耶香が立ち上がった。

「ど、どこ行くの？」

「トイレ」

「そ……そう……じゃあ、私も……」

前の休み時間に済ませていたけれど、ついに行く。女子トイレで別々の個室に入ると、三葉は用がないので、そのまま便座に座った。かさかさとして早耶香が入った個室から音が聴こえてきたので月経中だと気づいた。三葉ほど早耶香は重くないけれど、やっぱり機嫌は悪くなりやすい。しばらくして早耶香が個室を出たので三葉も出る。

「……………」

「……………」

「……………」と、富山、どうだった？」

「別に、普通」

「そっか。まあ、そうだよね」

予鈴が鳴った。

「……………」

「……………」

教室に戻ると、克彦も戻ってくる。三葉が目を合わさないようにしていると、克彦は黙って自席に座った。授業が始まって、頭に入らない。先週にキルヒアイスが受けてくれた実力テストが返ってきて、先生に誉められても嬉しくない。そして、重い気分のまま放課後になり、早耶香が教室を出て行くので、あとを追った。

「い、いっしよに帰ろうよ」

「……………」

早耶香は歩調を早めなかった。後ろから克彦がついてくる気配がする。三人で校門を出ると、いつも通りの道を黙って歩く。

「……………」

「……………」

「……………」

二つめの交差点まで沈黙のまま進み、克彦が口を開いた。

「オレ、三葉と少し話したい。神社前の公園に行かないか」

「え……」

「じゃあ、私は帰る」

そう言つて早耶香が離れていこうとしたのを、とつさに三葉の手は早耶香の袖をつかんで止めた。

「ヤダよ！ 私はサヤチンと友達でいたいよ！」

「……………」

「私は三人がいいの!!」

叫ぶと涙が溢れた。

「三人でいたい！ 二人とも好きだもん!! バラバラなんてイヤだよ!!」

「……………」

「お願い！ このままの三人でいよう！」

「…三葉ちゃん……」

「三葉……………」

「サヤチンとテツシーと私の三人でいたいのに！ お願いだよ！」

ぼろぼろと三葉が涙を零すので、早耶香がハンカチを出してくれた。

「ほら、そんなに泣かないで」

そう言う早耶香も泣きかけている。克彦がタメ息をついた。

「泣く子と地頭には勝てない、つてか」

これ以上、三葉を困らせたくなかつたので克彦は戦術的撤退を決め、今しばらく三竦みは続くことになった。

運命の変化

キルヒアイスは三葉の部屋で目を覚まして、手紙を読んで顔を曇らせた。

「……………」のままの三人で……………」

期待していた朗報と違う手紙だった。

キルヒアイスさんへ

私は今までの三人でいたい。

サヤチンは大事な友達だし、テツシーとも友達でいたいんです。

今までの三人で、このままの三人で平和に、ずっと過ごしていきたい。

だから、必要以上にテツシーに近づかないで。

二人きりで出かけるのは無しで、二人きりになるのもさけて。

私の友情を壊さないでください。

三葉の人生なので三葉の気持ちが一番だとはわかるけれど、あの克彦の告白を思い出

すと残念でならない。

「……………」平和に、ずっと過ごして……………」そんな時間は、もう……………」あなたたちには……………」

できれば三葉と克彦には、ほんの数ヶ月でも幸せな日々を過ごして欲しかったのに、

早耶香に遠慮しているのか、決断を先延ばしにしたのか、もどかしい答えが書いてあった。

「……………テツシーのあの告白を三葉さんにも聴いていただきたくらいですのに……………あんなに熱い想いを……………」

切なくて両手を胸の前で祈るように握った。三葉の胸の膨らみに手が触れているけれど、それさえ意識しないほど残念に思っている。それでも、いつも通りに身支度をして通学路に出た。

「おはようございます、テツシー、サヤチン」

「あ、ああ！ おはよう。三葉！」

「……………おはよー…三葉ちゃん……………また、そのモード……………」

克彦は何か期待した目で見てくるけれど、早耶香は冷めた目で見てくる。もう、そのお嬢様モードはやめてほしいんだけどな、という視線だったけれど、早耶香に会釈してから、克彦を見つめる。

「……………」

「……………」

二人とも、夕日に照らされたお互いの顔を想い出してしまった。

「……………」

必要以上に近づくな、と呪縛されてしまい、まるで後宮にいるアンネローゼと自分のようだときえ感じると、余計にもどかしい。けれど、このままの三人でいたいという気持ちにも少し共感できる、あのままの三人でいられたら、と10歳の頃を想い出しもある。ただ、似ているようで姉弟という家族愛がある三角関係とは、まったく違う部分もあるのだと考えれば、いつかは選択のときがくるかもしれないし、この三人には永遠に來ないのかもしれない。克彦を見つめる三葉の目尻に涙が浮かんだ。

「……テツシー……」

「……三葉……」

克彦が何か言う前に、早耶香が大きく手を振りかぶった。

「サヤチン・ハンマー……」

ハンマーと言ったのにチョップを頭頂部に受けてしまった。

三葉はオーディン市街地に文句を言いながら買い物へ出ていた。朝から夕方まで座学と訓練とサイオキシンの危険性について、みっちり学ばされて、かなり疲れている。「好きなワインを買っていいとか言つてさ。エサがあれば頑張つて勉強すると思う、その魂胆がイヤだなあ……そりゃ、サイオキシンの盛られた私も悪かったけどさ。休暇中くらいに宮廷闘争から離れてるかなって思うじゃん。相手もフェザーン人だったし。ホン

ト油断ならない世界だなあ……」

つぶやきながら目的の店に着いた。

「この店かあ……」

教えられたワインの専門店に一人で入った。店内には中級貴族の夫婦や、上級貴族の使い走りで来ているメイドや執事がいる。三葉は商品棚を見て回った。

「どれにしようかなあ……つて、知識もないし。高ければいいってもものじゃないかな。ラベルのイメージで決めちゃおう」

なんとなく手を伸ばしたワイン瓶を取ろうとして、同じく手を伸ばした隣りにいた客と手が触れ合った。

「あ……」

二人とも手を引つ込めたけれど、三葉は相手が女性だったので今現在は男として譲る。

「どうぞ、フロイライン」

「ありがとう」

ヒルデガルド・フォン・マリーンドルフは快活に礼を言つてワイン瓶を取った。

「……………」

何か社交辞令でも言うべき場面だったけれど、三葉は不慣れだったし、ヒルダはキル

ヒアイスの襟元に大佐の階級章がついていることに興味をもっている。上級貴族という雰囲気もないのに、この若さで大佐というのは異例の出世といえる。どういふ武勲があるのか、訊きたいという好奇心にかられたけれど、さすがに初対面なので遠慮した。「では、失礼します。大佐」

ヒルダはキルヒアイスの瞳が自分の胸や腰を見てくる男性らしい視線も感じていたけれど、だいたいの男性は自然の摂理なのか、男の生理現象なのか、似たような反応をするので、もう慣れているし、それほど不快でもない。会釈して背中を向けた。

「お父様の好きな銘柄があつてよかつたわ」

あまりワインなどには詳しくないけれど、それでも父親の嗜好くらいは把握しているので会計を済ませ帰宅する。居間に入ると、フランツ・フォン・マリーンドルフは浮かない顔で何かを悩んでいた。

「どうされました？ 浮かない顔をして」

「ああ。少し親類のことが気にかかつてな」

「ハインリッヒのことですか？」

「いや、マクシミリアンのことだ」

穏健な良識派で知られるフランツだったけれど、なぜか気がかりな親戚には恵まれて
いる。

「マックが、どうかしたのですか？」

「ああ、財務省の調査官を追い払ってしまつてな」

「彼なら、やりかねませんね」

親戚なので子供の頃に遊んだこともある。あまり、いい性格でないことも知っているし、男勝りのヒルダとは外で遊んで衣服を汚し、いっしょに入浴したこともあるけれど、なぜか、まだ9歳だったヒルダの下半身をジロジロと見てきたことを印象深く覚えていゝる。そして、ヒルダが15歳を過ぎると、もうパーティーで出会つても興味なさそうにしていたので、かなり残念な性的指向をもっているのだと、薄々察してもいた。貴族間の噂話でも、若い少女を囲っていると流れているし、貴族内の一部では同好の士が集つて、いかがわしいグループをつくつていゝるとも聴く。フランスはタメ息をついた。

「はああ…やれやれ、近いうちに説得に出向かなければならないかもしれないな。隣の星系でもあることだし」

「そういうことなら、私もついていきましようか」

「ヒルダが？」

「マックとは歳も近いですし、何より、こういったことを経験しておきたいのです」

「うむ、お前は、そういうことにばかり興味を持つなあ……まあいい、では、連れて行こう」

フランチは激しく後悔することになる選択をした。

キルヒアイスが自分自身に戻るとラインハルトとワインを呑んでいる状況だった。場所はオーデインの下宿先、ラインハルトと二人きりなので安心できる。まずラインハルトが本日の三葉が行ったキルヒアイスとしての行動を教えてくれた。予定通りの学習と訓練をしてきていた。

「彼女は総じて、それなりに真面目にやってくれている。オレから、とくに報告すべきことは無いな。そっちは、どうだ？」

「はい、こちらも平穏な学生生活が続いております。……」

「そう言うが、なにかはあるな？」

「あるといえば、ありますが……我々には不得手な分野の問題です」

「オレたちに不得手？」

「はい」

「そう言われると、ますます気になる。言ってみろ」

矜持が刺激されたラインハルトがワインをキルヒアイスのグラスへ注ぎながら促すので、三葉と克彦、そして早耶香の三角関係をキルヒアイスが説明した。聴いたラインハルトは不得手という表現に納得している。

「なるほど……確かにオレたちには不得手だ。ロイエンタールあたりなら、巧く解決するかもしれないが……いや、余計に……」

「三葉さんは、そつとしておいてほしい、関係を変えないでほしいと願っておられますから」

「ならば、そうしてやるがいい。まだ若いのだ。これから成長する時間は………そうか、彼女らに時間は無いのか………気の毒に」

ラインハルトの瞳も、そのアイスブルーの輝きが曇る。解決してやりたいけれど、それはできない、という想いが胸の中にわだかまる。

「キルヒアイス、そのテッシーとフロイラインサヤチンも隕石落下で死ぬ運命なのか？」

「はい」

「そうか………」

「せめて、あと少しの命なら、わずかな時間でも幸せな時間があってほしいのです。………そう考えるのは傲慢でしょうか？」

「どうだろうな………傲慢か、そうなのかもしれない。人の運命を知っているのは、いわば神の視点だ。あと少しで、お前は死ぬのだから、せいぜい楽しめ、というのは傲慢以外のなものでもない」

「……………」

キルヒアイスが悲しげに視線を落とした。どことなく女性っぽい雰囲気があったのでラインハルトは話題を変えするために意図的に言う。

「フ、だんだん女らしくなってきたな。もしも、お前が女に生まれていたら、オレとお前の運命も大きく変わっていただろうな」

「そうですね、少なくとも私は軍人にはなっていないでしょう」

「そうなるな。クスッ、案外、オレはお前に嫌われていたかもしれない」

ラインハルトが途中で失笑したのでキルヒアイスは不思議に思つて問う。

「なぜ、私がラインハルト様を嫌うのですか？」

「女子であつたなら名はジークフリードではないにしても、何か俗っぽい名であつたとき、オレはその感想をそのまま初対面で伝えてしまい、大いに嫌われたかもな」

「クスッ、たしかに。アンネローゼ様とは仲良くしたかもしれませんが、その弟とは初対面以降、ぎくしゃくしたかもしれませんね」

「赤毛の長身の美人になるか……姉上のいい友人になつてくれたかもしれない……まあ、そうなるとオレは死んでしまうか」

「なぜ、ラインハルト様が亡くなられるのです？」

「お前がいなければ、同盟軍相手にはともかく、これまでの数々の陰謀でオレが生き残れたとは思えない。最悪、初陣で戦死という報告の形での謀殺が成立していただろう」

「……………」

「お前が男に生まれてくれて、よかったよ。もしも女だったら、不仲になるか……仲良くなっていたら、それはそれで未亡人にしてしまったかもしれないな」

「ラインハルト様が女子に生まれておいでになれば、その美しきで高名になられたでしょう」

「オレがか……………」

二人ともラインハルトが女子であった場合の運命を想像した。まずアンネローゼが後宮にあがる。次に皇妃の美しい妹がどうなるか、酔いが醒め、吐き気を覚えるような想像をしてしまった。

「よそう。くだらぬことは考えぬ」

「はい……」

「二人とも男でよかった。それだけだ」

ラインハルトはグラスを呑み干した。語り込んでしまい、もう一本開きたいという飲酒欲求を覚えたけれど、自身の父が酒に溺れていた姿を思い出し、自制した。

「もう休もう」

「はい」

キルヒアイスは一人になって寝台に入ると、眠りに落ちる前に、改めてアンネローゼ

を早く救い出すと誓った。

三葉は自分自身に戻ると、妹の四葉と入浴しながらオーデインでの一日を語っていた。

「また訓練、訓練の一日だったよ。ワインは美味しかったけど」

「お疲れ様」

「あのワインって、日本円になると、いくらなのかなあ……そもそも帝国マルクは何円に……」

「それを言い出したら、今の戦艦や戦闘機が何億円でも、ワープできる宇宙戦艦が何億帝国マルクでも、どうでもよくなるらない？」

「まあ、そうだけど……イゼルローン要塞なんか、建設費が高くなりすぎて担当者を皇帝が死刑にしたって話だし」

「勝手な皇帝だね。アンネローゼさん、大丈夫？」

「あ、その話は今の皇帝のお父さんかな。今の皇帝は遊び人で若い頃はさんざん遊んだらしいよ。今は枯れた老人みたいで、せいぜいバラの世話くらいしかしてないって」

「ランを大事にしてるんじゃないの？」

「それはキルヒアイスのお父さん」

「ふーん、銀河帝国期の男性って晩年は花の世話をする文化なの？」

「どうかねア……文化的な幅は狭い気がするけど」

「過去の核戦争が文化の幅を狭めたの？」

「うーん……そんな風に観察したりしてないから」

「せっかく未来の世界に居るんだから、もっと観察しようよ」

「そんな時間が無いんだよ。訓練と勉強で、もう、みっちり。ラインハルトさんもキルヒアイスも、なんとかアンネローゼさんを助けてあげたい一心だから」

「そっか、それは頑張ってあげないとね」

三葉と四葉は遠い世界のアンネローゼたちの幸福を願いつつ、お風呂から揚がった。

広島、アスターテ、おもらし

キルヒアイスは糸守高校の修学旅行での行き先を決めるHRで、三葉の手をあげた。

「宮水さん、どうぞ」

クラス委員が指名してくれたので上品に立ち上がって発言する。

「発言の機会をいただきありがとうございます。私の意見を述べさせていただきます。やはり、すでに先生方からのご意見にもありますように、広島県と京都府への訪問をプランにさせていただく方が良いかと考えます」

北海道、東京、京都、大阪、広島、福岡、沖縄から生徒と教師の意見をまとめて決定するHRだった。三葉に目立たないで、と言われているので、ずっと自重していたけれど、生徒たちの意見が東京でデイズニーランドに行った後、大阪でUSJに行つて帰るというプランが多数派になりつつあったので、どうしても黙っていられず意見具申していた。

「その理由につきましては、まず広島には第二次世界大戦についての歴史遺産が多く、大和ミュージアムと原爆資料館は訪れる意味が深いと考えます。戦艦大和は水上戦艦と

して人類最大のものでした。しかも、日本は明治維新期まで中世的な技術体制しか持ち得なかったのに、わずか半世紀あまりで欧米に追いつき、この戦艦を造り上げています。これは人類史を見渡しても画期的なこと、その有形の資産を見学するのは、良い学習の機会です」

三葉の声が教室に響き、克彦ら数名の男子が賛同する。

「大和は見てみたいよな。あと潜水艦もあるし」

「オレもデイズニーより大和がいいな」

賛同の声に対して三葉の頭が貴婦人のように会釈して意見具申を続ける。

「そして広島を推挙いたします二点目の理由ですが、熱核兵器が居住惑星の表面上で……」

うっかり宇宙戦史の視点で語ってしまったので言い直す。

「いえ、地球上で有人の市街地に向けて熱核兵器が使用された例は今のところ広島と長崎のみです。その破壊の爪痕を学び得る原爆資料館は是非とも訪れるべきかと考えます。その惨禍を知れば、今後の人類の方向性について、どうあるべきかを深く考える機会も与えられることでしょう。悲劇を繰り返さないためにも、何ができるか、よく過去を知るべきです」

喉元まで、あと26年で壊滅的な核戦争が地球上で起こることを伝えたくなくなった。秋に落下してくるティアマト彗星の一部は町民の多くを犠牲にするけれど、全員ではな

い。わずかな生き残りがアーレ・ハイネセンのように歴史を大きく動かすかもしれない。自分が意図的に歴史を改変するのだから、宇宙の因果が乱れることもないかもしれない。伝えたいけれど、伝えられないので、せめて遠回しに論じている。

「どうか、よく考えてください。一人一人の認識が、全体の認識になります。二度と核戦争の惨禍を繰り返さないために。そして、よりよく生きるために」

「……」

クラスメートたちが黙って聴く者と野次を飛ばす者に分かれる。

「演説うぜえ」

「はいはい、次の町長、あんたでいいよ」

「あなた方は……」

この教室にいる生徒たちの大半が死んでしまうことを知っているキルヒアイスは涙を零してしまった。野次を飛ばしている生徒さえ、その元気が貴重に想える。そして女子の涙を見たことで野次が止まる。

「涙を零したりして、すみません。発言を続けさせてください」

もはや誰も止めない。ユキちゃん先生が促す。

「どうぞ、続けてください。宮水さ……ん」

思わず宮水様とユキちゃん先生が言いそうになるほどだった。

「はい。京都について述べさせていただきます。京都は桓武天皇が794年に都として以来、すでに1219年も都市として繁栄しています。このこと自体、人類史上まれにみぬ奇跡です。加えて千年の時を経た木造の建造物がいまだ現存しており、これも奇跡といつてよいかと感じますし、この時代に生きる者として一目見ておくことができるのは、何物にも代え難い幸運かと存じます。さきほどの広島の場合で述べました第二次世界大戦から、わずかな期間で再び日本は立ち直っています。いまだアメリカ軍は駐屯していますが高度な自治を保ち、政治的な発言と権利も自由です。振り返れば千年の都があり、大きな戦争の苦難を乗り越え、とても自由な社会を築いている、これほど素晴らしい国家は人類史の宝石と言つてもよいくらいに貴重です。その貴重さを知るに、広島と京都は最適地です。以上のような観点から、私は修学旅行での広島県と京都府への訪問を提案いたします」

ユキちゃん先生だけが拍手してくれている。再び小声で野次が流れる。

「お嬢様、うげえ」

「やつぱ、町長の娘だよなあ。言うことが、いちいち模範解答でムカつくぜ」

「うぎすぎい」

クラスメートが不規則発言しているので、また三葉に怒られるかもしれないと少し後悔したけれど、もう言ってしまったことなので頭をさげて着席した。ユキちゃん先生が

安心した顔で教壇に立つ。

「では、東京と大阪の案と、広島と京都の案で、また職員会議を経て決定します。みなさんからの意見は単純な多数決ではなく、修学旅行の意義と目的をふまえて決まりますから、そのことも承知しておいてください」

校長と教育委員会からデイズニーランドとUSJはさけるように指導されているユキちゃん先生は、生徒からの自発的な意見ということで広島と京都を職員会議に出せそうなので、軽い足取りで職員室に戻り、三葉の口が述べた意見を模範解答としてメモしておいた。

帝国軍は同時並行して、アスターテ方面へローエングラム上級大将の艦隊を、カストロプ領ヘシムムーデ提督の艦隊を派遣していた。そして、三葉は旗艦ブリュンヒルトの艦橋から同盟軍第四艦隊との交戦を見ていた。

「……………」
軍人としてのキルヒアイスの立場を悪くしないよう直立不動の立ち姿でラインハルトの横に立っている。

「……………」

「怖いか？」

ラインハルトが訊きながら、キルヒアイスの前髪に少しか触った。もう三葉も慣れ
てきたので触らせておく。

「いえ、怖くはないです。そして、ラインハルトさんの作戦は、いいと思います」

「ほお、だが、顔が不安そうだな」

「……………」作戦は良くても、それを実行する人たちが、今回はミッターマイヤーさんも口
イエンロー…：タールさんもないし。ノルデンさんもメックリンガーさんも外され
ちやっただすよ？ 意地悪されすぎです。しかも、一個艦隊で行けとか、ありえない
ですよ」

「クスッ…：ノルデンはともかく、他の三人がいないのは、いささか淋しいな。だが、他の
提督たちとて死にたくはあるまい。奮戦するしかないだろう。それに非協力的な別の
友軍艦隊がいるよりオレたちの艦隊だけの方が、ずっといい」

「それは一理ありますね。それにしても、この戦艦、すごく新しい感じですね」

少し余裕が出てきた三葉がブリュンヒルトの艦橋を見回すと、ラインハルトも嬉しそ
うに微笑んだ。

「フ、わかるか。まだ、フロイラインミツハは、この艦の外観を知るまい。見せてやろう」

少年が宝物を友人に自慢するような顔でラインハルトは手元のパネルを操作すると、
モニターにブリュンヒルトの外観を映してみせた。

「うわあ……白い……ぜんぜん、他の戦艦と違う……」

「そうだろう。この美しい艦を見て、どう思う？」

「えつと……白くて……細長くて……後部が複数に分かれて……」

見た感じの印象として三葉は新型のブリュンヒルトを大宇宙に浮く大王イカか、イカ型宇宙怪獣みたいだと思ったけれど、それを正直に言うと言いとラインハルトの機嫌が悪くなることは容易に察せられたので、ほどほどの世辞を言う。

「どうにも言葉がないですよ。カッコいい艦ですね」

「フ」

ラインハルトは心底嬉しそうに微笑んだ。さらにラインハルトを喜ばせる方向へ艦隊も進んでいた。ラインハルトの見込み通り、すでに第四艦隊は組織的な抵抗ができなくなっている。メルカツツからの通信に対して掃討戦は無用と答え、艦隊の再編を指示したラインハルトは再び三葉に訊いてみる。

「次に、左右どちらの敵艦隊を攻撃するべきだと思う？」

「……………どちらも可能っぽいけど、やっぱり数が少ない方かな……」

もう三葉も艦隊戦についての知識も叩き込まれているので正解を述べ、ラインハルトも頷いた。

「うむ、そうだろうな。だが、他に何か言いたそうな顔をしているな。言ってみろ」

「じゃあ、もう、ここで撤退するというのはダメですか？」

「ここですか？ まだ、敵は二個艦隊も残っているぞ」

「2倍の敵を相手に一つ艦隊をつぶしたことですし、もう戦功としては十分じゃないですか。また昇進できますよ」

「だが、みすみす敵の二個艦隊を逃すというのか？」

「第三次ティアマト会戦のときも、ホーランドさんの艦隊だけつぶして、あとは放置したじゃないですか。いい感じに勝ってるうちに帰るのがラインハルトさんらしいかと」

「……………。あのときとは状況が違う。敵の二個艦隊は分散している。これを撃つ好機なのだ」

「そうですね。そう言われるとは思ってました。目を見たら、やる気まんまんだから」「フン」

「言ってみろ、と言った手前ラインハルトは美しい鼻を鳴らしただけで三葉の意見を強くは否定しなかった。そして、次に同盟軍の第六艦隊へ向けて移動するよう指令して、また三葉が何か言いたそうにしているので、訊くだけ訊いてみる。

「何か異議でもあるのか？」

「異議っていうか……………次の会敵までに時間があるなら、交代でみんなに休憩をしてもらったら、どうかなくて……………余計なことかもしれないけど」

「いや、いい意見だ。気づかなかった。そうさせよう」
「……」

それは気づいてあげようよ、みんながみんなラインハルトさんみたいに、やる気まんまんまで参加してるわけじゃないんだから、と三葉は思ったけれど顔に出さないようにして休息の指示を出しに行つた。そして7時間後、第六艦隊も破り、第二艦隊へ紡錘陣形をとつて中央突破をしつつあつた。

「完勝ですね」

「ああ」

「本当に、すごい」

「フ」

単純な賞賛だったけれど、快勝しつつある状況で言われると嬉しい。

「どうやら勝つたな」

ラインハルトがつぶやいたとき、第二艦隊の旗艦。パトロクロスでヤン・ウエンリーも言った。

「どうやら、うまく行きそうだな」

中央突破されるのを逆手にとつてラインハルト艦隊の後方に回り込みつつある。ラインハルトが指揮席から立ち上がった。

「しまった……」

「え？」

「してやられた……敵は左右に分かれて我が軍の後方に回り込むつもりだ。中央突破を逆手に取られてしまった」

「……………どうされますか？」

三葉の問いに、ラインハルトは即断する。

「全艦隊、全速前進！ 大きく時計回りに迂回して逆進する敵の後背をつけ！」

その命令に一部の艦は離反したけれど、多くは従い、陣形はリング状になった。

「何たる無様な陣形だ！ これでは消耗戦ではないか……」

「……………」

「キルヒアイス、どう思う？」

もうキルヒアイスと呼ばれることに、すっかり慣れている三葉は意見を求められて閃いたことを述べるか、迷った。

「……………。人として、思いついてはいけない作戦を思いついてしまいました」

「ほお、キルヒ……いや、フロイラインミツハが、か？」

「はい……あまり言いたくないんですけど、どうせ言ってみろって、言うでしょ」

「ああ、聴いてみたいな。ぜひ拝聴させてくれ」

そうまで言われて三葉は遮音力場があることを忘れていなかったけれど、絶対に声が漏れないよう腰を屈め、ラインハルトの耳元へ囁く。赤毛と金髪が触れ合うほどの距離で、それでも小声で言う。

「ラインハルトさんとキルヒアイスの目的が帝国軍の単純な勝利ではなくて、アンネローゼさんを取り戻すことであるなら、その障害となりそうな人を、さつき命令に反して自滅してしまったエルラツハ少将のような形で、この機会に反転突撃でもさせるか、なにか策があるフリをして孤立させて置き去りにするか、単純に殿を命じて私たちは安全に撤退するか、そういう風に……始末……する、っていうのは、どうですか？」

「……………意外、だな……………」

聴き終えたラインハルトは目を丸くして、キルヒアイスの顔を見つめた。そして、キルヒアイスの瞳の奥にいるのが、17歳の少女である三葉なのに、考えついた策が正攻法などではなく策略に類するものだったことが、本当に意外だった。

「自分でも意外ですよ。こんなこと思いつくなんて。自分たちが優位に立つことだけを考えてると、人間って、どこまでも卑しくなりますね……ホント……怖い。戦争なんて、さつさと、やめればいいのに」

三葉は寒気がするように腕を撫でた。

「……」までの優勢な戦闘だって、私たちは気持ちよく勝っていたけど、相手は……………、相

手の同盟軍の人たちは、やっぱり地球人なんですよ。もともとは同じ地球人」

「ああ、もう地球人などという古典的な言い方はしないが、同じ人間だ」

「じゃあ、戦死者の中には、誰かのお父さんだったり、旦那さんだったり、もしかして結婚直前の婚約者もいたかも……かわいそう……」

「……………」やはり、フロイラインミツハはフロイラインなのだ……」

これを言ったのが軍人であれば、何を甘いことをと叱りたくなるけれど、三葉が17歳の少女であることを考えると、ラインハルトは遮音力場もあることなので言わせておいた。三葉は気になっていることを問う。

「あの、私から質問していいですか？」

「ああ、どうぞ」

「私たちの中央突破を逆手にとって後方に回り込むって戦術、どうして傍受できなかつたんでしょう？」

「それはおそらく敵将の中に、すぐれた者がいて会戦前に戦術コンピューターに内容を送信しておいたからだろう。つまり、こちらが各個撃破をもくろむことを見越していた者が敵の中にいるということだ」

「…怖いですね……第二艦隊を最初に相手にしていたら、危ないところだったんだ……」

「……………」

「あ、もう、こんな時間」

時刻を見ると、もう夜12時になりそうだった。

「すみません、手紙を書く時間もないので、戦況など、キルヒアイスに教えてあげてくださいね」

そう言つて姿勢を正して直立不動になると、三葉は目を閉じた。

キルヒアイスは目を開けてアスターテ会戦の最終局面を見た。

「これは……」

「面白い陣形だろう。どうして、こうなつたと思う？」

「お意地の悪い質問ですね」

苦笑したけれどキルヒアイスは明晰に考えた。

「我々は3方向から包囲されつつありましたが、ラインハルト様の作戦通りに進み、おそらく今、戦っているのは最後の3つ目の敵艦隊でしょう」

「なぜ、そう思う？」

「あれから24時間という時間経過と、他に敵艦隊が残っていれば、こんな無防備な陣形をラインハルト様が維持されているはずがありません」

「たしかに」

「それで、ここから、どうなさいますか?」

「ふむ。やはり撤退だろうが、フロイラインミツハの発案を教えてやろう」

そう言つてラインハルトは三葉の発想をキルヒアイスに伝えた。

「……………意外ですね」

「だろう」

「とはいえ、彼女に軍事的な知識を与え、戦場に身を置かせているのは私たちです。場にあつたふさわしい思考をした、それぞれの居場所に適応してきた、といえ、そうかもしれない。それにアンネローゼ様のことを強く気にかけてくださっているのも、やはり女性だからでしょうが、私自身も女性として過ごしているために、もうむこうにいるときは自分が自分でないというか、二つめの自分といった心地になつていますから」

「それは見てみたいものだな。フロイラインとして過ごすキルヒアイスというのは実に興味深い」

「見せられたものではありません」

キルヒアイスが少し赤面してから思考を戦場に戻した。端末機を操作して、ここまで
の会戦全体を把握し、そして提案する。

「やはりタイミングを見ての撤退でしょう。ラインハルト様」

「ああ。フロイラインミツハの策は、どちらかというオレたちが被害者にされかけた

ことが多かつたような策謀だな」

「はい。たしかに」

これまで何度も戦場で門閥貴族から戦死に見せかけて殺されかけた二人は嫌な思い出を振り返っている。

「オレは勝者になるにしても卑怯者にはなりたくない。もつとも、オレの麾下の艦艇にフレーゲルでもいたのなら、その誘惑に勝てたか、どうか。このくらい、いいだろう、と反転命令でも出したかもしれないな。あのバカならのるだろう、殿をつとめて貴族の意地を見せてみる、それとも怖いか、とでも嚇ければ勇猛果敢に戦死してくれたかもな」

「クスっ……お意地の悪いことで」

失笑したキルヒアイスとしても、アンネローゼ暗殺未遂事件の裏で糸を引いていた男なら、そんな卑劣な手段で抹殺しても良い気がしてくる。ただ、巻き込まれる乗艦の兵士たちが憐れだった。

「あながちフロイラインミツハの考えた策、使えるな。惜しむらくは現在、麾下にフレーゲルのような男がいないことだ」

「いたら、なさいましたか？ 実際のところ」

「うむ………悩むところだな。卑怯者にはなりたくないが、フレーゲルは姉上の暗殺も………」

「そうですね、相手が卑怯者なら、それもいいかもしれません。ただ彼一人でなく多くの将兵が巻き込まれることになります」

「ああ、それは後味が悪いな」

二人が長話していると、通信士官が入電を告げる。

「敵旗艦より入電！」

「読み上げろ」

「はい！……。我々は十分に戦った。これから撤退する。反撃の備えはあるが、できれば追撃しないでほしい。自由惑星同盟軍准将ヤン・ウエンリー。以上です！」

「……………」

ラインハルトとキルヒアイスが目を見合わせた。キルヒアイスが通信士官に問う。

「本当に敵旗艦からのものですか？」

「はい！ 偽装工作の痕跡はありません！」

「……………」。ラインハルト様、どう思われますか？」

「策にしては見え透いているというか、浅はかすぎるな。底が浅いというより、底も無いし、裏も無い。つまり……ただの本心だろう。こちらがモタモタと撤退のタイミングを逃しているから痺れを切らしたな。正直すぎるヤツだ。クク…。よかろう！ こちらも撤退する！ 返信を送れ！」

「はっ!」

敬礼した通信士官がメモを取る用意をした。

「貴官の勇戦に敬意を表す、再戦の日まで壮健なれ。と、私の名で送れ」

ラインハルトは模範解答を返信させた。アスターテ会戦は終結し、同盟軍の戦死者は151万人を超え、帝国軍のそれは15万5000人余りとなり、やや撤退のタイミングが遅れたことで糸守町の人口を超える戦死者を出していた。

三葉はアスターテ会戦での自分の思考を振り返り、身震いしていた。

「私なんてこと考えたの……怖っ……」

「何かあったの?」

そばにいた四葉が問うてくる。

「うくん……妹に言えるようなことじゃないよ」

「また、キャバクラでも行ったの?」

「……………」私、ちゃんと二人の役に立とうとしてるよ。ちよつと卑怯な作戦を思いついたただけだもん」

「どんな?」

「じゃあ言うけど」

三葉はアスターテ会戦の推移と、自軍内の敵を排する策を妹に語った。

「つて感じ。卑怯だけど、アンネローゼさんを助けるためなら、ありかなって。暗殺とか、飲み物に何か入れたりとか、普通にやり合う世界みたいだし」

「なるほどねえ。ありかもしれないけど、それをお姉ちゃんが思いつくなんて、意外」
「う……ラインハルトさんと同じような感想を……」

「今回も勝ったから、上級大将の次は？」

「元帥だよ」

「もう登り詰めてる感じだね。アンネローゼさんを救い出すのも、あと少しかも。ふア……」

アクビをした四葉は眠そうに自室へ戻り、三葉は入浴してから休んだ。いつも通りに起きて克彦と早耶香の三人で、いつも通りに登校する。告白されたことで変わるかと懸念した三人の関係は結局、いつも通りのままだった。ただ、いつも通りでないこともあった。

「……ちっ……」

登校中に他のクラスメートから舌打ちされた気がする。もう俊樹の選挙も終わり、冷やかされる立場でもなくなったはずなのに、いつもより敵意を周囲から感じる。

「……うぎ……」

教室でも廊下でも、女子トイレでも、一部の生徒から敵愾心のようなものを感じていたけれど、何かしてくるわけではないので三葉は聞こえないフリをして放課後を迎えた。いつも通りに三人で家に向かい、交差点で別れる。

「じゃあな、三葉」

「三葉ちゃん、また明日」

「うん、バイバイ」

一人になって家と神社へ向かう道を登っているときだった。
がさつ…

木陰の藪から五人の生徒が出てきた。男子が三人、女子が二人、三葉を包围するよう
に待ちかまえて隠れていた様子だった。

「宮水、あんたさ、調子に乗りすぎじゃない？」

いつも祭りで口囁み酒を造っているときに嫌なことを言ってくる女子が、いつもより
敵意を丸出しにしてからんでくる。柄の悪い男子生徒もいる。

「お前には借りがあるからな」

少し前に三葉に股間を蹴られた男子で、しつかり根に持っている様子だった。三葉は
逃げ道がないか、目で探したけれど狭い道の前後から挟撃体勢を敷かれていて逃げるこ
とはできない。

「……彼我兵力差は……5対1……前回やぶれた時より多い……当然か……」

「はん？ 何ぶつぶつ言ってるのさ。ここ、電波とどかないから助けも呼べないよ。キヤハハハ！」

もともと基地局の少ない山奥の町は一部の地区では高校生が使うような格安スマフォでは電波が届かないこともあり、それを三葉も知っていた。三葉のスマフォも、ここから100メートル前後は外部と連絡が取れなくなる。

「へえ……通信妨害まで考えて。ずいぶん戦理にかなう作戦……」

「あんた一回とことん痛い目みた方がいいよ。いい家に生まれたからって、人生なめすぎ」

「クスつ、うちは貴族じゃないけどね」

「あん？ なに笑ってるんだ。状況わかってんのか、クソアマ、女だからって容赦されると思うなよ」

男子が拳を手のひらに打ち当てて威嚇してくる。色々と学んだ三葉には、その威嚇も戦艦主砲の射程距離外からの威嚇射撃と本質的には同じなのだと感じられた。

「……………。降伏しても、捕虜として遇してはくれなさそうね」

「許してほしいなら、とりあえず土下座しなさいよ」

「きやはは♪ 土下座いいね、制服を脱いでパンツだけで土下座してよ」

「はああ……」

三葉は四葉の真似をして大袈裟にタメ息をついた。そして言う。

「仕方ない、やるしかないか」

「勝てると思ってるのか？ オラー！」

わかりやすい威嚇をしてくる男子がローキックで三葉の足を撃とうとした。その蹴撃から、三葉は素早く避けて逃げた。

ガザッ！

狭い道といっても左右は藪で、その藪の中に飛び込んで逃げる。それを男子が追う。すでに当初の挟撃作戦が破綻していることには気が回っていない。単なる狩りとして作戦もなく三葉のお尻を追いかける。

「待てやコラー！」

「じゃあ待つよ」

藪の中に飛び込んだ三葉は低い姿勢で待ちかまえていて、無防備に追ってきた男子の顎先に思いっきり頭突きを入れた。

ゴツッ…

女子の腕力の無さを技で補っている。

「まず一人」

再び三葉は逃げる。

「地の利は、こつちにあるから」

すぐ家の近くなので、物心つく前から地形は把握している。どこに大きな岩があり、どこに登りやすい木の根があるか、すべて知っていた。

「ちよこまかとー！」

追ってくる男子が木の根を登るために両手を使えない状態になるところを狙って、上から側頭部を蹴った。

「ぐはっ……」

蹴られて落ちていく。

「あと一人」

戦力差は5対1だったけれど、実質3対1で、女子二人は参戦していない。残りの一人を木の幹に回り込んだところで待ちかまえて正拳突きで倒すと、道で待っている女子二人の前に出た。

「お待たせ」

「なっ……あいつらは?!」

「大きな怪我はしてないと思うよ」

「……そんな……バカな……こんなことが……」

二人の女子は、パエツタ中将のように口を開けて驚愕している。

「アスターテ並みの各個撃破ができたかな」

わざとらしく三葉が拳を鳴らして近づくと、二人ともペタンと座り込んでしまい、もう2対1で挑もうという戦意は欠片もない様子だった。しかし、三葉の背後で藪から男子が出てきた。

「痛てえ……宮水、てめえ、もう許さねえぞ」

側頭部を蹴って落とした男子が痛そうにしながらも、しつかりと立っている。

「覚悟しろよ。もう女と思わねえ」

「……」

相手が油断無く空手の構えを取ったので、この男子が極真空手岐阜県連盟糸守町統括道場の一人息子であることを三葉も思い出した。何度か学校新聞に地方大会で優勝したことで記事が載ったので記憶していたし、泣きそうだった女子二人の顔が来援に輝いた。

「やっちゃえー！」

「ボコボコにしてやってー！」

「……………」

三葉と男子が無言で対峙する。もう三葉も油断無く素手による白兵戦の構えを取っ

ていて、その隙の無さに男子も本気で三葉と戦う気になっていた。ちよつと五人で一人の女子を痛めつけて泣かせようとしていた気分から、まったくの真剣勝負に変わっている。

「せいやー！」

「くっ……」

三葉は正拳突きされて、その拳を避けてから手首を取って投げ飛ばしてやろうとしたけれど、拳の戻しが素早く、そして力強かったので手首を取れず、逆に隙をつくってしまふ。

「らっっー！」

その隙を的確に相手が狙ってきて中段の蹴りで三葉の腹部を撃ってきた。

ドスっ……

三葉は後方へ重心をさげながら太腿を大きくあげて防御した。スカートなので相手にシヨーツの股間が丸見えになっている。けれど三葉は恥ずかしがりもせず、相手も油断して見惚れたりしない、本当に真剣勝負となっている。そして三葉は、かなりのダメージを太腿に感じた。

「……………」

痛っ……ちやんとガードしたのに……キルヒアイスの身体と違って、私の足、弱すぎ

……やばいかも……、と三葉は打たれた太腿に力が入らないので体格差を思い知った。今は幼年学校時代から訓練してきた男の身体ではなくて、神事の舞いくらいしか訓練してこなかった女子の身体で、相手は幼少の頃から空手で鍛えてきた男子なのだ。打ち合いで実感して戦慄する。

「……………」

「……………」

あと数回、打ち合っていると圧倒されることが容易に予想できた。体格差は駆逐艦で艦に挑むようなものだと感じる。火力、防御力、まるで違うように腕力も身体の丈夫さも違う。そして、三葉が的確な防御をしたことで、ますます相手は油断しなくなっている。

「……………」

「……………」

三葉は勝つための戦術を無言で考える。

「……………あ」

三葉が地面へ視線を落とし声をあげた。そして、続けて言う。

「マムシ！ そのこ！」

「っ……」

自然豊かな糸守町ではマムシを見かけることも少なくない。毒蛇の名を聴いて、とつさに男子は足元を見た。

ベキッ！ バキッ！

三葉の正拳が男子の腹部に連発で入る。わき腹の急所を狙つての正確な連発だった。「ぐはっ……ぐはっ……」

膝を着いた男子へ三葉は思いつきり前蹴りする。スカートが舞い上がつて三葉のシヨーツが丸見えになり、前蹴りは男子の側頭部を打った。蹴られた男子は地面へ転倒する。

「くっ……まだまだア！」

それでも男子が受けたダメージは軽かった。きやしやな三葉の手足では鍛えられた男子に立てなくなるようなダメージを与えにくい。蹴られて転がっても、すぐに立ち上がろうとしてくる。

「軽いんだよ、しよせん女の宮水が……。ちよっ?! …お前……」

男子は立ち上がろうとしたけれど、三葉が子供の頭ほどある石を振り上げて構えているので恐怖を覚えた。両腕で頭上高い位置まで石を振り上げて、すぐにも叩きつけられる体勢を取っている。

「お前……そんなもので……」

「この高さによる位置エネルギーが加われば、私の腕力でも、あなたを殺せる」
「……マジかよ……」

「降伏して。そしたら、やめるから。でないと、やるよ！」

「さ、殺人だぞ！」

「脅しだよ！ でも本気！」

「警察に捕まるぞ！」

「正当防衛だよ。たった一人を五人で襲ったよね？」

「……………」

「私の優しさに感謝しなさい。ママシって言った後、殴るんじゃないで指で両目をえぐってもよかったのに。今だって殺さずに手足の骨を狙って落としてあげる」

「お前は、いつたい……………」

「さあ！ 降伏しなさい！！ しからざれば、撃つ！！ カウントダウン、3、2……」

「わ、わかった！ まいった！ まいったから、やめてくれ！」

男子が負けを認めた。三葉も石をおろした。

「……………卑怯者が……………」

「五人で一人の女子を襲ってにおいて、どの口が言うの？」

「くっ……………」

「で、黒幕は男子じゃないよねー！」

三葉が振り返って二人の女子を睨む。

「前からチクチクと私にからんでくるけどさ！ 何か恨みでもあるわけ?! 男子まで使って！」

「……………」

二人の女子が悔しそうに目を伏せた。そんな態度に、ますます三葉は頭に血が上るのを感じた。

「私が二人に何かした?!」

「……………」

「なんとか言えば?!」

三葉はカツとなって二人に蹴りを入れた。

「キャツ…」

「ううっ…」

「おい、宮水！ お前、強いんだから、やめろよ！ その二人は素人だからさ！」

「私も素人だし」

「いやいや！ お前、絶対何かやってるだろ?! さっきの構え、何だよ?! 戦い方が実戦的すぎるぞ！ ケンカ慣れどころか、殺し合いレベルで！」

「…………。そんな話じゃないし。ちゃんと手加減したし。男子は黙ってて！　これは女
同士の問題なの！」

三葉は再び女子二人を睨む。

「で、どうして、私にからむのよ？　このさい、はつきりしてもらおうじゃない！　私に
だつてね、堪忍袋の緒つてもものがあるし、切れたからつて、いつもいつも補給されるわ
けじゃないから！」

三葉が目を伏せている女子の胸倉をつかんで揺すつた。

「さあ言つてよ！　なんで?！」

「…………あんたが…………ウザいから…………」

「つ、何よそれ?!　私が、あなたに何かした?！」

「くつ…………ウザいからよ！　バカ！　死んじゃえ!!」

パンっ！

三葉が平手打ちして頬を打った。ある程度の加減はされているので男子は黙つて見
ている。もう女子同士のケンカに立ち入りたくない顔色だった。

「うっ…………この!!」

女子は頬を打たれて打ち返してくるけれど、三葉は見切つて片手で受け止めると、ま
た平手打ちする。

パシントン!

さつきより強く打たれて、とうとう女子が泣き出した。三葉は泣き出した女子の胸倉を離すと、もう一人の女子へ手を伸ばした。

「ヒイツ…」

怯えて身を固くしている。三葉はラインハルトのような高圧的雰囲気で声をつくつた。

「影で厭味を言っているだけなら見逃してあげてもよかつたけど、こうやって実害まであるとなると、私としては君たちを、どう遇するべきかな?」

「……………」

「無益なだけでなく有害とあつては、ね」

「……………」

昨日は深窓のお嬢様のような雰囲気だったのに、今日は朝から普通に見えたものの、襲つてみたら戦士のように強く、そして勝つと急に高圧的な君主のように見下してくる。いったい、どの三葉が彼女の素顔なのか、わからなくなってきた。

「まあ、とりあえず二人には土下座してもらおうか。で、二度と私に刃向かわないって誓いなさい。あ、そうそう、もちろん土下座は制服を脱いでパンツ姿でね。私にさせようとしたことだし。男子たちへサービスあつてもいいでしょ、無用の兵役に使われた分」

「……誰が……」

「……あなたに……土下座なんか……」

最後の意地で二人は抵抗している。三葉としても非常に立腹しているので二人を屈服させておきたい。これ以上の武力行使はできないと考えた三葉は政治的抹殺をほめかすことを思いついた。

「じゃあ、もう村八分しかないね」

「……え？」

「お父さんとお祖母ちゃんに頼んで、あなたたちの一家丸ごと、村八分にするね。私に対する不敬罪、ううん、殺逆未遂罪で村八分、一族親類もろともに」

「つ……ちよつ……、待って……」

意地を張っていた二人の両膝が震え始めた。岐阜県の山奥という田舎で育ったゆえに村八分は知っている。現在の人権感覚では否定されているものの、今でも残っているとも聴く。そして三葉の父は町長、祖母は神社を中心とする町民の最上位に居る。さらに正義は自分たちに無い。五人で一人を襲ったのは動かない事実で悪いことだとわかっている。三葉の唇が村八分という音を発した直後から、二人の背筋は凍りつき、魂が言霊で縛られるような恐怖を覚えていた。

バツ…

女子の片方が崩れるように土下座し始めた。もう片方も続く。

バツ…

二人とも地面に這い蹲つて土下座し続ける。

「許してください、もうしません、ごめんなさい、ごめんなさい」

「すみませんでした、ごめんだ、ひぐう、うう、ごめ、ごめ、うぐ、許して…」

泣きながら土下座しているし、片方の女子は恐怖で失禁してしまつたらしく、お尻の周りの地面に水たまりをつくっている。二人の女子は生まれて初めての心底の恐怖を覚え、対照的に三葉は強い快感を覚えていた。

「フフン♪」

ラインハルトほどではないけれど形の整つた美しい鼻を鳴らして勝ち誇る。

「どうか、どうか村八分だけはやめてください。私たちが悪かったです、ごめんなさい」

「ひぐううはううう…ごめえんえん…」

恐怖で小水を漏らしてしまつた女子は、もう言葉が聞き取れないほど泣いている。三葉は楽しくて微笑しながら問う。

「さて、どうしようかな？」

「この通り、どうか、どうか」

泣いてはいても、まだ言葉が聞き取れる方の女子に言ってみる。

「あなたもさ、おしっこ漏らして土下座しなよ」

「……、もう漏らしてます」

恥ずかしそうに女子がスカートをたくし上げた。小さくショーツの股間が濡れて、よく見ると地面にも手のひらくらいの土が濡れた痕がある。たまたま膀胱に貯まっていた量が少なかっただけで、もう片方の女子と同じく、とつくに失禁している様子だった。三葉は心底愉快になってくる。

「クスッ♪ あはははは、恥ずかしいね」

「……………」

「多勢に無勢で私をイジめるつもりが、この無様な姿。クス、クス、ククク」

「うう…私たちが悪かったです、本当にごめんなさい」

「ごめんなさいいいい」

「たしか、制服も脱がせてパンツ一枚で土下座とか、言つてたよね？」

「……………」

二人の女子が周囲を見回した。自分たち以外は誰もいない。もともと人口が少ない町なので人通りが少ない上、この先にあるのは三葉の家と神社だけなので朝夕はともかく昼間は誰も来ない。諦めて女子たちが制服を脱ぎかけると、三葉は止めた。

「あ、いいよ、そこまでは追いつめない。もう許してあげる」

「ああ、ありがとうございます！」

二人が頭を地につける。許すと言った三葉は、だんだん快感が消え、逆に後悔が湧いてきた。同級生に土下座させている自分を、とても醜いと感じる。

「……………」

意地を張っていた女子二人が一瞬のうちに屈服して土下座してくれたのは、確かに快感だった。相手の生殺与奪を握った立場で、許しを乞われるのは優越感が濃厚な蜜のように湧いてくる。湧いてきて、脳に染み込む。

「……………これか……………貴族の特権意識……………」

そして理解していく。その蜜が脳を腐敗させることを、それは銀河帝国で見てきたので知っている。だから後悔する。深い後悔だった。脅しのためとはいえ、つい父と祖母の存在も誇示してしまった。とくに父が町長であることは、これまで自分の中でも認めにくかったことなのに、とっさに利用してしまい、自分自身が口惜しい。

「親の地位で威張るとか、これじゃフレーゲルと、いっしょ……………でも、こんなに快感なんだ……………他人を、人とも扱わないで上に立つ快感……………」

「……………」

二人の女子は、フレーゲルって何かな、と思ったけれど、とりあえず土下座を続けておく。三葉は言ってる。

「もういいよ、頭をあげて、立って」

「はい……」

「うん……ぐすつ……」

二人とも土下座をやめて立とうとしたけれど、腰が抜けていて座り込んだままになる。なので三葉は片膝を地面に着いて目線の高さを二人に合わせた。

「でも、一つだけ訊かせてよ。なんで、私にからんでくるの？　そもそも私が二人に何かした？　それとも、真の黒幕が居て誰かに依頼されて私を襲撃してきたの？」

言いながら三葉は真の黒幕を考えてみた。誰かに恨まれる覚えは、ほぼ無い。あるとすれば克彦に告白されたらしいので、嫉妬から早耶香がベーネミュンデのように刺客を放ったという発想はできるけれど、そもそも早耶香はそういう人間ではないはずだし、たとえ早耶香が命してもよほどの報酬がなければ、この二人が動くとは思えない。何より、そういうことは銀河帝国の宮廷では起こりえるけれど、糸守町では起こりえない。

「……………黒幕なんて……………居ないです……」

「じゃあ、どうして私を襲ったの？　動機は？　理由は？」

「……………それは……………」

「うっ……うぐっ……うわああ！　宮水さんのせいで!!　もう、いい！　私もう死ぬから！　宮水さんなんか大嫌いつ！　あなたのせいで私の生きる希望は無くなったんだから

！ 死んで一生恨んでやる！」

「わ……私のせいって……何が？ ちよつと落ち着いて、死んだら一生恨めないし、つて
いうか、私に恨まれる覚えはないんだけど」

「うぐうつ……うううつ……」

泣きじやくる女子の肩を、もう一方の女子が撫でた。そして説明する。

「宮水さんのせいで修学旅行の行き先、広島と京都になりそうでしょ」

「え？ ……あ、……うん……」

三葉も昨日、自分の口が何を発言したかは手紙で知っていた。読んだとき、また余計なことを、と思いはしたけれど、さほど問題には感じなかった。戦史面で広島を、文化面で京都をキルヒアイスが推しそうなことは違和感の無い話で、京都を見たいというのは三葉がオーディン観光したいというのと、さほど変わらない自然な欲求だと思つていた。

「……まあ、そう言つたみたい……だけど……それが何か？」

「それが何か、じゃないよ。この子、デイズニーランドに行くの、すごく楽しみにしてたんだよ。私だつて」

「……そ……そうなんだ……ごめん」

「ごめんで済まないよ。だから、私たち……」

「え……えっと、ようするに私が修学旅行の行き先を広島と京都がいいって言ったから、こんな闇討ち事件みたいなことしたの？」

「……そうよ……」

「そ、それだけの理由で？」

「……それだけって……宮水さんにとっては、そうでも……私たちにとって、それがどれだけ……」

「もう死ぬから、どうでもいい……もう私、死ぬから……」

「ちよつと待ってよ。死ぬほど行きたいなら、行けばいいよ。修学旅行じゃなくても、夏休みでも連休でも」

「……やっぱり、宮水さんには、私たちの状況なんて、本気でわからないんだね……あはは……私も死にたくなってきちゃった……」

「状況って？ なに、どういうこと？」

「……………」

黙る二人の替わりに男子が言ってくる。

「おい、宮水、オレらの家が貧乏なの、知らないわけないだろ？」

「え………知ってはいるけど……」

小さな町なので、それとなくそれぞれの家庭の事情は知っていたりする。深くは知ら

ないけれど、待ち伏せしていた五人が五人とも裕福な家庭ではない、むしろ母子家庭だったり、父親が居ても家計が不安定だったりすることは、なんとなくは三葉も知っていた。

「知ってるけど……たかが遊園地だよ？」

「……………」

二人の女子から殺意を込めた視線で睨まれた。

「……………たかが……ね……、……やっぱり、あなたは生まれながらの貴族様で、私たち貧乏人のことなんて永遠に理解できない……そういうことなんだ……」

「な、何を大袈裟なこと言ってるの？ 私は貴族じゃないし、みんな平等だよ？」

「平等なもんか!! 私の家は川沿いの町営住宅にあつて、いつも大雨のたびに洪水を心配しなきゃいけない低地にあるのよ! 道路よりも低い位置に窓があつて! 私は覚えてる! 小学校のとき夏休みなのに、どこにも遊びに連れて行ってもらえず、それどころかエアコンも使えなくて窓を開けて暑さを我慢してた! ご飯も一日、素麺と卵だけ! お腹が空いて動けなくて、ずっと一日、畳の上でゴロゴロしてたら、あなたが道路を歩いてきた! 家族といっしょに! 新幹線で行ったデイズニールンドの話しながら! しかも、あなたは白雪姫のコスプレをしていた! デイズニーで公式コスプレをすると5万円もするのよ! その金額さえ、知らないでしょ?!」

「……………あ、あのときの話……………まあ、白雪姫の服は買ってもらったけど……………いくらなのかは、ちよつと……………子供だったし……………」

「見上げた道路の上を歩くお姫様と、その日の夕食にも困る私の家!! さあ、これでも何が平等なの?!」

「……………」

「お貴族様には、私たちの苦しみなんてわからない! 知ろうともしない! なんのに、ささやかな希望さえ平気で踏みにしていく! ずっと修学旅行でデイズニーへ行けることを楽しみにしてたのに! 家にお金が無くても修学旅行なら学用助成金が出て行けるのに! 京都と広島がいいなんて真面目ぶって言って!! 先生への自分の点数稼ぎで私たちの希望を奪った!!」

「……………うちだってお母さんは早くに亡くなって、父子家庭だし……………そのお父さんだつて家に居ないし……………」

「けど、お金に困ったことは無いでしょ。その日の夕食に困ったことある?」

「……………無いけど……………」

「高校卒業したら東京の大学に行きたいつて、いつも言ってるよね。それ4年間で一千万円は軽く超えるよ。私の家には、まったく無理。そんな貴族みたいな宮水さんに私たちの気持ちはわからないよ」

「貴族って……私は、ただの平民……」

「私も、この子も、デイズニールランド、大好きだけど行ったことないの」
「行ったことない……のに……大好きって……」

「夢の国なんだよ……お金が無いと行けない……夢の国」
「……」

「日帰りの夜行バスで行ったって、一人3万円は要る。お母さんと二人で6万円。お母さんの一ヶ月分のパート代」

「……」

「宮水神社の御祓い、一回1万円から、高いと10万円も取ってるよね？ 勅使河原建設からの御寄進なんて100万ってことも。地鎮祭だつて5万は取ってるって」

「……。ああいうのは、ちゃんと神社の会計に入れてるから……」

「生活費は、どうしてるの？」

「……よく知らないけど、お婆ちゃんが……それなりに……」

「ほら、あなたの家と私で、ぜんぜん違う。生まれた家の違いで、こんなに差がある」

「……。うちも平民というか……爵位とか無い社会だし……神社には官位があったけど……形骸化して……」

「結局、私たち貧乏人の気持ちなんてわからないのよ……修学旅行が大事なチャンス

だったのに……ぐすつ……ひつく……行きたかった……行きたかったのに……ずつと……」

顔を覆つて泣き出した女子を見ると三葉は心に痛みを覚えた。

「ごめん……私……知らなくて……」

思い返してみれば、幼い頃は二人の女子とも仲良くしていたかもしれない。小さな町で同じ学年なので何度も幼稚園や小学校の裏庭で遊んだかもしれない。けれど、だんだん家庭の経済的格差から疎遠になり、今では同じような所得階級で群れるようになっていく。三葉は公務員家庭の早耶香や建設会社を営む家柄の克彦とつながっている。ほぼ本能的に、そうしていたし、それに無自覚だった。

「……ごめん……」

「ごめんで済ませるの？ ……私の青春……私の夢……返してよ……」

「ぐすつ……ううつ……私たちの夢を……返して……」

「…………しゅ……修学旅行の行き先って……もう決定なの？」

恐る恐る三葉が訊くと、男子が答えてくれる。他の頭突きと正拳で倒された男子も、いつのまにか戻ってきていて、再び三葉は包囲されるような体勢になり、今回は居心地の悪さと罪悪感を覚えていた。

「今日の職員会議で決まるって。ほぼ宮水の意見が通るだろうって話だ。広島と京都なん

て、つまんねえところによ。ちっ」

「わ…私だって、つまらないよ。せめてUSJかディズニー、どっちかは行きたかった。みんなで」

「「だったら、なんで、あんなこと言った?!」」

「う……………あ、あの時は……………わ、私が私じゃなかったというか……………。職員会議……………」

三葉はスマホを出して時刻を確認した。

「まだ間に合うかも……………職員会議に意見具申……………」

三葉が泣いている女子の手首を握った。

「いつしよに来て！ みんなも！」

「ぐすつ、何する気なの？」

「職員会議に意見具申するの！」

「ぐしん？」

「いいから来て、決を採られる前に！」

「「……………」」

五人は迷ったけれど、町長の娘なら、なんとかなるかもしれないと、いつしよに糸守高校まで駆け戻り、職員室に駆け込んだ。

バンツ…

三葉がドアを勢いよく開け、叫ぶ。

「提案します！ ハア…ハア…」

「宮水さん、今は会議中ですよ」

ユキちゃん先生が驚き注意してくるけれど、引き下がらない。

「その会議へ意見具申いたします！ 発言の許可をお願いします！」

「許可って…職員会議は職員の…」

「お願いします！」

「…「お願いします！」」」

他の五人も頭を下げたので、ユキちゃん先生は困って校長を振り返る。校長も困って
いたけれど、やはり三葉が町長の娘なので許した。

「言ってみなさい」

「デイズニーランドに行かせてください！ みんなで！」

「…………… あなたの意見は広島と京都だと……………」

「私が間違っていました！ 本当に行きたいのはデイズニーランドです！ あのときは

……………あのときは、嘘をついてました！」

「嘘って……………」

「ああいう意見を言えば、私の内申点が良くなって、いい大学に行けるかなって！ そんな

な卑劣な考えで自分に嘘をついていました！ でも、みんなに怒られて！ とくに、家計の苦しい家のクラスメートにとっては、初めて行けるチャンスだったんです！ それを私が踏みにしてしまつて！」

三葉が振り返ると、ユキちゃん先生は男子たちが怪我をしていることに気づいた。「あなたたち、その怪我は？」

「……………」

三葉を襲おうとして逆撃されたとは答えにくい。

「私がやりました！ 私の意見が卑劣だったから、ケンカになつて！ 私が悪いんです！ どうか、お願いします！ デイズニールランドに行かせてください！」

勢い三葉が土下座のように頭を下げると、ユキちゃん先生は困り切り、他の教員を振り返る。もう広島と京都で決まりかけていて、旅行代理店の担当者もいた。大人たちが、しばらく話し合い、そして決が下つた。

「もう広島は外せないの」

「……………」

「けれど、かなり無茶な日程になるし、お土産代を食事代に回すことに生徒たちが賛同してくれるなら、広島から東京というプランも可能です」

「……………」

「交通費が高くつくから、食事代が出なくなるのよ。初日のお昼はお弁当を持参、最終日の夕食も各自の自由行動でお小遣いの中から食べる、そういうプランなら岐阜から広島へ行つて東京を経て帰ることがギリギリできるわ。それでも行きたい？」

「そ、それでも……行きたい。……よね？」

三葉が振り返ると、五人は頷いた。けれど、ユキちゃん先生は忠告する。

「あなたたちだけで決めてはいけません。今夜中に、学年全員のうち90%以上から同意が取れるなら、そう変更します。電話連絡、大変ですよ、やりますか？」

「「「「はい！」」」」

覚悟したほど連絡は大変ではなく、ラインやSNSで情報が回ったので、すぐに同意が集まり、行き先は広島と東京になった。夜遅くなつて学校を出るため、六人はグラウンドの校門付近にいた。二人の女子が笑顔で礼を言ってくる。

「ありがとうございます、宮水さん」

「ううん、悪いのは私だから」

三葉は三人の男子にも謝る。

「暴力ふるつて、ごめんなさい」

「「もう、いいって」」

「よくないよ。私がしたのと同じように殴ったり蹴ったりしてください」

三葉が無防備に立って目を閉じる。

「女は殴れないな」

「そうそう」

「おっぱい揉ませてくれるなら、別だけどな」

「え……………そ、…それでもいいよ。揉んで」

「……………」

「……………」

三葉は覚悟して無防備のままである。目も閉じたままで、その頬が少し赤くなってきた。とても可愛く見えてしまい、三人が迷う。

「じゃあ、ちよつとだけ」

「よし、ちよつとだけ」

「お、おう、ちよつとな」

三人がその気になったので、女子二人が止める。

「やめなさい！」

「宮水さんも、もういいから。目を開けて」

「……………」

三葉が目を開けた。そして、両膝と両手をグラウンドについた。

「土下座します」

「もういいって！」

「二人にさせたから、させてください。人として、自分が間違っていたことを反省する機会をください」

「……………」

「私は間違っていました。ごめんなさい」

三葉が額をグラウンドにつける。本当に悔いているし反省しているので泣けてきた。今まで自分が恵まれていることに無自覚なばかりか、身近に貧家があることも見てみないフリをしてきた。見ているのに見えていなかった。そんな銀河帝国貴族の子弟たちと、まったく同じ部分があることを思い知って、恥ずかしかった。

「宮水さん……………もう頭をあげて…」

「そうだよ、もういいよ」

「……………」

三葉は泣き顔をあげたけれど、両膝は地面についたまま立たない。

「おしっこを漏らしながら、もう一度、土下座します」

「……………そこまでしなくても……………」

「私は父親の地位を利用した最低な女だから、せめて謝らせてください。ずっと、それだ

けはしたくないって思ってたくせに、さつき二人にしたから」

「……」

「本当に、ごめんなさい……………」

三葉は謝つた後に、おしっこを漏らそうとしたけれど、すぐに出てこない。こういう風に、きちんと謝るために学校へ戻ってからトイレに入っていないので、それなりに膀胱へ小水は貯まっているけれど、やはり心理的な抵抗が大きくて、すぐには出せない。

「……………すみません……………ちよつと待って……………すぐ漏らすから……………」

「もういいよ。おもらしまでしなくても」

「そうだよ、あれは強制されたというより、私たちがビビって漏らしたただけだから」

二人のシヨーツはすっかり乾いていた。三葉は首を横に振る。

「そうさせるくらい、私が悪いことしたわけだから……………あ……………出ちゃう……………うう……………」

三葉がピクンと背筋をそらせた。

「ふあ……………」

尿道が開いて、おしっこが流れ出る感覚がする。

シヨワ……………シヤアア……………

シヨーツの中が生温かくなった。

「ああ……………ハア……………ああ……………」

わざと、おしっこを漏らす行為がもたらす恥ずかしさで三葉は顔を真っ赤にして、涙も流している。両目からダクダクと涙を零し、謝罪の気持ちを込めて二人を見上げる。

シヤアアアア…

おしっこが漏れ続ける。股間から真下に落ちる小さな滝と、内腿を這う流れに分かれて三葉のおしっこおもらしが終わった。

「ハア…………ぐすつ…………ハア…………」

「…………宮水さん…」

「……………」

男子たちも黙って見ている。おしっこおもらしが終わった三葉は水たまりに両手をついた。

「私が…………うくつ…………間違っていました。…ひつく…………ごめんなさいっ」

頭もさげて、おしっこの水たまりに土下座している。三葉の涙もポタポタと滴って水たまりの量を増やしていた。人としての尊厳が踏みにじられるような有様だったけれど、先に同じことをさせてしまったので、余計に自分がしたことを反省している。

「ううっ…………うわあああつ…………うわあああん、ごめんなさいいいいっ…」

三葉が号泣し始めると、二人の女子は水たまりに片膝をついて三葉を抱き上げてくれた。

「宮水さんの誠意、わかったから」

「もう十分だよ、十分。やっぱり、宮水さんはえらい人だよ。よくわかった」

「ぐすつ…本当に、ごめんなさい」

「うん、うん」

三人の女子が仲直りして抱き合っているので男子たちは何も言わない。ただ、おしっこを漏らしている時の三葉には祭りで唾液を垂らしている時とは、別の可愛らしさと美しさがあつて神々しいほどだと心中反芻していた。

真の宮水祭り、元帥府人事、みつは神社

キルヒアイスは宮水神社の境内で夏祭りにそなえた訓練として、四葉が巫女服を着て舞っているのを見て感動していた。まだ10歳の四葉が神々しくさえ感じられるほど美しい。

「高天原にかみつまします。かむろぎかむはやぎなる神々に」

祝詞の声も朗々として、場の空気さえ変化している気がする。舞いが終わり、三葉の手が妹を讃えて拍手する。

「すばらしいですわ！　なんて感動的なのでしょう！　まるで天使のようですよ！」

「……。ありがとう、お姉様」

実姉の顔で最大限の讃辞を送られると、かなり照れくさい。四葉が赤面して咳払いした。

「コホン。じゃあ、次は、いっしょに舞ってみて」

「はい」

すでに巫女服を着て準備もしている。巫女服に着替えるとき、ショーツとブラジャー

は身につけないのが本来の巫女服の作法だと教えられて、それに従っているけれど、身体がスースーとして落ち着かない。女性として振る舞ううちに、すっかり女性としての羞恥心が身に付いてきたので、シヨーツとブラジャーを着けていないことが、とても恥ずかしくて抵抗感がある。できれば拒否したい。それでも夏祭りの日に三葉と入れ替わりが生じていた場合にそなえての訓練なので、軍事訓練を求めている立場で断ることはできなかつた。

「お姉様、いくよ。私に合わせて舞ってみて」

「はい」

二人が神社の舞台に立ち、一葉が雅楽を奏でてくれる。やってみると三葉が白兵戦技や射撃を習得するのが早かつたように、すぐに舞いを覚えることができた。

「うん、いいね。この調子なら大丈夫そう」

「きつと三葉さんが、しっかり練習してくださいたおかげですわ」

「はは…」

嫌がる姉に祖母が叩き込んでいた長年の記憶が蘇り、四葉は苦笑した。舞いの習得が終わると、四葉は三宝を持ってきた。

「それは何でしょうか？」

「三宝って言うてね。普通の家は鏡餅とかを載せる台だよ。神さまへのお供え物を載せ

るのが普通の使い方。ここに炊いたお米を載せるの」

「お米を供えるのですね」

「ううん、お米は口噛み酒の材料。とりあえず、やるから見てて」

四葉は三宝へ電子ジャーから炊いた白米を杓文字で盛った。

「舞いが終わった直後の形から入るね。よく見てて」

そう言った四葉は舞いの最終形である姿勢になると、手を伸ばして三宝から米を指先で摘みあげ、口に運ぶ。

「んぐ……んぐ……」

あえて大袈裟に米を噛む様子を見せて、それから酒杓へおごそかに白濁液を吐き出した。

「と、こんな感じに。お米をよく噛んで、ここへキレイに吐き出すの。唾液とお米がよく混じるように噛んで、それから一粒残さず吐き出して、できるだけヨダレが糸を引かないように、すつきり出すんだよ」

「……………」

三葉の瞳が、いつも通りやりたくなさそうにしている。けれど、いつもの子供が駄々をこねるような拒否の色合いではなく、あまりに文化が違うので困惑しているという色合いの瞳だった。

「じゃあ、やってみて」

「……………あの……………何と言いますか……………その……………こう申し上げては大変失礼かもしれないのですが……………私の知っている行儀作法や女性としての振る舞いから見て……………その……………品位が……………いささか……………欠けるといいますか……………文化的な違いかもしれませんが……………上品には見えないのです……………」

喫茶中に食べかけのパンケーキを撮影することさえ、激しく羞恥心を刺激されてできなかったのに、口に入れた食物を唾液とともに吐き出すという行為を求められて拒否したいのに拒否できず困っている。四葉は選択の余地なく求める。

「これは神聖な儀式だから品格は高いよ。いかに上品にやれるかがポイント」

「……………」
「やってみて」

ずいっと四葉が三宝を差し出してくる。

「……………」

「さ、やってみて」

「……………はい……………」

実姉と違って駄々はこねないけれど、三葉の手が震えている。その震える手で白米を少しだけ摘むと、口に運んだ。

「……………」

「よく噛んで。お米がトロトロの液状になるまで。なるべく、噛んでる動作を周りに見せる感じに」

「……………」

三葉の目が潤みつつ、米を噛んでいる。

「はい、こっちに出して。ヨダレが糸を引かないように、すつきりと」

「……………」

恥ずかしそうに手で隠しながら、ほんの少しだけ三葉の唇が開き、スーっと酒杓へ白濁液を吐き出していく。

「うん、一回目にしては上出来」

「……………」
「ありがとうございます……………」

「はい、二回目やろうね」

「……………」
「はい……………」

「さつきより多めに口へ入れて。で、吐き出すとき手で隠すのはいいんだけど、完全に隠しちゃダメなの。ちよつと手をそえるくらいの感じ。周りの人たちから見えそうで見えない、見えないようにでいてチラリとは見える、そんな風に見せる仕事で」

「……………」

「ゆつくり私もやるから、真似しながら、やって」

「……………はい……」

四葉の手が白米を摘み、続いて三葉の手も白米を指先で摘む。その白米が10歳と17歳の乙女たちの唇に入ると、ゆつくりと大きく咀嚼し、それから上品な仕草で酒杵を持ち、そこへ吐き出す。

ポタ…ポタ…すーっ…

二人の唇から白濁液が酒杵に落ちた。唾液で光っている。

「……………」

「お姉様、いい感じだよ。三回目やって。今度は舞いの最終の姿勢から」

「……………はい……」

舞いと同じく吐き出す動作は身体が覚えているようでもあるけれど、身体が拒否している覚えもあって、なかなかできない。五回目が終わると、泣いてはいけないと思っているのに泣けてきた。

「うっ……………うっ……………」

声をあげないように泣いているけれど、顔を真っ赤にして、その顔を両手で隠している。四葉は小さく肩をすくめ、優しいけれど譲らない声で言う。

「ちよつと休憩しようか。でも、これを町みんなの前でやれるように特訓するから、午

後からはサヤチンさんとテツシーくんも呼んで見てもらうからね」

「っ……………」

姉の顔がイヤイヤするように左右へ振られている。これは本人と、ほぼ同じ動作だったし、身体が覚えているのかもしれない。午前中の練習が終わり、お昼ご飯になると食卓には、いつもと違って箸がなく白米だけが山盛りに三宝へ載せられていた。

「お昼ご飯で箸を使わずに手で食べる練習もするね」

そう言つて四葉は手で白米を摘みあげると口へ運んだ。

「……………くっ。このくらい噛んでから吐き出すんだけど、今は飲み込んでいいから。じゃ、やってみて」

「……………はい……」

手で直接に食事するということにも、とても抵抗がある。

「……………」

それでも三葉の手は求められた義務に応えようと、白米を摘みあげると唇に入れた。よく噛んでから飲み込む。

「……………これで、よろしいでしょうか？」

「そうそう。よくできてる」

練習を兼ねた昼食を終えると、四葉が呼んでおいた早耶香と克彦が呼び鈴を鳴らし

た。

「はいはい！」

四葉が玄関へ行き、二人に神社の舞台へ上がって待っていてくれるように言い、戻ってきた。

「じゃ、また着替えて今度は人前で挑戦するよ」

「……………はい…」

そう返事をしたけれど、三葉の足は立とうとしない。

「さ、早く着替えて行こう」

「……………はい…」

返事はしても、立たずにいる。

「どうしたの？ 早く立って」

「…す、すみません……………あ…足に力が入らなくて……………」

ぺたりと座り込んだまま、三葉の足は動かない。

「……………た……………立とうとしているのですが……………足に力が……………」

「……………」

お姉ちゃんだと駄々をこねるところで、お姉様は義務感と拒否感の板挟みで身体に不具合がでるんだ、と四葉は二人の反応の違いを知った。実姉は嫌なことは寝転がって手

足をジタバタさせるけれど、今は義務を果たそうという表情はしているものの、強い拒否感で足が動かない様子だった。嫌がるのは同じでも、やっぱり気品が違ふと感じた。そして、四葉は一葉が使ってきた策略をろうする。

「うん、わかった。そんなにイヤなら今日の口噛み修業は無しにして、舞いだけ二人に見てもらおう。ほら立って」

四葉が三葉のお尻をポンポンと叩いた。

「舞い……だけ、ですか……？」

「そうそう。さ、ゆっくり立ってみて」

「はい……」

今度は、かろうじて足に力が入り立てた。二人で巫女服に着替えて舞台にあがる。

「お待たせ」

「お待たせいたしました」

祭りの時とは違い、早耶香と克彦も舞台にあがって座っている。

「近くで見ると、またキレイやね」

「ああ……キレイだ……」

「ありがとう、テツシー、サヤチン」

「……」

もう声色だけで早耶香は察するようになったので、もともと克彦と隣り合って座っていた位置から、さらに10センチ、克彦に近づいて座り直した。一葉が雅楽を奏で始めてくれたので、巫女二人が舞う。

「おお……」

「キレイやね……」

「ああ、特等席で見られてラッキーだぜ」

舞いが終わると拍手して、早耶香が問う。

「でも、急に練習を見てほしいなんて、どうしたん？」

四葉が答える。

「うん、それがさ。第二の思春期みたいで、また口嚙み酒を造るのがイヤだって言い出したから、慣れさせるために二人に来てもらったの」

「第三次性徴じゃないんだから……あく、でも、そのお嬢様モードのときだとイヤかもね。そのモード入ると、きっちり一日続けてるし。ある意味、ホント第三次性徴なのかも」

女子高生になっても子供っぽかった親友が最近では貴婦人のように変貌することがあるのに慣れてきた早耶香は巫女服を着ている親友を見上げた。

「……」

そつと上品かつ、さりげなく三葉の瞳がそらされて早耶香との衝突を避けるようにしている。そのけなげさが、また克彦の気を引こうとしているようで早耶香はベーネミユンデのように睨んだ。

「さ、次の実演やるよ」

そう言つて四葉が三宝に電子ジャーから白米を盛ると、三葉の身体が硬くこわばる。四葉は平然と告げる。

「やっぱり、ちゃんと口づみの練習もしようね、お姉様」

「……………はい……」

「さ、私から、やって見せるね」

四葉が舞いの最終形をとり、おごそかに白米を摘みあげると口に含み、酒杵に吐き出してみせた。

「はい、今度はお姉様の番」

「……………はい……」

震える三葉の手が白米を摘みあげると、唇に運ぶ。

「……………」

そつと酒杵を持つと、手で隠しながら吐いた。その表情が、いつもより儂げなので克彦が見惚れる。しかも距離が近い。やり終わると三葉の両手が顔を隠した。

「お姉様、恥ずかしがってやると余計に見栄えが悪いよ。きちつと所作通りにやって」
「…はい…すみません…」

泣きそうになりながら返事をして、また実演する。やはり動作は身体が覚えていく
れるけれど、その動作を拒否する感覚もあるようで、うまくいかない。何度も実演させ
られ、いちいち克彦が見惚れるのが早耶香は腹立たしくなってきたので7度目の実演の
最中に聞こえるように言った。

「やっぱり、人前でやることじゃないよね。女子として」

「っ…」

ビクンと三葉の肩が震え、白濁液を吐き出せなくなつて顔を隠して泣き出した。

「サヤチンさん……ひどいよ。せつかくイヤイヤでも頑張つてたのに」

「ごめん、つい」

「慣れさせる練習だったのに。今日は、もう限界かな」

四葉がタメ息をついて、早耶香を呼ぶ。

「ちよつと、こつち来て。サヤチンさん」

「私だけ？」

「そうそう」

そう言つて四葉は早耶香と、どこかへ行つてしまった。一葉も和楽器をもつて倉庫へ

行くと、克彦と二人きりになった。

「そんなに泣くなよ。キレイだったぞ」

「……………本当に、そう感じてくださいますか？」

「ああ」

「……………」

泣きやんだけれど、かなり疲れた表情でうつむいている。克彦は抱きしめて慰めたいと想ったけれど、早耶香が戻ってきた。

「もう戻ってきたのか」

「…………。もう戻ってきたよ！」

「四葉ちゃんからの用事、何だったんだ？」

「少し二人きりにさせて慰める時間だって！ あの子、ホントに小学4年生なのかな？

しっかりしすぎ！」

四葉が平服に着替えて戻ってきた。

「お姉様、もう今日は終わりでいいよ。あとは、のんびり過ごして」

「…………はい…………ありがとうございます…………あの、テッシー…………サヤチン…………お茶でもいいかがですか？」

「おう、サンキュー」

「それ、明らかに私をついでというか、しょうがないから誘ったよね？ 社交辞令的に」
「いえ、とんでもないことです。どうぞ、ゆっくりしていつてください。私は着替えて参りますので少し失礼いたします」

しずしずと巫女服で歩き去っていく姿を克彦が見惚れる。

「……」

「私も巫女服……着てみたら似合うかな……」

「サヤチンさんも着てみる？」

「いいの？」

「いいよ」

「でも、神聖な物なんじゃないの？」

「別にサヤチンさんが穢らわしい者じゃないから大丈夫だよ」

「クスっ……くくっ！」

「そこで笑うな!!」

克彦に笑われて怒った。そして着て見せてやりたい気持ちが湧く。

「着てみる！ お願います！」

「うん、じゃあ、こっち来て」

克彦を舞台に残して四葉と早耶香も家に戻る。居間へ入ると、目隠しして着替えてい

る三葉の姿を見て、早耶香が疑問に思う。

「ああいう風にして着替える決まりなの？」

「うくん……第三次性徴みたいな感じだね、最近ちよつと自分の裸を見るのも恥ずかしい日もあるんだって」

「……………それ、やばくない？　そういえば体育のとき女子トイレに入ってきて着替えるよね。まるで他の女子の着替えを見ないようにしてるみたいにな」

「……………」

四葉が話題をそらすために脱ぎ終わった巫女服を拾い上げた。

「サヤチンさん、服を脱いで。着付けしてあげるから」

「あ、うん、ありがとう」

女子しかないないので早耶香は下着姿になった。

「これでいい？」

「ううん、完全な裸になって。それから軽くでいいし、水のシャワーを浴びてきて」

「あ、裸ぎかあ。……………まあ、着てみたいし、シャワーお借りするね」

そう言つて早耶香は全裸になると宮水家の浴室で冷たいシャワーを浴びて戻ってきた。そうして四葉に巫女服を着付けしてもらつた。

「はい、終了」

「意外と重いね……」

「よく似合ってるよ」

「よくお似合いですわ。サヤチン」

キルヒアイスは早耶香の着替えが終わってから目隠しをとり、一目見て賞賛している。

「ホントに?」

「はい」

「ありがとう。でも、この巫女服って露出は少ないけど、きわどい構造だよ。和服だから胸元が開くのは予想してたけど、腋から脇腹までも縫製されてるわけじゃないから、着乱れると開きそうだし。下半身の袴もズボンみたいに閉じてるのかと思ったら、ロングスカートの前後にスリットを股間まで入れたみたいに無防備だから、姿勢によっては危ういし。しかも、下着なしだからへたしたら丸見え」

「……………」

三葉の瞳が困惑気味に伏せられ、四葉が説明する。

「昔の人の知恵と技術的な限界じゃないかな。腋のところが開いてるのは赤ちゃんに母乳をあげるとき便利らしいよ。だから女性の和服に共通するみたい。あと股間が開いてるのも、しゃがむとそのままトイレできるし。昔は授乳室とか、囲われたトイレが無

かったから、服を脱がないでできるのが大切だったんじゃないのかな」

「なるほどお、そういえば今でも小川にトイレだった名残の棧橋があるね。あんな丸見えのところでは服は脱げないけど、しやがむだけならギリギリかな。でも、テツシーが言ってたけど、この町って分水嶺にあたるから、太平洋側にも日本海側にも私たちが使った水が流れていくらしいね」

「そうらしいね。……………」

四葉は少し考え込む。その様子に二人が問う。

「どうしたの、四葉ちゃん？」

「どうかされましたか、四葉」

「実はね、夏祭りは平年通りでいいんだけど、今度の秋祭りは特別らしいの」

「……………」

「特別って？」

「1200年前の宮水三葉が残した予言というか、頼みみたいなものがあるらしいの」
「え？ 三葉ちゃんが1200年前に？ って、どういうこと？」

「あ、言っただけでなかったね。宮水家は、一葉、二葉、三葉、四葉、五葉、中略、十二葉までの名を女系で代々襲名するから、12代で一巡して、また次は一葉になるの。つまり一葉お祖母ちゃんのお母さんは十二葉だったわけ」

「そんな干支みたいなの」

「だから、1200年前にも宮水三葉や宮水四葉は居たんだよ。姉妹だったか、母娘だったかで。まあ、西洋的な言い方をするとフリードリヒ4世の前はフリードリヒ3世だったみたいなの感じで、今の私は四葉17世くらいじゃないかな」

「あはは♪ ルイ16世みたいだね。それ、どのくらい昔から続いているの?」

「おそらく2400年前から、その頃に初代の宮水一葉が、この地に降り立ったらしいよ」

「それって日本書紀より古くない?」

「うん、伝承によると日本各地の巫女は、この飛騨地方から拡がったらしいし、記紀にもキクリヒメという名の姫が出ていて、イザナギを説諭したらしいよ。このキクリヒメは、うちの神社だと宮水九葉の何世かってことになってる」

「イザナギを説諭って、すごくない? イザナミ、イザナギが主神だよ、日本の」

「天照大神が主神って見方もあるけど、まあ主要な神様であることは確かだね」

「そんな神様を説諭って、どうやって?」

「それについての詳しい記述は記紀にも、うちの神社にも残ってないかな」

「ふーん…で、1200年前の宮水三葉が残した予言って?」

「今度の秋祭りでティヤマト彗星が来るよね。あの彗星に向かって、あることをするよ

うに言い残してるの」

「あること？」

早耶香とキルヒアイスが異口同音に問うたけれど、四葉は答えるのを迷う。

「うーん……ちよつと、まあ、現代の常識では、考えられないというか、たぶん、お姉ちゃんは絶対拒否するようなことだよ」

「もしかして、桶の上で踊りながら裸になれ、みたいなの？」

「あ、アメノウズメの伝説も知ってるんだ」

「この巫女服を着てみて思い出したの。そういえば、天照大神を岩戸から呼び出すために踊った巫女はみんなの前で、おっぱい出したり最終的にはアソコが見えるまで服を押し下げたって」

「神がかりして胸乳かきいで、裳紐を、ほとにおし垂れき」

四葉が暗唱すると、巫女らしい響きがあつたけれど、説明は即物的になる。

「裳の紐、つまり腰の紐を、ほとまで押し垂れた。ほとは女性の股間を意味するから、ようするにサヤチンさんの言うとおおり、ストリップってことだね」

「巫女って、もつと神聖な存在かと思つてたのに、この話を知つたとき、びつくりしたよ」

「何をもつて神聖とするかは色々あるよ。西洋でもオーデインは戦争と死の神様、トールは雷神、死や電気が神聖なのは、まあ考え方によるよね。さらに、おしつこの神様

もいるし」

「えーえ？ そんな神様いるの？」

「いるよ。ミツハノメカミ。もろにお姉ちゃんの名前とかぶる。宮水三葉とミツハノメカミは同音。そして1200年前の宮水三葉が今現在の宮水三葉に求めているのも、ほとぼしりと口づみを星へ向けること」

「ほとぼしり？」

「おしつこのこと。つまり、彗星にむかって口づみ酒を垂れながら、おしつこも垂れてね、つて予言というか、頼み」

「……………」

「これをしてないと、死に等しい後悔をする、とあるらしいけど、お姉ちゃんに何年か前にお祖母ちゃんが言ったたら、それをするなら死んだ方がマシだつて」

続けて四葉が問う。

「どう？ やれそう？ もし本番がきたら、その日に」

「……………」

「だよ。まあ、ほとぼしりはともかく口づみ酒はやらないとね。あ、サヤチンさんもやってみる？」

「遠慮しときます」

「とりあえず、巫女服姿をテツシーくんに見せにいかうか」
「うんっ」

三人で克彦が待っている舞台に戻った。

「おお……意外と似合ってるな」

「意外とつて、どういう意味よ？」

「ははは」

「……。……フフ」

早耶香は意外と言われつつも、似合っていると誉められて、まだ諦めるのは早いと自分を励ました。

いよいよ念願だった元帥府をかまえたラインハルトは部下の人事を進めていた。ミッターマイヤーら有能と見込んだ将官を集め、当然にキルヒアイスも配置している。なのに、とても不機嫌な顔だった。本日のキルヒアイスが本人ではなく、三葉なことが原因ではない。

「ちっ……」

元帥執務室でラインハルトは舌打ちし、懨然とした表情で手にもった書類を睨んでいる。その2枚の書類は軍務尚書エーレンベルク元帥と皇帝フリードリヒ4世からの推

薦状だった。三葉がなだめるように言う。

「ラインハルトさんは、ノルデン少将さんのこと嫌いでもんね」

推薦状にはノルデンをラインハルトの元帥府に推薦する旨が書かれていた。フリードリヒからの推薦状には国璽まで押してある。

「……ちつ……」

感情のやり場に困っているようでラインハルトは二度目の舌打ちをしている。三葉はそばに寄ると、横から推薦状を眺めつつ、ラインハルトの気が静まるようにと、キルヒアイスの手で金髪の前髪を撫でた。三葉はいつもしてくれていることを、やりかえしてあげる気持ちで、ラインハルトの金髪を指先で弄ぶ。

「まあまあ、そんなに怒らないでください」

「……」

キルヒアイスの手で、こんなことをされたのは初めてだったけれど、新鮮さと意外さが幾分かラインハルトの怒気を散らしてはくれた。三葉は言い聞かせるように、やや女子っぽく語る。

「私がこの前、ノルデンさんに廊下で会ったとき、ぜひローエンGRAM元帥の元帥府に入りたいって言ってたから、たぶんエーレンベルク元帥さんと皇帝陛下にお願ひしたんじゃないかな。美術品でも献上して。子爵家だし、推薦状くらいなら書いてもらえる立

場なんじゃないかな」

「くっ……なぜ、オレの元帥府に望んでもいない者を配属させねばならん?！」

「そりゃあ、制度上は任命権が元帥の専権でありますけど、軍務尚書はともかく皇帝陛下からの推薦状で断つても大丈夫なんですか?」

「……………」過去に例はない。おそろく」

「こんなことで反逆の意志あり、と思われるくらいなら入れるしかないと思いますよ。ノルデンさんを元帥府に」

「わかってる!」

「ほとんどの門閥貴族から嫌われてるのに、子爵家のノルデンさんだけでも、こちらを好きになってくれたなら、いいじゃないですか。嫌われてるより、ずっといいですよ」

「……だんだんキルヒアイスと同じようなことを言うようになってきたな」

「それが任務みたいなので」
「フン」

鼻を鳴らしているラインハルトのために三葉はフェザーン経由で買った日本茶を淹れる。さすがに茶器まではそろわなかったので紅茶向けのティーカップに緑色の茶が注がれた。すでに何度かラインハルトも三葉のおかげで日本茶を飲んでいたので出されたカップを黙って口にした。少し気分が落ち着く。

「元帥府をかまえば、オレの目指すとおりの人事が可能になると思っていたものを………それさえ、ままならぬとは………ようやく元帥となったのに………」

「それは、あれですよ。ミュツケンベルガー元帥さんだつて、使いたくないけどラインハルトさんを使っていたじゃないですか。えらくなつても立場立場の苦労はあるつてことですよ」

「………フロイラインミツハが可愛くなくなつてきた」

ラインハルトの悪態を聞き流して三葉は乾菓子を皿に盛つて差し出した。

「これは？」

「オコシという餅米や栗を蒸した後、乾かして炒つたものを水飴と砂糖で固めた御菓子です。クルミとゴマも入っていますよ」

「ふーん………変わった物を取り寄せる」

「元帥府になつてから補給部門の対応がぜんぜん変わりましたよ。何でも探してきてくれます」

「では、ぜひノルデンを左遷する口実を探してきてくれ」

ラインハルトは乾菓子を摘むと食べてみた。クツキーのような味を予想したのに、ずつと軽やかな甘味とクルミと栗、ゴマの風味が口に拡がった。

「ほお………美味しいな。この緑の茶とも、よく合う」

「よかった。私はノルデン少将さんのこと好きですよ。戦場においても緊張感がないところとか、なごむし」

「では、キルヒアイスの管轄としよう」

「え？ でも、私、少将ですよ？ 同格だし、ノルデン少将さんの方が先任なのに？ た

しか軍隊って同じ階級なら、その階級に一日でも早く任官している人が上って序列じゃなかったですか？」

「よく覚えているな。その通りだ。だが、すぐにお前は中將になるさ」

「そんな簡単にポンポンあがるものですか？ こないだまで大佐だったのに」

「これを見ろ」

ラインハルトがカストロプ領の星系図を三次元モニターに出した。

「この星系で起こっている内乱の鎮圧をキルヒアイスへ勅命がくだるよう根回ししている」

「内乱………つてことは皇帝に逆らってる人がいるんですか？」

「そうだ」

「すごいじゃないですか。神聖不可侵の皇帝に反逆なんて」

「そんな立派なものではない。ただの貴族のバカ息子が起こしたくだらん動乱だ。自動防衛の人工衛星と、たった5000隻の私兵艦隊で帝国が揺らぐものか。すぐに平定さ

れ処刑されるだけの愚か者だ」

説明されつつ、三葉は三次元モニターに表示されている情報を読み取り、すでにアスターテ会戦と時期を同じくして派遣されていたシムムーデ提督の艦隊が全滅していることも知った。

「……平定……さつき、勅命っておつしやいましたけど、それって私……キルヒアイスさんが総司令官で行くつてことですか？ ラインハルトさんは来てくれないの？」

「ああ、そうだ。少将として2000隻の艦隊を率いて出陣させる」

「……2000……。恐れながら意見具申の機会をいただきたく存じます！」

三葉が直立して敬礼しつつ言ったけれど、ラインハルトは面倒そうに応じる。

「もって回った言い方をするな、言いたいことはわかっている」

「わかっているなら、五千へ二千で挑ませるのは、やめてくださいよ。アスターテみたいな芸当、そうそう再演できるとは思えませんよ。都合良く相手が兵力を分散してくれるなんてことも無いのが普通でしょうし」

「フ、艦隊戦の常道を学んだのは、誉めてやる。だが、大丈夫だ。キルヒアイスなら、やれる」

「……私の日に対戦するかもしれませんよ。遭遇戦つてこともありえる」

「それも大丈夫だ。フロイラインミツハがキルヒアイスでいるのは週に1度ほど、キル

ヒアイスなら、なんとかする」

「……………きつとね、そういう時に限って私になるんだよ……………。だいたい、戦利にかなってませんよ。5対2なだけでも圧倒的に不利なのに、地の利だつて相手領地内だから、こつちに無いし。先発したシユムーデ提督の艦隊はアルテミス之首飾りにやられてるわけで、この衛星群の存在を艦隊数に置き換えて3000隻と見積もれば、もう8対2ですよ」

「……………」

「そもそも、私たちの元帥府にある艦隊の全部で行けば楽勝なのに、わざわざ戦力を小出しするなんて愚の骨頂じゃないですか。私に教えてくれたことの基本とぜんぜん違う！」

「……………ふう……………まあ、フロイラインミツハの言は基本的に正しい」

やや苛立ったけれどラインハルトは自制して、日本茶を飲んでから三葉に語る。

「基本的には正しいが、今回も作戦がある」

「どんな？」

「それはキルヒアイスが考えている。あいつが大丈夫だと言うからには絶対に大丈夫だ」

「……………絶対なんて……………敵将の中に、すぐれた人が今回もいるかも……………」

「私兵艦隊に、そんなものはいない。情報によれば、艦隊司令はバカ息子の妹だそうだ。羊の群れを羊が率いているに、すぎん」

「…妹が弱いとは限らないし……うちの四葉なんか、私より優秀で…」

「地の利も帝国領内であるから同等だ」

「……航路図はあるかもしれないけど、相手の庭先で……こちらが掴んでいない星系内の地理情報をいっぱい持つてるわけで……しかも、シムムーデ提督は衛星のことを知らなかったから全滅したわけで……他にも秘密兵器があるかも…」

「ぐっ……」

かなりラインハルトは苛立った。それでも相手がフロイラインなので我慢する。ラインハルトが黙って我慢していると、三葉が言い募る。

「二千で行けなんて言わずに、みんなで行きましょうよ。せっかく元帥府になって大艦隊のトップになったんですよ。ここは余裕の完勝を決めるのがラインハルトさんらしいですって」

「ふう……わかった、わかった。たしかにフロイラインミツハの言う通りだ。だが、より大きな狙いもあるのだ」

「狙いつて?」

「今回の出征をキルヒアイスが単独で成し得れば、元帥府内での地位は確固たるものに

なる。少将から中将というだけでなく、我が元帥府内でのナンバー2ということの内々に知らしめる効果もあるのだ。そういう力関係は女性にはわかるまい。だから、たしかに艦隊数の上で戦理にかなう作戦といえないのは十分、オレもキルヒアイスもわかっている。わかっている上でキルヒアイスが勝算を立てているのだから、行かせるのだ」

「……………」

女性にはわかるまい、と言われて三葉が黙り、そして決定権が自分に無いことは知っているし、これ以上の反論をするとラインハルトが怒り出す気配も感じている。それでも不安そうな表情になっているキルヒアイスの顔を見ると、男らしく無くて情けないのと、フロイラインに対して申し訳ないので、ラインハルトは努力して優しい譲歩をする。「キルヒアイスはオレにも作戦の細部を黙っているが、わずか2000隻の艦隊に工艦を大量に編入している。ゼツフル粒子を最大限に搭載して」

「……………ゼツフル粒子を…」

「キルヒアイスはオレの影にいてくれて、あまり目立ってこなかったが、ことゼツフル粒子や機雷、爆破作戦においては銀河一と言っても過言でなくらいの名人技をもっている。だから、そのキルヒアイスが勝算を立てているのだ、安心して行ってくれ」

「……………」

まだ不安そうなのでラインハルトはキルヒアイスの肩を撫でてから軽く叩いた。そ

して軍人人生として、ありえないほど優しい提案を努力してつくった。

「もしも、形勢が不利になったときは撤退も選択肢に入れてかまわない。周囲の将校に意見を訊いて、撤退が大半を占めるようなら撤退していい。だから、行ってくれ」

「……………はい」

かなり不安ながらも三葉は敬礼した。やっと説得が終わってラインハルトも安堵する。

「ふう…。では、これから、その根回しのために政務補佐官のワイツに会うから、ついてきてくれ。今のような自信のなさそうな顔はするなよ。堂々としている」

「…はい。 ……質問いいですか？」

「ああ」

「根回しって、具体的に何をされるんですか？」

「すでにリヒテンラーデにはキルヒアイスへ勅命が下るよう依頼してあるが、いい顔をしていないのだ。ゆえに、ヤツの政務補佐官であるワイツに金品を送って、動いてもらう。そういうことだ」

そう言ったラインハルトと郊外へ地上車で移動すると、待っていたワイツを乗せ、移動しながら会話する。社交辞令的な挨拶が終わると、三葉は渡すように言われていた金品をワイツに差し出した。

「……」

お互い無言で受け渡しが終わると、ラインハルトが依頼する。

「国務尚書におかれては、いい顔をされていないそうだが、こう言ってくれ。キルヒアイス少将は私の腹心中の腹心だ。討伐に成功したときは褒賞を与えて恩を売ればいい。さすれば後日、何かと益になる。また失敗したら、それは推挙した私の責任。改めて私へ討伐を命じればすむことだし、部下が失敗したとなれば、私も功を誇つてばかりとはいかぬ、と」

「わかりました。とはいえ……」

ワイツがちらりと三葉を見てくる。

「この赤毛の少将殿に、わずか2000隻の艦隊で可能なものでしょうか？」

「キルヒアイスなら、やってくれる。な？」

「はっ、必ずご期待にそいます！」

背筋を伸ばして敬礼することは身体が覚えていてくれるし、少しでもアンネローゼを救い出すことの手助けになるのなら、とも思うけれど、やはり不安は大きい。そもそも軍人たちだけでなく国務尚書ら文官たちでさえ2000隻で出立することに懐疑的であり、わざわざワイロを渡してまで進めることなのか、キルヒアイスの栄達を図るにしても、もう少し地道な方がいいのではないか、せめて相手を上回る6000隻の艦艇が

欲しかった。それが無理でも500隻でも1000隻でも味方は多い方がいいと考えた三葉はワイツをおろしてからラインハルトに訊く。

「さつきノルデンさんを私の管轄にするって言ってましたよね」

「ん？ ああ、言ったな」

「今回の作戦にノルデンさんを戦闘技術顧問として連れて行っていいですか？」

「戦闘技術顧問？ ああ、あの、先の内乱鎮定で貴族どもが指揮を執るのでは、おぼつかないからミッターマイヤーやロイエンタールをつけていたあれか。いや、しかし、すでにフロイラインミツハの知識も、戦略シミュレーションの成績も、とうにノルデンなど凌駕しているだろう。まったく不要だと思うが」

「机上の成績ではそうかも知れませんが、単に私の心の問題です。ラインハルトさんがいないってことは、顔見知りがぜんぜんいないってことになって変に緊張しちやいそうですから。誰と何を話していいか困るから」

「心の……オレなどは、あやつがいるとイライラするだけで、むしろ邪魔だが……そういえば、フロイラインミツハは楽しそうに会話しているときもあったな」

「なごむんですよ。いい感じに」

「そうか。まあ、それならオレは、かまわないが……一応、戦闘技術顧問というのは司令官の下に組み込まれるものだ。さきほどフロイラインミツハが言ったように軍の序列

でいうと、同じ少将でも先任はノルデンだから、キルヒアイスの下風に立つことを、あの子爵家の嫡男が承知するか……」

「ラインハルトさんの元帥府に入る前の研修ってことにして、作戦が失敗しても責任を問われない立場で見学に来てくださいってことで、どうでしょう？」

「……………武人として、どうかと思うが……………あやつなら……………。では、そのような話でフロイラインミツハがノルデンに打診してみても、あやつが素直に受け入れるなら連れて行く方がいい。プライドが許さぬという顔をするなら、むしろ指揮系統を混乱させる危険があるので連れて行くな。ということ、どうだ？」

「はい、わかりました」

話が決まったので三葉はラインハルトと別れ、子爵家へ訪問する連絡をしてからワイン専門店に立ち寄り、高価なワインを買ってノルデンへの手土産とした。

「こんばんは。遅くに、すみません」

「おお♪ キルヒアイス少将、わざわざのご訪問、歓迎いたしますぞ」

夕食の時間帯を少し過ぎているので、ノルデンは軽く飲酒したような顔色で三葉を歓迎してくれた。

「いきなり、すみません」

「いやいや、ご夕食は、お済みかな？」

「どうぞ、お構いなく」

「まあ、そう言わず、お済みでなければ用意させましょう。お客人を空腹で帰したとあつては子爵家のプライドにかかわりますからな。ははは」

ノルデンが使用人に夕食を用意させ、三葉は執事へ手土産だったワインを渡した。贈る相手が子爵家なので、それなりに高いワインをキルヒアイスの財布から買って、それもノルデンを喜ばせた。なごやかに夕食をいただき、ノルデンも本題を待つていてくれるので語る。

「ノルデン少将さんのローエングラム元帥府への配属の件ですが、正式な配属の前に少し研修というか、見学していただきたいな、とラインハルトさんと話していたんですよ」

「ほお、研修と」

「それで、ちょうど私へ次に下る命令で、はじめて艦隊指揮を執らないといけないことになりそうです。正直、不安でノルデンさんが戦闘技術顧問として、ついてきてくれると嬉しいなつて」

「戦闘技術顧問ですか…」

「それは名目だけで、作戦が失敗しても責任を取るの私です。実質、ノルデン少将さんには、私が落ち着いて指揮を執れるよう話し相手になつていただければ、なんて思つていたりします。お願いできませんか？」

「そういうことなら、喜んで引き受けましょう」

「ありがとうございます」

「さあ、そろそろ、いただいたワインも冷えた頃合いでしょう。いっしょに、いただきましょう」

「はい」

かなり高かったワインが、どういう味なのか興味があつたので嬉しかった。ノルデンと三葉は乾杯して、アスターテ会戦の快勝を着に盛り上がった。

「ローエングラム元帥は、向かうところ敵なしですな」

「そうですね。でも、同盟軍のあの二人と最初から対峙していたら、どうだったのかなあ」

「あの二人とは？」

「ヤンさんとホーランドさんですよ」

「ああ、あの。ヤンの手並みは知りませんが、ティアマトでのホーランド艦隊の動きは見事でしたからな」

「たとえば、あの二人と同数の艦隊で衝突したら、ラインハルトさんは、どう戦うのかなって」

「うむ。さながらアマーバのような動きをしたホーランド艦隊、あの動きはミュツケン

ベルガー元帥の艦隊を翻弄してしまいましたからな。エネルギー消耗が早いとはいえ、一気呵成に攻める様は見習うべきところがありそうですね」

「はい、確かに」

ウイレム・ホーランドは過去ばかりでなく同時代にも知己を得たけれど、いずれにせよ本人の知るところではなかった。

キルヒアイスはラインハルトの部屋で、いつしよにワインを飲んでいる状況を認識した。

「はあ……」

「タメ息をついて、どうした？」

「すぐにブラスタを抜かなくていい状況のようで安心したのです。ワインにも何も入っていない」

「あるときは、すまなかった。オレの不覚でもある」

そう言ってラインハルトはルビンスカヤらに謀られたときのことを詫び、キルヒアイスのグラスにワインを注いだ。三葉がノルデンとの会談を終え、帰ってきてラインハルトと飲み直している状況だった。キルヒアイスは今日の予定が、どう終了したのか、手紙が無かったのでラインハルトに問う。

「ワイツ政務補佐官との会談は、どうでした？」

「予定通りだ」

「にしては、ご機嫌が悪そうですね」

「ああ、悪いさー！」

そう言つてラインハルトは2枚の推薦状を親友に見せた。

「これは……」

目を通して、なだめるように言う。

「嫌われているより、よいでしょう」

「やはり、そう言うのか……。……お前の管轄にしたからな。フロイラインミツハは、

あの子爵家の嫡男が気に入ったようだ。女の考えることはわからん！」

「単に相性の問題かと思えますよ。ごく平凡な女学生でしたから、ごく平凡な貴族の息

子と、ごく平凡な会話をするのが落ち着くのでしょうか」

「すると、彼女はノルデンに恋をしているのか？」

「それは無いと思います。前にも言いましたが、おそらく彼女は、この身体にいるときは女性を異性と感じてしまうでしょう。ですから、もし誰かを好きになるとすれば、それは女性であるはずですよ」

「ほお、では、お前は向こうで男を好きになるのか？」

「……可能性としては。ですから、ノルデン少将のことはラインハルト様と私のような男友達という感覚で接しておられるのでしょう。とくに、彼女にとつての初陣をもにしたということもありますし。こちらにいるときラインハルト様以外の親しい人間がいるのも、悪いことではないでしょう」

「まあ、そうかも知れんな」

ラインハルトはワインを飲み、そして問う。

「カストロプの件、策はどうだ？　もし、当日にフロイラインミツハだとしても」

「勝算はあります」

「わかった。任せよう」

まだキルヒアイスとは乾杯していなかったもので、ラインハルトは優雅にグラスをかかげた。二人で杯を干すと、遅い時刻なのにフーバー夫人が部屋のドアをノックしてきた。キルヒアイスがドアを開けるとフーバー夫人は届け物の木箱を持っていた。

「これは？」

「あらあら、ご自分で頼んでおいて、お忘れですか？　夕方、ワイン屋さんから伝言つきで届きましたよ。12時5分に部屋へ持ってきてほしい、と」

「あ…そうですか、すっかり忘れていました、すみません」

一瞬でキルヒアイスは三葉が何か買ったのだと察して受け取る。フーバー夫人に謝

辞を述べて休んでもらい、木箱を開けてみた。中にはワインボトルが2本と三葉からのドイツ語による手紙が入っていた。ラインハルトも興味をもって見てくる。

二人へ

ワイン専門店では日本酒を見つけたので、思わず買ってしまいました。

お米から造るワインと同じくらいのアールコール度数のお酒です。2本買ったので1本は二人で、どうぞ。もう1本は次に私とラインハルトさんで飲みましょう。

で、お願いなんですけど、せめて、あと500隻、できれば、もっと、派遣艦隊数を増やせませんか。少将級の麾下に入る艦艇数が2000隻程度なのはわかっています。が、ノルデンさんにも顧問参加を頼みますし、ちよつとオーバーしても少将2名なんだから、通るかと思いません。

お願いします。

読み終えたキルヒアイスとラインハルトが失笑する。

「クスっ……」

笑った後にラインハルトが日本酒の入ったワインボトルを眺めつつ言う。

「フロイラインミツハめ、なかなかの策士だ」

「私たちが同時に手紙を目にするようにしていますね」

「そうなれば願いを無下にすまい、という読みだな。まあいい。オレとしてはフロイラ

インを安心させるためなら500隻程度の増派に異存はないが、キルヒアイスの作戦上はどうだ？ かえって邪魔になるか？」

「いえ、工作艦の編成率が高かったので、砲艦や高速巡洋艦を加えることができれば艦隊編成のバランスが整い、ありがたいことは確かです」

「では、そうしよう」

そう決めて二人は日本酒を味わった。

三葉は、ほろ酔い気分からシラフに戻って少し淋しかった。

「……………お酒は二十歳から……………か……………」

まだ未成年なので呑めない。ちよつと興味が湧いてきて、台所にある日本酒を呑んでみたいとも思うけれど、もしも一葉に見つかったとき、どんな折檻を受けるか、とても恐ろしいので自重する。

「お姉ちゃん、今日は、どうだった？」

四葉が部屋にいて訊いてくる。

「次の作戦で私とかキルヒアイスが総司令官の艦隊で戦うことになるかも」

「それは責任重大だね。その日が、お姉ちゃんでないといいけど……………」

四葉の懸念に三葉が激しく頷く。

「そういう日に限って私になりそうだよね?!」

「うん。…………大丈夫、お姉ちゃん?」

「はああ…なんとか、頑張るよ。あ、あの子たちからラインが入ってる」

三葉は会話しながらスマフォをチェックしていてメッセージに気づいた。雨降って地固まるで襲撃してきた二人の女子とも仲が良くなっている。

「ねえ、四葉。これ、どう思う? 修学旅行中、東京で夕ご飯、おごってくれるって」

三葉は妹にスマフォを見せて経緯も話した。

「いいんじゃない。ごちそうになれば。お土産代が食事代になるって、ようするにお小遣いで食事してってことでしょ。一食浮けば助かるよ?」

「そうだけど、あの子の家、貧乏貴族…じゃなくて、貧乏だって。無理してないかな」

「けど、おごってくれるレストランは親戚がやってるイタリアンの店で、その子たちもタダだから招待してるって書いてあるし遠慮しなくていいんじゃない?」

「うん…………そうなんだけど…………話がデキすぎてるというか…………なにかの罠なんじゃないかと…………」

「罠って、そんな宮廷闘争じゃあるまいし。女子高生が仲直りと今後の友好のために、いい感じに親戚の店を利用しようとしてるだけだと思うよ」

「そ、そうだよ。なんか向こうにいると根回しとか、駆け引き、策略、いろいろあつて

疑り深くなっちゃってるのかも。普通に考えて、仲直りのディナーだよ。うん、行く。う。ごちそうになります、と」

三葉は帝国軍少将から女子高生の気分に戻って、笑顔のスタンプつきで返信した。それから入浴する。四葉と二人で裸になり、風呂場に入ると尿意を覚えた。三葉は排水溝のそばに立ち、シャワーで流しながら、おしっこする。

「……………はああ……」

気持ちよさそうなため息をつく実姉に四葉が苦言を呈する。

「お姉ちゃん、行儀が悪いよ」

「テヘヘ……つい……」

「ミツハノメカミ」

「その名で呼ばないで。おしっこの化身とか、ひどい神話だよね」

三葉は身体を洗い、腋も剃ってから湯船に浸かった。

「はああ……………疲れた。目を閉じると寝そう……………」

そう言いつつ寝かけているので四葉が手を引いて風呂を揚がり、身体も拭いてやった。

「ありがとお……四葉……………なんか、私の身体、すごい疲れてるんだけど、今日、なにをした？」

「お祭りの練習」

「どおりで……クタクタなわけ……」

部屋に戻った三葉は裸のまま布団に潜り込むと、すぐに眠った。朝になり悲鳴をあげる。

「なんで?! どうして、私は裸なの?! まさかキルヒアイスが私に何かしたの?!」

悲鳴を聴いた四葉が実に面倒そうに語る。

「お姉ちゃんは自分で裸で寝たよ。お風呂に入った記憶ある?」

「あるような……夢だったような……」

「早くしないと遅刻するよ」

言われて急いで登校する。ぼんやりと授業を受け、おしっこがしたくなって休み時間に女子トイレに入ると、仲が良くなった二人の女子がいて三葉へ声をかけてくる。

「宮水さん、いっしょにアルバイトしてよ」

「お願い、修学旅行のお小遣いが欲しいの」

「アルバイトかあ……でも、この町って、高校生にできるアルバイトなんてあった? コンビニも、おばちゃんたちで固定なのに。しかも、修学旅行、すぐだよ?」

「ごく簡単なバイトで、即日1万円」

「でも、私たち3人でやるのが条件なの、お願い! ね!」

「いいけど、どんな?」

「今から、おしっこを漏らすまで我慢し続けるの」

「それだけ。それだけで合計3万円。男子たちが払ってくれるよ」

「……ヤダ」

三葉はスツと個室へ入ろうとしたのに女子二人が左右の手首を握って懇願してくる。

「私たちには、こういう稼ぎ方しかできないんだよ」

「宮水さんなら、私たちの気持ちわかってくれるよね？」

「……そんなこと……言われても……」

「もちろん、男子たちには指一本、触らせないから」

「見せるだけ。おしっこ漏らすところを見せるだけで私たちに3万円くれるの」

「……男子って、あのときの3人？」

「うん」

「……あの3人は私たちが漏らすとこ、見たのに……」

「だから、もう一回、見たいって」

「お願い、でないと私たち、お小遣い無しで修学旅行に参加なの」

「……だからって、なんで私まで……」

「宮水さんは私たちより、ずっと美人じゃん」

「そうそう。男子の気持ち、わかるよ。宮水さん、可愛いもん」

「……そんな風に言われても……」

「お願い！ お金がないの！」

「お願いします！ どうか、私たち貧民にチャンスを！」

「……そりゃ助けてあげたいけど……」

この二人とは仲を修繕中で、しかも修学旅行中にはレストランで奢ってもらう予定もあるし、何より家庭の貧困で苦勞している話は聴いている。お小遣い無しで修学旅行というのが、みじめだというのもわかる。三葉は逆に問うてみる。

「でも、払ってくれる男子たちは、そのお金、どうやって手に入れたの？」

「あいつら、とび職のバイトやるし」

「男は夜間の土方とか、年齢的に違法らしいけど、やってるよ」

「……そんな頑張った大切なお金を……」

「私たちには頑張るバイトもないの」

「こんな田舎じゃ、どうしようもないの」

「……新聞配達とか……」

「町の人口を考えてよ。部数が少なくって、販売店の家族だけでやってるよ」

「もう修学旅行まで時間がないの。一日で即手渡しの1万円、どうか、お願い」

「……………」

「お願いしますー！」

「……………漏らすまで我慢つて……………せめて学校はヤダ……………誰も見てない場所。あの三人しか見ないようなところ……………なら、……………これっつきり……………なら……………すごくイヤだけど……………あなたたちの貧しさを知らなかった私も……………勉強すべきだし……………」

「ありがとう！ 超ありがとう！」

「さすが、宮水さん！ 神様仏様、三葉大明神だよ！ ありがとう！」

「私は神様じゃないから……………」

三葉は用を済ますこと無く女子トイレから教室に戻った。授業を受けるけれど、下腹部が落ち着かない。まだ、おもらしするほどではないもののトイレに行きたいのに意図的に行かないのは、かなりストレスだった。

「……………」

お昼休みになり尿意が強いまま、お弁当を食べているとタメ息が漏れる。落ち着かない様子で何度も三葉が座り直すので早耶香が問う。

「三葉ちゃん、もしかしてトイレを我慢してるの？ 今日はお嬢様モードじゃないのに、トイレに行つてないよね」

「……………うん……………まあ……………ちよつと、そういう気分で……………」

そっか……………私……………いつもキルヒアイスに我慢させて……………あいつ、ちゃんと朝夕の2回

を家で済ませてくれて学校の女子トイレには入ってないんだ……その気になれば、女子更衣室だって覗けるのに、けっこう立派な男子……入れ替わったのがキルヒアイスでよかった……エッチな人だったら、何をされたか……、と三葉は尿意に耐えながら、途切れ途切れに思考する。五時間目が終わると、もう学校で失禁したら、どうしようかと想うほど膀胱がづらい。

「ふう……ふう……」

「宮水さん、あとちよつと頑張ろうね……うう……」

「宮水大明神、よろしくお願いね……うう……」

女子二人も午前中から我慢し続けているので、限界に近い顔色をしている。三人とも高校生にもなつて、学校でのおもらしという事態は絶対に避けたい。六時間目をひたすらに耐え、やっと放課後になった。学校から出ると、もう道端で漏らしてしまいそうなほど、おしっこがしたくて三人とも内股になっている。

「……ハア……ふう……うう……」

「宮水、お前つて、やっぱり可愛いな」

三葉と対決した空手有段の男子が言ってくれるけれど、まったく嬉しくない。他二名の男子も性的好奇心をもって三葉たち女子三人を見てくる。片方の女子が、おしっこを我慢しながら男子に要求する。

「どうせ、もう私たち、おもらし決定なんだし、先払いしてよ……うう……」
 「しつかりしてるぜ。ほらよ」

一万円ずつ女子に支払ってくれた。

「オレんちの道場に来いよ。他人に見られないぞ。今日は練習無いし、オヤジも山奥の現場だから」

「……………」

三葉たち三人の女子は目配せし合い、女子らしい警戒心で拒否する。

「やーよ。どつか物陰でいいから」

「連れ込んで変なことする気でしょ」

二人に続いて三葉も言う。

「そつちが用意した場所は不安だし。変なことする気なら、抵抗するから。今は漏れそ
 うで動けないけど、漏らしたら動けるんだからね。うう……」

三葉は片手を股間に入れてギョツと押さえた。そうしないと失禁しそうなほど尿意
 が強い。他の女子も同じポーズになった。

「ははは、じゃあ、どうする、ここで漏らすか？」

「……………」

まだ学校に近い場所なので生徒たちが多い。早耶香と克彦が心配して声をかけてく

れたけれど、笑顔をつくって帰ってもらい、三葉は男子たちに提案する。

「うちの神社の……分祀されてる一社に来て……そこなら朝の掃除当番以外、誰も来ないはずだから」

「ああ、いいぜ。けど、分祀って、いっぱいあるよな。そのうちの、どこ？」

「ついてきて……うう……」

三葉は尿意に耐えつつ湖の畔にある小さな神社へ五人を案内した。社名が美津波神社となっている。

「ここって、お前と同じ名前だよな……なにか意味あるのか？」

「……ここは歴代の宮水三葉と記紀神話のミツハノメカミを合祀してる神社なの」

「ふーん……そういえば、お前んち、歴代で順番に名前を使ってるらしいな」

「うう……もう漏れそう。こっちに入って。ここなら誰も来ないし」

三葉は神社の奥に入っていく。一般的に見て立入禁止の区域に見えたので五人は戸惑った。

「おい、いいのか？　こんなところで漏らす気か？」

「そうよ、ここって神聖な場所なんじゃないの？」

「ねえ、バチ当たらないの？」

「大丈夫……うう……言いたくないけど、ここの神様は、おしっこの化身だから、お

しつこに関してはお怒りにならないから…ハア…ハア…

もう限界に近い三葉は、よろめきながら大岩に手をついた。どことなく女性器の形に似た大岩で、その奥から清水が湧いている。

「あああ……もう無理……」

「私も！」

「うん、私も……」

ずつと耐えていた三人の女子が同時に限界を迎えて、下着を濡らしていく。

「はあ……あああつ……んう……」

「うくつんう……」

「あうあうあううう……」

三人とも喘ぎ声とともに、おしつこを漏らしていき、スカートから小さな滝がキラキラと落ちる。その光景に男子たちは見惚れた。

「おおっ♪」

「可愛いな♪」

「そそるぜ♪」

男子たちはアメノウズメが脱いで見せたときの男神たちのように盛り上がっている。

「……ハア……ぐすつ……これでいい？」

「…ハア……こんなを見て、…何が楽しいんだか……ぐすつ…」
「…ぐすつ……男ってバカばかり……」

女子は三人とも涙目で鼻を噉っている。泣くと余計にみじめになるのがわかっていて涙を耐えていた。三人が漏らした小水は合流して水たまりとなり、さらに湧き水とも合流して湖へと流れている。

「ねえ、宮水さん、本当に神社の奥で、おしっこなんかして大丈夫だったの?」
「バチ当たらないの?」

二人の女子がポケットティッシュで足を拭きながら問う。三葉も生温かく濡れた足を拭きつつ答える。

「ミツハノメカミはイザナミのおしっこから生まれた神様だし、宮水三葉もおしっこを司るの……認めたくないけど」

「あ、オレ、爺さんから聞いたことあるぞ。宮水家の一番が唾液だよな? あと、おっぱいとか、いろいろあるんだろ? 四葉ちゃんは何だ?」

「四葉は右目の涙だよ。……私も涙とかだったらよかったのに」

「へえ……他に何があるんだ? 何人いて?」

「一葉から十二葉」

三葉が言いたくなさそうに言った。当然、説明を乞われる。

「じゃあ、一葉が唾液なのか？」

「うん」

「他は、どうなるんだ？ 順番に」

「……………一葉がツハキ、唾汁を司るよ。二葉が右おっぱいの乳汁」

「右限定なのか。左は？」

「左おっぱいの乳汁は十葉が司るはず」

「で、三葉はおしっこか？」

「……………ただの伝承だよ……………」

「四葉ちゃんが涙って、可愛いな」

「……………」

「五葉は？」

「右の腋の汗だよ」

「微妙だな。六葉は？」

「額の汗」

「努力の神様って感じだな。七葉は？」

「左の腋の汗」

「八葉は？」

「左目の涙」

「また涙か。そうやって左右を埋めるのか、じゃあ九葉は？」

「……ねんごろの汁……」

「なんだ、それ？」

「……よく知らないけど、……女の子の身体からエッチな気分するとき出る汁だって

……たぶん……よく知らないけど……」

三葉が恥ずかしそうに顔を真っ赤にして言うので男子たちも軽く興奮した。

「で、十葉は左おっぱいだよな。十一葉はなんだ？」

「羊水」

「ヨウスイって何だっけ？ 聞いたことある気がするけど」

「……」

また三葉が恥ずかしそうにして黙ると他の女子が援護してくれる。

「バカね、羊水くらい覚えておきなさい。赤ちゃんを子宮の中で守る液体のことよ」

「ああ、あれか。で、ラストの十二葉は？」

「………月経の……血……」

「血かあ……。それにしても、全部が液体なんだな。まあ、宮水って名だしな。十二宮か

らの汁って感じか」

「聖水12人衆か。ぎやははは」

「バカっ！」

女子の一人が男子に蹴りを入れてくれている。三葉はスカートが生乾きになってきたので帰宅したくなった。これ以上、今の雰囲気男子たちと居たくない。それは二人の女子も同感だったようで解散となり、三葉は一人で町唯一のコンビニに入った。

「はああ……疲れた、ひどい一日だった」

とても喉が渴いているので清涼飲料を手を取った。お会計しようとして予期せず入手した一万円札を視認する。

「……………」

少し考え、その一万円札はレジ横の募金箱に入れ落とした。

キルヒアイス in 広島、カストロップ vs 三葉

キルヒアイスは糸守高校の修学旅行で広島県にあるホテルの一室でトランプを持っている状況が目に入ってきた。

「……………」

「もしもーし？ 三葉ちゃんの番だよ？ 聞いてる？」

早耶香が覗き込んでくる。

「あ……………はい……………すみません。何ですか？」

「だから、三葉ちゃんの番」

「…はい……………すみません。何のゲームをしていたのですか？」

「半分寝てた？ もう12時だもんね」

「……………」

時計を見ると12時なっているので、三葉が同室の女子たちと談笑しながら日付を越えたのだと認識した。

「はい、少しウトウトしていたようです。申し訳ありません」

「……………モードチェンジしてる……………まあ、いいや」

早耶香が持っていたトランプを放り出して、お菓子を食べてノンアルコールのビール風味飲料を飲んだ。他の女子が言ってくる。

「そろそろ本題に入ろうよ」

「え……………このモードに入った三葉ちゃんって本心隠してる感じがしてイヤだなあ」

「……………すみません……………。本題とは何でしょうか？」

「ほら、こうやってトボける。修学旅行の夜にする話って言ったら恋話に決まってるのにさ」

「恋……………」

克彦とアンネローゼの顔を思い出してしまった。もう、この身体にいるときは女性として振る舞うことが当然になっていて、乙女のように頬が熱くなるのを感じた。

「三葉ちゃんとサヤチン、ずっと戦争状態だもんね」

「……………」

「で、どっちが優勢なの？」

「……………」

早耶香がポッキーを囓り、三葉の手が明らかに自分の分という場所に置いてあったビール風味飲料を取って一口飲んで様子見する。

「サヤチンも本心隠してるじゃん」

「劣勢だからよ！」

早耶香が三葉の首にヘッドロックをかけてきた。豊かな胸の膨らみを後頭部に感じて少し困惑する。今は同性だと感じているけれど、この柔らかさを自分が感じていていいのだろうかという軽い罪悪感はある。

「うっ……サヤチン……何をされるのですか……どうか、離してください」

「こいつめ、テツシーから告白されたって言うの！」

「それ、劣勢じゃなくて、もう敗戦じゃん」

「まだ付き合ってるわけじゃないし、諦めなければ可能性はあるもん！」

ますます早耶香が腕に力を入れてくるけれど、敵意は感じない。ほのかな親しみの情を覚えて、されるまま身を任せていく。

「サヤチンはわかったからさ。三葉ちゃんは、どう想ってるの？」

「私は……」

話しやすいように早耶香が腕の力をゆるめてくれた。

「……これまでのように三人で仲良くしていきたいと思っております」

「なんか、模範解答だね。誰かに言わされてるみたい。じゃあ、次の人」

もう三人の煮詰まらない関係に飽きられたのか、次の女子へと話題が移り、順繰りに

恋の話をしていくうちに朝の4時になった。全員、寝るつもりがないようで新しいお菓子を開け、ジュースを回している。それでも、少し話題が無くなってきたタイミングができる。

「誰か何か、話題ない？」

「……………」

「何もなければ、またトランプする？　もう寝ちやいそう。ねえ、誰か、何でもいいから話題は？　主に恋バナで」

「……………」

訊きたいことがあったキルヒアイスは遠慮がちに挙手していた。

「はい、宮水さん、どうぞ」

「もし、みなさんが恋をしていない相手と結婚することを強制されたら、どうお感じになりますか？」

「何それ？　普通にありえないでしょ」

「ですから、もしも、の話です」

「断るか逃げるか、するんじゃない？」

「断れず逃げられなければ、どう感じますか？」

「いやいや、それ犯罪じゃん」

「……。犯罪にならず、たとえば相手が大きな権力を持つていた場合などで結婚を強制されたときの話です」

「お金持ちってこと？」

「はい、そういう場合も含めてください」

「うーん……。お金かぁ……。迷うかもしれないけど、やっぱり相手によるかな。いい人そうだったら、結婚してもいい」

「こちらは相手のことを選べない場合です」

「……。それ、死ぬほど苦痛なだけじゃん」

「やはり……。そう思いますか……。もし、そんな生活が10年も続いたら、どうでしょう？」

「諦めて慣れるかもしれないけど、頭おかしくなって精神病にでもなるんじゃない」

「……………」

「え、なに？ 三葉ちゃん、変なお見合いでも強制されてるの？」

「いえ、私の話ではありません」

そう言ったわりに自分のことのように悲痛な顔をしているので周囲が心配になる。早耶香が言ってくる。

「そこまで言ったなら、話してよ」

「……………はい。この話は、ここだけでお願いします。そして、私とは遠い関係にある話です」

そう前置きしたキルヒアイスは女子高生たちに、アンネローゼとフリードリヒのことを欧州の小王国での出来事で三葉とは遠い親戚という風に話した。聞き終わった女子たちが重い沈黙に包まれる。一人が口を開いた。

「……………一日も早く助けてあげられるといいね…」

「その前にアンネローゼさんの心が壊れてしまわないといいけど…」

どう話しても銀河帝国の当局に伝わるはずはないけれど、念のために名を改変して説明していた。別の女子が言う。

「アンネローゼさんと弟のラインラットさん、そして親友のキルヒマウスさん、この三人は離れていても、お互いの存在が心も、社会的な意味でも支え合っているとと思うなあ」

「どういう意味？」

「だってさ、お互いが居るから自暴自棄にならないでしょ。社会的にも王妃の弟って立場だと、貴族たちにしても目立つ方法では抹殺できないし。お姉さんの存在がラインラットさんとキルヒマウスさんを守ってもいると思うの。もちろん、その逆も」

「けど、女の子にとつて15歳から25歳までって一番楽しい時期なのに……………悔しいよ！ そんなのつてない！ その国王フリーザリヒを殺したい。クーデターでも起こつ

て死んじやえばいいのに」

「うん、一日も早く解放されてほしい。ね、三葉ちゃん、私たちに協力できることってないの?」

「お気持ちだけで十分です。ありがとうございます。みなさまのお話を聞けただけでも、とても気づかされておりますから」

ずっと不敬罪を恐れてラインハルトとしか、この話はしておらず、両親にさえ相談したことはない。それを大つびらに、しかも女性に相談することができて見解を知ることができたのは幸いだったし、やはり一日も早く解放したいと誓い直した。気がつけば、朝日が昇ってきている。

「朝だねえ。完徹したねえ」

「朝ご飯、何時からだつけ?」

「7時だよ。まだあるね」

「お風呂いかない? 6時から開くはず」

「行こう行こう」

「……」

「三葉ちゃんもおいでよ」

「いえ、私は遠慮いたします。後片付けをしておきますから、みなさん楽しんでらしてく

ださい」

そう言つて徹夜の女子会の後片付けをして全員で朝食を摂り、バスで大和ミュージアムへ移動した。メインの展示物である戦艦大和の10分の1模型を見ると、穏やかな貴婦人としての振る舞いが少し崩れて、少年のように戦艦を見つめて三葉の瞳を輝かせた。

「火薬式の砲と、火力ボイラーで、これほどの戦艦を造り上げるなんて……」

「三葉、こういうの好きか？ オレは好きだけど」

克彦をはじめ男子は、やはり喜んでいられるけれど、女子の反応は薄い中、はしゃいでいるので目立った。

「だって、これレールキャノンではないのに、重力下で大気の抵抗もありながら46キロ先まで到達するのですよ。とても素晴らしい技術です！ しかも明治維新から半世紀あまりで、ここまで追いつくなんて民族性がなせる技なのか、国家体制によるものなのか、その両方なのか、本当に日本人は驚異的です！」

「レールキャノンなんて言葉よく知ってたな」

「え……」

うつかり徹夜明けの頭で余計なことを口にしてしまい焦ったけれど、克彦は感心しているだけだった。

「レールキャノンも、そろそろ実用化されるかなあ。大きな戦争でもあれば、その必要性もあるのかもしれないけど」

「……。そんなこと起こらなければよいですね」

この後の地球の歴史を思い出して、はしゃいでいた気持ちが一気に落ち込んだ。昼食のお好み焼きを食べて、原爆資料館を巡ると、落ち込んでいた気持ちが地の底まで沈んだ。

「……はあ……はあ……」

「三葉ちゃん、大丈夫？　鳥肌、立ってるけど」

早耶香が心配してくれたので笑顔をつくろうとしたけれど、冷や汗が流れただけだった。

「……だ……大丈夫です……いえ、その……展示物の……シヨックが……大きすぎて……何度も戦場を巡ってきたけれど、艦隊戦で死体を見ることは無い。地上戦でも、そこで見るのは兵士として不本意ではあっても死地に赴く覚悟を大なり小なりしてきた戦闘員の死体であって、子供や女性がいる市街地、むしろ本土に残っていたのは非戦闘員が多かったのに、そこに落とされた熱核兵器の惨状を見ると、足がすくんで早耶香と克彦に両方から支えられるようにして歩いていた。

「……はあ……」

「三葉、気分が悪いんやったら、もう途中でやめるか？ 別に、全部見んでもええやろ」

「そうよ。顔色、すごい悪いよ」

「いえ……きちんと、すべて……。……テッシーとサヤチンは、平気なのですか？」

「いや、まあ、気分のええもんやないけど、こういうの見慣れたというか」

「なんの καν ので、よく見るからね。8月とかテレビでも、やりまくるし」

小学生の頃から平和教育の名のもと日教組が宗教的な熱心さをもって主導する戦争の悲惨さを何度も見てきた二人に比べて、幼年学校では帝国軍の精強さと、かつての戦功や英雄について教えられるばかりで、ラインハルトに言わせれば、なぜそれほど精強な帝国軍が百年かかっても叛乱軍を覆滅できないのだ、とつつこみを入れられるような戦争観の教育しか受けてこなかった。おまけに克彦と早耶香は戦場と死など自分とは無縁の遠いことだと確信しているのに比べて、死も戦場も我がこととして捉える感性の差は巨大だった。

「……はあ……うう……」

奥へ進むほど展示物のインパクトは大きくなり、三葉の胃が痙攣してきた。

「……う……」

「吐きそう？ トイレ行く？」

「……」

口を押さえて頷いたときには限界だった。三葉の唇から嘔吐物が流れ出て床に拵がった。お好み焼きだった物が、三葉の唾液と胃液が混じった状態で出てくる。

「ハア……ハア……うう……すみません……ごめんなさい……」

施設の係員がバケツと雑巾を持ってきた。申し訳なさそうに謝るのに、かまいませんよ、とショックを受けてくれたことが、むしろ教育効果を出せて嬉しいというような表情で片付けてくれる。

「三葉ちゃん、トイレに行こう」

「はい……」

早耶香に手を引かれて女子トイレで顔と手を洗ったけれど、顔色は悪いままだった。徹夜のせいもあつて目に隈ができてるし、全体に青白い。それでも自滅的な義務感で館内を最後まで巡った。あまりの悲惨さに泣けてくる。

「……ぐすつ……ううつ……ひつく……」

熱核兵器が市民に使用された惨状は戦争観が変わるような衝撃だった。そこには英雄もいなければ、戦功も虚しい。あるのは焼き殺された死体と、死にきれずに苦しみ続ける人々の姿だった。

「……ううつ……あああつ……」

もう号泣になってしまい、ユキちゃん先生らも感受性の強い生徒がショックを受ける

ことは想定していたので優しくフォローしてくれたものの、展示物の印象が頭に残って消えないまま、広島駅から東京駅まで新幹線で移動し、デイズニールランドに近い格安ホテルで眠った。

ハンス・エドワルド・ベルゲングリューン大佐は、したたかに酔っていた。わずか2500隻のキルヒアイス艦隊の旗艦バルバロッサの通路を歩きながら、ウイスキーボトルをあおっている。

「ヒクッ…」

「酔っているな、ベルゲングリューン」

フォルカー・アクセル・フォン・ビューロー大佐が注意しても、また酒をあおる。

「ああ、酔っているさ。前回、失敗したときより数が少ないんだぞ」

「だからこそ…」

そんな二人へ三葉が遠慮がちに声をかける。

「た、大佐…お時間いいですか？」

「ハッ」

「…」

ビューローは敬礼したけれど、ベルゲングリューンは司令官を睨む。睨まれて三葉は

怯み、その隣にいるノルデン少将が咳払いしても無視だった。

「こ、これから作戦を説明します……」

酔つてるよ、このオジサン、ありえないでしょ、作戦前に、なんで、こんなに規律が乱れてるわけ、しかも佐官なのに、徴兵された新兵ならともかく、大佐クラスならラインハルトさんが選んだ人材のはずなのに……ホントに大丈夫なの……ラインハルト陣営も下層はいまいちなんじゃ……、と三葉は強い不安を覚えつつも、なんとか平静な顔を保つて四人で艦橋へ向かう。ベルゲングリューンがアルコールの匂いをさせて近づいてきた。

「小官は作戦より全体の数の方に問題があると、愚考つかまつりますが……」

「と、とにかく、これを見てください」

うん……それは、わかる……でも、だからって飲酒はないでしょ、と三葉は冷静さを維持する。艦橋へ入り、三葉自ら作戦を説明し始めた。キルヒアイスの指が自信なさげにメインモニターを指した。艦隊の配置図を見てベルゲングリューンが疑問に感じる。

「工作艦ばかり、こんなに並べて、どうしようと言うんですか」

「ま、まず、シムムーデ提督が前回敗北された状況を振り返ります」

三葉はキルヒアイスが書いてくれた日本語混じりの作戦書を読む。もう三葉もドイツ語を読み書きできるけれど、今は機密保持のために日本語を使っているのだった。

「カストロプ公は説得に出向いたマリンドルフ伯と、その令嬢を捕らえているばかりか、帝国に反旗を翻し、マリンドルフ領へも、その妹が5000の艦隊を指揮して侵攻していました。が、シユムーデ提督は私兵艦隊を無視してカストロプ本領の惑星ラパートを突くと見せかけ、私兵艦隊が慌てて戻ってきたところを迎撃するおつもりだったようです。しかし、逆にラパート星に配備されていたアルテミス之首飾りへ追い込まれる形となり壊滅しました」

「それを、たった2500隻の艦隊で、どうしようというのです?！」

あまりに頼りない雰囲気が漂っているのでベルゲングリューンは三葉から作戦書を奪い取った。

「……これは……いったい、何が書いてあるのです?！」

日本語なので、まったく読めない。

「返してください。機密保持のため特殊な記号を使っています。私にしか読めません」
「……………」

不承不承でベルゲングリューンが作戦書を返した。

「まず、アルテミスの首飾りはゼツフル粒子によって無力化します。さいわい、微弱ながら引力がありますから、昨日のうちに散布されています」

住民がいる惑星へ影響させずに軌道上の衛星のみを破壊するためにゼツフル粒子を

散布するのは、名人芸といつていいほどの巧妙さを要するけれど、すでに完了している。その分、作戦を延期することはできず、明日にするわけにはいかなかった。そしてカストロ側気づかれなかったためにもベルゲングリーンらにさえ秘匿され、キルヒアイス自らが工作艦を指揮して作業を終えていた。キルヒアイスの声が自信なさそうに説明を続ける。

「次に、敵艦隊ですが、我々を待ちかまえるように正面にいますから、これに正面から接敵します」

「正面からっ?! 2500で5000にですかっ?! 敵は2倍ですぞ! まさか、この旗艦バルバロッサが第三世代最新鋭艦であることを過信しておられるではありませんまいな! デザインこそ新しいが、しよせんは戦艦1隻、数の力には勝てませんぞ! だいたい、少将クラスの分艦隊に元帥旗艦と同等の新鋭艦が配備されること自体がおかしい! ご自身を過信してのことなら、手痛い反撃にあうと忠告いたしますぞ!」

「……」

おっしやる通りですね……お友達だから配備したのは、みんな知ってるよね……、と三葉はラインハルトの配備に私情が入っていることは否定できなかった。それでも任務は頑張る。

「最後まで聞いてください。接敵寸前に後退します。当然、相手は追ってきます」

「でしような」

「この追ってきた敵へ、横から小惑星を複数個ぶつけます。この小惑星にはワルキューレを隠してありますし、ワルキューレを隠していない小惑星は敵陣内で爆発するよう仕込みがしてありますから、敵艦隊は混乱に陥るでしょう。そこで後退をやめ、前進し敵中心を突きます。相手は5000といっても士気の低い私兵です。これで勝てるでしょう」

「……………たしかに、その作戦なら……………可能性は…」

ベルゲングリューンが作戦を聞いて、少し納得したけれど、それでも不満そうに通路へ出ると、酒瓶をダストシューターに捨てた。

「まだ半分以上残ってたんじゃないのか」

心配して追ってきたビューローが言い、ベルゲングリューンは憤然とする。

「あの頼りない司令官を見たか?! 作戦を説明するのに手が震えていたじゃないか！」

声だつて震えていた! 昨日までは冷静だったが、いよいよ戦場に着て怖くなつたつて顔だぞー!

「……………」

ビューローも否定できないので黙っている。

「あんな頼りない司令官のもとで酔っていたら、うまくいく作戦も失敗する! だいた

い、どうして同格で先任のノルデン少将が戦闘技術顧問でついてくるんだ?! イゼルローンの失敗を忘れたのか?!

「そのことだがな、昨日、キルヒアイス少将はオレにも、もしも自分が明らかに間違った戦闘指揮を執った場合は、かなり強い口調で反論してほしいと言った。どんなに強く進言しても、あとで罰したりしないから遠慮無く言ってくれと。むしろ、なるべく優しく言ってくれる方が、きつと素直に聞くとまで言われた」

「はあ?! なんだ、それは?!」

怒りながらベルゲングリューンが歩いていく。

「どこへ行くんだ?」

「タンクベッドで一眠り! 酒を抜くのだ!!」

激怒しながらタンクベッドに入った寝顔を見ると、ビューローは司令官が頼りになろうがなるまいが、どのみち戦闘前にはお互い死にたくないのだから僚友は酒を抜いたのではないかと思っただけで、もう言っても詮無いことなので艦橋に戻って作戦開始の準備をする。しばらくしてベルゲングリューンが無言で艦橋へ入ってきて手伝ってくれた。すべての準備が整い、無駄とはわかっていても降伏勧告をする。

「すーっ……はーっ……」

三葉が深呼吸をして気持ちを整えていると、ノルデンが背後に立ってキルヒアイスの

肩を優しく叩いてくれた。

「そう緊張せず。どうせ、こちらが何を言っても降伏などしやしないでしょう。好きなことを言つてやればいいんですよ。しよせん、ヤツらは逆賊。滅びるのみです。ははははー！」

「はい、ありがとうございます」

おかげで少し緊張が解け、三葉は通信をオンにする。ノルデンも、そのままカメラに映るキルヒアイスの隣りに立つて、得意げに胸を張る。通信にカストロプが応答したので三葉が名乗る。

「ジークフリード・キルヒアイス少将です。マクシミリアン・フォン・カストロプに対して降伏勧告します」

「ほお、最近では女のような顔の若造が司令官になれるのか。貴族でもない身でどうやって取り入った？ スカートが似合いそうだな、そつちか？」

「……………」

なんでギリシャ風なんだろう……完全にギリシャだ……古代ギリシャ風だ……、と三葉は固まった。通信スクリーンに大きく映し出されたカストロプは細身で長髪のハンサムと言つていい顔立ちの男性だったけれど、着ている服は古代ギリシャ風だった。背景に見える建物の内装もギリシャ風だし、使用人たちもギリシャ風の服装をしている。

帝都オーデインが中世ドイツ風だったのも驚いたけれど、今回の驚きはより大きい。

「……」

でも……私も祭りの日には巫女服を着て舞うんだし……あれも古代からの衣装だし……この人たちも、なにか儀式でもやってたのかな、と三葉は思い直して降伏勧告の答えを確認しようとする。その前に、カストロプが言ってきた。

「そんなところにおらず降りてこい。こうやってかわいがってやるぞ」

ジャラ…

カストロプは10歳くらいの少女を、あられもない姿にした上で首と両手に輪をかけた鎖でつないでいた。手錠と違い、結局のところ鎖が長いので両手の自由はあるようだけれど、いかにも奴隷であるという雰囲気を出すための装飾的な拘束で趣味の悪さを感じる光景だった。四葉と同じくらいの年頃の少女が涙を流しているし、そんな少女が10人くらいいて、さらに伯爵令嬢のヒルダまで同じ姿にされていた。

「……なんてことを……」

「いいものを見せてやる。もともとヒルダは歳だから要らんし、他のにも飽きたからな」
そう言うとカストロプは使用人に命じてヒルダたちを闘技場へ追い込み、十数頭の猟犬をけしかけた。

「グルルウル！」

「キヤーっ！」

この獵犬というのがDNA処理によって頭部に円錐状の角をもつようになった有角犬で、裸同然の無防備な少女たちは追い回され、身体を角で突かれている。もともと犬は強く噛みつくことで攻撃力を発揮するように何十年もかけて進化してきたのに、小さな角で突くよう訓練されて攻撃力が乏しい、貴族権力の散文的な一面を象徴するイマイチな獣だったのだ。

「キヤーっ!! 助けてええー！」

「痛い、痛いよ！ うわああああん！」

「私の後ろにいて！ くっ…ああっ!!」

攻撃力が弱い分、すぐに致命傷とならず長く追い回されることになる。逃げまどう少女たちを守るようにヒルダが獵犬たちに立ち向かっているけれど、素手で複数の獵犬にかなうはずもなく、その美しい瞳が角に挟られ、悲鳴をあげるのを見たキルヒアيسの顔が怒りで真っ赤になった。赤毛も波打ち、怒髪天を衝く。

「この才変態公爵!! 全艦!! 最大加速!!」

「ふわははははは！ 来るがいい！」

明らかに挑発だったけれど、作戦でも前進する予定なのでビューローたちも止めない。キルヒアيس艦隊が進む、そしてアルテミス之首飾りの射程範囲に入った瞬間だっ

た。

ふわっ…

宇宙空間なので衝撃波が来るまでは音は聞こえないけれど、光りの輪がラパート星を囲んだ。

「なんと見事な……」

「お見事……」

名人芸を通り越して、大きな重力のある可住惑星の表面上にいる住民たちに一切の被害をおよぼさず、しかも首飾りの射程距離圏外から、軌道上の微弱な重力しかもたない人工衛星だけを爆破する神業的なゼツフル粒子の仕込み方に、ベルゲングリューンたちは息を飲んだ。これはこの人にしか再現できない、この人ならイゼルローンさえゼツフル粒子で攻略するのではないかと、とビューローたちが心から尊敬していると、作戦予定よりも前進速度が速いので敵艦隊との距離が詰まってくる。

「なんだ?! 何が起こつておるのだ?! ええい、首飾りは無敵ではなかったのか?!」

まだ通信がつかっているカストロプが激しく動揺しているけれど、妹の艦隊のことは覚えていた。

「エリザベート・フォン・カストロプ提督! ヤツらを生かして返すな!!」

妹のことをフルネームで呼んだカストロプが命じると、わざわざ敵艦隊の旗艦から三

葉たちへ通信が送られてくる。

「名門カストロプロに、わずか2500隻の艦隊でたてつくとは愚かなことよ」

兄と同じく自己顕示欲が強いようで、必要もなく戦闘前に顔を見せてくれている。細身で長髪の美女といつていい顔立ちのエリザベートはギリシャ風の服ではなく、ぴつたりと身体に密着する新素材の服を着ていた。自分の美しい身体のラインを、もろに丸出しにするようなデザインの服で、手や足まで覆っていて露出度は低いのに乳首や股間の形が見て取れるのでエロティックだった。その色は長髪と同じ金色で輝いている。

「……」

なに、あの人……バカみたい……変な宇宙服みたいで……センス古すぎ……、と三葉は昭和の頃に人々が想像したような女性用宇宙服を思い出した。エリザベートはキラキラと輝きながら語る。

「フッフ、ジークフリード・キルヒアイス少将といったかしら。お前も、こういう風に可愛がってあげるわ」

ジャラ…

エリザベートは14歳くらいの少年を、あられもない姿にした上で首と両手に輪をかけて鎖でつないでいた。

「うう…」

少年たちはエリザベートが着ているのと同じ素材の服を着せられているけれど、その色は黒でデザインは女性向け競泳水着のようなハイレグカットで胸部も覆っているのに、あえて乳首の周辺だけ3センチほど穴がある。とても悪趣味なものだったし、何よりハイレグの股間にあるべきものがないように見える。

「フフフ、お前も捕まえて主砲を切り落としてあげる。偉大なる皇帝カスパー、ああ、カストラートの男の子があげる悲鳴は本当に最高ですね！ ジーク・カスパー！」

第5代皇帝のカスパーが同性愛者であり、去勢されたカストラートを愛したことは公式には秘匿されているけれど、公爵家ともなれば知っている場合もあるようでエリザベートは自身の変質的な性愛の口実に使っているようだった。

「ほらほら、いい声で鳴きなさい！」

エリザベートが少年たちの乳首をつねり、お尻をえぐっている。

「ううううっ！」

「痛いです痛いです、おやめください、エリザ姫ええ！」

少年たちは全員が黒髪黒瞳で、エリザベートの趣味で集められていたけれど、黒髪黒瞳だけあって人種的に日本人っぽく見える少年が多い。不本意に去勢された姿はあれだった。

「キャハハハハハ♪ さあ、ジーク、お前も、こつちにおいで。ちよつと歳だけど玩具に

してあげるわ、ジーク」

「っ…、その名で呼ぶなああああ！ その穢らわしい口を引き裂いて、鍋で炊いて婆ア汁にしてやる!!」

完全に三葉は頭に血が上った。日本人っぽい少年たちが虐待されていることも、キルヒアイスのことをジークと呼んでもいいのはアンネローゼだけだ、という想いからも、アドレナリンが血液の全量を占めるような怒りに満たされ、怒号する。

「全艦!!! 砲撃戦用意!!!」

「キャハハハハ♪ バカめ！ 全艦、砲撃戦用意！ お前も私のフロリアンズに加えてやるわ！」

「全力戦闘準備!!!」

三葉が対戦準備を命じると、ベルゲングリユーンが通信の送信を切ってから異議を唱える。

「閣下っ！ 予定と違います！ すでに速度が出すぎていますから、もう後退をお命じになりませんと！」

「このまま前進ッ!!」

「閣下っ!」

「閣下、ご予定では後退して小惑星を突入させ敵艦隊の混乱を誘うはず、ここは一つ冷静

になってください」

ビューローが優しく進言してみても、三葉は命令をかえない。

「このまま前進！」

「閣下!! なりません!!」

「我らは、わずか2500! 正面からぶつかって勝てる相手ではありませんぞー!」

ベルゲン・グリューンとビューローが左右から三葉に言い募ってくるけれど、腕を振って制した。

「大佐たちはあれを見ても、なんとも思わない?!」

三葉が通信スクリーンを指す、そのスクリーンでは、いまだカストロプの闘技場の様子が送信されてきていて、有角犬たちに襲われているヒルダと少女たちが映っている。ヒルダは少女たちを統率して、より小さい歳の子を中心に守り、自分と身体の大きめの少女たちで円陣を作って防御しているけれど、その分、どんどん背中を刺されている。さらにエリザベートの旗艦艦橋では少年たちが虐待されている。乳首から血を流している子もいれば、お尻を虐待される痛みのみか、おしっこを漏らしている子もいた。少女たちの血と涙も、少年たちの血と涙も、あわれすぎて吐き気がする。それは二名の大佐も痛いほどわかっている。それでも進言せざるをえない。

「あれは敵の罠です!! こちらの冷静さを奪うために、やっていることですぞー!」

「挑発にのつてはいけません!! 今、戦えば全滅します!」

「うるさい! 子供を守れない軍隊に存在価値なんてない!!」

三葉は一つの真理を口にした。

「後退していたら、間に合わないから!!」

三葉がキルヒアイスの右手を挙げ、前へと振り、命じる。

「ファイエル!!」

すでに、お互いの射程距離に入ってしまった。双方前進していたので近接戦闘になる。ベルゲングリューンが苦い顔でつぶやく。

「くっ……これでは後退しても遅い……もうダメだ……」

「……こうなつては善戦するしか……だが、相手は2倍……。あの挑発を無視しえないのは、わかるが……戦力差が2倍では、我々に勝ち目は……」

ビューローも拳を握って俯く。

「2倍の敵にだつて勝つ方法はある!」

三葉はノルデンを振り返る。

「ノルデン少将さん! ホーランドアタックの準備を!」

「了解! 全艦へ通信! 戦術コンピュータの回路Hを開くよう!」

二人は事前にコンピュータへ仕込んでおいた戦術を展開する。

「ホーランドアタック開始!!」

キルヒアイス艦隊が、さながらアmeerバのように速度と躍動性にすぐれた艦隊運動で敵艦列を乱していく。かなりのエネルギー消費ではあったけれど、その分だけ敵を乱し、練度の低い私兵だったので立て直せないでいる。ベルゲングリーンが感心しつつも進言する。

「見事な艦隊運動ですが、こんな動きでは長くはもちませんぞ」

「わかっていきます。通信を！ 敵艦隊の全艦へ向けて通信回路を開きなさい!!」

三葉の命令通りに通信要員が敵艦隊への通信を送る用意をした。三葉は気合いのこもった声で朗々と告げる。声の出し方には神道修練者らしい熟達があった。

「敵将兵の全員に告ぐ！ 自分で選びなさい！ あなたたちはカストロプの手下として死ぬか、名誉ある帝国軍に加わるか！」

男性として発達したキルヒアイスの声帯で、神事の祝詞を詠み上げる訓練を積んでいた三葉が力強く発声すると、その言葉には重みと迫力が溢れていた。

「選びなさい！ 私たちは先遣艦隊に過ぎない！ すでに、ローエングラム元帥閣下が1万隻の艦隊を率いて近くまで来ている！ 今なら、まだ間に合う！ 降伏なさい！

寝返りなさい！」

根本では女性である三葉が男性の声帯で力を込めて語りかけると、カストラートたち

の声が独特であるように、聴いたことのない独自さがあり母親の優しさと父親の厳しさが同居しているような声となり、カストロプ艦隊の私兵たちは魂を掴まれるような感覚を受ける。

「降伏すればカストロプ以外の罪は問わない！　そして寝返って、いまだカストロプの手下である艦を撃てば、戦功とみなしてあげます！　さあ！　選べ！」

もう神職者が愚者を導くような語り方になった。

「自分で選びなさい！　変態兄妹の手下として死ぬか！！　生き伸びてチャンスをつかむか！　自分で選べ！！　自分を助けよ！！」

「……………」

ベルゲングリューンが呆気にとられ、ビュローも目を丸くしているけれど、ノルデンは聴きながらクスリと失笑した。あと1万隻が控えているというのは、大きなブラフだったけれど、もともと前回のシムムーデ提督が5000隻で、キルヒアイス艦隊の2500隻が少なすぎることと、アルテミスの首飾りが消失してしまったこと、ホーランドの戦術を模した奇抜な動きで混戦になり指揮系統が乱れつつあることも手伝い、1隻また1隻と降伏したり寝返りを宣言して1秒前までの味方を撃ち始め、ここぞとばかりに私怨で友軍艦を撃つ艦長まで現れ、陣形の最後尾で裏切りやすかった100隻単位の分艦隊が旗色を変えたことで、一気にカストロプ艦隊全体が瓦解していく。徐々に砲火

が乏しくなり、三葉はタイミングを見極めて命じる。

「バルバロッサを敵旗艦の前につけなさい!!」

第三代最新鋭艦である真紅のバルバロッサは戦艦というより猟犬のような機敏さでエリザベートの旗艦ノイエ・カスパーの前に立ち塞がった。艦橋でエリザベートが状況の急変についていけず、顔を強張らせている。

「なっ……な……なにをしているの?! 撃て! 撃ちなさい!!」

「……」

もう誰もエリザベートの命令をきかない。それどころか、フロリアンズと呼ばれる去勢された少年たちは恨みのこもった目でエリザベートを睨んでいる。その目には殺意さえ感じられた。男としての大切なものを奪われ、今日まで虐待と恥辱の限りを尽くされてきた。

「ま……ま、…待ちなさい! わ、…わかった! わかったわ! 降伏する!! 私も降伏して兄を撃つわ!! だからっ、だからああ!!」

エリザベートが三葉に向かって懇願してくる。

「だから助けてえ!! 悪いのは兄よ!! 兄が帝国に逆らうって言い出したの!! 私は従うしかなかった!! 私も被害者なの!!」

懇願するエリザベートは怯えて、おしっこを漏らしている。ぴったりと身体に密着す

る金色の新素材服を着ているので、おしつこがジャバジャバと股間から拡がっているのが、よくわかった。見苦しく責任を兄になすりつける妹を見て三葉は嫌悪感が極まり、エリザベートの顔が映る手元の通信モニターへ唾を吐いた。そして、言う。

「こいつは捕らえておきなさい!! 惑星制圧戦能力のある艦は大気圏突入用意!! 陸戦準備!!」

まだ首謀者は残っている。バルバロッサはノイエ・カスパーの前からラパート星へと飛び立つ。旗艦が先頭に出る状態になったけれど、ラパート星から攻撃らしいものはない。すぐにバルバロッサは大気圏に突入した。

「私の装甲服を準備して! ノルデン少将さん、艦隊指揮をお願いします。バルバロッサはあのギリシャ神殿みたいな建物に強行着陸を! 地对空攻撃には注意して!」

「了解しました。お任せを」

ノルデンは嬉しそうに艦隊指揮を引き継いだけれど、ベルゲングリューンとビューローは異議を唱える。

「閣下が自ら出撃されなくとも!」

「危険です!」

「怖いなら、そこで見ていなさい」

そう言われると、ベルゲングリューンも戦士の矜持を刺激され装甲服に着替える。作

戦前までは女子のようになよなよしい雰囲気があり、今も激情のあまり勇ましいのに、どこか女武將が男をバカにするような空気を感ずるので、ベルゲングリーンも意地を張つたし、白兵戦の心得もある。ビューローは子爵家のノルデンだけに艦隊指揮を任せるのは不安なので艦橋残留を選んだ。

「これより、艦隊は私の指揮下へ♪」

もちろんノルデンは装甲服に着替えず艦隊司令席へ得意げに座り、ラインハルトの真似をしたポーズをとった。艦隊へ地表からの対空攻撃は、その兵器そのものが無かったので迅速に強行着陸ができ、三葉を中心にした陸戦要員が突入する。当然、司令官を守るような陣形で突入したけれど、駆けるキルヒアイスの脚は速く、すぐに三葉が先頭になって闘技場へ駆け込んだ。

「覚悟なさい！ ロリコン公爵！」

「お、おのれえ！ 者ども、かかれエ！ かかれエ！」

闘技場には狼狽したカストロプがいて手下たちに迎撃を命じているけれど、誰も従わない。もう手下たちは両手をあげて膝を着いている。その顔に忠誠心は欠片も残っていないかった。けれど、獵犬だけは主人の命令に哀れなまでの忠誠心で従い、三葉たちに襲いかかってくる。

「かわいそうだけど人を襲う訓練をされたなら……」

三葉は苦い顔をして戦斧を振るい、数頭を薙ぎ払った。それで猟犬たちも主人への義理を果たしたと考えたのか、それとも装甲服を着た人間には勝てないと獣の本能で感じたのか、逃げ散っていく。

「くうう……う、動くな！ 動けば、ヒルダを殺すぞ！」

追いつめられたカストロプは出血多量で朦朧としているヒルダを人質にして、古代ギリシャ風の刀剣を突きつけている。

「くっ……しまった……」

もう戦闘の全体は決しているけれど、三葉としては少女たちをなんとかしても助けたいので困る。カストロプとしては、もう逃げ場も目的もないので、やぶれかぶれだった。

「動くなよ……。そうだ、武器を捨てろ！」

「……」

三葉は戦斧を手放した。戦斧はラパート星の重力に引かれて足元へ落ちた。さらに三葉は面鎧をあげて顔を見せ、闘技場の壁にかかっていたカストロプが持っているのと同じギリシャ風の刀剣を手に取った。

「私と一対一で勝負しなさい！ あなたが勝てば、この星系から逃げ出すまでの時間をあげます。だから、その子を離して私と勝負しろ!!」

「なっ………いいだろう！」

カストロプも乗った。この星系を無事に逃げ出したところでフェザーンまで辿り着ける可能性は無いに等しいけれど、もともと妹指揮下の半個艦隊で帝政に刃向かう思考をする男なので、最期の希望を一对一の勝負に賭ける。何より貴族として、そしてギリシャ文化を愛する者として一对一での真剣勝負はしてみたかった。カストロプはヒルダを離して剣を握り直した。

「……………」

「……………」

三葉とカストロプが対峙して構える。すぐに三葉から仕掛けた。真っ直ぐに上から下へ斬りつける。

「はっ!」

「くっ…」

カストロプは直線的な攻撃を剣で受けた。そうなることを三葉は予想していてナイフ対ナイフの戦闘訓練で培った技で、カストロプの停止した手首を反対の手で捕まえると同時に蹴りを腹部に入れる。

「ぐはっ?!」

「はっ!!」

蹴られて前屈みになったカストロプの首へと剣を振り下ろした。

ザンツ……

剣の切れ味とキルヒアイスの筋力はカストロプの首を胴体から離別させた。死亡を確認するまでもないので三葉は剣を離すと、ヒルダへ駆け寄る。

「しつかりして！ 君！」

「……うう……」

抱き上げられたヒルダは左目だけでキルヒアイスの顔を見ると、その聡明な記憶力で以前にオーディンで会ったことがあると判断したけれど、さすがに詳しく思い出すことはできない。

「助けに来た！ 安心して！ 衛生兵か、軍医を!! 早く!!」

「……ありがとう……あなたの……お名前は？」

「宮水三葉ああ……じゃなくて！ ジークフリード・キルヒアイスです！」

「……私は……ヒル……」

そこまで言ってヒルダは失神した。衛生兵が駆けつけヒルダと少女たちの手当を始めるのと、三葉はカストロプの死体を見下ろした。

「……………犬のエサにでもなればいい……………」

「閣下、死体はオーディンで検分されることになるでしょう」

ベルゲングリユーンが言った。

「そう……ベルゲングリユーン大佐さん」

「はっ！」

「他に敵は？」

「おりません」

「戦闘終了ですか？」

「そうなります」

「……。さっきの女の子……」

三葉は再びヒルダの容態が心配になったので、衛生兵から引き継いで治療している軍医に訊いてみた。軍医による説明では失血死しかけていたものの輸血が間に合い。傷そのものは浅いので命に別状はないが、右目の失明はまぬかれないことだった。

「かわいそうに……」

同情の念と忌々しさが湧いてきて、三葉は転がっているカストロプの頭を蹴った。

「このゲスが！」

サッカーボールのように転がっていく。主人の遺体を辱められても、使用人たちは誰一人として異議を唱えない。ベルゲングリユーンが尊敬の眼差しで言ってくる。

「閣下は猛将であらせられますな。それでいて情に厚く、また策士でもある」

「……………」

誉められてるのかな、と三葉は思ったけれど、あまり適切な返答が浮かばない。かわりに闘技場の貴賓席にあるテーブルに置いてある酒類へ目がいった。金満な公爵家らしくテーブルには豪華な料理と、最近わかるようになってきた帝国産ワインの中でも最高級の物が並んでいる。

「……………ベルゲングリューン大佐さん」

「はっ」

「もう戦闘はない？」

「はい、確認します」

重ねて問われ、ベルゲングリューンは司令官が戦闘態勢を解く気であることを察し、念のための確認をする。地上に降りた陸戦隊も、宇宙に残った艦隊も、もう敵がないので戦っていない。当面の安全が確保できていた。

「もう完全に降伏しておりませすれば、戦闘が行われることはないかと思われませう」

「……………。じゃあ、もう飲んでもいいと思う？」

「……………。はっ、お付き合いさせていただきます！」

ベルゲングリューンもアルコールは好きだった。困難な作戦を成功させた戦友として、酒を酌み交わしたい気持ちは強い。二人が飲み始めると、当然のように酒宴になり、罪を問われたくないカストロプロの使用人たちは酒をついでくる。

「帝国万歳！」

「キルヒアイス閣下万歳！」

他の陸戦要員や占領事務に従事するはずだった兵卒たちも飲み始め、だんだんと秩序が無くなってくると略奪と婦女暴行が始まった。酔つてきた三葉の見ている前で陸戦要員が使用人が着ている脱がせやすそうなギリシャ風の衣服を脱がせて女性を押し倒している。

「……………」

ふらつと立ち上がった三葉は女性を押し倒している陸戦要員を横から蹴った。

ドカッ！

「ぐはっ……」

「いくら勝ったからって、それはやり過ぎ！」

「はっ……はい！」

強姦しようとしていた陸戦要員は敬礼して逃げていく。三葉が見回すと、同じようなセクハラ行為をしかけていた兵士たちは慌てて威儀を正し素知らぬ顔をしているけれど、略奪した腕輪や宝石を持っていたりする。セクハラされていた女性たちは乱された衣服を悲しそうに直しながら、三葉へ救いを乞う視線を向けている。対して兵士たちは勝利の余韻のまま、役得行為に浸りたい顔をしていた。

「うーん……………どう指揮したら……………」

三葉はベルゲングリューンに助言を求めようと視線を送った。ベルゲングリューンは通信機に向かい、ビューローへ現地状況の報告中だった。片手にはワイングラスを持っていて焼酎が入っている。カストロプロ家の酒庫には帝国ワインだけでなく、ギリシャの古代酒を再現したものや、中国の紹興酒、メキシコのテキーラ、そして日本酒や焼酎までコレクションされていて、三葉も日本酒と焼酎を楽しんでいる。ベルゲングリューンは焼酎のお湯割りが気に入ったようだった。通信機のモニターに映るビューローが赤ら顔の同僚に呆れている。

「酔っているな、ベルゲングリューン」

「ああ、酔っているさ。前回、失敗したときより数が少ないんだぞ」

「……………。この会話、作戦前にもしたような……………。とにかく、ほどほどにしておけ」

通信が終わったタイミングで三葉は声をかけてみる。

「ベルゲングリューン大佐さん」

「はっ。ヒクツ…失礼」

ベルゲングリューンの顔は焼酎のお湯割りのおかげで血の巡りがよくなり、バルバロッサのように赤くなっている。もう作戦前の2倍は飲んでいた。三葉も深く酔っているし、二人とも顔を合わせるとお互いの杯に酒を注ぎ合った。

「この焼酎というのは、美味しいものですな。ほのかに香る芋の香りがまた」

「そうそう。いいよね。…つて、そうじゃなくて、ちよつと相談なんですけど」

「はっ、なんででしょうか？」

「ああやつて、兵士が宝石とかを盗んでるのはあり？」

「はっ……あまり良い習慣とはいえませんが、役得といえますか、さきのクロプシュトック侯の叛乱鎮圧時にも戦利品を入手した者は多く、ある程度は兵士への褒賞という意味合いもあります」

「褒賞かあ…なるほど…」

「帝国軍の悪しき風習と言つてしまえば、それまでですが、婦女暴行や殺人まで発生するのは、いささか困りものです。ヒクツ…失礼。ほどほどの戦利品収拾は、まあ、やむをえないかと…。我々として、この酒もカストロプ家の財産ですから」

「あ、そつか。さっきのワインなんか一本で2000万帝国マルクはしたし。ヒクツ…あ、失礼。……うくん……風習……役得……文化の違いかな…ヒクツ……そういえば、ロイエンロールが、そんな話で相談に来てた気が……たしか、厳しくし過ぎてトラブつて……逆にミッターマイヤーが捕まったとか……そんな話をロイエンロールが……あいつ、私のこと、ときどき睨む…」

「それは閣下が、ヒクツ…失礼。ロイエンタールなのに、ロイエンロールという二つ名を

広めたからでは？」

「あ、ロールじゃなかった、タールだった。つい。だって、あいつの前髪というか、もみあげのあたりの毛、あえてロールさせて垂らしてるの、うざったらしくくない？」

「ははははっ！ たしかに。まあ、それで二つ名が定着しつつあるのですが、ご本人は不快でしょうな。睨むくらいには」

「だいたい、あいつ、左右の目の色が違うくらいで調子に乗って、女の子と遊びまくってるあたりも、男として、どうかと思うよ。ヒクツ」

「そうですねア、恋人に手を出された士官と決闘沙汰になったこともあるようですし、こゝと戦闘においては優秀な方なのですが、女遊びが過ぎる点は不評ですなあ。まあ、おかげで閣下が名付けたロイエンロールが拡がりつつあるようですが」

「あはは、あいつ、もうロイエンロールでいいよ。髪の毛と、女の子にロールされてるバカ中将。だいたい男が、しかも軍人が、あんな髪型するなんてバカ丸出し」

「わははは！ 手厳しいですな」

「つて、また本題を忘れて。えつと……どうしよう？ 戦利品とか、役得。でも、婦女暴行とかまでしてるのは、被害者がいるし。カストロプの財産はいいとしても、罪のない人が乱暴されるのはダメでしょ」

「そうですねア……ヒクツ……失礼。とりあえず閣下が司令官なので、閣下が基準を

お示しになりませんと。軍規に厳密であれば、この飲酒もまずいわけですし。とはいえ、この勝利、これくらいはいいでしょう。あとは、どうされるか、閣下のお考えは、いかがでしょうか？」

「……うん……役得もあるよね……あんまり厳しすぎてミッターマイヤーみたいに失敗しても困るし、部下を処罰するのも……かといつて強姦と殺人は……」

かなり酔った頭で三葉は考え、結論に至る。

「よし！ 飲酒はあり！ 飲めるだけ飲もう！ でも、婦女暴行は禁止！！ 傷害殺人も禁止！！ 略奪はカストロプの財産限定で、ほどほどに！」

「はっー！」

「婦女暴行したヤツは犬に喰わせるから！！」

もともと三葉が艦隊戦で突撃を開始したのは、女性への陵辱に憤慨したからだを知っている兵士たちに命令は徹底され、婦女暴行は発生しなくなったけれど、ほどほどの略奪は行われた。酒宴は続きフラフラと三葉はカストロプが座っていた玉座へ腰をおろした。手にはカストロプの首を持っている。放り出そうかと思っただけれど、少しばかり遺体に対する尊厳の念も湧き、そつとテーブルの上に置いた。そして日本人でもあまり知らない神道式の冥福を祈る動作をした。

「よもつくに、あきつかみ、やすくにとおぼしめせ」

三葉が何らかの祈りを捧げていると感じた使用人たちもギリシヤ式の祈りを捧げてくる。祈り終わった三葉はカストロップの頭へ囁く。

「次に生まれ変わってくるときは、ロリコンじゃないといいね。……ヒクツ……ヒクツ……あ、もう12時に……」

時計を見ると読みにくいギリシヤ文字だったけれど、12進法は共通のようで時刻はわかった。

「紙とペンある?」

「はい! 今すぐに!」

使用人がダツシユで取りに行ってくれる。その間に三葉は大吟醸の日本酒をグビグビとラツパ飲みする。あと数分で未成年になってしまうので飲めるだけ飲もう、という勢いで瓶を空けた。

「ふはあ♪」

「おお、さすが閣下! では、自分も」

ベルゲングリユーンも負けじと焼酎をラツパ飲みする。三葉は最高級のワインに続けて手を出し、飲みながら使用人が持ってきた紙にペンを走らせる。

「……フフ♪ ヒクツ……完勝つと……」

微笑みでワインを唇の端から垂らしつつ、満足そうに手紙を書きにくい羊皮紙へ書き

始めた。